

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第129集

皂角子久保Ⅵ遺跡発掘調査報告書

一般国道340号改良工事関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

皂角子久保VI遺跡発掘調査報告書

一般国道340号改良工事関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,000箇所にあふ遺跡が確認されております。これら先人が残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた重大な責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な一施策であります。特に幹線道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書の皂角子久保Ⅵ遺跡は、軽米町西方の観音林丘陵に立地し、昭和62年の発掘調査によって縄文時代の狩り場跡や平安時代の集落跡、江戸時代の民家跡等が発見されました。特に本県では初めて平安時代の畑地跡が検出され、陸稲が栽培されていた可能性も指摘されるなど県北部の歴史を解明するうえで貴重な資料を得ることができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

おわりに、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助、御協力を賜りました軽米町教育委員会をはじめ、関係各位に衷心より謝意を表します。

昭和63年6月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 中 村 直

例 言

1. 本報告書は、岩手県九戸郡軽米町大字晴山第21地割字小沼4-3ほかに所在する邑角子久保VI遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。
2. 本遺跡は岩手県教育委員会が所管する遺跡台帳にI F 81-0323として掲載されている。
3. 発掘調査は、一般国道340号の改良工事に伴い、岩手県教育委員会文化課の調整を経て岩手県土木部の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団が記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。
4. 調査面積は5,000㎡である。野外調査は、昭和62年7月1日から10月23日まで行った。調査資料の整理は62年11月2日から63年3月31日まで行った。調査略号はS K VI-87である。
5. 調査には文化財専門調査員の平井進と田村壮一があたり、整理は平井進が担当した。
6. 分析・鑑定は次の方々及び機関に依頼した。(敬称略)

火山灰の分析・鑑定	奈良大学教授 三辻 利一
岩質鑑定	佐藤地質工学研究所 佐藤 二郎
木材鑑定	岩手県木炭協会 早坂松次郎
プラント・オパール分析	古環境研究所
種子同定	パリーノ・サーヴィ株式会社
7. 本調査にあたって、次の方々から指導・助言を得た。(敬称略)

盛岡短期大学学長 草間俊一	軽米町歴史民俗資料館館長 大川茂樹
---------------	-------------------
8. 遺跡の基準点測量はアジア航測株式会社に、空中写真撮影は東邦航空株式会社に依頼した。
9. 本報告書の執筆・編集・校正は平井進が担当した。
10. 野外調査にあたっては、二戸土木事務所、軽米町教育委員会等の関係機関や高沢喜一氏をはじめとする地元の方々の御協力を頂いた。
11. 本遺跡から出土した遺物及び調査資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

序	
例言	
I 調査に至る経過----- 3	2. 平安時代----- 44
II 位置と環境----- 3	〔1〕住居跡----- 45
1. 位置----- 3	〔2〕掘立柱建物跡----- 60
2. 地理的環境----- 3	〔3〕溝跡----- 64
3. 地形----- 4	〔4〕ピット----- 67
4. 地質----- 4	〔5〕畑地跡----- 74
5. 基本層序----- 4	〔6〕遺構外出土遺物----- 79
6. 歴史的環境----- 7	〔7〕まとめ----- 82
III 調査の方法と経過----- 12	3. 江戸～明治時代----- 87
1. 調査と整理の方法----- 12	〔1〕住居跡----- 87
(1) 野外調査----- 12	〔2〕井戸跡----- 89
(2) 室内整理----- 13	〔3〕ピット----- 91
(3) 掲載図版について----- 14	〔4〕出土遺物----- 91
2. 調査経過の概要----- 15	〔5〕まとめ----- 112
IV 検出された遺構と遺物----- 19	付 篇
1. 縄文時代----- 19	皂角子久保VI遺跡出土火山灰の
〔1〕ピット----- 19	蛍光X線分析----- 114
〔2〕陥し穴----- 28	プラント・オパール分析調査報告書----- 116
〔3〕遺構外出土の遺物----- 38	皂角子久保VI遺跡出土試料
〔4〕まとめ----- 41	種子同定報告書----- 129

表 目 次

第1表 軽米町内遺跡一覧表-----	11
第2表 種子同定とプラント・オパールの結果-----	85
第3表 木器・木製品一覧表-----	111

図 版 目 次

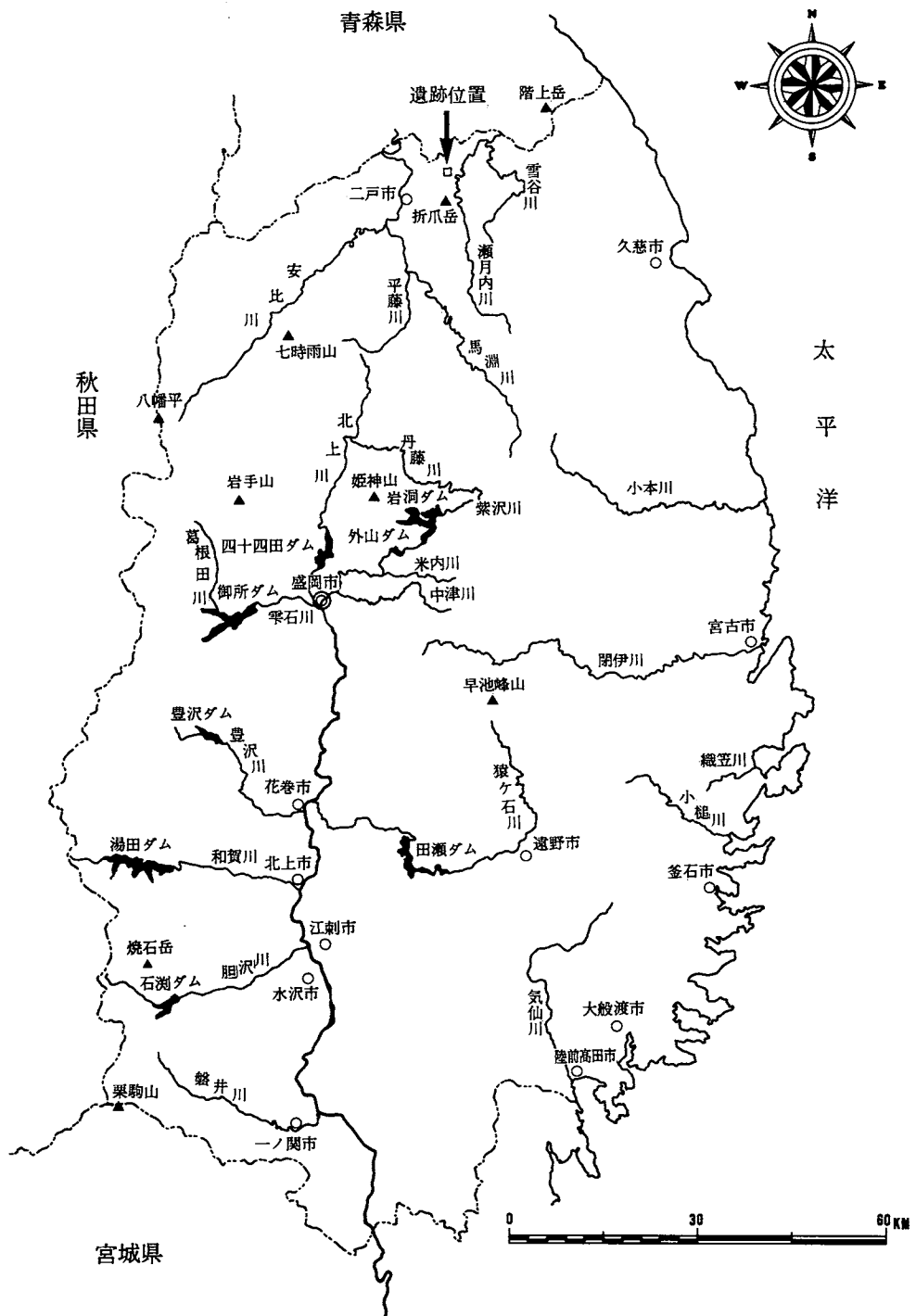
第1図 岩手県全図----- 1	第31図 IV A - 59 陥し穴----- 33
第2図 遺跡位置図----- 2	第32図 III A - 101 陥し穴----- 34
第3図 遺跡周辺の地形図----- 5	第33図 V A - 104 陥し穴----- 34
第4図 IV A 区土層断面図----- 6	第34図 V A - 101 陥し穴----- 35
第5図 軽米町内遺跡分布図----- 9	第35図 V A - 102 陥し穴----- 36
第6図 グリッド配置図----- 15	第36図 V A - 103 陥し穴----- 37
第7図 遺構配置図----- 17	第37図 VI A - 101 陥し穴----- 38
第8図 縄文時代の遺構配置図----- 19	第38図 遺構外出土遺物(土器)----- 39
第9図 V A - 56ピット----- 20	第39図 遺構外出土遺物(石器)----- 40
第10図 V A - 52ピット----- 20	第40図 平安時代の遺構配置図----- 44
第11図 V A - 51ピット----- 21	第41図 I A - 1 住居跡----- 46
第12図 V A - 57ピット----- 22	第42図 I A - 1 住居跡内出土遺物(1)--- 47
第13図 VI A - 52ピット----- 22	第43図 I A - 1 住居跡内出土遺物(2)--- 48
第14図 V B - 51ピット----- 23	第44図 II A - 1 住居跡----- 50
第15図 VI A - 53ピット----- 23	第45図 III A - 1 住居跡及び出土遺物----- 52
第16図 VI B - 51ピット----- 24	第46図 IV A - 1 住居跡----- 54
第17図 VI B - 53ピット----- 25	第47図 IV A - 1 住居跡内出土遺物----- 55
第18図 VI A - 54ピット----- 25	第48図 IV A - 2 住居跡----- 57
第19図 VI A - 55ピット----- 26	第49図 IV A - 2 住居跡内出土遺物(1)----- 58
第20図 V A - 54~VI B - 52ピット----- 27	第50図 IV A - 2 住居跡内出土遺物(2)----- 59
第21図 III A - 57 陥し穴----- 29	第51図 III A - 301 掘立柱建物跡及び 出土遺物----- 61
第22図 III A - 58 陥し穴----- 29	第52図 III A - 302 掘立柱建物跡及び 出土遺物----- 63
第23図 III A - 59 陥し穴----- 30	第53図 III A - 303 掘立柱建物跡----- 64
第24図 III A - 60 陥し穴----- 30	第54図 II A - 201 溝跡----- 65
第25図 III A - 61 陥し穴----- 31	第55図 III A - 201 溝跡----- 66
第26図 III A - 62 陥し穴----- 31	第56図 III A - 51ピット及び出土遺物----- 68
第27図 IV A - 55 陥し穴----- 31	第57図 IV A - 51ピット----- 69
第28図 IV A - 56 陥し穴----- 32	第58図 IV A - 52・53ピット及び出土遺物--- 70
第29図 IV A - 57 陥し穴----- 32	
第30図 IV A - 58 陥し穴----- 33	

第59図	II A - 51～57ピット群	71	第76図	VIII A - 1 住居跡内出土遺物	94
第60図	II A - 58・59ピット	72	第77図	木器・木製品(1)	96
第61図	II A - 60・61ピット	72	第78図	木器・木製品(2)	97
第62図	II B - 51・52ピット	72	第79図	木器・木製品(3)	98
第63図	III A - 52・53ピット	73	第80図	木器・木製品(4)	99
第64図	III A - 54・55ピット	73	第81図	木器・木製品(5)	100
第65図	III A - 59ピット	73	第82図	木器・木製品(6)	101
第66図	IV A - 54ピット	73	第83図	木器・木製品(7)	102
第67図	III A～IV A区畑地跡重複状況	75	第84図	木器・木製品(8)	103
第68図	畑地跡断面図及び上層断面図	76	第85図	木器・木製品(9)	104
第69図	III A～IV A区畑地跡	77	第86図	木器・木製品(10)	105
第70図	遺構外出土遺物(平安)(1)	80	第87図	木器・木製品(11)	106
第71図	遺構外出土遺物(平安)(2)	81	第88図	木器・木製品(12)	107
第72図	江戸～明治時代の遺構配置図	87	第89図	木器・木製品(13)	108
第73図	VIII A - 1 住居跡	88	第90図	木器・木製品(14)	109
第74図	井戸跡及び柱穴状ピット	90	第91図	木器・木製品(15)	110
第75図	VIII A - 1 住居跡出土遺物	93			

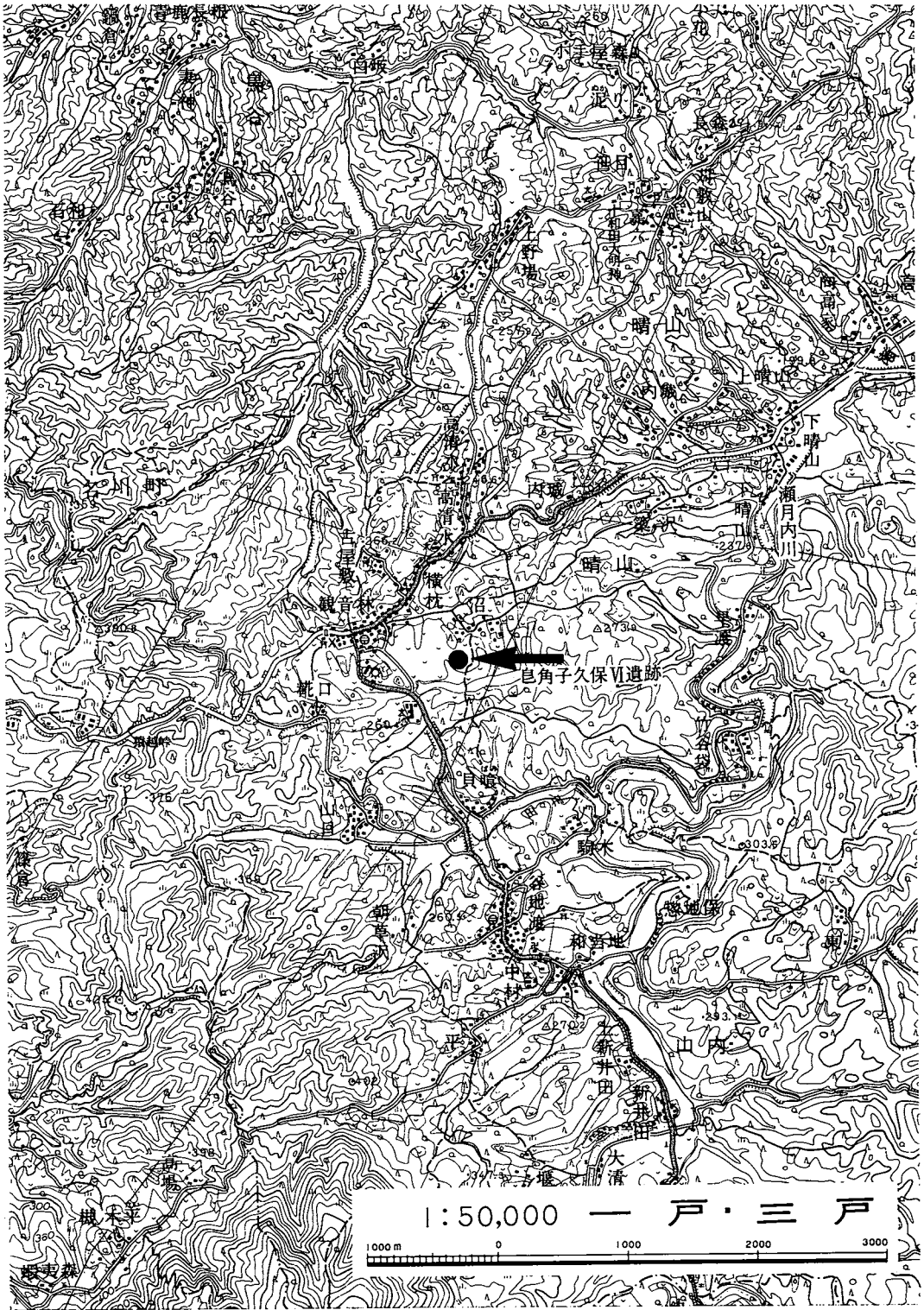
写真図版目次

写真図版 1	調査区全景	137	写真図版 9	III A - 61、IV A - 55～57 陥し穴	145
写真図版 2	平安時代の遺構群	138	写真図版 10	IV A - 58・59陥し穴	146
写真図版 3	調査風景・基本層序等	139	写真図版 11	III A - 101、V A - 104 陥し穴	147
写真図版 4	V A - 51・52・56・57 ピット	140	写真図版 12	V A - 101・102陥し穴	148
写真図版 5	VI A - 52、V B - 51、VI A - 53 VI B - 51ピット	141	写真図版 13	V A - 103、VI A - 101 陥し穴	149
写真図版 6	VI A - 54・55、VI B - 53 ピット	142	写真図版 14	I A - 1 住居跡	150
写真図版 7	V A - 53・54、VI A - 51、 VI B - 52ピット	143	写真図版 15	I A - 1 住居跡遺物出土状況	151
写真図版 8	III A - 57～60陥し穴	144	写真図版 16	II A - 1 住居跡	152

写真図版17	Ⅲ A - 1 住居跡	153	写真図版31	I A - 1 住居跡内出土遺物	167
写真図版18	Ⅳ A - 1 住居跡	154	写真図版32	Ⅲ A - 1、Ⅳ A - 1 住居跡 内出土遺物	168
写真図版19	Ⅳ A - 1 住居跡・カマド・ 遺物出土状況	155	写真図版33	Ⅳ A - 2 住居跡内出土遺物	169
写真図版20	Ⅳ A - 2 住居跡	156	写真図版34	ピット内出土及び 遺構外出土遺物(土師器)	170
写真図版21	Ⅲ A - 301 掘立柱建物跡	157	写真図版35	ミニチュア土器・土製品 (土師器)・磁器	171
写真図版22	Ⅲ A - 302・303 掘立柱建物跡	158	写真図版36	鉄滓・埴埴・陶磁器	172
写真図版23	Ⅲ A - 201 溝跡	159	写真図版37	石器・石製品	173
写真図版24	Ⅱ A - 201 溝跡、Ⅲ A - 51、 Ⅳ A - 51ピット	160	写真図版38	鉄製品	174
写真図版25	畑地跡	161	写真図版39	古銭・布	175
写真図版26	畑地跡の検出・重複状況	162	写真図版40	木器・木製品 (1)	176
写真図版27	Ⅲ A - 1 住居跡	163	写真図版41	木器・木製品 (2)	177
写真図版28	Ⅲ A - 301 井戸跡	164	写真図版42	木製品 (3)	178
写真図版29	縄文土器	165	写真図版43	木製品・板材・杭	179
写真図版30	縄文土器及び I A - 1 住居跡 内出土遺物	166	写真図版44	井戸枠	180



第1図 岩手県全図



第2図 遺跡位置図

I 調査に至る経過

九戸郡軽米町地内における一般国道 340号の道路改良工事は、観音林南側を迂回する総延長 2,600mの改良工事であり、昭和60年度に着工し、昭和66年度完成の予定である。

これに関連する埋蔵文化財包蔵地については、昭和60年12月3日付け「二土第1334号 一般国道 340号道路改良工事施行に伴う埋蔵文化財発掘調査の事前調査について」をもって、県教育委員会事務局文化課長あての依頼があった。この依頼にもとづき文化課は、同年12月23～24日の両日に現地調査を実施した。

路線内には既到大堤Ⅱ、皂角子久保Ⅵ、皂角子久保Ⅶ、小沼Ⅰ等の遺跡が確認されており、現地調査の結果は、昭和60年12月25日付け「教文第 526号」により二戸土木事務所長あて回答した。これにより、昭和61年には大堤Ⅱ遺跡、昭和62年度には皂角子久保Ⅵ遺跡の発掘調査が実施されることとなり、文化課の調整と指導のもとに財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの発掘調査事業計画に編入された。

二戸土木事務所から委託を受けた当埋蔵文化財センターは、昭和62年7月1日付けの契約により発掘調査に着手することとなった。

II 位置と環境

1. 位置

本遺跡の所在する軽米町は、岩手県の北端に位置し、北は青森県名川町、南郷村、階上町に接する。東は岩手県種市町と大野村、南は山形村と九戸村、西は二戸市に接する。本遺跡は、軽米町の西部に所在し、打瓜岳（852 m）山頂の北約 6 km、J R 東日本釜田一温泉駅の東約 7 kmに位置する。同地点は北緯40度19分13秒、東経 141 度23分24秒付近である。

2. 地理的環境

軽米町の年平均気温は 9.3℃、降水量は 1,047 mmである。最寒月平均気温が^(文1) - 3.5℃、最暖月平均気温が23℃である。よってケッペンの気候区分からいえば冷帯湿潤気候に属する。この気象条件を岩手県内の他の地域と比較すると、気温では内陸性気候の特徴を有する盛岡とほぼ同じ、降水量においては非常に少ない。^(文1、註1) 初霜は10月初旬、終霜は5月中旬で積雪期間は約3ヶ月である。風向は年間を通じ西風が多いが、特に冬期間は季節風による西風となる。5月～7月に北東風（山背）が吹きこむことがあり、その日数が多いと冷害の要因となる。

本遺跡の東約 2.5 kmには瀬月内川が北流している。同河川は山形村の明神岳（887 m）を水源とし部分的には蛇行しながらもほぼ北流する。同河川は二級河川であり、水量も少ないが、

流域には九戸村の戸田、伊保内、江刺家、軽米町の山内、晴山、高家など多くの集落が立地し、生活用水としての役割を果たしている。

3. 地形

本遺跡がのる軽米町晴山地区は北上山地北端に位置し、西に折爪岳山地や猿越峠山地がほぼ南北に連なっている。折爪岳山地は急斜面を形成しその脚部は明瞭であるが、猿越峠山地の脚部は特にその東側ではそれ程明瞭とはいいがたい。これらの山地の東側には瀬月内川が山地に平行するように北流する。この山地と瀬月内川の間は幅の狭い丘陵となっているが、中村（本遺跡の南約2km）付近から北部では比較的まとまった面的広がりをもつ。これが観音林丘陵である。この丘陵は標高200～300mでその起伏量は概ね50～150mである。しかも、本遺跡付近では起伏量が50m未満であり、なだらかな丘陵のなかでも一層なだらかな地形となっている。本遺跡の現況は、尾根の頂部には植林されているが、その他は畑地として利用されている。

4. 地質

馬淵川寄りの山地斜面は第三紀層が基盤として露われ、瀬月内川寄りには直接古生層のチャート、スレート等が基盤となっている。丘陵は大小の沢や川によって開析され、谷底平野は砂礫、泥の堆積となっている。

本遺跡は観音林丘陵の縁辺にのり、火山砕屑物を基盤としている。表土の土壌は駒板統の黒ボクである。

5. 基本層序

調査区の微地形は、尾根の頂部とそこから続くやや急な斜面、及び尾根の裾野として広がる緩斜面の三つに区分される。この微地形の層序を比較すると、層の欠落や層厚の相違となって表われる。尾根の頂部では第Ⅱ～Ⅲ・Ⅶ層が流失している。尾根の東側は中位から脚部まで第Ⅲ層が厚く堆積し、その下の第Ⅳ層は中振浮石の純層が20～30cmの厚さに堆積する。それに対して西側はⅠb層が厚く堆積し、第Ⅳ層の中振浮石の純層はほとんど見られない。以上の状況から遺跡全体を標準的に表わす所は得られない。したがって、ここでは層厚についてはとりあげず、土層の重なる順序・土性・混入物と遺構・遺物とのかかわりを述べるにとどめたい。なお、白頭山火山灰と十和田a降下火山灰は遺構の埋土もしくは当該時期に形成された凹地以外では全く見られなかったため、層序の位置は認識していたにもかかわらず連番を付けなかった。

第Ⅰa層 10Y R $\frac{2}{2}$ ～ $\frac{3}{2}$ 黒褐色土 黒ボク。尾根の頂部は腐葉土との混土。遺跡の全面を被う表土で畑地として耕作されている。締まりがない。

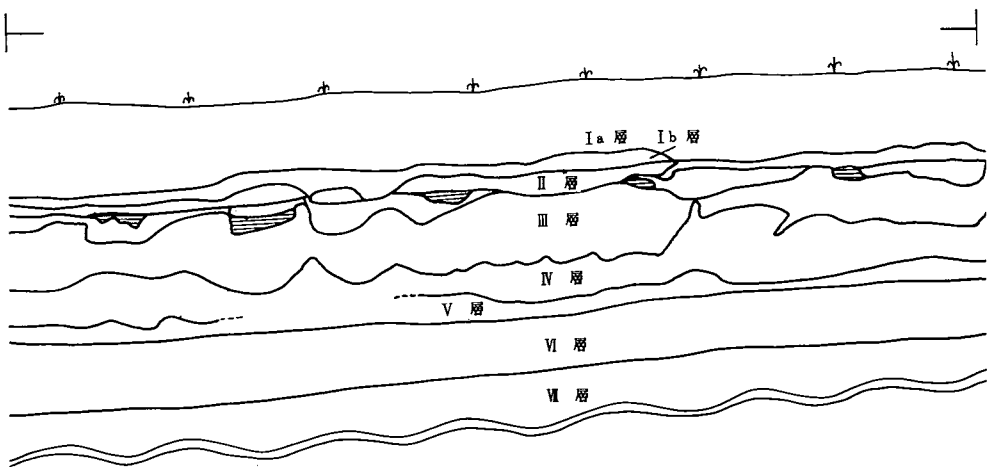
第Ⅰb層 10Y R $\frac{2}{2}$ ～ $\frac{3}{2}$ 黒褐色～黒色土 黒ボク。基本的にはⅠa層と同じであるが、Ⅰa層より締まっている。

(2.5 Y R $\frac{3}{2}$ ～ $\frac{4}{2}$ にふい黄色土 白頭山火山灰。粉状で全く粘性を欠く。黄ばんで見える。)

(2.5 Y R $\frac{7}{4}$ 灰白色土	十和田 a 降下火山灰。ガラス質でさらさらしている。
第II層 10 Y R $\frac{5}{4}$ 黒色土	上位に十和田 b 降下火山灰が混入する。粘性を有する。平安時代以降の遺構検出面であり、遺構外出土の土師器・須恵器はほとんどがこの層から検出される。
第III層 10 Y R $\frac{3}{4}$ ~ $\frac{2}{2}$ 黒色土	黄褐色の浮石粒がほぼ均一に含まれる。粘性が有り締まっている。
第IV層 10 Y R $\frac{3}{4}$ ~ $\frac{2}{2}$ 暗褐色~黒褐色土	中振浮石層。第III層起源の黒色土と混じり、上位は黒色土が卓越するが、下位ほど中振浮石が多くなり明るく粘性が乏しい。
第V層 10 Y R $\frac{3}{4}$ ~ $\frac{2}{2}$ 黒~黒褐色土	褐色の粗大パミスを含む。粘性もあり、やや硬く締まっている。縄文時代前期の遺構検出面である。
第VI層 7.5 Y R $\frac{5}{6}$ 明褐色土	南部浮石層。一次堆積で尾根の頂部を除いて遺跡の全面に広がる。層厚は30~40cmで一定している。
第VII層 10 Y R $\frac{3}{4}$ ~ $\frac{2}{2}$ 黒~黒褐色土	上位に若干南部浮石粒が混入する所もある。尾根の上位には見られない。
第VIII層 10 Y R $\frac{3}{4}$ ~ $\frac{2}{2}$ 褐色土	八戸火山灰層。粘性があり、よく締まっている。遺跡全体を覆う基盤層である。

なお、参考としてIV A 区の土層図を下記に示めしておく。

L=248,600M



第4図 IV A 区土層断面図

6. 歴史的環境

旧石器時代の遺跡は、軽米町及びその周辺からの確実な報告例はないが、^(文3) 吠屋敷 Ia 遺跡から「『旧石器』的要素を持つ石器」として尖頭器 3 点、彫器 1 点が報告されている。しかし、^(注2) 出土層位が不明であり、再吟味する必要がある。

縄文時代草創期の遺構と遺物は^(文4) 馬場野 II 遺跡から発見されている。遺構は土坑、遺物は多縄文系土器である。同遺跡は本遺跡の東約 5.5 km に位置し、瀬月内川とその東を蛇行しながら北流する雪谷川との間の丘陵地に立地している。該期の遺跡は県北地区では唯一の遺跡である。

県北部の縄文時代早期の遺跡数は、近年の発掘調査が増加するに伴いその数を増してきている。当町では^(文5) 土弓 I 遺跡、馬場野 II 遺跡、^(文4) 天馬沢遺跡、^(文6) 平中遺跡が知られ、前二者は発掘調査によって遺構や遺物が確認されている。土弓 I 遺跡からは貝殻文土器、表裏縄文土器、馬場野 II 遺跡からは住居跡 2 棟と押型文土器、貝殻文土器が出土している。これらの遺跡は町の中央部とやや東寄りに位置し、なだらかな丘陵に立地している。

縄文時代前期の遺跡は吠屋敷 Ia 遺跡、吠屋敷 Ib 遺跡^(文6)、吠屋敷 II 遺跡^(文7)、吠屋敷 III 遺跡^(文8)、大日向 II 遺跡^(文9)などが発掘調査されているほか、少なくとも^(文7) 駒木 VII 遺跡、^(文7) 駒木遺跡、^(文8) 上館遺跡の 3 遺跡が知られている。住居跡が確認されたのは吠屋敷 Ia 遺跡 1 棟、吠屋敷 Ib 遺跡 2 棟、大日向 II 遺跡の 5 棟である。吠屋敷 II 遺跡と吠屋敷 III 遺跡は当該時期の土器片が少量出土している。

縄文時代中期の遺跡は、遺跡数が増加し、規模においても前期に比較して拡大される。時期は中期前半に属する遺跡は少なく、ほとんどが中期末葉のものである。住居跡でみると吠屋敷 Ia 遺跡の 34 棟、^(文10) 君成田 IV 遺跡と馬場野 II 遺跡の 10 棟、吠屋敷 II 遺跡の 7 棟、吠屋敷 III 遺跡と大日向 II 遺跡の各 4 棟、吠屋敷 Ib 遺跡の 1 棟など集中的に立地する傾向がみられる。

縄文時代後期は更に規模が拡大する。君成田 IV 遺跡の 40 棟を最高に馬場野 II 遺跡の 35 棟、^(文11) 駒板遺跡の 34 棟、大日向 II 遺跡の 27 棟、吠屋敷 III 遺跡の 9 棟、吠屋敷 II 遺跡の 6 棟などのように住居跡の数も増加する。

縄文時代晩期は後期にあげた遺跡以外に 40 以上の遺跡が知られ、時期別の遺跡数では最も多い。しかし、発掘された住居跡は、駒板遺跡の 8 棟を最高に君成田 IV 遺跡の 5 棟、馬場野 II 遺跡の 4 棟、吠屋敷 Ia 遺跡の 1 棟と数が少なくなる。

以上のように縄文時代の遺跡は時期が新しくなるほど遺跡数が増加する傾向にある。

弥生時代の遺跡としては住居跡 11 棟が発見された馬場野 II 遺跡と遺物のみの出土例は君成田 IV 遺跡、土弓 I 遺跡、駒板遺跡等がある。馬場野 II 遺跡では第 IX 群土器として一括され、「土器から見た時期は東北地方における弥生時代初頭頃と考えられる」と報告されている。^(注3) また、吠屋敷 Ia 遺跡からは^(注3) 谷起鳥式併行とされるもののほかに、わずか 1 点のみの出土ではあるが後北 C₂ 式に併行する土器が報告されている。また、『軽米町誌』によれば^(文12) 長倉遺跡から甌が、

諏訪の森からは江別C式土器が出土している。

古墳時代から奈良時代にかけては縄文時代の中～晩期ほどの解明は進んでいない。町内唯一の古墳といわれる御前水古墳は未発掘であり、その全容は不明であるが同古墳からは蕨手刀1振が出土している。同古墳は本遺跡の東4kmに位置している。また、同町誌では古代城柵として「チャシ」をあげ、下野場館にその可能性をもとめている。

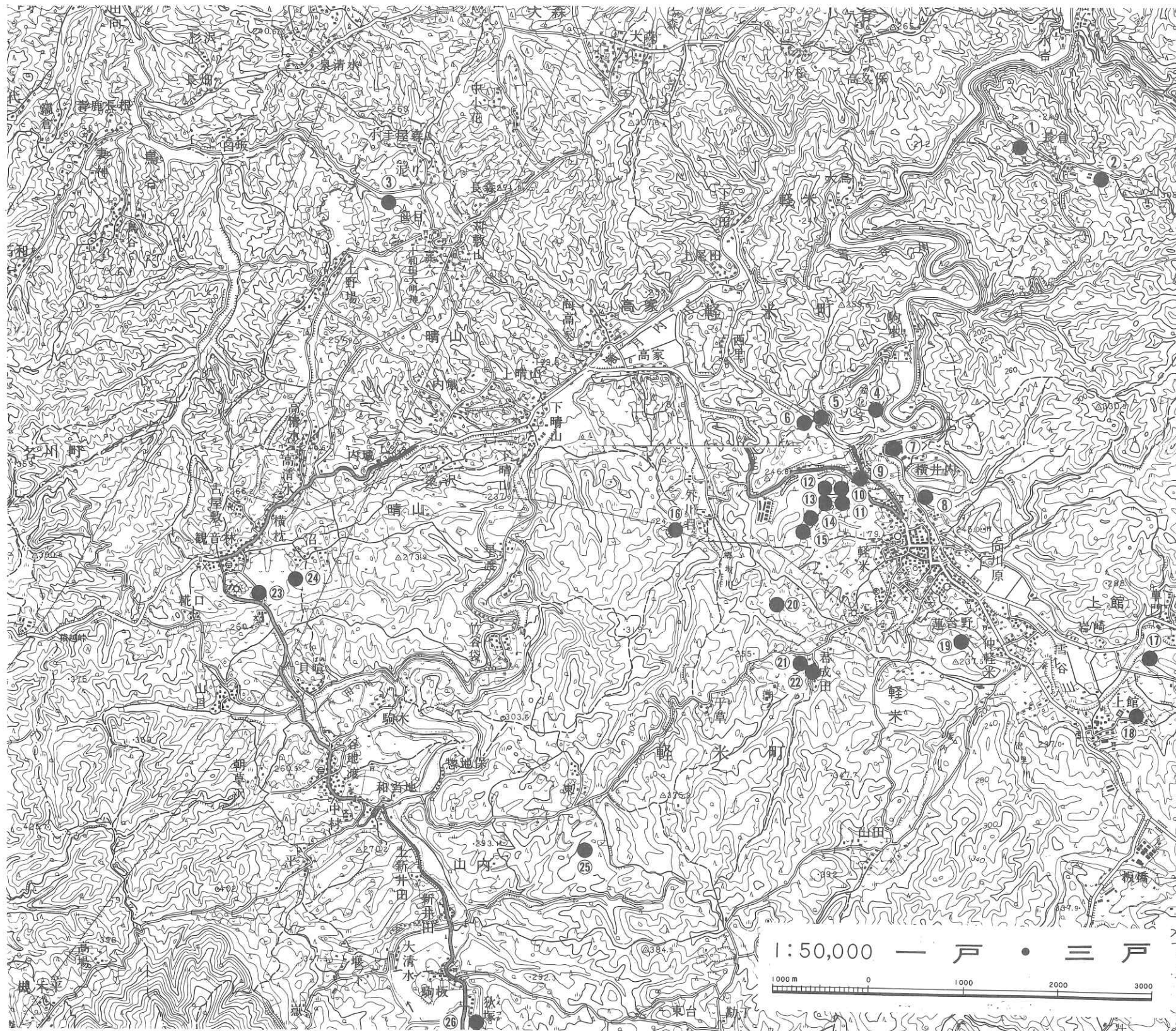
発掘調査によって奈良時代の遺跡と確認されたのは駒板遺跡の15棟、君成田IV遺跡、大日向II遺跡の各2棟、吠屋敷Ia遺跡の1棟である。

平安時代にはいと吠屋敷Ia遺跡の7棟、吠屋敷Ib遺跡の1棟、大日向II遺跡の2棟と大鳥I遺跡、土弓III遺跡、君成田V遺跡、君成田VI遺跡、狄塚I遺跡等が知られている。また土師器、須恵器が出土している遺跡はこれらのほかにも多数あることから、該期の遺跡は相当数にのぼると思われる。それは奈良～平安時代には相当の集落が構成されていたことを推測させる。

町内の徳楽寺に収蔵されている薬師如来像、脇侍菩薩像等の仏像は平安時代中期の作といわれている。材質はカツラであり、浄法寺町天台寺の聖観音像と同じである。中央ではヒノキ材を使用するのが通例であることから地方の作と考えられている。

中世における当町は南部氏の統治下にはいり、糠部五郡中九戸郡に属したとされるが、南部氏の直接統治が鎌倉期の初めまで遡るとい説について、町誌は否定的見解をとっている。鎌倉期の後半には北条氏の支配に一時入るが、中世末の天正年間には再び南部氏一門の支配に入るなど揺れ動いている。しかし、当該時期の詳細な文献史料を欠くため、軽米町の詳細な変遷は不明である。中世の最終末の戦いとなった九戸政実の乱（1591年）では当町に勢力を有していた地侍のうち小軽米左衛門佐久俊のみが三戸南部の信直に味方し、他はすべて政実側に立っている。現在、当時の城館跡との伝承をもつ館跡が6遺跡あるが、『岩手県中世城館跡分布調査報告書』によれば、町内にある中世城館の遺跡数は32を数えている。なお、駒板遺跡からは該期の2棟の竪穴住居跡を検出している。

近世後半から幕末にかけて砂鉄を原料とする鉄産業が北上山系北部に成立する。八戸藩領九戸郡では大野鉄山が最大で玉川・金取・葛柄・水沢・大谷・滝山の6鉄山から成る。この玉川鉄山は軽米町の東端に位置する。玉川鉄山跡の発掘調査は県立博物館が昭和60年から調査を行ったが、その規模があまりにも大きく全貌を明らかにするまでには至っていない。近世の住居跡は君成田IV遺跡と吠屋敷Ib遺跡から各1棟が検出されている。



- ①長倉No14遺跡
- ②長倉遺跡
- ③下野場館跡
- ④大鳥Ⅰ遺跡
- ⑤土弓Ⅰ遺跡
- ⑥土弓Ⅲ遺跡
- ⑦駒木Ⅶ遺跡
- ⑧駒木遺跡
- ⑨大日向Ⅱ遺跡
- ⑩叭屋敷Ⅰa遺跡
- ⑪叭屋敷Ⅰb遺跡
- ⑫叭屋敷Ⅲ遺跡
- ⑬叭屋敷Ⅱ遺跡
- ⑭馬場野Ⅰ遺跡
- ⑮馬場野Ⅱ遺跡
- ⑯御前水古墳
- ⑰平中遺跡
- ⑱上館遺跡
- ⑲諏訪の森遺跡
- ⑳君成田Ⅳ遺跡
- ㉑君成田Ⅴ遺跡
- ㉒君成田Ⅵ遺跡
- ㉓大堤Ⅱ遺跡
- ㉔皂角子久保Ⅵ遺跡
- ㉕駒板遺跡
- ㉖狄塚Ⅰ遺跡

※天馬沢遺跡は平中遺跡の北東
約1.5kmに位置するため図幅外である。

第5図 軽米町内遺跡分布図

第1表 軽米町内遺跡一覧表(「岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧」より抜粋、補注)

番号	遺跡コード	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地	備考
1		長倉 Na 14	散布地	縄文	軽米町大字長倉	岩埋報第10集
2	I F 63. 1397	長倉 I	散布地	こしき(土師器)破片、石剣	軽米町大字長倉字一本木	岩埋報第25集
3	I F 62. 2031	下野場 館	館址	石器	軽米町大字晴山字下野場	
4	I F 63. 2029	大鳥 I	散布地	縄文(後・晩期)土器、平安	軽米町大字軽米字大鳥	
5	I F 73. 1058	土弓 I	集落跡	縄文(晩期)土器	軽米町大字土弓	岩埋報第50集
6	I F 73. 1056	土弓 III	集落跡	平安土器	軽米町大字軽米字土弓	
7	I F 73. 0128	駒木 VII	散布地	縄文(晩期・前期)土器	軽米町大字上館	
8	I F 73. 0185	駒木	散布地	縄文(前・中期)土器	軽米町大字軽米字駒木	
9	I F 73. 2112	大日向 II	散布地	縄文(前期(円下a)晩期)石器	軽米町大字軽米第12地割字土弓	岩埋報第100集
10	I F 73. 2110	吠屋敷 Ia	集落跡	縄文(晩期)土器	軽米町大字軽米字吠屋敷	岩埋報第61集
11	"	" Ib	"	"	軽米町大字軽米字吠屋敷	岩埋報第63集
12	"	" III	"	"	軽米町大字軽米字吠屋敷	岩埋報第48集
13	"	" II	"	"	軽米町大字軽米字吠屋敷	岩埋報第47集
14	I F 73. 2048	馬場野 I	集落跡	縄文(後期)	軽米町大字軽米字馬場野	岩埋報第68集
15	I F 73. 2058	馬場野 II	集落跡	縄文(晩期)土器	軽米町大字軽米字馬場野	岩埋報第99集
16	I F 72. 2352	御前水古墳	古墳	蕨手刀	軽米町大字軽米字外川目	
17	I F 84. 1001	平中	散布地	縄文(早・中期)土器、土師器、石斧	軽米町大字上館字平中	
18	I F 83. 1056	上館	館跡	濠	軽米町大字上館字下町	
19	I F 83. 0273	諏訪の森	散布地	縄文(晩期)土器、江別式C	軽米町大字軽米字諏訪の森	
20	I F 83. 0043	君成田 IV	集落跡	縄文(後・晩期)土器	軽米町大字軽米字君成田	岩埋報第62集
21	I F 83. 0084	君成田 V	集落跡	縄文(晩期)土器、平安	軽米町大字軽米字君成田	
22	I F 83. 0096	君成田 VI	集落跡	縄文(晩期)土器	軽米町大字軽米字君成田	
23	I F 81. 0248	大堤 II	散布地	縄文土器	軽米町大字晴山字大堤	岩埋報第119集
24	I F 81. 0323	皂角子久保VI	散布地	縄文土器	軽米町大字晴山字皂角子久保	岩埋報第129集(本書)
25	I F 92. 0214	駒板	集落跡	縄文(後・晩期)土器、平安(近世)	軽米町大字山内字駒板	岩埋報第98集
26	I F 92. 1183	狄塚 I	集落跡	縄文(晩期)土器、平安	軽米町大字狄塚字川向	

〔注〕

1. 平均気温 ・ 降水量
 盛岡市 9.6℃ 1,237.5 mm
 宮古市 10.1℃ 1,456.0 mm
 大船渡市 10.5℃ 1,718.5 mm
2. 文献2 P.235
3. 文献4 P.313
4. 岩手県教育委員会の『遺跡地名表』による。
5. 文献12 P.60

Ⅲ 調査の方法と経過

1. 調査と整理の方法

(1) 野外調査

〔グリッドの設定〕 (第6図)

調査区内には二戸土木事務所が測量した中心杭がNo.35からNo.46まで20m間隔で打ってあった。その中のNo.41+10の杭を選んで基点1とし、中心杭No.40と結ぶ線を東西の基線(基線1)とした。次にこの基線に直交し基点1を通る直線を設定し、南北の基線(基線2)とした。これにより得られた基線をもとにして1m間隔に調査区全域を網羅するようにメッシュを組んだ。

次に、基点1の西150m、北20mの地点に座標の原点(E-0、S-0)を定めた。原点より東と南へ30mごとに区画し、東へはI、II、III……IXのローマ数字、南へは大文字のアルファベットA、Bを付し大グリッドを設定した。また、小グリッドは更に10等分し、東へは0、1、2……9の算用数字、南へは小文字のアルファベットa、b、c……jを付した。

以上の操作によって得られた線分およびグリッドに次のように命名した。線分には原点より東へ向うものにはE、南へ向かうものにはSを冠し1メートル単位で数字を付し、E-1、S-1のごとく命名した。グリッド名は数字とアルファベットの組み合わせにより、IA、IIB、0a、1bのごとく表わした。なお、基線2は磁北に対し20秒西偏するのみであったため、その差を無視し基線をもって遺跡の方位とした。本報告書の遺構図面に示めされた方位は遺跡の方位である。

基準点測量の結果、基点1は次のような値を得ている。

平面直角座標 第X系	北緯 40°19'13"	真北 - 0°21'37"
X = +35726.308	東経 141°23'24"	標高 253.039m (杭高)
Y = +47311.567		

〔粗掘〕

はじめに調査区全域にわたって表採を実施した。次に調査区の外面線に沿って幅1mのトレンチを入れ遺物の出土状況、土層の観察等を行った。その結果、尾根の東側斜面には遺構・遺物は少なく西側のIIA区、IIB区、IIIA区等は土師器を中心に遺物が若干ではあるが採集でき遺構も確認された。したがって、IIA区～IIIA区は手掘りによって進めることとしたが、東側斜面の表土剥ぎや土捨て場が確保できないため調査区内で土を返す必要があり、それらについては重機を使用することにした。また、クメ押し等にも重機を使用した。

〔遺構検出と遺構の命名〕

遺構検出は土捨て場がないため大グリッドごとに土を返す方法をとらざるを得ない状況から、

順序よく進めることはできなかった。したがって、まず尾根の頂部（V A区、V B区、VI A区、VI B区）と、II A区、II B区から開始した。しかし、尾根の頂部には縄文、西側斜面には平安の遺構がかなり広範囲に広がることが明らかになったため、当初の計画を変更して、遺構や遺物が無い区域を土捨て場とする方法をとった。

大部分の遺構は表土直下で明瞭に検出された。検出された遺構を調査した後、調査区の全域で中振浮石層を剥ぎ遺構検出を行った。その結果、円筒状陥し穴11基と溝状陥し穴1基を検出した。また、VIII A区以東を除いてすべてVIII層の褐色土まで掘り下げて遺構検出を行ったがVI層以下からは遺構や遺物は全く検出されなかった。

遺構名は大グリッドごと、種別ごと、検出順に連番を付し遺構名とした。番号は種別によって次のとおりとした。建物跡は1から、ピットは（検出時に円形状を呈するものは全て含めて）51から、溝状陥し穴は101から、溝跡は201から、その他は301からそれぞれ始めることとした。ただし、調査の過程で遺構の種別が変わった場合はその時点で変更した。なお、VIII A区の掘立柱建物跡は検出時に明確であったことから住居跡と同様1の番号を付したが、それ以外の掘立柱建物跡はかなり後から分かったため300番台の番号を採用している。

〔精査と実測〕

原則として竪穴住居跡は4分法、ピット等は2分法を採用した。遺構図面は $\frac{1}{50}$ の縮尺を用い遺り方実測を行った。標高はレベル計測機を用いて計測した。遺構配置図中の等高線は表土を除去した後に計測したものである。埋土の土層番号は上位から順に算用数字を用いて表わし、基本層序のローマ数字と区別した。

遺構の観察や精査の過程において必要と思われる事項はフィールド・カードに記録した。

〔写真撮影〕

現場での写真撮影は35mm判2台（モノクロ、カラー・リバーサル）と6×7cm判のモノクロ1台を使用した。空中写真は民間会社に依頼した。

(2) 室内整理

〔整理担当者と整理計画〕

野外調査で得た資料の整理は、一部は野外調査と並行して行ったものもあるが、その大半は当センターで行った。野外調査には平井、田村が当たったが、整理は平井が担当した。しかし、本文記載に当っては両調査員の意思疎通を計るように心がけた。

室内整理は11月1日から翌年3月末日までの5ヶ月、整理作業補助員3名を充当する体制で行った。11月は遺物の洗浄・記名・接合・復合と遺構図面の点検・合成・トレースを中心に、12月は遺物実測と調査略報用の図版及び遺物写真撮影、1～2月は遺物実測トレースと拓本作成及び遺物の観察と本文の記述、3月は図版作成と本文執筆割付という計画で進めた。本文執

筆と割付けを除いて概ね予定通り進行した。

〔遺構図面〕

現場で作成した図面を点検した後、登録番号を付し台帳に記載した。必要に応じて図面を合成・分解し、報告書掲載用に第2原図を作成した。トレース、図版作成は作業員が、図版の割付けは調査員が行った。

〔遺物処理〕

野外調査と並行して、遺物の処理（洗浄・注記・接合・復元）を行った。しかし、一部は室内整理まで残った。遺物量は、石器が13点、土器は接合・復元しない状態でコンテナ2箱、鉄製品11点、木製品53点、陶磁器22点である。上記の処理の後、報告書掲載用の遺物を選び仮番号を付した。登録番号は報告書で使用した番号とし、台帳に記載した。登録しなかった遺物は、縄文のみの土器片と土師器片および遺構外から出土した陶磁器片である。

実測図又は拓影図として報告書に掲載した遺物と遺構外から出土した陶磁器片は写真撮影をし、報告書の巻末に写真図版として一括し掲載した。写真は35mmモノクロで、撮影には当センターの写真技師が当たった。

〔写真整理〕

野外調査中に撮影した写真は35mm判と6×7cm判に分けてネガアルバムに整理した。スライドはスライドファイルに整理した。いずれも撮影順に整理し、台帳に記載した。

遺物写真は遺物写真として一括し、撮影順にネガアルバムに整理した。

(3) 掲載図版等について

本報告書に掲載した図版は下記の要領で作成したものである。

〔遺構図版〕

遺跡位置図や遺構配置図等は任意の縮尺とし、縮尺率をその都度記した。各遺構の平面図と断面図は $\frac{1}{40}$ の縮尺を原則とした。使用したスクリーントーンは凡例に示したとおりである。方位は遺跡の方位を指し、磁北との差は20秒西偏している。

〔遺物実測図〕

遺物の実測図は原寸大で行った。縄文や土師器の調整痕は器表面側の底部幅とした。実測図の左肩に付した数値は、口縁部径・底部径・高さ、単位はセンチメートルである。不明は—、推定は（ ）、残存高には〔 〕を付けた。木製品は、年輪は木取りが分かる程度に間引くか、又は省略した。調整痕等は凡例に示したとおりである。

〔遺物図版〕

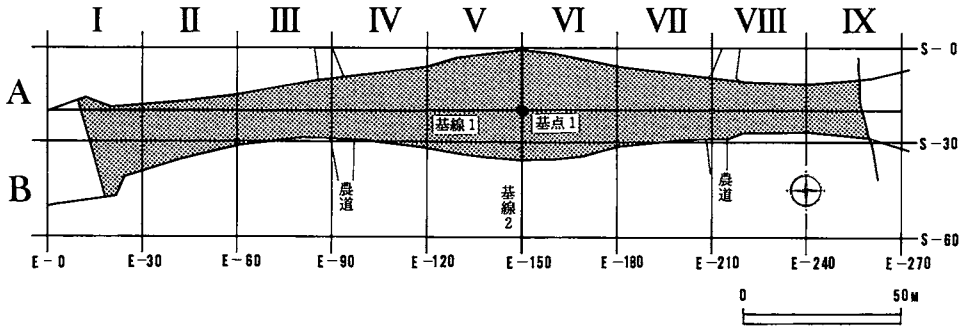
報告書に掲載した遺物実測図は古銭、鉄製品、土製品は $\frac{1}{2}$ 、土器と礫石器は $\frac{1}{3}$ 、剝片石器は $\frac{1}{4}$ に縮小した。木器・木製品は任意の縮尺を用い、その都度縮尺率を注記した。

遺物番号は土器は1から、石器は201から、その他は301から連番を付した。

〔写真図版〕

遺物は概ね遺物図版と同じ縮尺を用いたが、遺構やその他の写真の縮尺は不定である。

遺物番号は遺物図版と同一である。



第6図 グリッド配置図

〔凡例〕

To-a 十和田a 降下火山灰

Ht 白頭山火山灰

To-b 十和田b 降下火山灰

Ch 中板浮石

Nb 南部浮石

S 石・礫

P₁・P₂ 柱穴・ピット

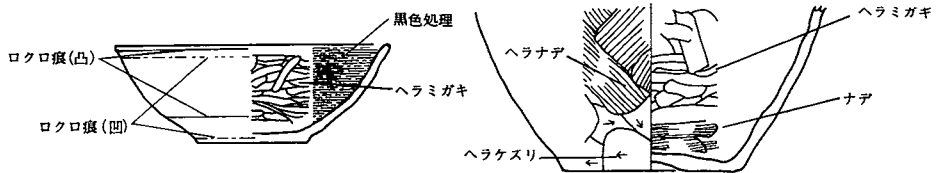
C 炭化材

調査区外

地山

煙土

岩埋セ…岩手県埋蔵文化財センター



2. 調査経過の概要

年度当初の計画に従い7月1日から野外調査を開始した。はじめに調査区の外面線に沿って1m幅でトレンチを入れた。トレンチの深さは概ね約20cmの1スコップ分とし、遺構・遺物の分布状況の把握につとめた。その結果、尾根の脚部付近を除くと第一次検出面までは概ね20cm程度と浅く人手による表土剥ぎは可能であった。ただし、土捨て場がないため土を返す以外に方法はなく、そのための重機を導入する計画を急いで立案することとなった。

人手による粗掘りはI A区の一部とII A区から始めた。調査開始1週間後の8日にI A-1

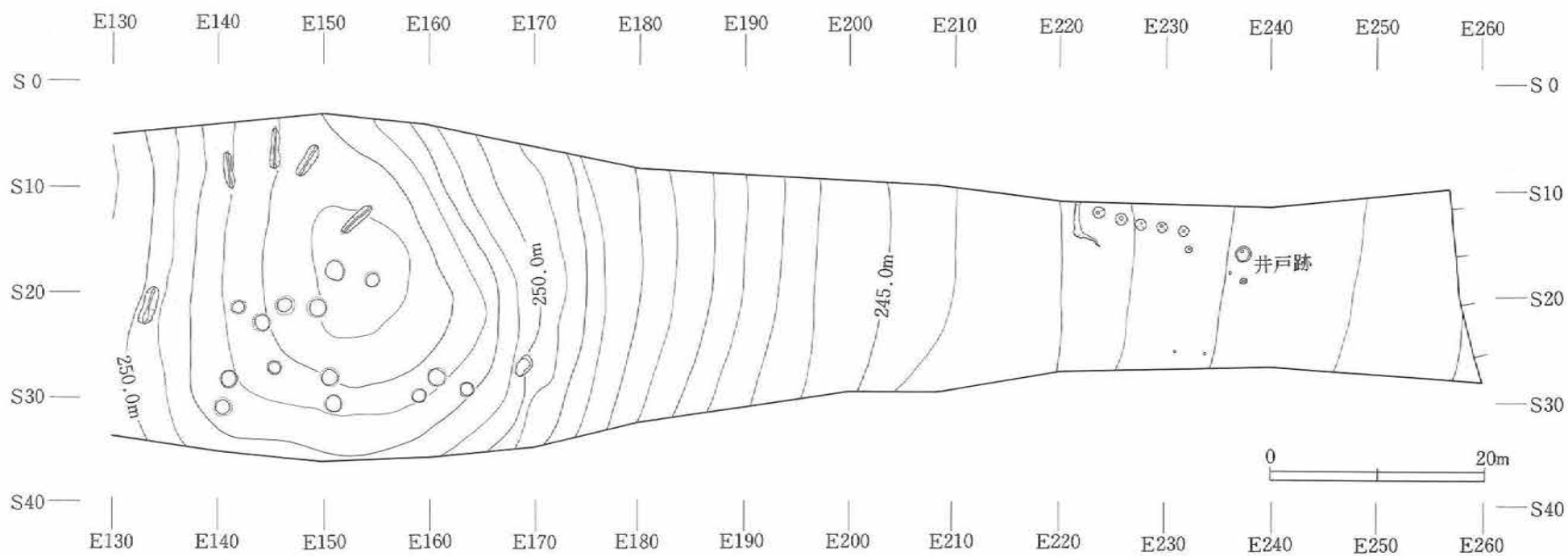
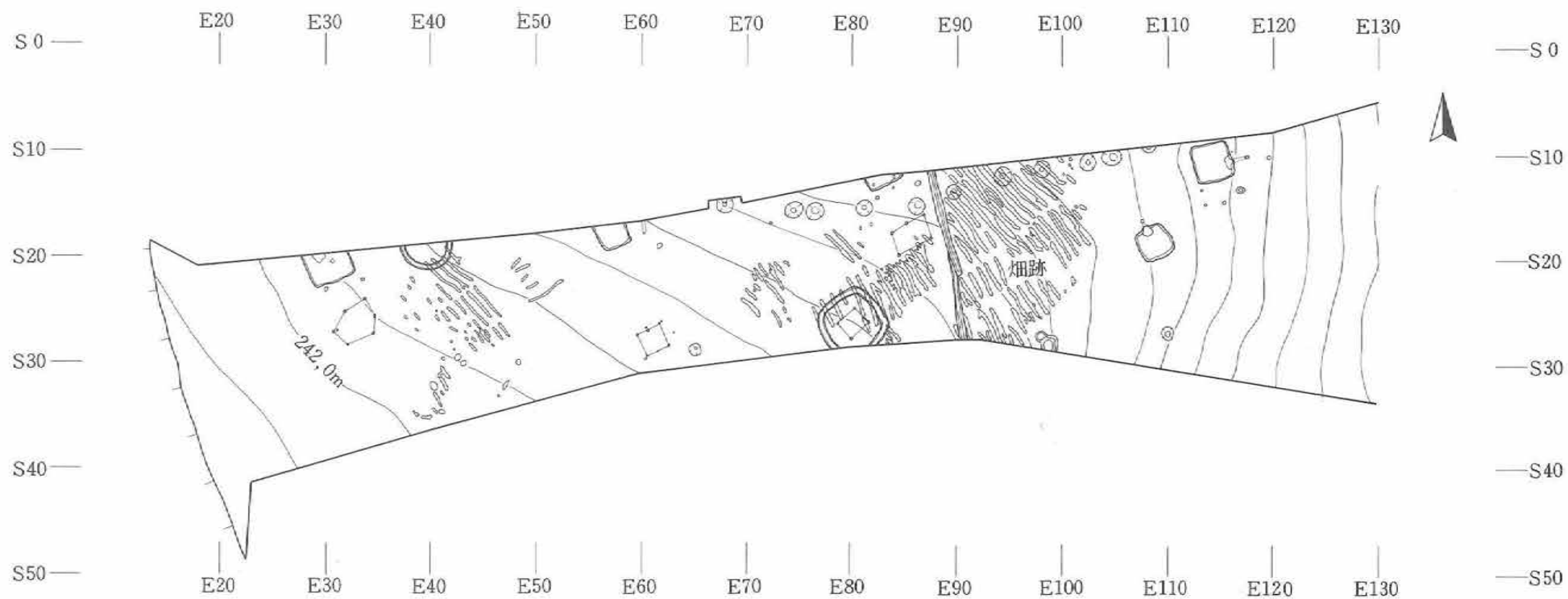
住とII A-1 住の精査に入り、同時に粗掘りも続行した。その結果、十和田 a 降下火山灰が筋状に幾本も検出され、畑跡ではないかという疑問を持った。この問題を解決するため当面II A 区、II B 区は人手で慎重に進めることとし、重機による粗掘りは笹や下草などが生えている尾根のV A 区、V B 区を行うことにした。重機による粗掘りは7月10日から始めた。尾根の頂部はピット群によって占められていることが判明したためその広がりを確認したところ、西側斜面中位は遺構遺物の空白区であることが分かった。したがってそこを土捨て場とすることにし、IV A 区の粗掘りに入った。

IV A 区はI 層が厚く堆積していたが、その土を除去するときわめて整然とした畑地跡と平安時代の住居跡2棟が検出された。また、I A-1 住居跡は焼失した住居跡であることも判明したため、炭化した植物遺体が検出される可能性もあることから、下位の埋土及び床面直上の埋土をフローティングすることにした。しかし、近年になく曇りや雨の日が続いたため、土を乾燥させることができず、やむを得ず土を細かくくだき、水でこした。以上の作業を併行して行う一方、栽培種の問題もでてきたため、プラント・オパールによる分析を行うことにした。

8月に入りIII A 区の粗掘りに入り、尾根をはさんで西側の平安時代の遺構の調査と東側の近世末の民家跡の調査を併行させた。III 区は竪穴住居跡、溝跡、方形周溝跡、畑地跡と遺構の密集区であることが判明した。また、尾根より東側は遺構が希薄であり、遺物もほとんど出土しないことから、本遺跡の主体は畑地跡を中心とする尾根の西側であるとの認識に立ち、調査の主力を尾根の西側においた。お盆休み以後、近世末の民家跡に伴って検出された井戸跡の調査に入った。井戸跡内から沢山の木製品と種子が出土した。西側ではIV A 区で検出した2棟の住居跡を主に調査を進めた。

9月に入りIII A 区から検出された周溝跡、畑地跡、住居跡などを中心に畑地跡の精査にうつった。9月17日にはプラント・オパールの資料採集のため古環境研究所の杉山氏がみえられた。折しも台風くずれの低気圧が通過し、悪天候であった。9月24日には現地説明会を開催した。参加者は約40名であった。9月28日は空中写真撮影を行い、以後畑地跡の遺構実測を行った。

10月に入って第IV層より下位の遺構検出（第二次遺構検出）を行った。12日に至って円筒状陥し穴1基を検出したことにより、全面をIV層まで掘り下げることとし、再度重機を使用できるように手続きをとった。16日にはIII A 区とIV A 区の境を横断している現農道の下への調査に着手した。21日は精査を終了し、22日は遺構実測を進めながら、VIII A 区、IX A 区のダメ押しと用具の梱包をし、10月23日をもって野外調査を終了した。

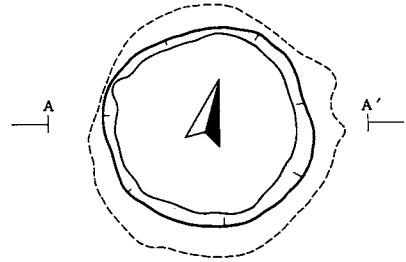


第7図 皂角子久保VI遺跡遺構配置図

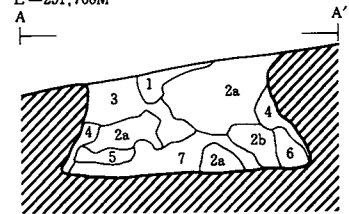
(1) フラスコ状ピット

V A-56ピット (第9図、写真図版4)

〔位置〕尾根の西側斜面上位で、検出されたピット群の中では北西端に位置する。〔埋土〕南部浮石粒の混入率によって、黒褐色～暗褐色土、暗褐色土、暗褐色～褐色土の3層に大別される。埋土2b層が南部浮石の崩壊土を主とすることから自然堆積と思われる。〔規模〕開口部105～115cm、頸部95cm、底部130～140cm、深さ50～60cmである。〔壁〕斜面下位側の頸部はほぼ開口部付近であるが、斜面上位側は頸部から開口部にかけて外反する。頸部から下の壁はオーバー・ハングする。大きく崩壊した所は見られない。〔底部〕水平かつ平坦である。



L=251,700M

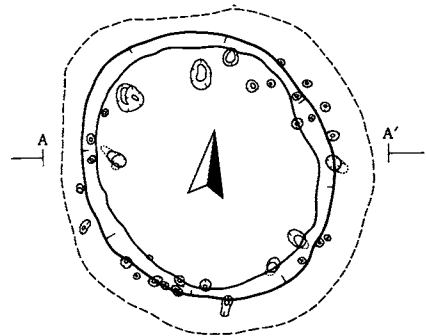


1. 10Y R 1/2 暗褐色土 (含Nb・C少)
- 2a. 10Y R 1/2 暗褐色土 (含Nb, パミス・C少)
- 2b. 10Y R 1/2 暗褐色土 (含Nb多)
3. 10Y R 1/2～1/4 暗褐色土～褐色土 (含Nb少)
4. 10Y R 1/2 褐色土 (含パミス少)
5. 10Y R 1/2 暗褐色土 (含Nb少)
6. 10Y R 1/2 褐色土 (含Nb多, パミス少)
7. 10Y R 1/2 褐色土

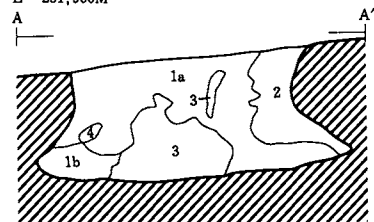
第9図 V A-56ピット

V A-52ピット (第10図、写真図版4)

〔位置〕尾根の西側斜面上位で、V A-56ピットの南東1.5mに位置する。〔埋土〕暗褐色土と褐色土の2層に大別される。埋土上位に粉炭が少々混入する。南部浮石粒等の混入の様子から自然堆積と思われる。埋土1a層から1の縄文土器が出土する。〔規模〕開口部128～148cm、頸部110～130cm、底部163～180cm、深さ55～65cmである。〔壁〕頸部がほぼ中位にあり、底部から頸部までの壁はやや急角度にオーバー・ハングし、頸部から開口部はやや外反ぎみに立ち上がる。〔底部〕中央部がやや低くなるが、ほぼ水平で平坦である。小さい杭跡状の小穴が多数見られる。小穴の大きさ、向きは不規則であるが、頸部の直下に環状に検出されたことから本遺構に伴うなんらかの施設を作った痕跡と思われる。規模は最大径が9cm、深さ10cm、小さいものは径2cm、深さ1cmである。〔出土遺物〕1が1点出土する。鉢形土器の口縁部付近の体部片である。縄文はL

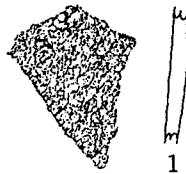


L=251,900M



- 1a. 10Y R 1/2 暗褐色土 (含Nb, C少)
- 1b. 10Y R 1/2 暗褐色土
2. 10Y R 1/2 褐色土
3. 10Y R 1/2 褐色土 (含Nb非常に少)
4. 10Y R 1/2 黄褐色土

第10図 V A-52ピット



Rの単節斜縄文であるが、押捺が弱く縄文は不鮮明である。内側は丁寧なミガキで調整される。

VA-51ピット (第11図、写真図版4)

〔位置〕尾根の頂部付近で、VA-52ピットの北東1mに位置する。〔埋土〕暗褐色土を主とし、5層に大別される。全体にパミスが少し混入する。埋土5を除き僅かであるが粉炭が混入する。埋土2より2の土器が出土する。〔規模〕開口部125～135cm、頸部115～128cm、底部180～185cm、深さ70～80cmである。

〔壁〕ほとんどの壁は底部から直角に近い立ち上がりとなり、中位で大きくオーバー・ハングし、あたかも天井部を構成するかのごとくである。天井部状の壁は凹凸が激しい。一部の壁は底部から頸部に向かって直線的に内傾する。頸部～開口部間の壁はほぼ直角に近い立ち上がりである。〔底部〕平坦で、中央部がやや低くなるがほぼ水平である。〔出土遺物〕2は口縁部を欠くため詳細は不明であるが、頸部直下に帯状の沈線文をもつ壺形土器と思われる。LRの単節斜縄文を

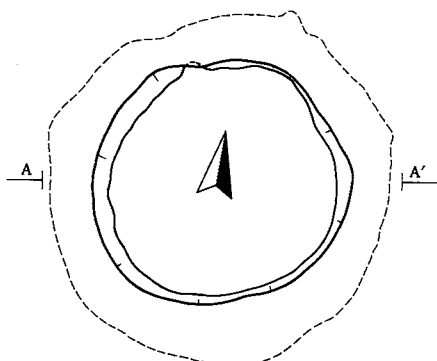
全面に施文した後、頸部直下に幅3.1cmの文様帯を区画する。文様は三叉文を繰り返す単純な構成で、区画された内部を磨り消したものである。胎土は緻密で色調は明黄褐色である。晩期前葉に属する。

VA-57ピット (第12図、写真図版4)

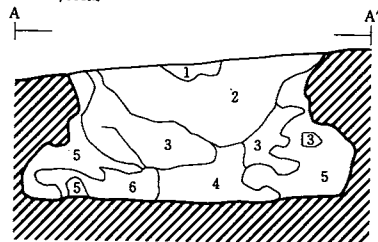
〔位置〕尾根の頂部で、VA-51ピットの東1mに位置する。〔埋土〕上位から黒～黒褐色土、南部浮石粒やパミスを多量に含む暗褐色土、褐色土、黄褐色土の4層に大別される。埋土3の上位からは3の土器が、下位と底部からは炭化材と若干の焼土粒が出土した。いずれも流れ込んだものである。自然堆積である。

〔規模〕開口部150～160cm、頸部135～150cm、底部190～200cm、深さ85～125cmである。

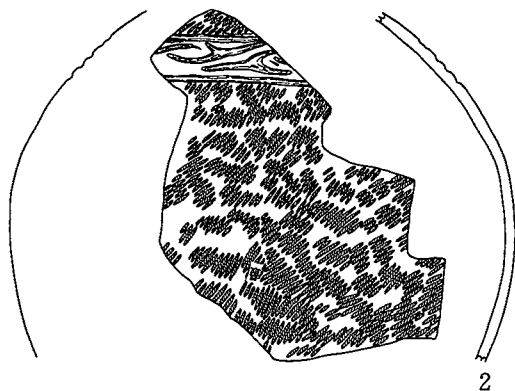
〔壁〕底部から頸部までの壁はオーバー・ハングし、頸部から開口部までの壁はやや外反ぎみ



L=251,600M



1. 10Y R 弱暗褐色土(含パミス非常に少・C)
2. 10Y R 弱暗褐色土(含パミス少・C)
3. 10Y R 弱～暗褐色土～褐色土(含パミスC少)
4. 10Y R 弱褐色土(含パミスC少)
5. 10Y R 弱黄褐色土(含パミス非常に少)
6. 10Y R 弱暗褐色土(含パミスC少)



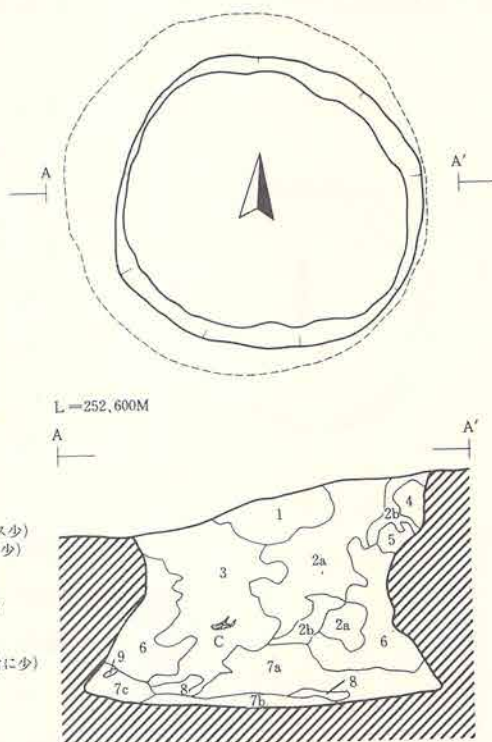
第11図 VA-51ピット

に立ち上がる。〔底部〕平坦である。中央部がやや低くなり鍋底状を呈する。〔出土遺物〕3は押捺が弱く縄文が不鮮明であるが、LRを縦回転したものと思われる。器表面には煮汁によると思われる残滓が付着している。内面には丁寧なミガキが施される。煮炊き用の深鉢形土器の体部片である。

埋土下位から底部にかけて出土した柱状の炭化材は小片で原形を留めていない。

材質はクリである。

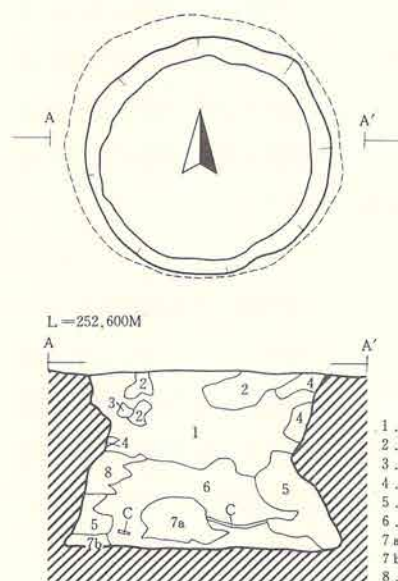
1. 10Y R 5/6 黒褐色土(含バミス少)
- 2a. 10Y R 5/6 暗褐色土(含バミス・C非常に少)
- 2b. 10Y R 5/6 暗褐色土(含バミス非常に少)
3. 10Y R 5/6 暗褐色土(含Nbバミス多・C)
4. 10Y R 5/6 褐色土(含バミス非常に少)
5. 10Y R 5/6 黄褐色土
6. 10Y R 5/6 褐色土(含バミス非常に少)
- 7a. 10Y R 5/6 黄褐色土(含バミス非常に少)
- 7b. 10Y R 5/6 暗褐色土(含バミス)
- 7c. 10Y R 5/6 黄褐色土(含バミス少)
8. 10Y R 5/6 黄褐色土(含バミス少)
9. 10Y R 5/6 黄褐色土



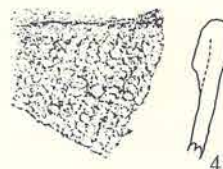
第12図 V A-57ピット

VIA-52ピット (第13図、写真図版5)

〔位置〕尾根の頂部中央に位置し、V A-57ピットの北東4 mの距離にある。検出されたピット群の中では北端に位置している。〔埋土〕黒褐色土、褐色土、暗褐色土の3層に大別される。埋土1と6は漸移している。埋土5は壁の崩壊土である。埋土1より4の土器が出土する。自然堆積である。〔規模〕開口部125～130 cm、頸部105～115 cm、底部135～150 cm、深さ92～94 cmである。



1. 10Y R 5/6 黒褐色土(含バミス)
2. 10Y R 5/6 黒褐色土(含バミス非常に少)
3. 10Y R 5/6 黒色土
4. 10Y R 5/6 褐色土(含Nb少)
5. 10Y R 5/6 暗褐色土(含NbP)
6. 10Y R 5/6 黒褐色土(含C)
- 7a. 10Y R 5/6 褐色土
- 7b. 10Y R 5/6 褐色土
8. 10Y R 5/6 褐色土(含バミス)

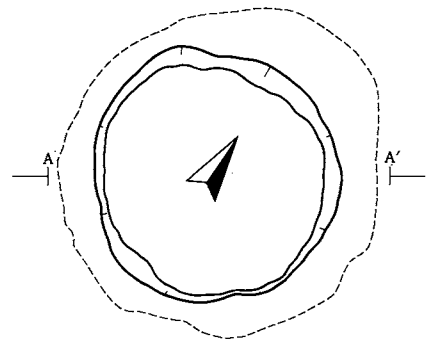


第13図 VI A-52ピット

〔壁〕頸部が中位に位置する。底部から頸部までは直線的にオーバー・ハングし、頸部から開口部までは凹凸しながら立ち上がる。〔底部〕水平かつ平坦である。〔出土遺物〕4が1点出土する。深鉢形土器の口縁部である。内側に厚い隆帯を貼布したものである。直接に接合はしないが、胎土、縄文等から見て3と同一個体と思われる。煮汁の残滓が付着している。

VB-51ピット (第14図、写真図版5)

〔位置〕尾根の南側斜面に占地し、ピット群の中では南西端に位置する。〔埋土〕暗褐色土、黒褐色土、褐色土の3層に大別されるが、レンズ状の堆積とはならない。中央は褐色土が多く、壁際ほど黒色土が多く混入する。上位に粉炭が混入する。〔規模〕開口部130～140cm、頸部118～125cm、底部170～185cm、深さ53～60cmである。〔壁〕頸部が開口部より10cmほど下がった所に位置する。底部から頸部まではほぼ直線的にオーバー・ハングし、崩落の跡などは見られない。頸部から開口部までは外反する。〔底部〕水平かつ平坦である。



L=251, 300M



- 1. 10Y R 褐色土(含Nb・C少)
- 2. 10Y R 暗褐色土(含Nb・C少)
- 3. 10Y R 黒褐色土(含Nb少)
- 4. 10Y R 暗褐色土(含Nb少)
- 5. 10Y R 褐色土(含Nb少)
- 6. 10Y R 黄褐色土(含Nb非常に少)

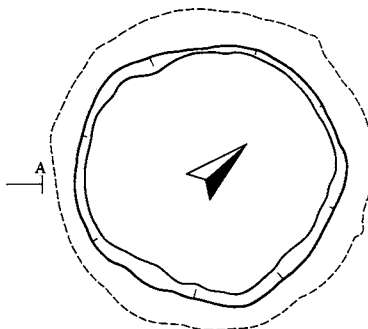
第14図 VB-51ピット

VIA-53ピット (第15図、写真図版5)

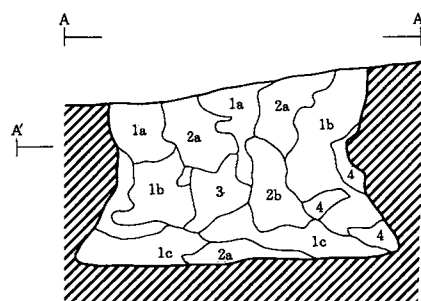
〔位置〕尾根の南斜面に位置し、VA-57ピットの南5mに位置する。〔埋土〕埋土は褐色土、暗褐色土、黄褐色土の3層に大別される。堆積状況は中央が褐色土で壁際は黒色土と南部浮石の崩壊土が混入する暗褐色土となる。〔規模〕開口部140～145cm、頸部125～130cm、底部170～175cm、深さ88～

100cmである。

〔壁〕頸部は中位にあり若干の崩壊が認められる。底部から頸部の壁は



L=252, 200M



- 1a. 10Y R 褐色土(含バミス)
- 1b. 10Y R 暗褐色土(含バミス少)
- 1c. 10Y R 暗褐色土(含バミス)
- 2a. 10Y R 褐色土(含バミス非常に少)
- 2b. 10Y R 褐色土(含バミス非常に少)
- 3. 10Y R 褐色土(含バミス少)
- 4. 10Y R 黄褐色土(含バミス少)

第15図 VIA-53ピット

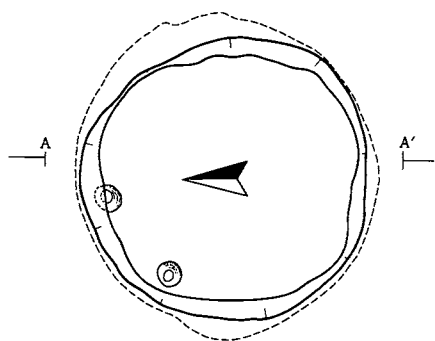
オーバー・ハングがきつい。頸部から開口部にかけては若干の凹凸が見られるもののほぼ垂直に近い立ち上がりとなる。〔底部〕水平でかつ平坦である。〔副穴〕北壁下位の一部に開口部45cm、深さ30cm、奥行き40cmほどの小穴が認められる。底部は斜行する。意図的に抉られたものかどうかは不明であるが、この副穴の埋土は本ピットの埋土とは全く異なり、黒褐色の粘土質シルトである。作図は省略した。

VIB-51ピット (第16図、写真図版5)

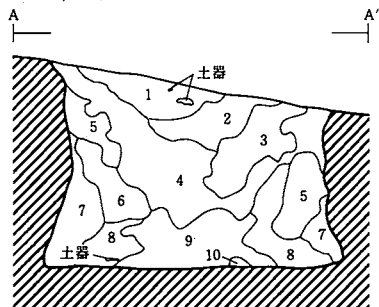
〔位置〕尾根の南側斜面に位置し、北1mでVI A-53ピットに達する。〔埋土〕暗褐色土、黒褐色土、褐色土、黄褐色土、の4層に大別される。壁の一部を構成する南部浮石の崩壊土が連続して認められる。埋土1~4層に土器片が多く包含される。自然堆積と思われる。〔規模〕開口部140~150cm、頸部130~135cm、底部165~170cm、深さ80~108cmである。〔壁〕頸部が下位にあり、底部から頸部は直線的にオーバー・ハングするがその角度は緩い。頸部から

開口部は凹凸をもちながらもほぼ垂直に立ち上がる。〔底部〕水平かつ平坦である。〔遺物の出土状況〕北壁際の底部に5

と6の2個の小形深鉢形土器が倒立の状態で置かれていた。2個の土器の間隔は50cmである。5は上半部を打ち欠き、6とほぼ同じ大きさにしたものである。打ち欠かれた破

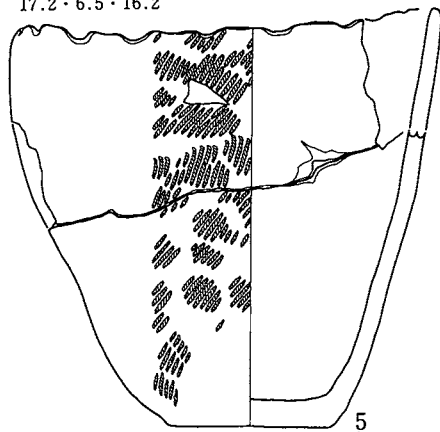


L=251,900M

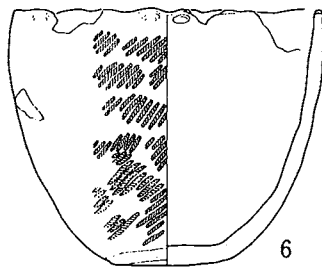


1. 10Y R 灰暗褐色土(含バミス)
2. 10Y R 灰黒褐色土(含バミス)
3. 10Y R 灰褐色土(含バミス)
4. 10Y R 灰暗褐色土(含バミス)
5. 10Y R 灰褐色土(含NbP, バミス)
6. 10Y R 灰褐色土(含NbP多)
7. 10Y R 灰黄褐色土(含バミス)
8. 10Y R 灰褐色土(含バミス)
9. 10Y R 灰褐色土
10. 10Y R 灰黒褐色土

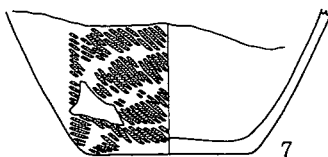
17.2・6.5・16.2



12.4・4.3・10.3



→6.4・[5.9]



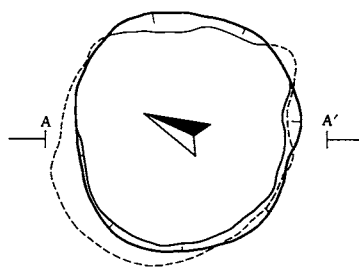
第16図 VIB-51ピット

片は埋土1～4層中に包含されていた。なお、5の土器には土が深さ3cmほど、6には全体につまっていたが、その土中には何らの遺物も含まれていない。〔出土遺物〕5～7の3点が出土する。5と6はともに口縁部は波状口縁で、体部はLRの単節斜縄文である。6の体部下端には磨消状に浅い沈線が1本回わる。内部はともに丁寧にミガキがかけられる。器表面には煮汁の跡が見られる。5は上半を打ち欠かれてはいたが、ほぼ完形になるまで復元できた。6は一部の口縁部を欠くがほぼ完形である。7は埋土中位から出土した小型の深鉢形土器の体部下半である。LRの単節斜縄文が施文される。いずれも晩期前葉に属する。

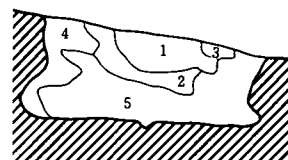
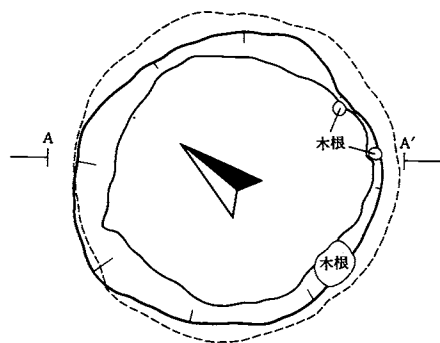
VIB-53ピット (第17図、写真図版6)

〔位置〕尾根の南東斜面で、VIB-51ピットの東7mに位置する。〔埋土〕斜面上位側には褐色土が多く流れ込み、埋土の上位には黒色土がU字状に堆積する。パミスを多く含む黒褐色土が埋土下位を構成する。〔規模〕開口部115～125cm、頸部110～115cm、底部120～140cm、深さ37～52cmである。〔壁〕頸部は下位にあり、底部から頸部までの壁は急角度で直線的にオーバー・ハングする。頸部から開口部までは凹凸をもちながらもほぼ垂直に近い立ち上がり

となる。〔底部〕水平かつ平坦である。中央に棒で突いたような凹みが1箇所見られる。



L=351,800M



1. 10Y R 5/6 黒色土(含パミス非常に少)
2. 10Y R 5/6 暗褐色土(含パミス非常に少)
3. 10Y R 5/6 黒褐色土(含パミス非常に少)
4. 10Y R 5/6 褐色土(含パミス・Nb少)
5. 10Y R 5/6 黒褐色土(含パミス・Nb少)

第17図 VIB-53ピット

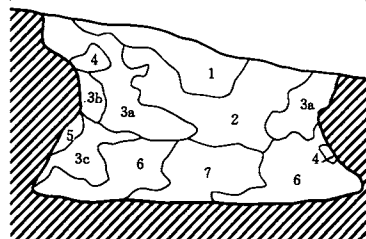
VIA-54ピット (第18図、写真図版6)

〔位置〕尾根の南東斜面に位置し、VIB-53ピットに隣接する。〔埋土〕最上位の中央には黒色土が比較的多く混入する。中央は褐色土が中心で、壁際ほ

ど南部浮石粒や暗褐色土が混入する。自然堆積である。

〔規模〕開口部153～165cm、頸部130～135cm、底部170～

L=251,800M



1. 10Y R 5/6 黒褐色土～褐色土(含パミス非常に少)
2. 10Y R 5/6 褐色土(含パミス少)
- 3 a. 10Y R 5/6 暗褐色土(含Nbパミス少)
- 3 b. 10Y R 5/6 暗褐色土～褐色土
- 3 c. 10Y R 5/6 暗褐色土～褐色土
4. 10Y R 5/6 黄褐色土
5. 10Y R 5/6 褐色土
6. 10Y R 5/6 褐色土(含パミス非常に少)
7. 10Y R 5/6 暗褐色土(含パミス非常に少)

第18図 VIA-54ピット

175 cm、深さ68～100 cmである。〔壁〕頸部は中位にあり、底部から頸部はほぼ直線的にオーバー・ハングし崩壊は見られない。頸部から開口部は多少崩壊が見られるがほぼまっすぐに立ち上がる。〔底部〕水平かつ平坦である。

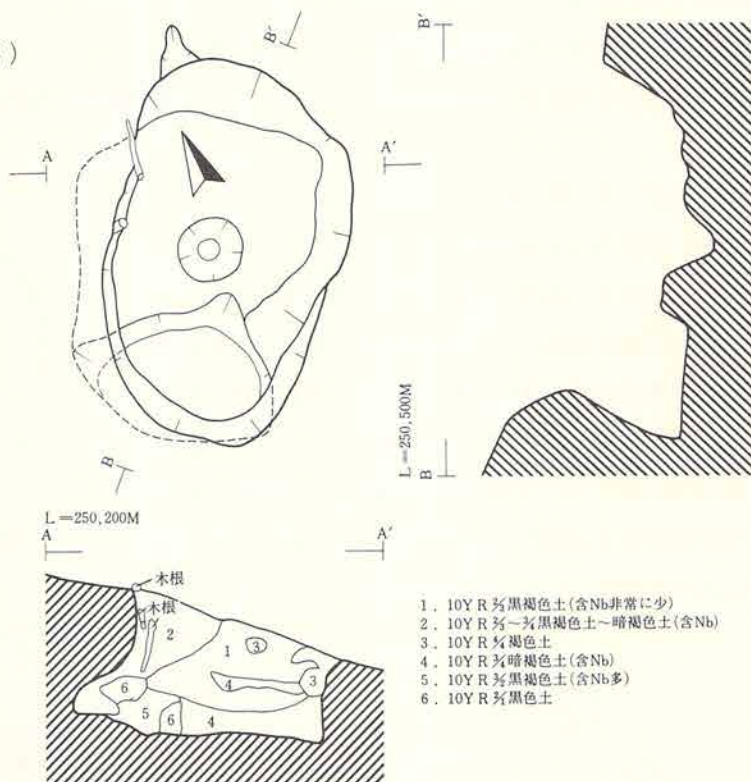
VIA-55ピット

(第19図、写真図版6)

〔位置〕尾根の東側斜面で、検出されたピット群の中では最東端に位置する。〔埋土〕南部浮石を主とする埋土で自然堆積である。

〔規模〕開口部125～200 cm、頸部115～190 cm、底部115～170 cm 深さ45～75 cmである。

〔壁〕木根等の攪乱を受け崩壊が著しい。頸部が下位に位置し、底部から頸部にかけての壁は急角度でオーバー・

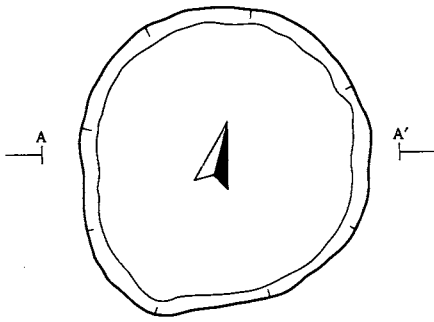


ハングし、袋状となる。〔底部〕水平であるが、南東隅は一段低くなっている。中央に深さ20 cmほどの副穴がある。〔その他〕本遺構は南東隅に一段下がった部分があって2基の重複も考えられるが、攪乱を受けたり、埋土が不詳な部分もあり、1基と考えたものである。

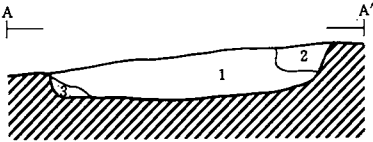
(2) 皿状ピット

V A-54ピット (第20図、写真図版7)

〔位置〕尾根の南東斜面、V B-51ピットの北1 mに位置する。〔埋土〕ほとんどが暗褐色土である。〔規模〕開口部155～170 cm、底部135～155 cm、深さ15～25 cmである。〔壁〕ほぼ垂直に立ち上がる。〔底部〕水平である。若干の凹凸が見られるが概ね平坦である。

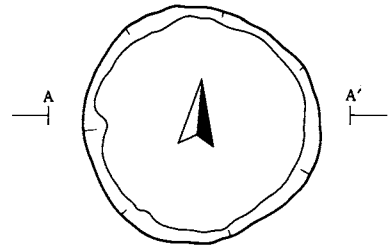


L=251,500M

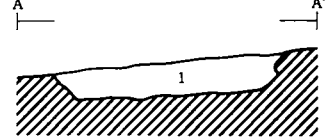


1. 10Y R 5/6 暗褐色土(含バミス少)
2. 10Y R 5/6 褐色土(含バミス少)
3. 10Y R 5/6 黄褐色土(含バミス少)

VA-54ピット

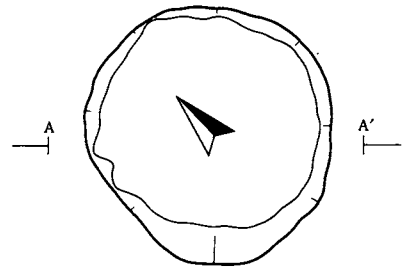


L=251,900M

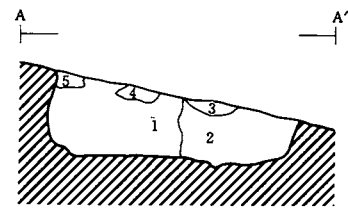


1. 10Y R 5/6 褐色土(含バミス少・C少)

VA-53ピット

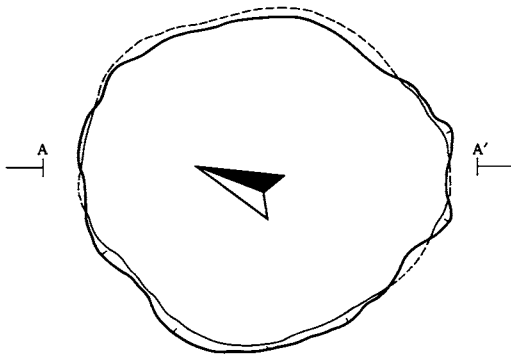


L=251,300M

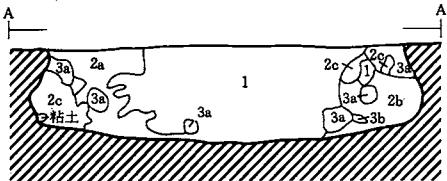


1. 10Y R 5/6 暗褐色土(含バミス少)
2. 10Y R 5/6 暗褐色土(含バミス少)
3. 10Y R 5/6 暗褐色土(含バミス少)
4. 10Y R 5/6 褐色土
5. 10Y R 5/6 褐色土

VI B-52ピット

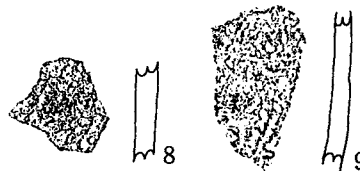


L=252,600M



1. 10Y R 5/6 暗褐色土(含バミス・C)
- 2 a. 10Y R 5/6 褐色土(含バミス)
- 2 b. 10Y R 5/6 褐色土(含バミス)
- 2 c. 10Y R 5/6 褐色土(含バミス)
- 3 a. 10Y R 5/6 黄褐色土
- 3 b. 3よりやや暗い
- 3 c. 粘土

VI A-51ピット



第20図 VA-53・54ピット、VI A-51ピット、VI B-52ピット

V A-53ピット（第20図、写真図版7）

〔位置〕尾根の南東斜面、V A-54ピットの東3 mに位置する。〔埋土〕南部浮石、暗褐色土、褐色土が混じり合った褐色土の単層である。〔規模〕開口部125～130 cm、底部110～115 cm、深さ12～20 cmである。〔壁〕外反しながら立ち上がる。壁が低いいため皿状に見える。〔床〕多少凹凸が見られるが、概ね水平かつ平坦である。

VIA-51ピット（第20図、写真図版7）

〔位置〕尾根の頂部に占地し、検出されたピットの中では最北端に位置する。〔埋土〕中央は暗褐色土が中心に、壁の近くは褐色土が堆積する。全体にやや締まっている。〔規模〕開口部175～200 cm、底部175～200 cm、深さ40～50 cmである。〔壁〕部分的に僅かにオーバー・ハングするところも見られるが、崩落によるものと思われる。概ね垂直に立ち上がる。〔底部〕中央が若干低くなる鍋底である。平坦である。〔出土遺物〕8、9の2点が埋土上位から出土する。同一個体の破片である。縄文はLRの単節斜縄文と思われるが、押捺が弱く不鮮明である。内側は丁寧に研磨されている。胎土、色調、原体等からV A-52ピットから出土した1の土器と同一個体と思われる。

VIB-52ピット（第20図、写真図版7）

〔位置〕尾根の南東斜面に位置し、VIA-54ピットに隣接する。〔埋土〕埋土1と2は漸移しており、大部分は暗褐色土となっている。〔規模〕開口部125～135 cm、底部115 cm、深さ20～40 cmである。〔壁〕やや凹凸があるが、ほぼ垂直に立ち上がる。〔底部〕水平ではあるが、やや凹凸が見られる。〔その他〕平面プランは開口部でやや不整な円形、底部は隅丸方形に近い形状である。

〔2〕 陥し穴

陥し穴は円筒状陥し穴と溝状陥し穴の2つのタイプが検出された。円筒状陥し穴は溝状陥し穴より古いとみられることから、円筒状陥し穴から述べることにする。

(1) 円筒状陥し穴

円筒状陥し穴は合計11基検出された。これらはすべて検出面、埋土、壁の状況などは同様であった。したがってこれらの項目については一括して述べ、個々の遺構の説明は割愛する。

・検出面……第V層

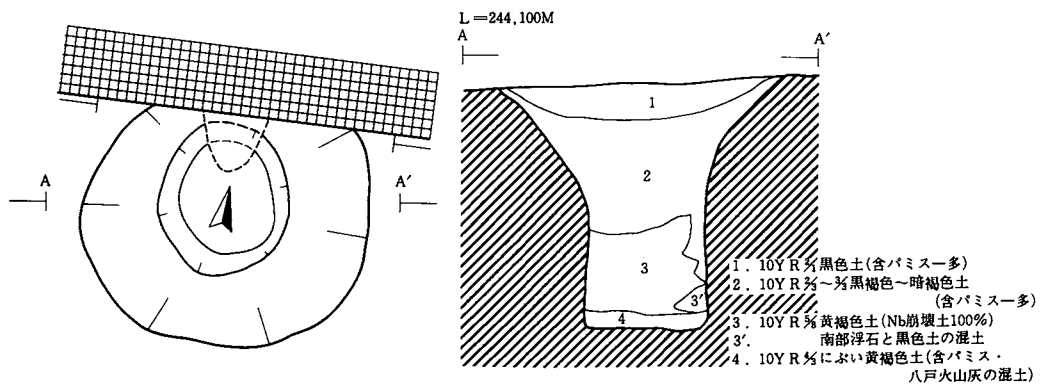
・埋土………黒色土、黒褐色～暗褐色土、崩壊した南部浮石、にぶい黄褐色土の4層が互層となって堆積している。

。壁……………Ⅶ層より上位は崩壊し播鉢状に斜行する。Ⅶ層より下位では崩壊は認められず、ほぼ垂直に立ち上がる。

なお、深さは底部の中央での計測値である。杭跡は発見できず、遺物も出土していない。

ⅢA-57陥し穴 (第21図、写真図版8)

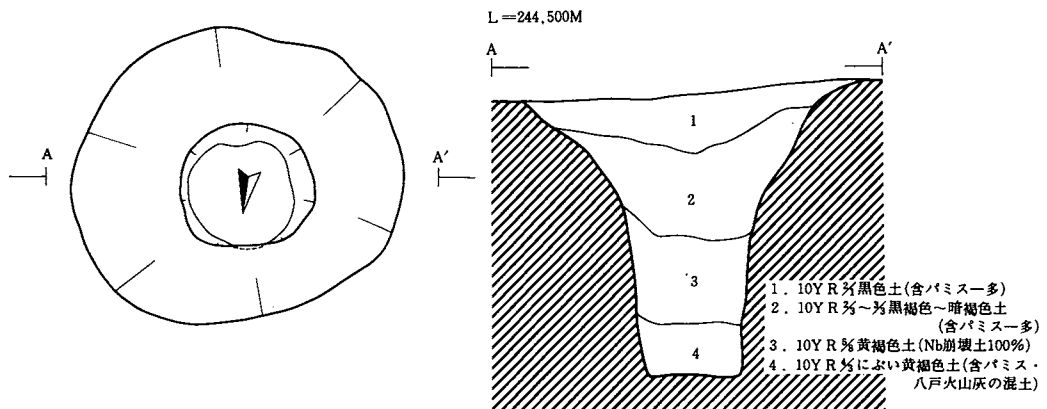
〔位置〕西側斜面下位に位置し、検出された円筒状陥し穴群の最西端に位置する。〔重複〕ⅢA-101陥し穴と重複する。ⅢA-101陥し穴は本遺構の精査中に発見したもので、しかもその大半は調査区外へ延びるため詳細は不明である。〔形状〕開口部は円形、底部は不整な長円形である。〔規模〕開口部145～155cm、底部50～60cm、深さ130cmである。〔その他〕底部に水が湧く。水深10cm。



第21図 ⅢA-57陥し穴

ⅢA-58陥し穴 (第22図、写真図版8)

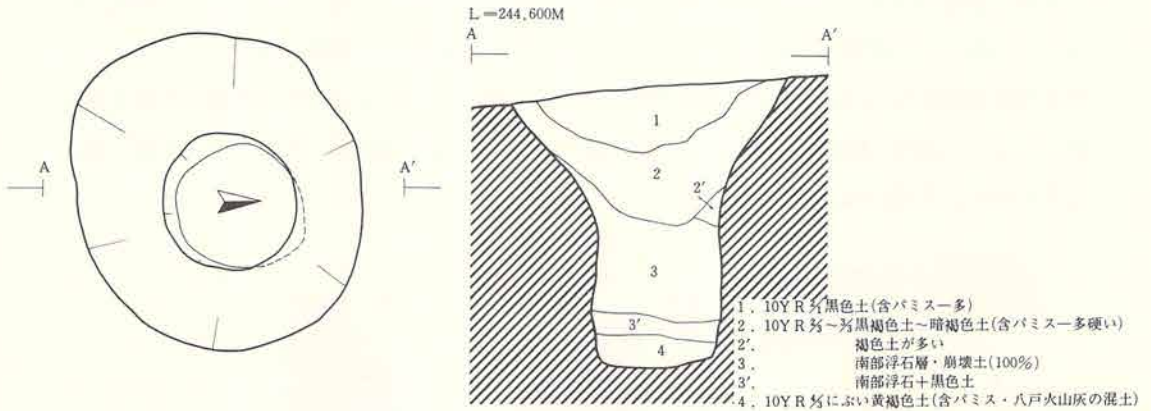
〔位置〕ⅢA-57陥し穴の東7m、ⅢA-54陥し穴の西2mに位置する。〔形状〕開口部は円形、底部はやや角張る所もあるが概ね円形である。〔規模〕開口部158～178cm、底部55～68cm、深さ150cmである。〔その他〕底部に水が湧く。水深15cm。



第22図 ⅢA-58陥し穴

III A-59陥し穴（第23図、写真図版8）

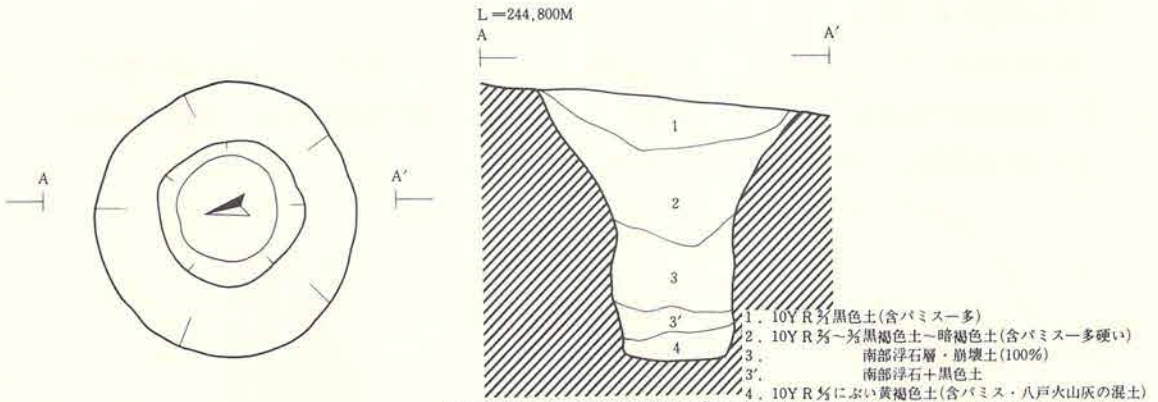
〔位置〕 III A-58陥し穴の東2 m、III A-60陥し穴の西4.5 mに位置する。〔形状〕 開口部は南西部（斜面下位側）は崩壊が進みやや広がるが基本的には円形である。底部は隅丸五角形である。〔規模〕 開口部150~175 cm、底部65 cm、深さ150 cmである。〔その他〕 底部に水が湧く。水深15 cm。



第23図 III A-59陥し穴

III A-60陥し穴（第24図、写真図版8）

〔位置〕 III A-59陥し穴の東4.5 m、III A-60陥し穴の西5 mに位置する。〔形状〕 開口部、底部とも円形である。〔規模〕 開口部140~145 cm、底部53~55 cm、深さ138 cmである。〔その他〕 底部に水が湧く。水深30 cm。

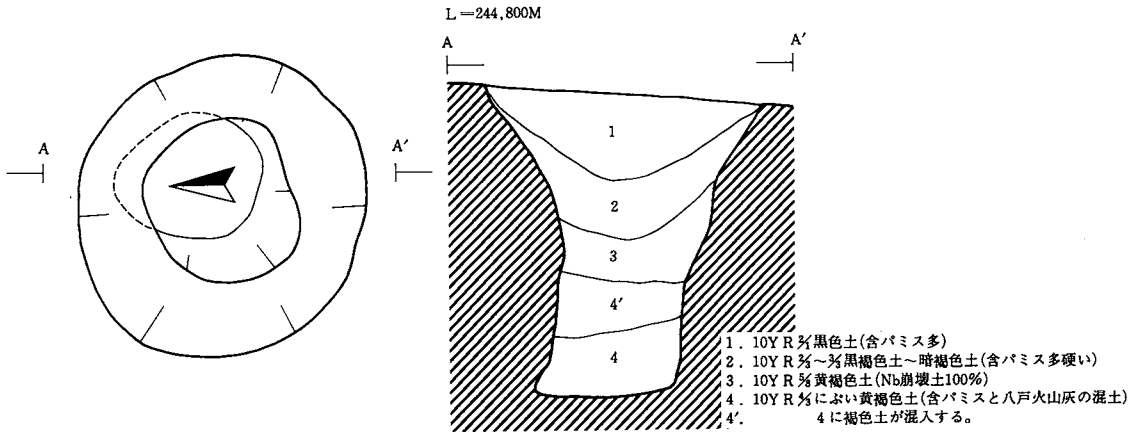


第24図 III A-60陥し穴

III A-61陥し穴（第25図、写真図版9）

〔位置〕 III A-60陥し穴の東5 m、III A-62陥し穴の南西3.8 mに位置する。〔形状〕 開口部は円形、底部は北側が抉られるように広がる不整な長円形である。壁全体が南東の（斜面下位側）に向かって緩やかに傾斜する。湧水と土圧の作用によるものと思われる。〔規模〕 開口部153

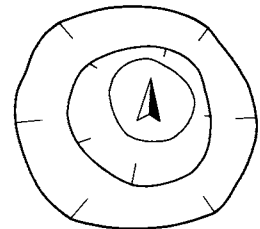
～160cm、底部68～78cm、深さ160cmである。〔その他〕底部に水が多量に湧く。水深60cm。



第25図 III A-61陥し穴

III A-62陥し穴 (第26図)

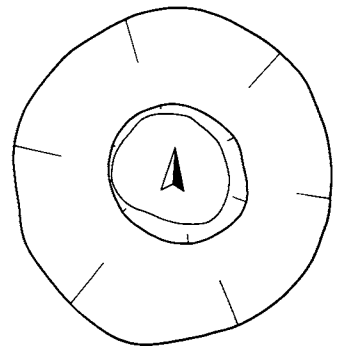
〔位置〕 III A-61陥し穴の北東3.8m、IV A-55陥し穴の南西4.8mに位置する。〔形状〕 開口部は円形、底部はやや歪むが円形である。〔規模〕 開口部118～125cm、底部43～48cm、深さ150cmである。〔その他〕 底部に水が湧く。水深10cm。本遺構は現農道の直下であり、早急に埋め戻す必要があったため断面図を省略した。



第26図 III A-62陥し穴

IV A-55陥し穴 (第27図、写真図版9)

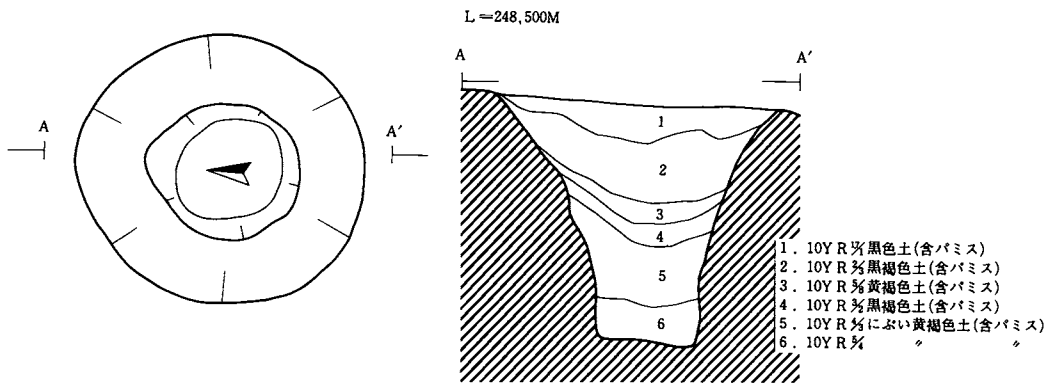
〔位置〕 III A-62陥し穴の北東4.8m、IV A-56陥し穴の西3.8mに位置する。〔形状〕 開口部は円形、底部は隅丸方形を呈する。〔規模〕 開口部170～175cm、底部55～60cm、深さ125cmである。〔その他〕 底部に水が湧く。水量は少なく、水深8cm。本遺構も農道部分にかかるため、断面の図化作業を省略した。



第27図 IV A-55陥し穴

IV A-56陥し穴 (第28図、写真図版9)

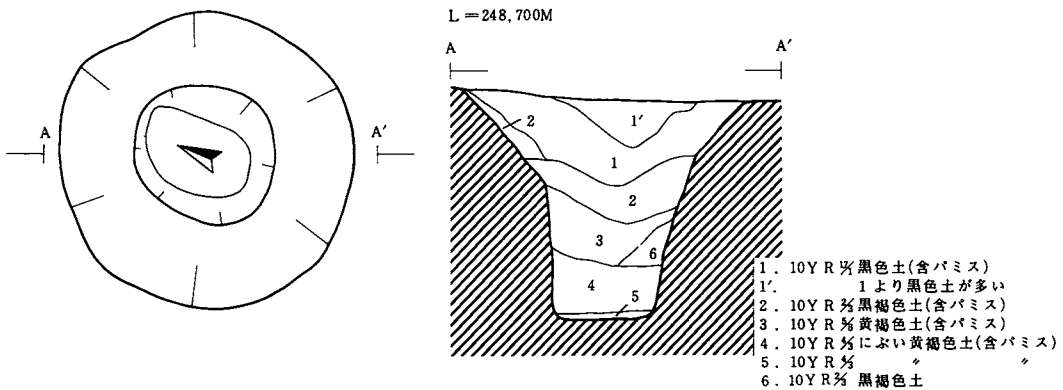
〔位置〕 IV A-55陥し穴の東3.8m、IV A-57陥し穴の西4.5mに位置する。〔形状〕 開口部は円形、底部は隅丸方形を呈する。〔規模〕 開口部140～155cm、底部53～58cm、深さ125cmである。〔その他〕 底部に水が湧くが、水量は少く、水深5cmである。



第28図 IV A-56陥し穴

IV A-57陥し穴 (第29図、写真図版9)

〔位置〕 IV A-56陥し穴の東4.5m、IV A-58陥し穴の西2.5mに位置する。〔形状〕 開口部は円形、底部は隅丸長方形である。〔規模〕 開口部155~160cm、底部40~60cm、深さ118cmである。〔その他〕 杭跡は検出されなかった。土圧により斜面の上位側の壁が膨らむ。



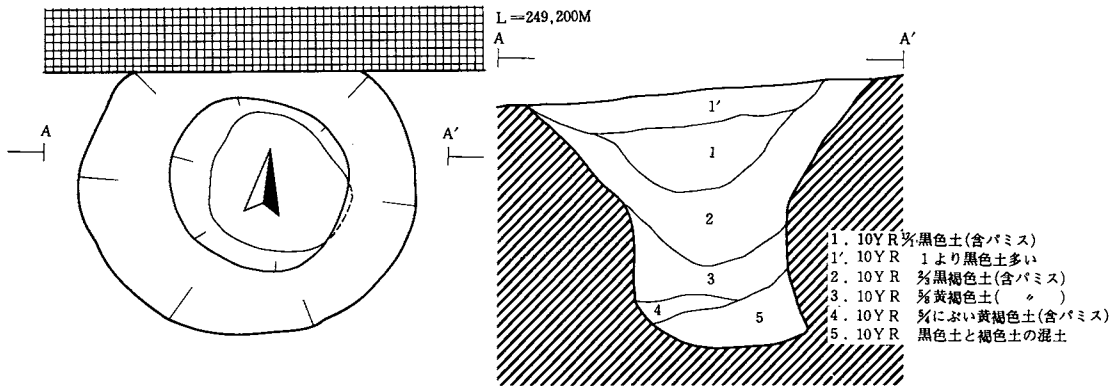
第29図 IV A-57陥し穴

IV A-58陥し穴 (第30図、写真図版10)

〔位置〕 IV A-57陥し穴の東2.5m、IV A-59陥し穴の西3.6mに位置する。〔形状〕 開口部は円形、底部は隅丸長方形を呈する。斜面上位側の壁は弓なりに膨らむ。土圧によるものと思われる。〔規模〕 開口部170~180cm、底部70~75cm、深さ138cmである。〔底部〕 杭跡等の痕跡はない。水平かつ平坦である。〔その他〕 開口部の一部は調査区外にかかる。

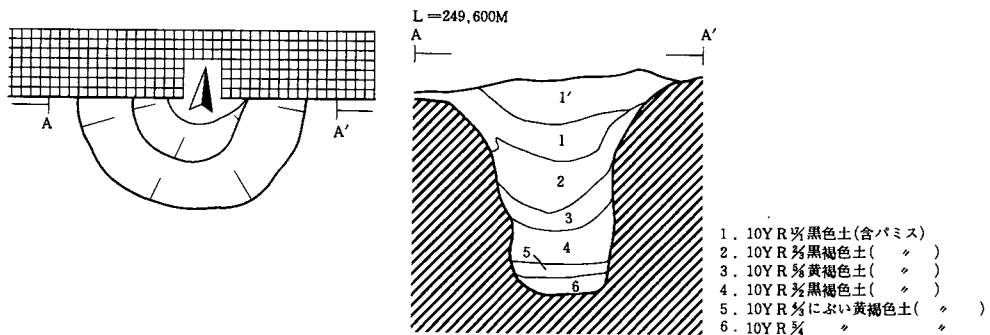
IV A-59陥し穴 (第31図、写真図版10)

〔位置〕 IV A-58陥し穴の東3.6mに位置する。検出された円筒状陥し穴の東端に位置する。〔形状〕 開口部は円形、底部は隅丸長方形を呈すると思われる。〔規模〕 開口部120cm、底部45cmと思われる。深さは115cmである。〔壁〕 やや凹凸が見られる。〔底部〕 杭跡の痕跡は



第30図 IV A-58陥し穴

見られない。水平かつ平坦と思われる。〔その他〕遺構の半分以上が調査区外にかかるため細部の観察や計測値は推定のものが多い。



第31図 IV A-59陥し穴

(2) 溝状陥し穴

溝状陥し穴は合計6基検出された。そのうち1基は大部分が調査区外にあるため不詳な点が多い。この1基を除けばすべて尾根の上位で検出されたが、検出面は基本層序の上位の土層が流失しているため、検出面から時期を推定することはできない。

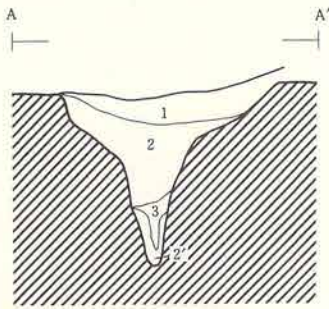
ⅢA-101陥し穴 (第32図、写真図版11)

本遺構はⅢA-57陥し穴を精査中に発見したものである。本遺構の南端部がⅢA-57陥し穴と重複はしていたが、その平面プランは不明である。調査できた部分での深さは90cmである。

V A-104陥し穴 (第33図、写真図版11)

〔位置〕尾根の西側斜面上位に位置する。〔方向〕長軸方向は斜面に直交する。〔形状〕開口

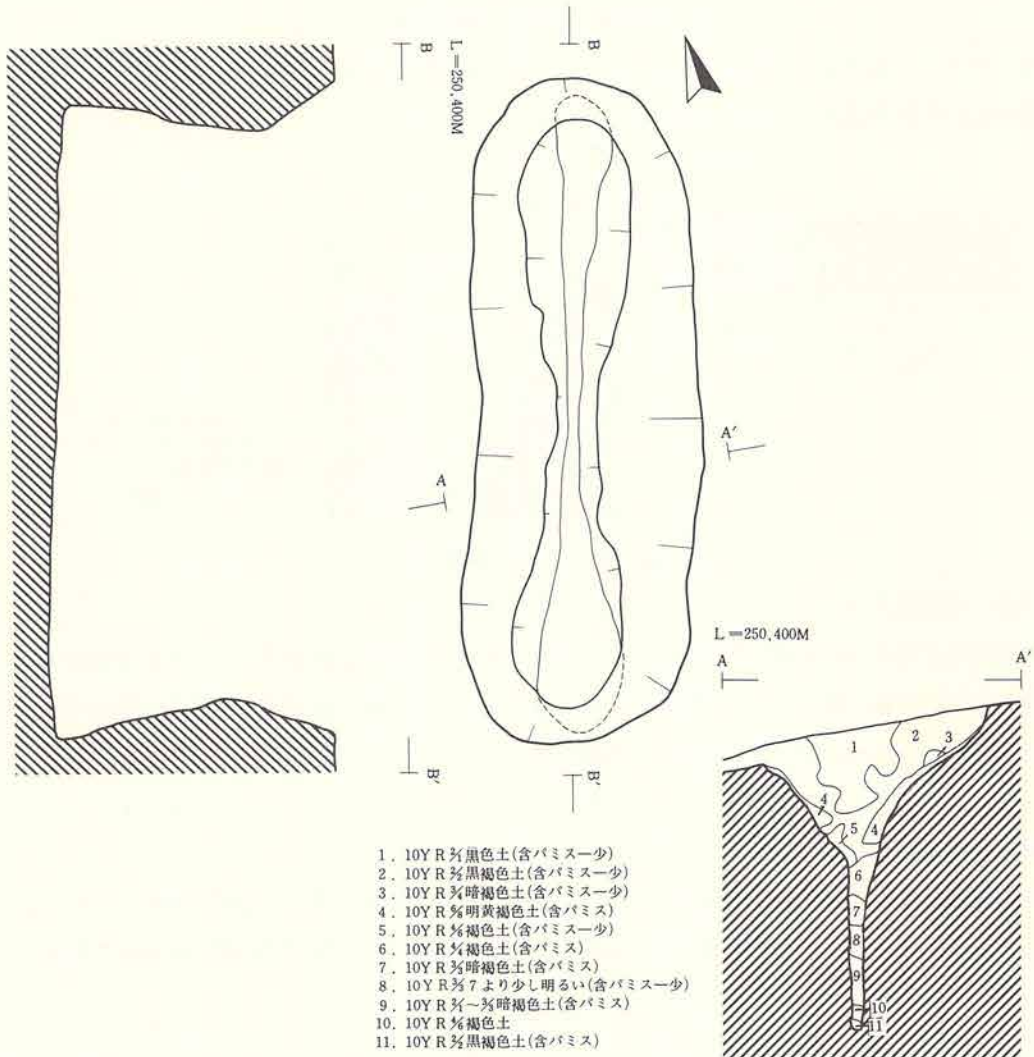
L=244,300M



1. 10Y R 5/6 黒褐色土(含バミス少)
2. 10Y R 5/6 暗褐色土(含バミス多)
3. 10Y R 5/6 黄褐色土(南部浮石)
- 2'. 10Y R 5/6 暗褐色土

第32図 III A-101陥し穴

部は溝状であるが、頸部より下位は両端が膨らみ
 広がる。両端部はオーバー・ハングする。〔埋
 土〕黒色土、暗褐色土、褐色土の互層で、崩壊し
 た南部浮石やバミスを含んでいる。〔規模〕開口
 部120cm×350cm、頸部310cm×(端部60cm、中央
 部20cm)、底部340cm×(端部30~45cm、中央部4
 cm)、深さ155cmである。〔その他〕杭跡は見られ
 なかった。

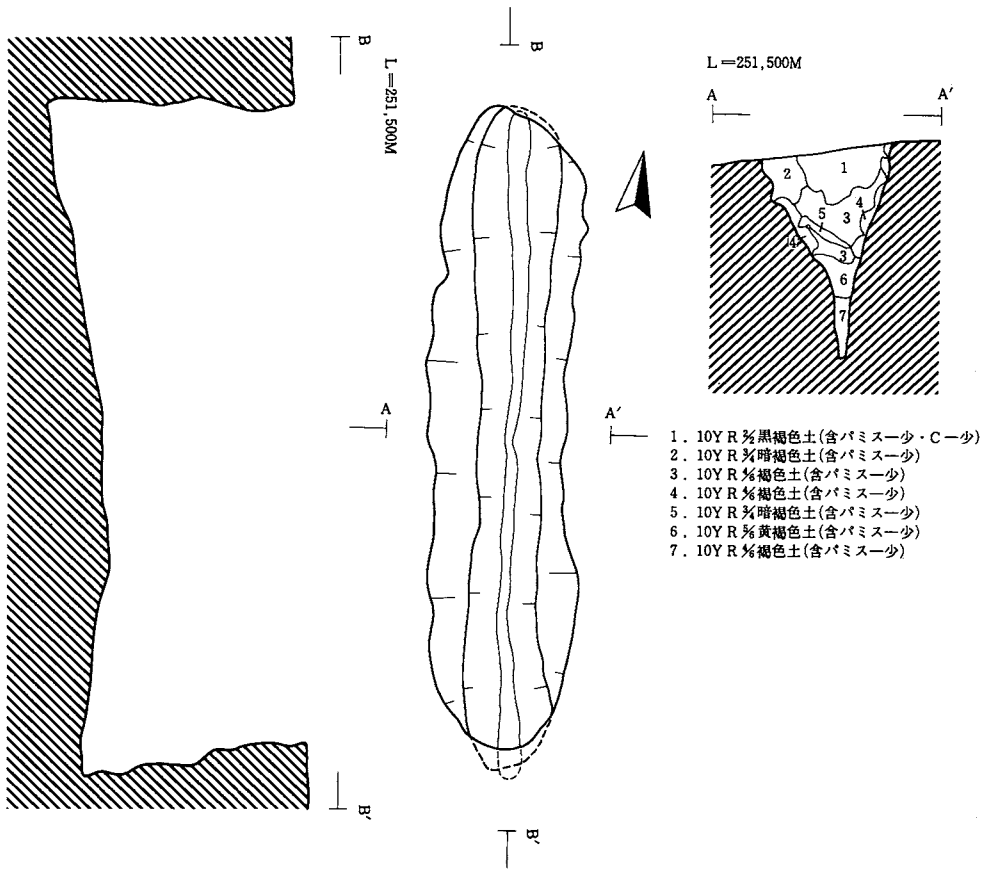


1. 10Y R 5/6 黒色土(含バミス少)
2. 10Y R 5/6 黒褐色土(含バミス少)
3. 10Y R 5/6 暗褐色土(含バミス少)
4. 10Y R 5/6 明黄褐色土(含バミス)
5. 10Y R 5/6 褐色土(含バミス少)
6. 10Y R 5/6 褐色土(含バミス)
7. 10Y R 5/6 暗褐色土(含バミス)
8. 10Y R 5/6 7より少し明るい(含バミス少)
9. 10Y R 5/6 暗褐色土(含バミス)
10. 10Y R 5/6 褐色土
11. 10Y R 5/6 黒褐色土(含バミス)

第33図 V A-104陥し穴

V A-101 陥し穴 (第34図、写真図版12)

〔位置〕西側斜面上位に占地し、連続して構築された4基の陥し穴のうち最西端に位置する。
 〔方向〕長軸方向は斜面に直交する。〔形状〕頸部より下位で、幅が極端に狭くなる。中央部の頸部は半分よりも下位になり、上位は大きく開いている。長軸線は中央部で若干ずれを生ずる。〔埋土〕黒褐色土、暗褐色土、褐色土、黄褐色土の互層で、全てに崩壊した南部浮石を含んでいる。〔規模〕開口部75cm×340cm、底部4～10cm×350cm、深さ(中央部)105cm、(端部)120cm～130cmである。

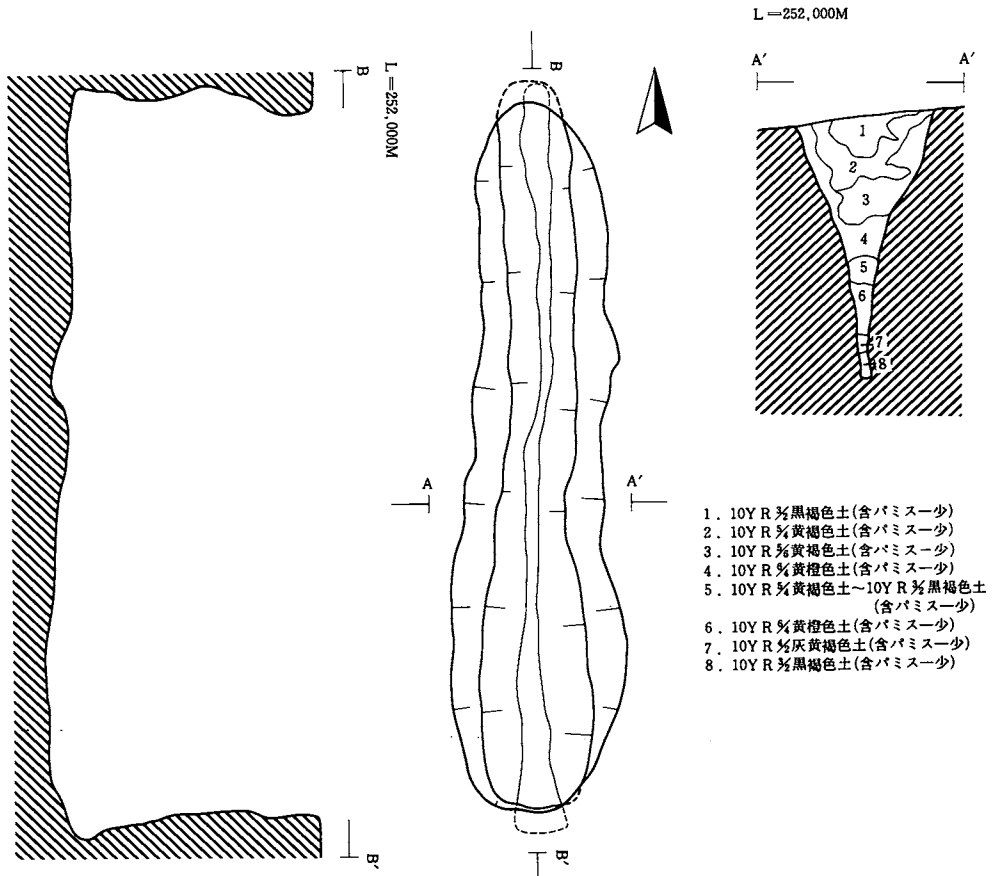


第34図 V A-101 陥し穴

V A-102 陥し穴 (第35図、写真図版12)

〔位置〕西側斜面の傾斜変換点に位置し、V A-101 陥し穴の北東4.5m、V A-103 陥し穴の北西3mに位置する。〔方向〕長軸方向は斜面に直交する。〔形状〕底部から開口部まで北半は細く、南半は幅が広がっている。底部の幅は端部が若干膨らむ。長軸方向の中心線は中央で明瞭に違い違っている。〔埋土〕黒褐色土、にぶい黄褐色土、黄褐色土の互層で、ほとんど

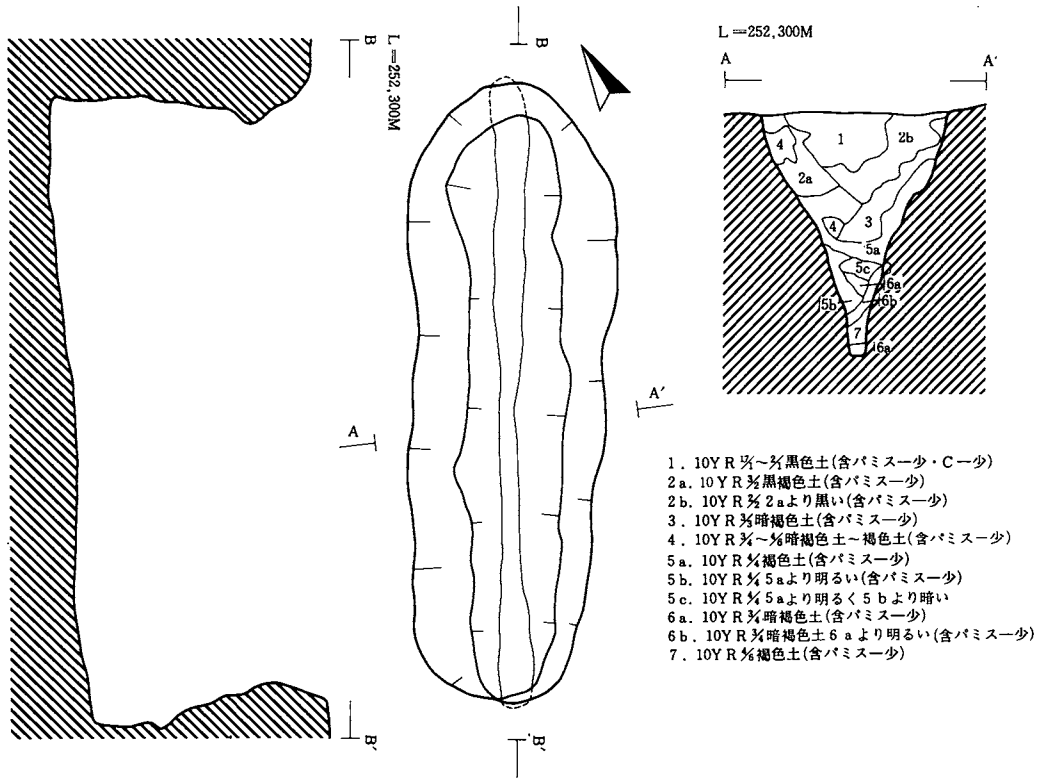
の層に南部浮石が混入する。〔規模〕開口部70cm×375cm、底部6cm×400cm、深さ135～145cmである。



第35図 V A-102陥し穴

V A-103陥し穴 (第36図、写真図版13)

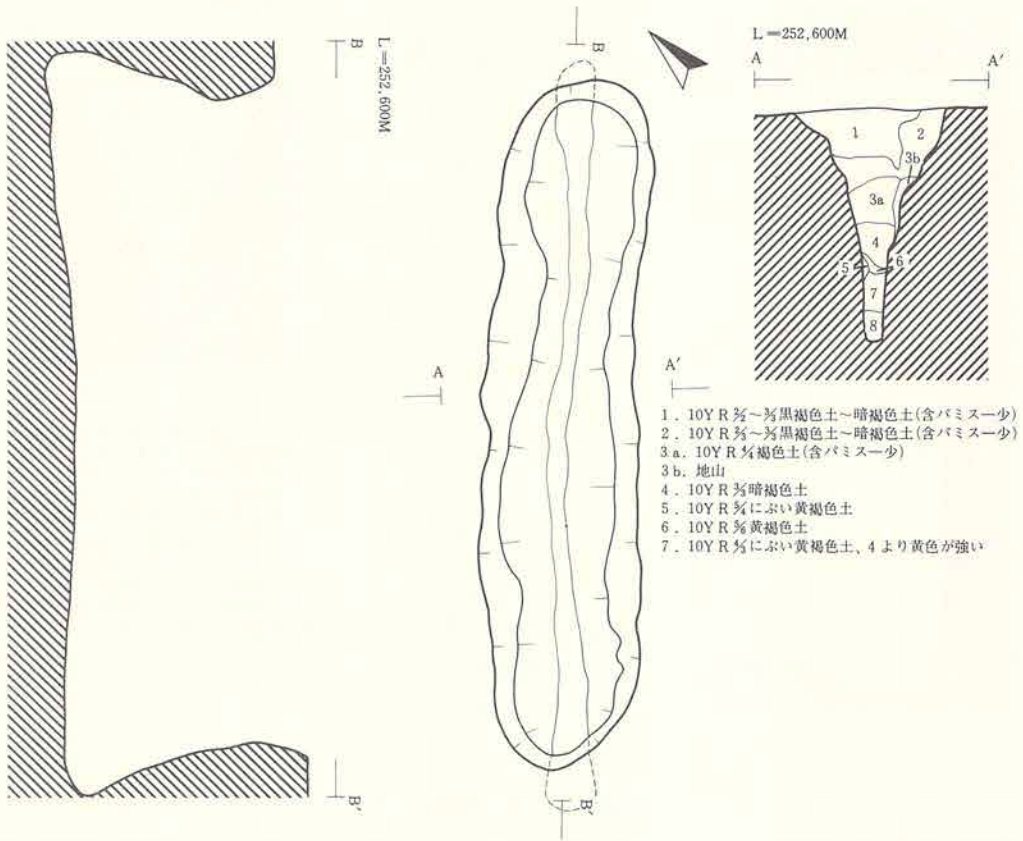
〔位置〕尾根の頂部に占地し、V A-102陥し穴の南東3m、VI A-101陥し穴の北西7mに位置する。〔方向〕長軸の方向は斜面に対し、斜めになる。〔形状〕開口部の幅はやや広い。頸部より下の壁も斜行しており、垂直に近い立ち上がりとなる部分は中央は底部から30cm程度、端部は頸部から垂直となるため1m以上となる。両端はオーバー・ハングする。中央より北側は若干深くなる。〔埋土〕黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土の互層であるが、他の溝状陥し穴に比べて黒色土の割合が多い。〔規模〕開口部105cm×330cm、底部8cm×340cm、中央の深さは130cm、北側の最深部で140cmを測る。



第36図 V A - 103陥し穴

VIA - 101陥し穴 (第37図、写真図版13)

〔位置〕尾根の頂部に占地し、V A - 103陥し穴の南東7 mに位置する。〔方向〕長軸の方向は斜面に対し斜めとなり、V A - 103 陥し穴とほぼ同じ方向をとる。〔形状〕上位の幅は広くなる。底部の幅は両端が中央より膨らみやや角ばる。両端はオーバー・ハングする。長軸の中心線は中央で大きくずれる。〔埋土〕黒褐色土、暗褐色土、にふい黄褐色土の互層であるが、上位は概ね黒褐色土が卓越する。〔規模〕開口部80cm×365cm、底部7 cm×390cm、深さ115 ~ 130 cmである。



第37図 VI A-101陥し穴

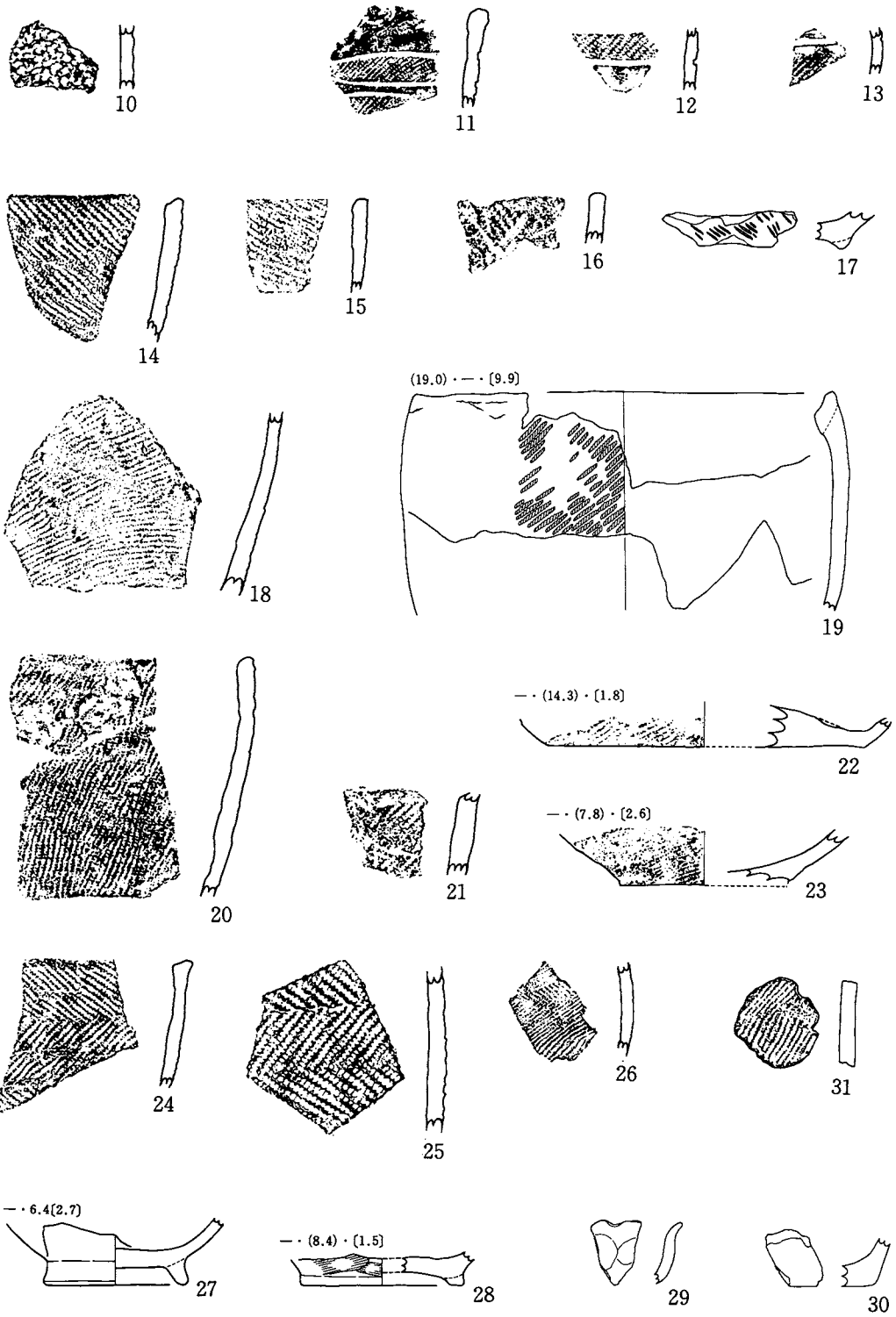
〔3〕遺構外出土の遺物

縄文時代に属する遺物は土器と石器である。土器は25cm¹×30cmのビニール袋1袋、石器は8点である。

(1) 土器(第38図、写真図版29~30)

10は胎土に若干の繊維が含まれる。小片のため原体は不詳であるが組紐と思われる。11~13は沈線によって区画された外部を磨消している。原体はいずれもLRの単節斜縄文である。11は山形口縁で口唇部に3個のキザミが施文される。内面は丁寧に研磨される。12、13の沈線は11より深く、角ばる。

14~23は単節斜縄文のみ施文する。うち14~18はRL、19~23はLRの原体を使用している。14は器面に成形痕(巻き上げ?)を残している。平縁で口唇部は内側に向かって削がれている。15は回転押捺がamai。16は器面にキズがついており、部分的に剥離しているところがある。

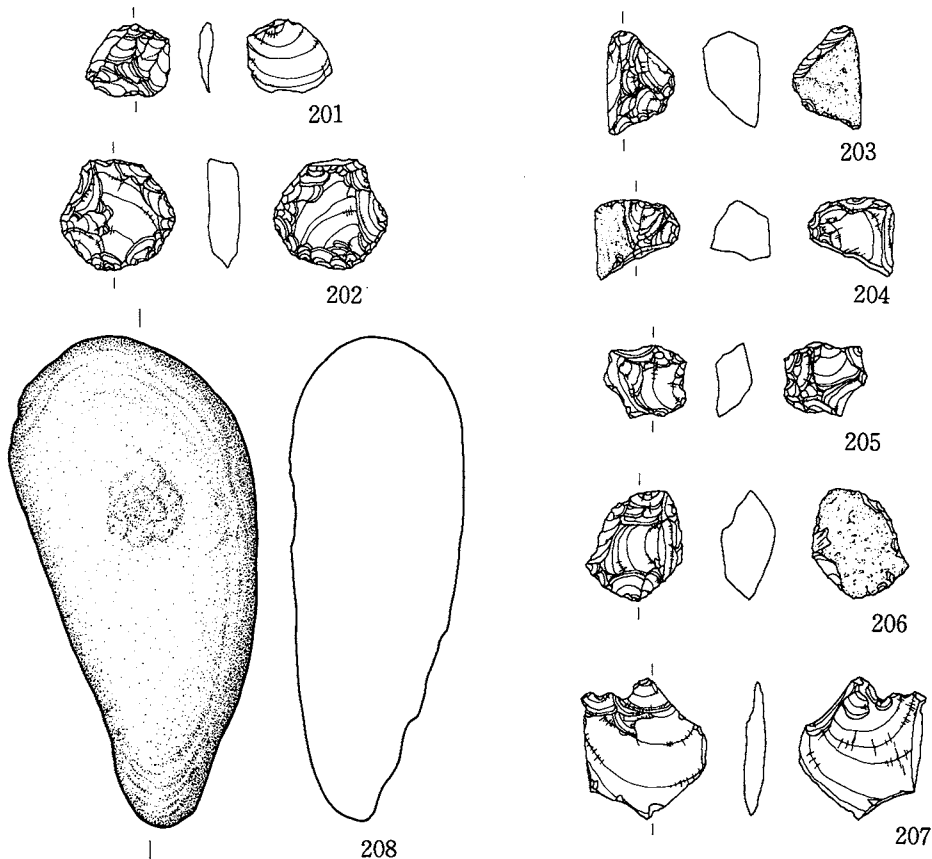


第38圖 遺構外出土遺物 (土器)

15と16は平縁で口唇部も平らである。17は低い高台が付いている。原体の節は非常に小さい。18は鉢形土器の体部下端である。R Lの縦回転である。胎土等は14に酷似する。内面は非常に丁寧に研磨される。19は口径の推定が19cmほどの深鉢形土器である。口縁部の内側に断面形が三角形状の太い粘土紐を1本貼付する。器表面の口唇部付近には貼付に際しての成形痕が見られる。煤が付着している。20は平縁で口唇部は丸味を帯びる。口縁部付近は若干肥厚する。煤が付着する。21は口唇部が内側に削がれている。内面は丁寧に研磨されるが器表面の調整は雑である。22は鉢形土器の底部である。平底で、推定の直径が14.5cmである。23は底部が剥落しているため詳細は不明であるが、体部下端に沈線が1本まわる。細粒の縄文が施文されている。推定の直径は8cmである。

24～26は羽状縄文である。24は結束しない羽状縄文で、成形痕（巻き上げ痕？）が残っている上に回転押捺している。25と26は結束する羽状縄文であるが、26は非常に細かい節である。

27～28は台付きの底部である。ともに無文であるが、27はよく研磨している。28は器表面が著しく剥落している。



第39図 遺構外出土遺物(石器)

29～30はミニチュア土器である。29は推定の高さが3.5cmで小鉢状のものである。30は小鉢の体部下端である。いずれも無文である。

10は前期に属する。該期に属すると思われる土器はこの1点だけである。11～30は後～晩期に属すると思われる。しかし、いずれの土器も形式名は比定できない。

31は鉢形土器の体部片を利用して作製された円盤状土製品である。

(2) 石器(第39図、写真図版37)

出土した石器は剥片石器7点と礫石器1点の計8点である。201と202は所謂調整痕を有する剥片石器、203～207はフレークである。201は片面のみに調整痕、202は両面に調整痕がみられる。208は凹石である。201の石質はチャート質珪質淡緑色凝灰岩、202は珪質泥岩、203～206は輝緑凝灰岩、207は凝灰質珪質泥岩、208は硬砂岩である。産地は202と207が奥羽山地に、他は北上山地に求められる。

〔4〕まとめ

縄文時代の遺構はピット15基、陥し穴17基が検出され、遺物は若干の土器と少量の石器を出土した。住居跡や多量の遺物を包蔵する所はなく、所謂「生活の場」としての性格は見い出されなかった。しかし、尾根づたいに北へ200mほど上がると晩期の土器や石器を比較的多く出土する所があり、地理的条件からも「生活の場」を窺わせる場所が存在している。

次に今回の調査結果について項目ごとに若干の所見を述べ、縄文時代のまとめとしたい。

(1) ピット

検出されたピットを断面形で分類するとフラスコ状ピット11基、皿状ピット4基である。フラスコ状ピットの規模は特に大きいものや小さいものはなく、ほぼ同程度でその平均値は開口部139cm、頸部125cm、底部135cm、深さ74cmである。これらのピットは尾根の頂部付近の南斜面を中心に密集して占地している。すなわち、日当たりが良く氷はけの良い所、少なくとも水が集まってくるような低地ではない所に作られている。これは皿状ピットも同様である。このような占地の特徴は、大堤Ⅱ遺跡や吠屋敷Ⅰa遺跡など他の遺跡を見ても広く共通する特徴である。

フラスコ状ピットの性格については貯蔵穴であるとの見方が一般的ではあるがなお検討の余地を残している。今回の調査でもそれを解明する資料は得られなかったが、ある特殊な使われ方をしたと思われる例が一例発見された。それはⅦB-51ピットである。北壁際の底面に2個の鉢形土器を倒立させていたものである。2個の間隔は50cmで、一方の深鉢は上半部を打ち欠きどちらも高さ20cmほどになるようにして倒立させている。一方は中空、一方は黒褐色土が充填されている。ピットの埋土は自然堆積で人為的に埋め戻したものではない。すなわち、2個の深鉢は何かを入れて伏せたものでも、埋置したものでもない。

ピット内に土器を置いてある例は他の幾つかの遺跡でも見られる。ここでは当遺跡に近い安

代町の水神遺跡^(文14)と浄法寺町の五庵 I 遺跡^(文15)、九戸村の獄 II 遺跡^(文16)、川向 III 遺跡^(文17)、滝谷 III 遺跡^(文18)、軽米町の駒板遺跡の例を考えてみたい。

獄 II 遺跡の第22号土坑と駒板遺跡の II D 44-2 ピットの場合は粗製の深鉢が土坑の中央に倒立していたものである。前者はピットの底部に直接置いたものではなく、ピットの二次使用に伴って置かれている。自然堆積である。器高は43cmである。底部が破損していたため中にはピットの埋土と同じ暗褐色土がつまっている。後者はピットの底部に直接伏せられている。器高27cmである。中空かどうかは不詳である。

川向 III 遺跡の H-24 ピットは粗製の深鉢と台付鉢が並列して壁際に倒立の状態では置かれている。前者の器高は38cm 後者は9cm で大きさは著しく異なっている。ともに中空である。

水神遺跡の H b 59 土坑の場合は壁際に3個の土器が並列してある。中央は横転しているが台付鉢を被った壺、左側は正立の壺、右側には倒立の鉢形土器である。いずれも中空である。壺の器高は27cm、29cm とほぼ同じ大きさで、鉢形土器は16cm でほぼ半分ぐらいの大きさである。報告者は壺の中には「物」が入っていた可能性を指摘し、埋め戻したものと推定している。

五庵 I 遺跡の VII H 25 土坑はやはり壁際に壺1個を正立させ、両側にはカラス貝を積んでいた。壺は赤彩された立派なもので、中には土坑の埋土と同じ土が入っている。右側のカラス貝は壺から8cm 離れた所に11点、左側の貝は16cm 離れた所に26点が重ねられているが、それらは入子状に重ねられ、ある意図をもって積まれたと考えられている。壺の高さは21.5cm である。

滝谷 III 遺跡の B C 30 ピットは高台付浅鉢形土器を内側にし、深鉢形土器がそれを覆うように(入子状)に伏せてあり、カキの殻が並んで置かれてあった。この場合も土器は中空である。

以上の例を本例と比較してみると、五庵 I 遺跡の例が同様の性格を有しているように思える。即ち、両例とも遺物の配置が何らかの意図で飾り付けたもの、または飾り付けて何かを行った跡ではないかと考えられるからである。水神遺跡の例は左右対称とはならず、滝谷 III 遺跡の例も同様でそこに「飾り付け」という性格を積極的に窺うには多少無理があるかもしれない。獄 II 遺跡と駒板遺跡の例はただちには本例と結び付くかどうかは速断できない。ただここにとり上げた例はいずれも縄文晩期と思われることから今後該期の類例を重ね検討する必要があるだろう。

(2) 陥し穴

陥し穴は円筒状のもの11基と溝状のもの6基の2タイプ17基が検出された。遺構内から出土した遺物は無く、その点からの時期決定はできない。しかし、埋土と検出面及び他の類例からすると次のように時期を推定することができるであろう。

円筒状陥し穴は中振浮石より下位で検出され埋土内にも中振浮石は全く含まれていない。このことは中振浮石が降下する以前に構築され、かつ埋没していたことになる。そこで、中振浮石の降下年代であるが、中曽根 II 遺跡^(文19) 149号、150号住居跡では大木 2a 式の埋土中位にレン

ズ状に堆積する。また、沼久保遺跡のⅢ E - 1 埋設土器は中振浮石層を切っている。この土器が円筒下層 d 式である。したがってその降下年代は前期前葉から前期後葉までの間である。^(文20)

この円筒状陥し穴は斜面に沿って一列に並んでいるが、各陥し穴の間は最大で 5 m、最小 2 m の間隔である。概ね斜面の上位は間隔が狭く、緩斜面になると広くなるといえる。しかし、Ⅲ A - 58 と Ⅲ A - 59 の間の 2 m と Ⅳ A - 57 と Ⅳ A - 58 の間の 2.5 m は他と比較して近より過ぎていることから、すべてが同時存在かどうかは断定できない。ただ、埋土等には相違が見られないことから、時期的なずれはない。

昨年の調査で明らかになった大堤Ⅱ遺跡の円筒状陥し穴と比較すると、検出面、形状、規模埋土はいずれも同じであるが、大堤Ⅱ遺跡で遺構の周囲に見られた坑跡は当遺跡では検出されなかった。

溝状陥し穴は円筒状陥し穴のようにすべてが一列に並んでいるわけではない。Ⅴ A - 101 陥し穴からⅥ A - 101 陥し穴のように連続するものと、Ⅴ A - 104 陥し穴のように単独で作る場合がある。今回の調査で特徴的であったのはⅤ A - 104 陥し穴に代表される溝の幅が極端に狭いものが検出されたことである。Ⅴ A - 104 陥し穴は両端部は丸味を帯びてふくらむ所謂バベル型である。頸部の位置で両端とも幅 60 cm である。それに対して中央の溝の幅は 20 cm であり、底部では僅か 4 cm 程度である。しかも頸部から底部までの深さは 90 ~ 100 cm である。移植ベラも腕も全く入らない細く深い溝である。これは地上から掘ろうとすれば、ほとんど不可能に近い。したがって両端部をまず掘って、体をその中に入れて脇から掘る以外にないのである。即ち端部のふくらみは掘り手が入るために必要なスペースと考えざるを得ない。このことは中央部の細い溝は端部ほど広くなり中央に向かって細くなっている事実からも言えることである。端部から中央へ向かって掘るならば、長軸の中心線が中央で屈曲する事実も容易に理解される。他の 4 例も若干中央部が狭く、端部が広いことから同様の作り方をしたと思われる。

(3) 遺物

土器と石器が若干出土した。土器は前期と思われる小片が 1 点あるが、他はいずれも後晩期のものと思われる。文様体を有するものは少なく、形式名でとらえられるのは 2 の大洞 B 式 1 点だけである。

石器は剥片石器 7 点と礫石器 1 点が出土したのみである。

2. 平安時代

平安時代の遺構と遺物の概要は次のとおりである。住居跡5棟、周溝を有する掘立柱建物跡1棟、掘立柱建物跡2棟、円形周溝1基、用水路跡1条、ピット6基、柱穴跡16基、畑地跡約600㎡である。

住居跡5棟のうち3棟は一部が調査区外にかかり、全体を調査できたのは2棟のみである。5棟とも一辺が4～5mの同規模で大型の住居跡はない。カマドの位置は北向きと、東向きである。

周溝を有する掘立柱建物跡の周溝は隅丸方形、柱は4本柱である。

掘立柱建物跡2棟はどちらも1間×2間で規模も同じである。

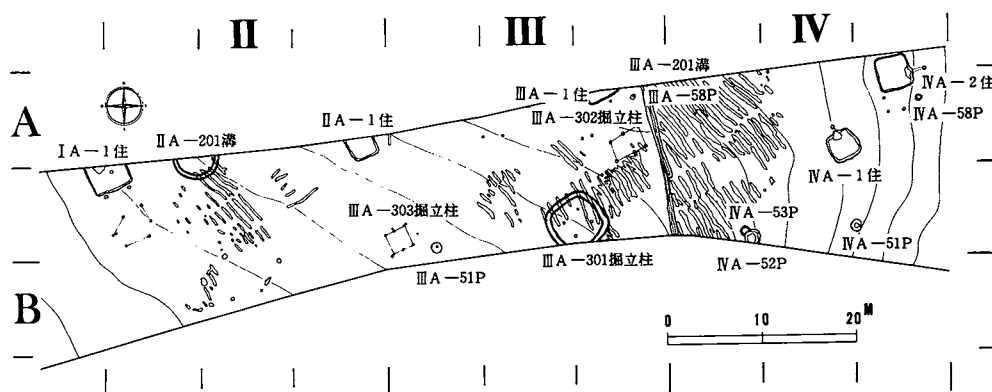
円形周溝は半分が調査区外にかかる。

用水路跡は直線の溝であるが勾配を調整するために溝を繋ぎ合わせて作られている。

ピット6基のうち3基は擋鉢状の形をしており、底部付近には淡い焼土が形成されている。底部からは草木灰・土器片・土製品などが出土する。

畑地跡は畝間の掘込みに十和田a降下火山灰が堆積していたことによって遺構を確認できたものである。畝は斜面に直交する方向に作られている。

平安時代の遺物は、土師器、須恵器、鉄器、鉄滓、土器及び種子が出土した。土師器の器種は甕、坏、土製品（玉、土鈴、土偶状）である。甕は長胴甕、坏はロクロ水挽きによるものである。須恵器は甕、坏、埴である。完形品はない。鉄器は刀子状のものである。鉄滓と埴塙の破片が出土した。木器は住居跡の埋土から出土したもので完全に炭化していた。鋤と思われる。



第40図 平安時代の遺構配置図

〔1〕住居跡

I A - 1 住居跡

本住居跡は北半が調査区外となるため一部は未調査である。本住居跡は焼失した住居である。カマドは検出されていない。

遺構（第41図、写真図版14～15）

〔位置〕 検出された5棟の住居跡のうち最も西側で検出された。沢まで約20mである。床面の標高は242.2mである。

〔埋土〕 埋土の上位は流失したり耕作に伴って削剝されている。斜面の上位では埋土の厚さが45cmであるが、下位は10cmと薄くなる。埋土は黒色土や黒褐色土を中心に3層に大別される。十和田a降下火山灰はブロック状となって埋土内にU字状に連なって堆積するほか東壁際の床に大きな塊となって見られる。白頭山火山灰は見られない。床を直接覆う埋土3層内には焼土粒、粉炭等が含まれる。

〔平面形・規模〕 4.2～4.4mを1辺とする方形と思われる。

〔壁〕 ほぼ垂直に近い立ち上がりを示し、大きな崩壊はない。

〔床〕 VI層上面で黒色土との混土で床を作る。水平で若干の凹凸があるが概して平坦である。全体にやや硬く締まっているが特に中央部に非常に硬い所がある。その一角に現地性焼土が形成されている。層厚は1cmにも満たない。直径70cmほどで鍋底状に中央部が低くなる。炉跡である。壁際に周溝が回る。溝の幅は10cm、深さは10cm以下である。

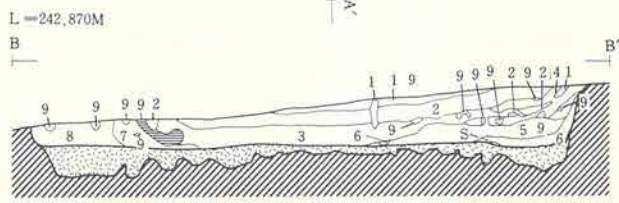
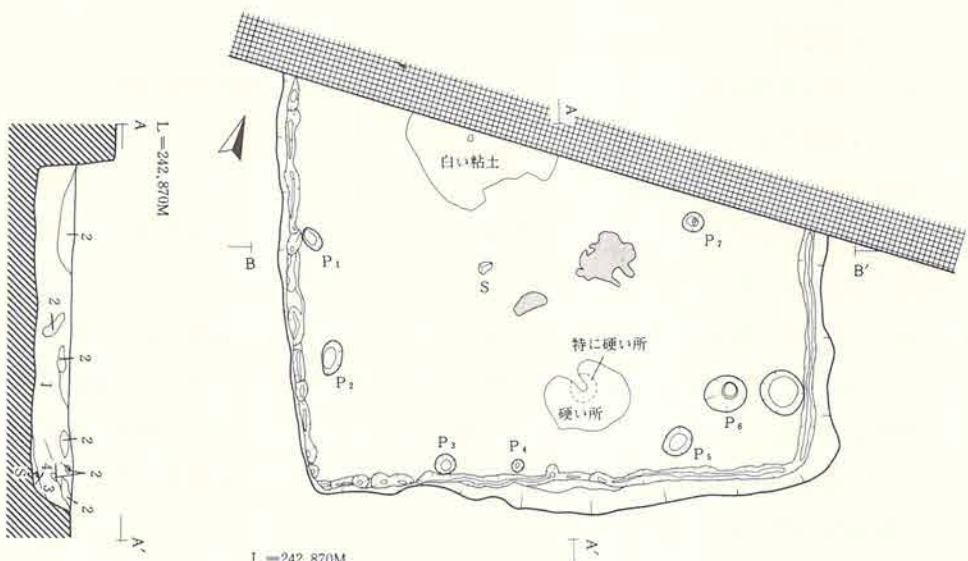
〔柱穴〕 明瞭な柱穴はないが浅い柱穴状ピットが壁際に8基検出された。径は20cm内外、深さは概ね15～20cmである。

〔その他〕

中央よりやや北西に偏して白い粘土が検出された。一部が調査区外へのびるため形状・用途など不詳な点が多い。円形ないし方形に硬く敷かれたもので厚さ3cmである。南部浮石が若干混入している。この粘土の直上は厚さ1～2cmの黒褐色土で硬くたたかかれている。焼土や粉炭等は検出されない。

遺物（第42～43図、写真図版30～31）

32～38と109は床面から、39～46と201～204は埋土内から出土したものである。32の甕は押し潰された状態で出土した。口縁部から体上半部はロクロを使用して整形している。33、34はロクロ不使用の甕の口縁部片である。33は口縁部が大きく外反し、34は短い口縁部が緩やかに立ち上がる。以上の3点はいずれも煤が付着している。胎土、焼きとも良好であるが、34は特に砂が少なく薄手である。35はあかやき土器の坏である。器壁は内湾ぎみに立ち上がる。色調は明赤褐色で焼きも良好である。36～38は須恵器である。36は壺ないし壺状の器形の口縁部



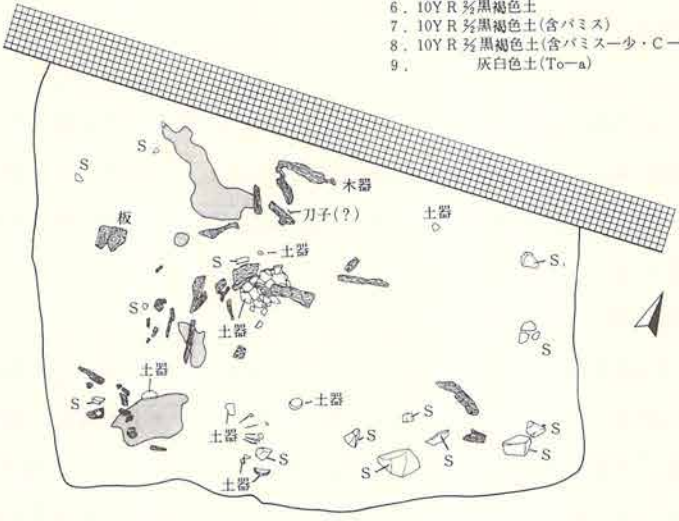
1. 10Y R 矽黒色土(含バミヌー少)
2. 10Y R 矽黒褐色土(含バミヌー少・To-a・C-少)
3. 10Y R 矽黒色土(含バミヌー少)
4. 10Y R 矽黒褐色土(含バミヌー少)

付表：柱穴状ピット (cm)

No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
深さ	25	20	14	16	11	20	16

1. 10Y R 矽黒色土(含バミヌー少)
2. 10Y R 矽黒色土(含バミヌー少)
3. 10Y R 矽黒褐色土(含バミヌー少・C-少)
4. 10Y R 矽黒色土(含バミヌー少)
5. 10Y R 矽黒褐色土(含バミヌー少)
6. 10Y R 矽黒褐色土
7. 10Y R 矽黒褐色土(含バミヌー)
8. 10Y R 矽黒褐色土(含バミヌー少・C-少)
9. 灰白色土(To-a)

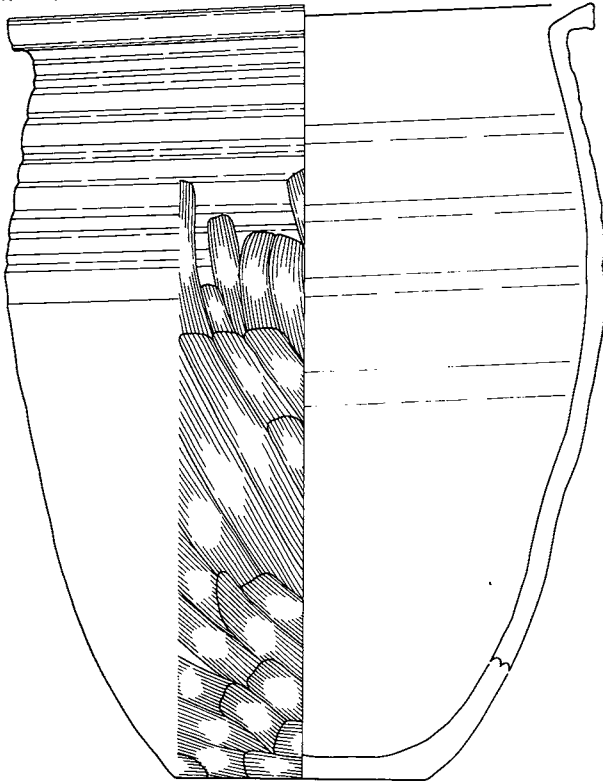
遺物等の出土状況



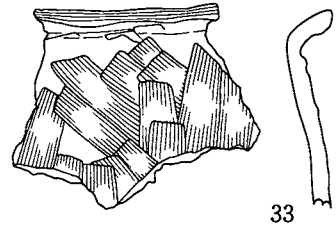
S = 1/60

第41図 I A-1 住居跡

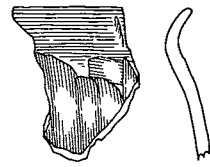
23.3 · 10.0 · 30.8



32



33

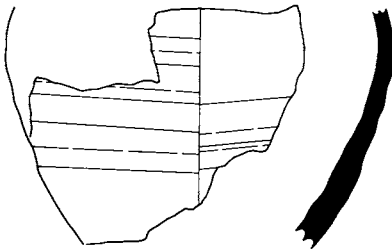


34



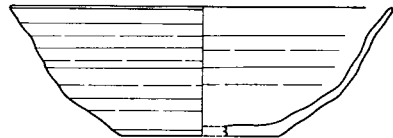
36

--- (9.3)



37

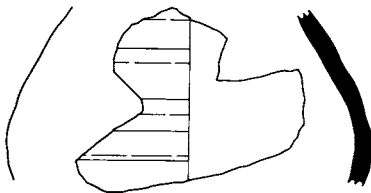
(15.3) · (6.2) · 5.2



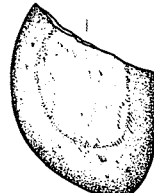
35



--- (7.8)

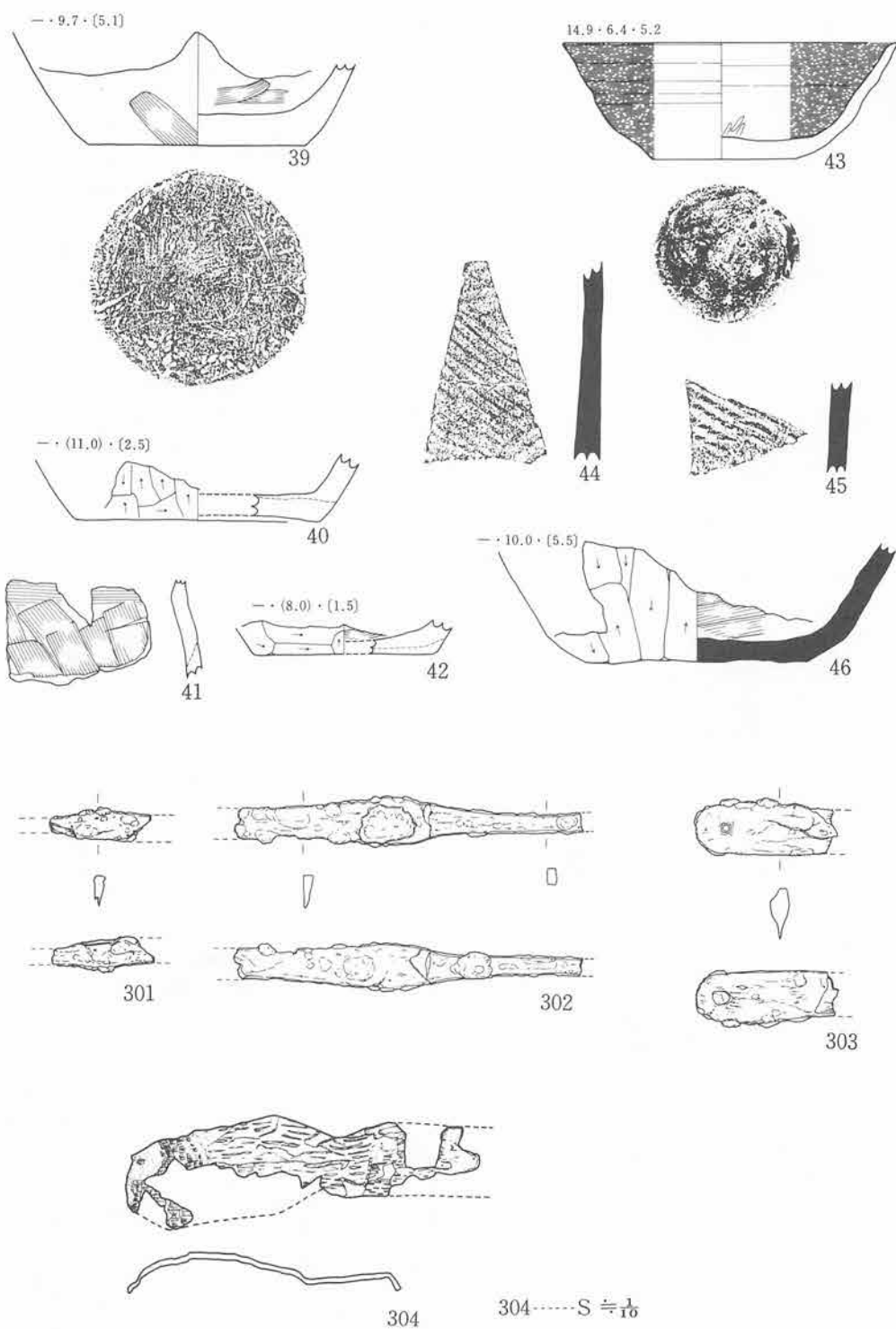


38



109

第42図 I A - 1 住居跡内出土遺物(1)



第43図 IA-1住居跡内出土遺物(2)

片である。37、38は壺の体部片と思われる。3点とも青灰色で胎土、器厚、出土状況等から同一個体の可能性もある。109は1面だけが使用された磨石である。

39～42は甕の口縁部と底部である。39は底部に縄文の側面圧痕が見られるが、大部分はヘラ状工具を用いて再調整しており詳細は不明である。縄文の節は大きく、条の間も大きく開いており、織物とか組紐状とは思われない。40もヘラ状工具で粗く再調整している。41は口縁部直下の体部片であるが、細く鋭い沈線が見られる。工具痕か文様体の一部かは不明である。42は底部に調整痕が見られない。43は内外面に黒色処理した坏である。底部は回転ヘラ切り再調整である。44～46は須恵器の甕の破片である。44、45は叩き目であるが内面に当て具痕は見られない。46は底部であるが底部、体部ともヘラケズリ調整である。301と302は刀子状の鉄製品である。同一個体の可能性が強いが直接に接合しない。303は腐蝕が進んでおり不詳な点もあるが、穂積み具と思われる。304は完全に炭化して出土した木製品である。詳細に観察すると陥所に削られた調整痕が見られ、先端部は削られて尖っていた。木製の鋤先と思われる。遺存状態は非常に悪く取り上げることはできなかった。また、埴塼の破片と鉄滓が出土している。

II A - 1 住居跡

本住居跡の北半は調査区外にあるため一部が未調査である。柱穴は認められず、カマドも検出されていない。

遺構（第44図、写真図版16）

〔位置〕調査区の北辺に位置し、尾根の脚部から続く緩斜面に立地する。III A - 1 住居跡と I A - 1 住居跡のちょうど中間にあり、ともに23mの距離である。

〔埋土〕黒色土、南部浮石粒を含む黒色土、白頭山火山灰の3層に大別される。白頭山火山灰は埋土下位に層状に堆積する。十和田 a 降下火山灰は小ブロック状となって壁際の埋土内及び床面に散見される。

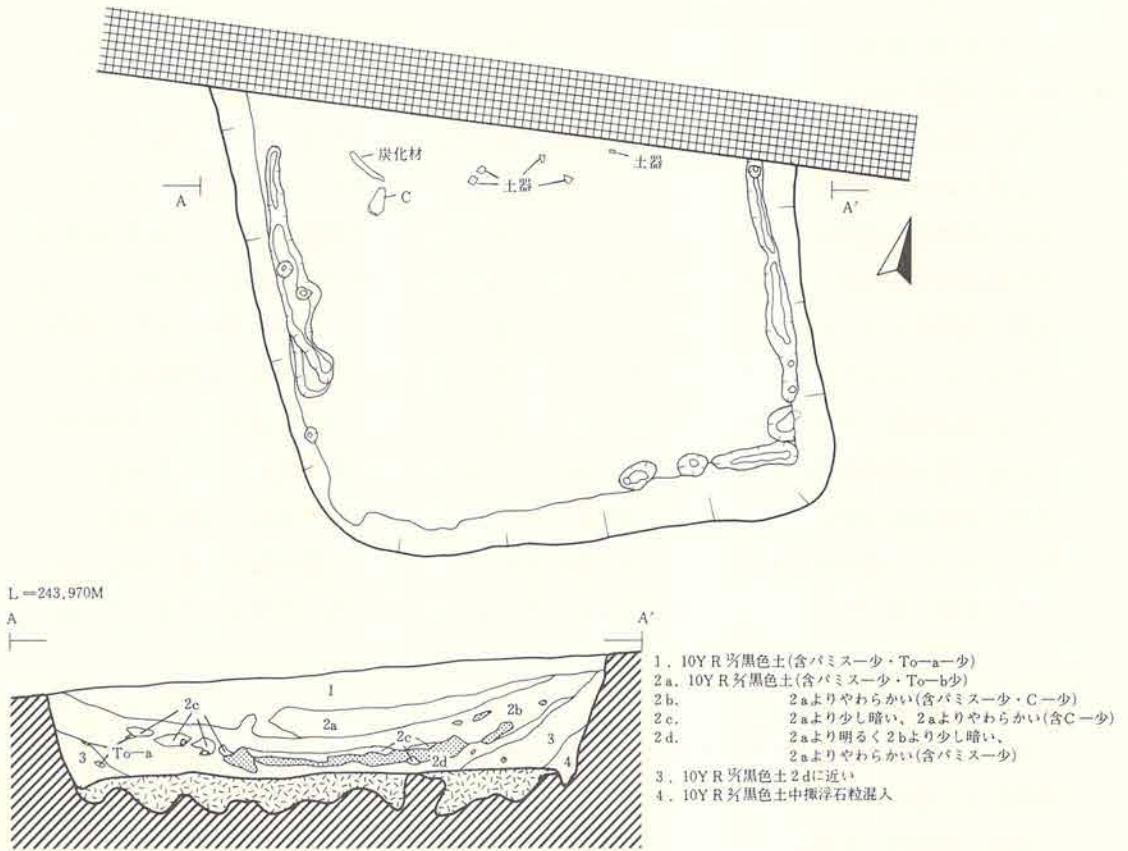
〔平面形・規模〕一辺が2.8 m程の正方形をなすと思われる。

〔壁〕ほぼ直立し崩壊の跡は見られない。

〔床〕VI層上面を床面とし、黒色土を混入させて床を作っている。多少のうねりがあるがほぼ平坦で水平である。周溝が回る以外は全く掘り込み跡は見られない。周溝の幅は10～15cm、深さは深い所で10cm、平均5 cm前後である。

〔その他〕

西側の床面から2個の炭化材が出土した。1個は原形を留めているが、一方は粉状となって原形をとどめていない。原形を留める炭化材は丸太材で材質はナラである。床面及び埋土下位から甕と坏が出土したが、いずれも小片のため図化は省略した。甕はロクロ不使用、坏は回転糸切り無調整の底部である。



第44図 II A - 1 住居跡

III A - 1 住居跡

本住居跡は大半が調査区外にあり、調査できたのは南側の一部のみである。柱穴が明瞭に検出できた唯一の住居跡である。

遺構 (第45図、写真図版17)

〔位置〕本住居跡の北側は微高地となっており、その脚部に位置する。用水路は本遺構の東側2 mにあり、IV A - 1 住居跡の北西23m、II A - 1 住居跡の東23mに位置する。

〔埋土〕黒色土、暗褐色土、十和田 a 降下火山灰と暗褐色土の混土、黒褐色土の4層に大別される。耕作土直下で検出され、掘り込みもやや浅い。白頭山火山灰は検出されていない。

〔平面形・規模〕一辺が3.3 m以上の方形と思われるが、詳細は不明である。

〔壁〕ほとんどが黒～黒褐色土で壁を構成するため、やや崩壊が進んでいる。

〔床〕黒色土と南部浮石の混土でやや硬く締まっている。南壁際に小ピットがある。水平かつ平坦である。壁際に周溝が回る。溝幅10cm、深さ30～35cmである。

〔柱穴〕南隅（P1）と南壁際に（P2）に検出される。P1は深さ51cm、P2は55cmである。どちらも底部が2段になっており、浅い方はそれぞれ43cmと40cmである。柱間は2.1mである。

〔その他〕。ピットについて

P1の東60cmの所に柱穴状ピットがある。埋土上～中位に焼土粒が流れ込み埋土下位からは土師器片が出土した。開口部は不整形、深さは60cmに達する。柱穴の可能性もある。

・本住居跡の周囲のピットについて

本住居跡と用水路跡との中間にⅢA-58ピットと住居跡南側に2基の柱穴が検出された。

ⅢA-58ピットは45×55cmの長方形で深さは15cmである。埋土は上位に若干の黒色土が混入する十和田a降下火山灰、下位は黒褐色の砂質土であるが、十和田a降下火山灰がその大半を占める。

ⅢA-56ピットは開口部径30～35cm、深さ49cmの柱穴状ピットである。ⅢA-57ピットは開口部径24cm、深さ69cmの柱穴状ピットである。両ピット間は芯～芯間で1.7m、その向きは住居跡の南壁と平行になる。壁と柱との間は70～80cmである。また、ⅢA-56ピットは本住居跡の西壁の延長線上に位置する。埋土は両ピットとも中位まで十和田a降下火山灰がブロック状に混入する黒褐色土である。

この3ピットは配置と埋土の状況から、本住居跡と何らかの関係を持っている遺構と思われる。

遺物（第45図、写真図版32）

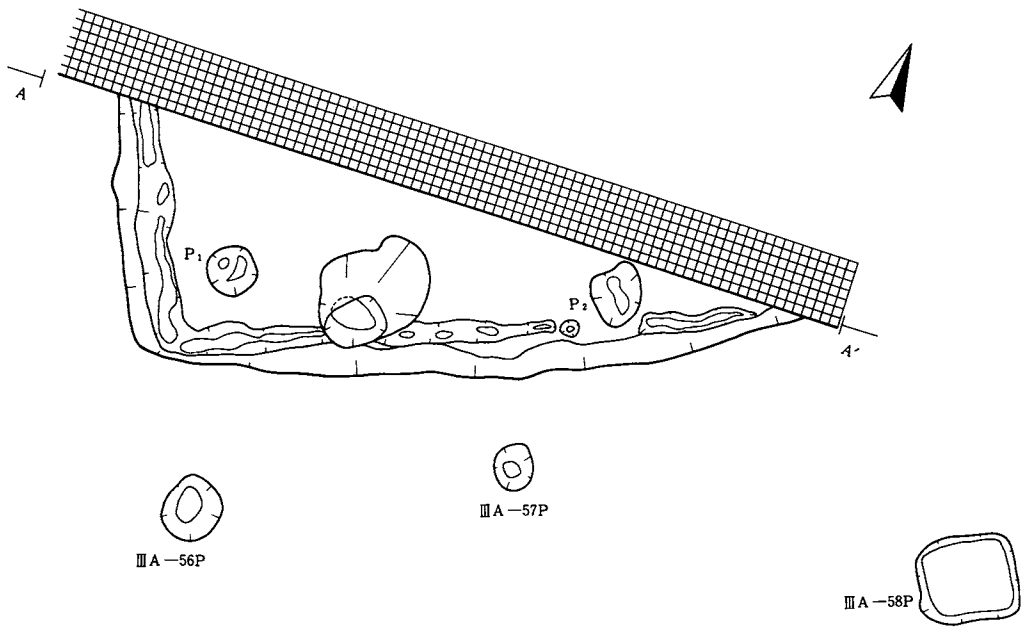
47と48の2点が出土した。47は埋土内から出土した甕の底部片である。体部下端及び底部はヘラナデ調整されている。煤が付着する。48は貼床内から検出された縄文土器である。無結束の羽状縄文である。

IV A - 1 住居跡

本住居跡は南壁の一部が崩落しているが、遺構の遺存状態は良好である。床の2箇所から炭化した茅状の草が出土した。埋土及び遺構を細部にわたって観察したが、粉炭、焼土等は発見されず、焼失とは考えられなかった。

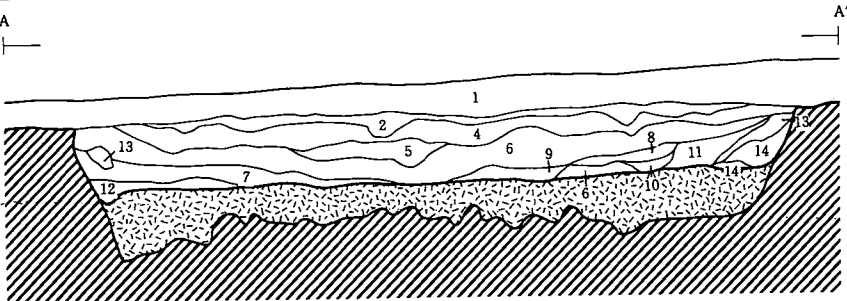
遺構（第46図、写真図版18～19）

〔位置〕尾根の脚部に位置し、床面の標高は約246mである。北東5.5mでIV A - 2住居跡に接する。ⅢA - 1住居跡とは22mの距離である。

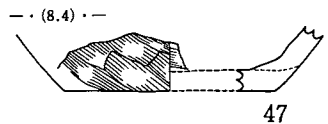


L=245.930M

A



1. 10Y R 矽黑褐色土
2. 10Y R 矽黑色土(含バミスー少)
3. 7.5Y R 矽暗褐色土(含バミスー少・Cー少・To-aー少)
4. 7.5Y R 矽極暗褐色土(含To-aー少)
5. 10Y R 矽暗褐色土(含To-aー多・バミスー少)
6. 10Y R 矽黑褐色土(含To-aー少)
7. 10Y R 矽黑褐色土
8. 10Y R 矽黑褐色土
9. 10Y R 矽黑色土(含To-aー少)
10. 10Y R 矽暗褐色土(含To-aー多)
11. 10Y R 矽黑褐色土(含To-aー少)
12. 10Y R 矽黑色土(含To-aー少)
13. 10Y R 矽黑褐色土(含To-aー少)
14. 10Y R 矽褐色土



第45図 III A - 1 住居跡及び出土遺物

〔埋土〕上位から黒色土、オリーブ褐色土（白頭山火山灰）、黒褐色土、黒褐色土と褐色土の混土、十和田 a 降下火山灰が小ブロック状に含まれる黒色土及び黒褐色土の7層に大別される。埋土7には壁の崩落土が含まれる。U字状の自然堆積である。

〔平面形・規模〕カマドが設置される北壁は2.6 m、南壁3.2 m、西壁3.1 mで歪んだ方形である。斜面下位側の南隅と西隅は隅丸となる。

〔壁〕斜面の上位側である東壁中央部と南壁の東半部は上位が崩壊し中に流れ込んでいる。斜面の上位で56 cm、下位で34 cmの掘り込みである。

〔床〕西隅付近が若干低くなるほかは概ね水平かつ平坦である。特に硬い所や軟らかい所はない。カマドの前には厚さ2～5 cmの焼土を含むシルトと焼土が散在している。カマドから掻き出されたものと思われる。

〔柱穴〕明瞭な柱穴や柱穴状ピットは見られない。P₁はカマドの脇に作られたピットである。P₂～P₇のうち深さ10 cmを越えるものはP₂の17 cmとP₄の10 cmのみで、P₃、P₅、P₆は窪みとなっている。

〔カマド〕北壁の中央部に設置される。袖部は芯材を使用せず粘土質シルトを用いて作られている。燃焼部は若干掘りくぼめられている。煙道部は削り貫き式である。煙出し部の上位と煙道部の入口にはカマド本体を構築している淡黄色の粘土質シルトがつまっている。煙出し部の下位は焼土がブロック状となって堆積している。燃焼部には焼土が3～5 cmの厚さに形成されている。規模は幅40 cm、奥行き60 cmである。明瞭な支脚は発見されなかったが、底部を含む甕の破片が散在していた。支脚として使用されていたと思われる。

〔その他〕。杭跡について

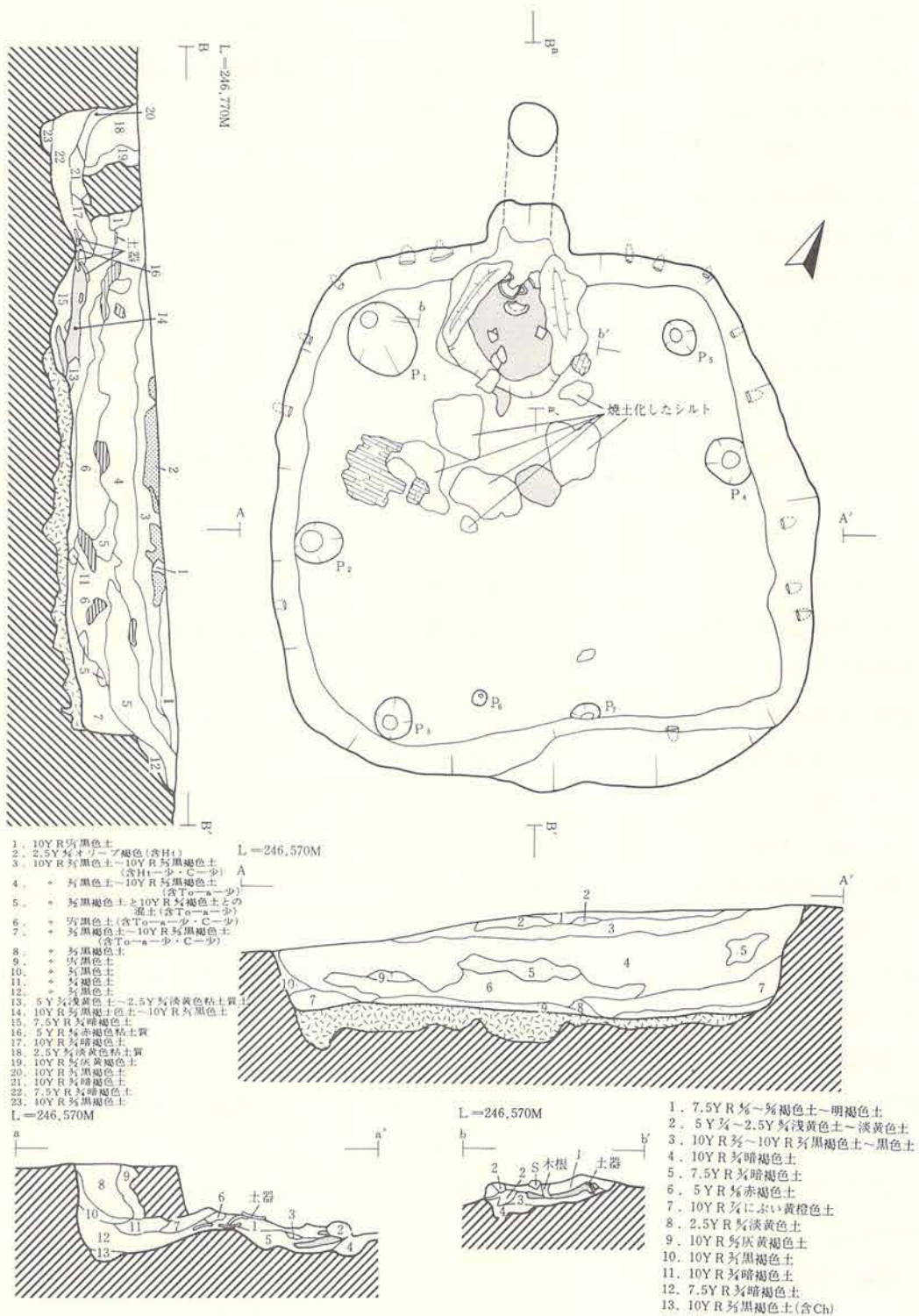
壁に細い杭状の跡が見られる。開口部は径5～6 cm、奥行きは概ね10 cm弱である。斜面上位側の壁は床から30 cm程の高さに、床が一段低くなる西隅付近は他の床とほぼ同じ高さとなる位置をとる。南壁と西壁の南半には各1個のみである。いずれも壁に直角に刺し込んだものである。用途は不明である。

・炭化物について

西壁の近くに茅状の草の炭化物が床面から出土した。また、同一の炭化物はカマドの東隅からも出土している。炭化物の周囲には焼土化したシルトが見られる。このシルトはカマドから掻き出されたものと思われる。炭化物はシルトに伴うものか、床に敷かれてあったものか等は不明である。

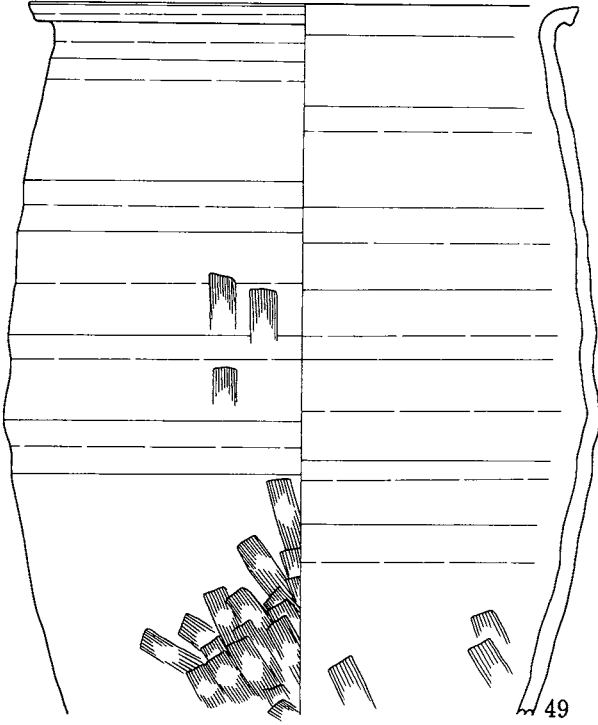
遺物（第47図、写真図版32）

49～51はカマド及び煙道部内、52～55は埋土内から出土したものである。49は口縁部から体部上半をロクロを使用して整形した甕である。体部下半はヘラナデ調整をしている。色調は明

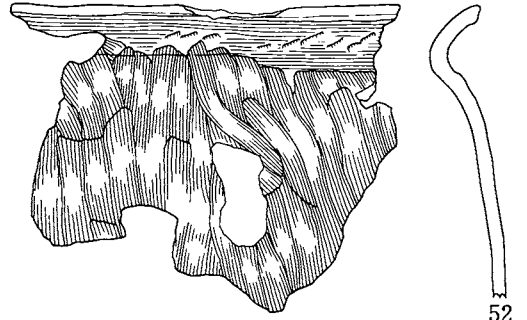


第46図 IV A - 1 住居跡

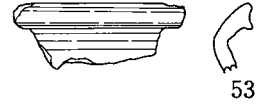
21.9 - - - [28.0]



49

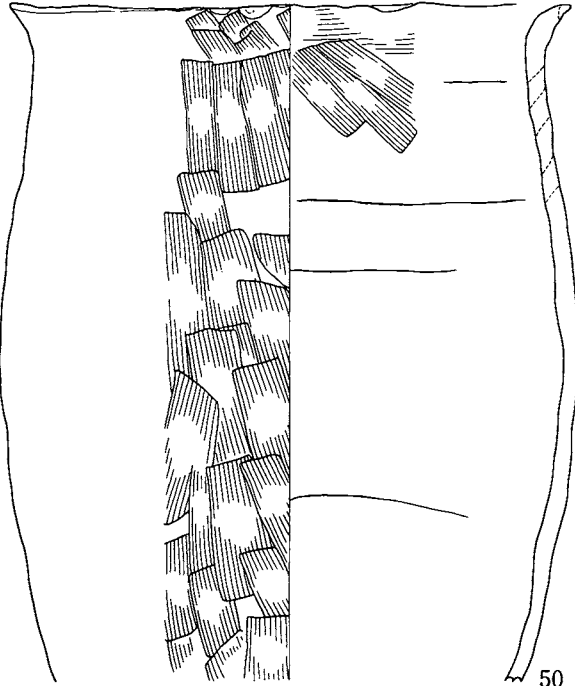


52

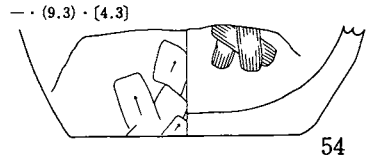


53

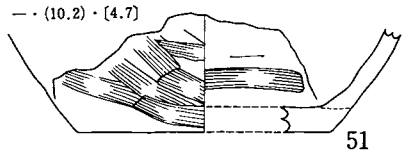
22.3 - - - [26.7]



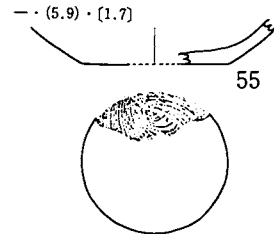
50



54



51



55

第47図 IV A - 1 住居跡内出土遺物

褐色である。50は形・大きさとも49と同じであるが、ロクロは使用されず口縁部直下からヘラナデ調整をしている。口縁部は短かく緩やかに外反する。胎土は粗砂が多くザラザラしているが焼きは硬い。色調は暗赤褐色をし、体下半から口縁部まで煤が付着する。51は胎土、色調は50と同様であるが、焼きは非常に良好できわめて硬い。52は短い口縁部が括れて大きく外反する。胎土は50と同じであるが色調はやや明るい。53は49と同様の口縁部破片である。54は胎土・色調からみて50と同一個体の可能性がある。55はあかやき土器の坏である。鉄滓も出土した。

IV A - 2 住居跡

IV A - 1 住居跡よりやや大きく、平面形はほぼ正方形である。東側にカマドを設置する。本住居跡の南側に柱穴状ピット等が検出された。

遺構（第48図、写真図版20）

〔位置〕 検出された5棟の住居跡のなかで最も東側に位置する。床面の高さは246.8mである。南西5.5mでIV A - 1 住居跡に接する。用水路跡からは24mの距離である。

〔埋土〕 上位から黒色土、白頭山火山灰、黒褐色土、十和田 a 降下火山灰が小ブロック状となって混入する黒褐色土の4層に大別される。白頭山火山灰は最大15cmの厚さで堆積する。自然堆積である。

〔平面形・規模〕 一辺が3.7mの正方形である。

〔壁〕 斜面の上位にあたる東壁で最大高60cmを測る。大きく崩壊している所はない。西壁中央の上位は一部斜行するように削られている。しかし、埋土は黒色土の単層であり、本住居跡全体の埋土とは明らかに異なっている。

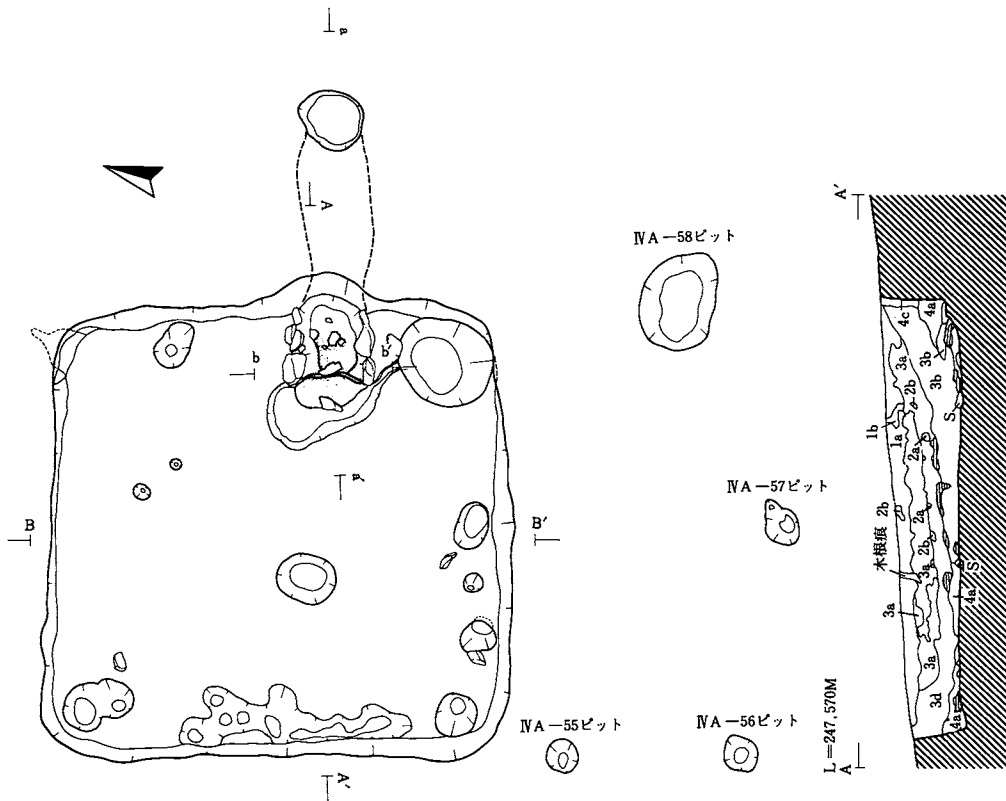
〔床〕 黒色土と南部浮石の混土で全体がやや硬く締まっている。全体的には水平で平坦である。ただし、南東隅（カマドの脇）に浅いピット1基と中央及び南～西壁を中心に浅い窪（柱穴状ピット）がみられる。

〔柱穴〕 深く明瞭な柱穴は見られない。西隅と南壁及び南壁際、東壁際に浅い窪がみられる。

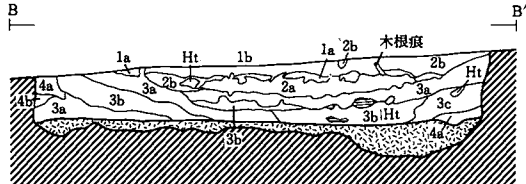
〔カマド〕 東壁の中央よりやや南に寄った所に設置される。袖部は垂角礫を用いて作られる。焚き口部は床より3cmほど掘り込まれ扇形状を呈する。燃焼部は鍋底状に掘り窪められ、南部浮石が加熱を受け、厚さ10cmほどの焼土を形成する。煙道部は割り貫き式である。

〔その他〕 ・周辺のピット

本住居跡の南側にピット1基と柱穴状ピット3基がある。埋土はいずれも黒色土に十和田 a 降下火山灰が含まれる単層である。IV A - 58ピットは皿状のピット、IV A - 56ピットとIV A - 57ピットはともに補助杭を有する柱穴で検出面からの深さはどちらも36cm、補助杭の深さは12cmである。IV A - 57ピットとIV A - 56ピットを結ぶ線は住居跡の南壁にはほぼ平行となる。柱間

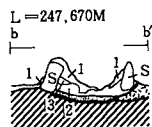
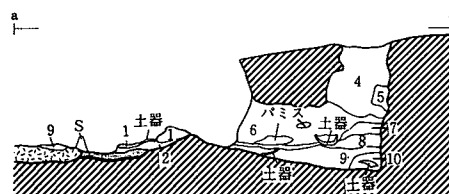


L=247.570M



- 1 a. 10Y R ㉗ 黒色土 (含Ht-少)
- 1 b. 10Y R ㉗ 黒色土
- 2 a. 2.5Y ㉗ オリーブ褐色土 (含Nt)
- 2 b. 2.5Y ㉗ 黒褐色土
- 3 a. 10Y R ㉗ 黒褐色土 (含Ht-少)
- 3 b. 10Y R ㉗ ㉗ 黒褐色土 (含バミス-少・To-a-少)
- 3 c. 10Y R ㉗ ㉗ 黒褐色土 (含Ch)
- 3 d. 10Y R ㉗ 黒褐色土 (含バミス-少・To-a-少)
- 4 a. 10Y R ㉗ 黒色土 (含バミス-少・Ch-少)
- 4 b. 10Y R ㉗ 黒色土 (含To-a-少)
- 4 c. 10Y R ㉗ 黒色土

L=247.670M

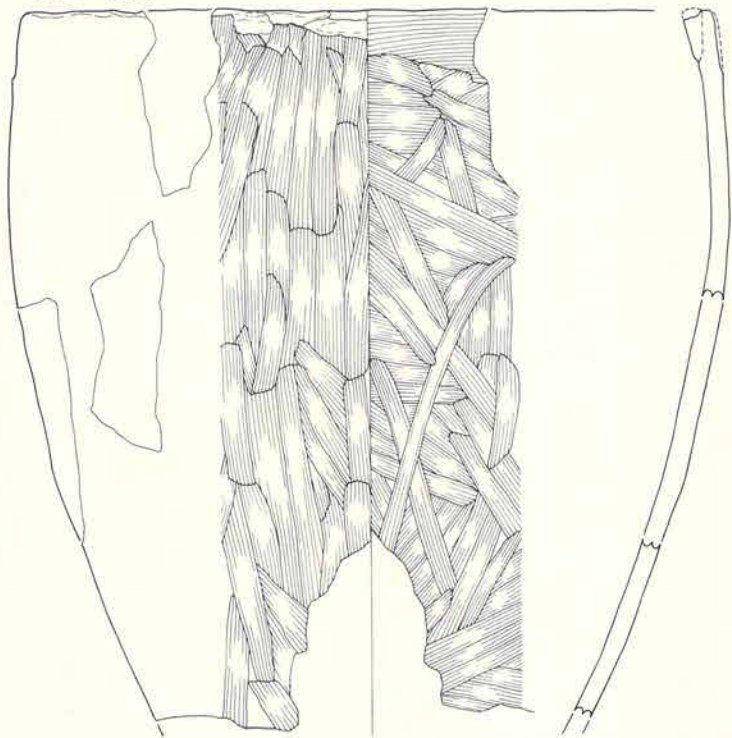


1. 5Y ㉗ 浅黄色粘土質土 (含C-少)
2. 2.5Y R ㉗ ~ 2.5Y ㉗ 赤褐色土 ~ 暗赤褐色土 (含C-少)
3. 7.5Y R ㉗ 極暗褐色土 (含C-少)
4. 10Y R ㉗ ~ 10Y R ㉗ ㉗ ㉗ 黄褐色土 ~ 暗褐色土 (含バミス-少)
5. 10Y R ㉗ 暗褐色土
6. 10Y R ㉗ 黒褐色土 (含C-少・バミス-多)
7. 2.5Y ㉗ 灰黄色粘土質土
8. 10Y R ㉗ 黒褐色土 (含C-多)
9. 10Y R ㉗ ㉗ ㉗ 黄褐色粘土質土 (含C-多)
10. 10Y R ㉗ 黒褐色土 (含C-少)

S = $\frac{1}{60}$

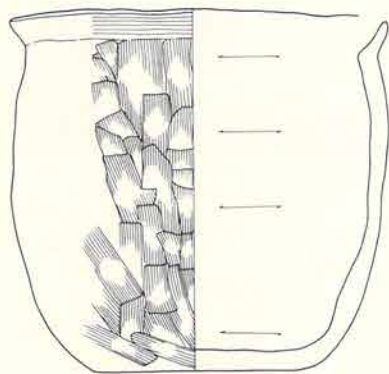
第48図 IV A - 2 住居跡

27.2 · — · [28, 8]

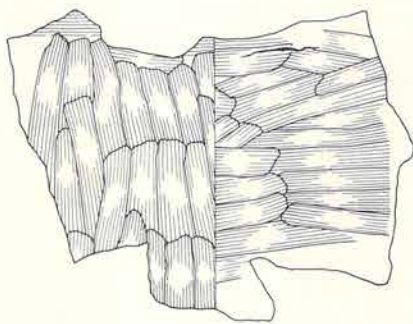


56

14.9 · 8.0 · 14.5



57



58



59

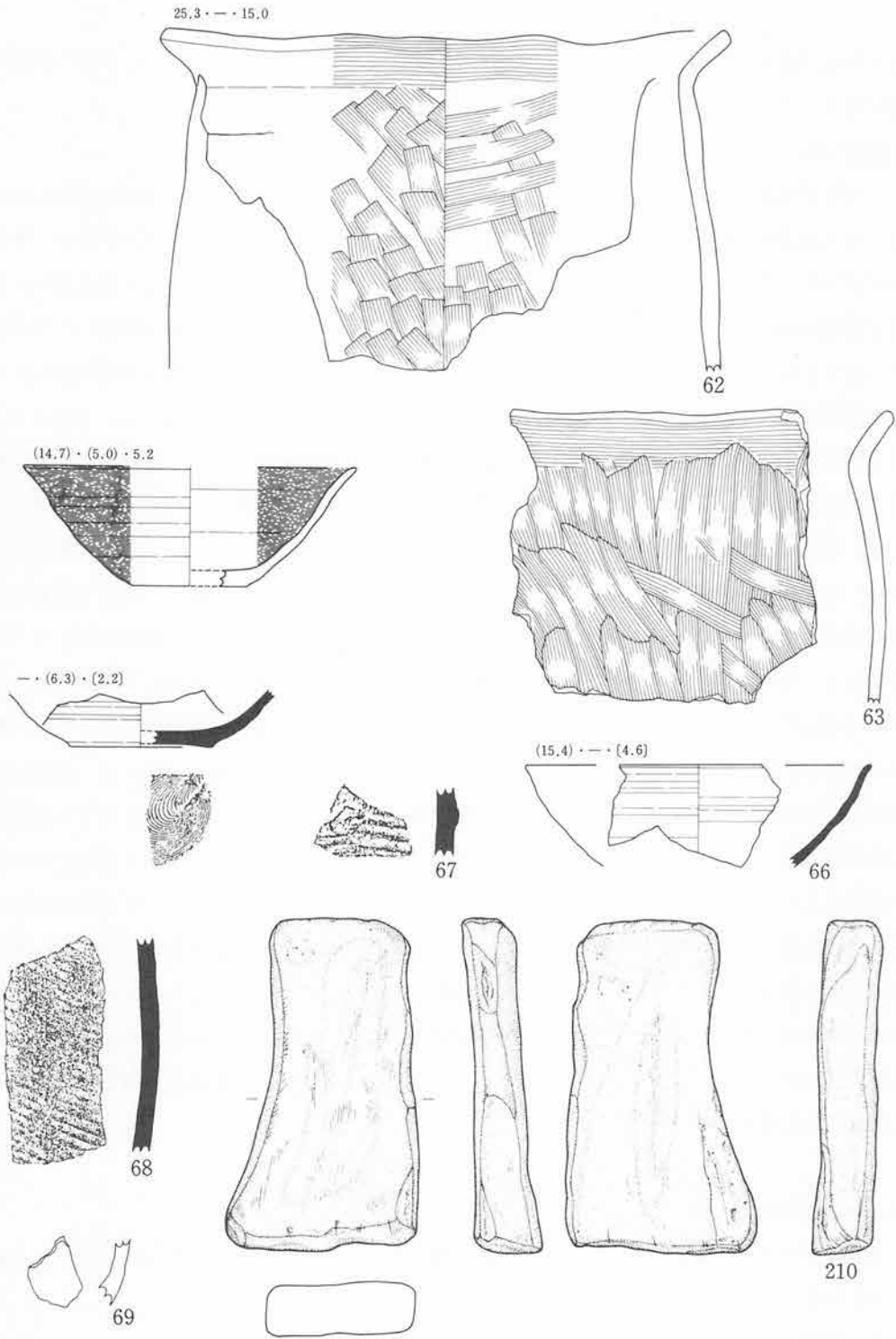


60



61

第49图 IV A - 2 住居跡内出土遺物(1)



第50图 IV A - 2 住居跡内出土遺物(2)

は 1.8 m、壁との間は約 2 m である。また IV A-55ピットと IV A-56ピットは住居跡の西壁の延長線上にのる。IV A-55ピットは南壁から 50cm の所に位置する。

遺物 (第49、50図、写真図版33)

カマド及び煙道部から出土したのは 56~58、61~63、66、110 の 8 点、床面から出土したのは 64 の 1 点でその他は埋土内から出土した。56は所謂括れを有し体部から区画されるような口縁部はなく、体部が直立し口唇部に至る。体下半を欠くため詳細は不明であるが甕と思われる。体上端部は 3 cm ほどの幅で一部を残して帯状に剥落している。剥落した部分には浅い 3 本の平行沈線がまわっている。同所の内側も一部剥落している所がある。そこは幾分外側に削がれるように薄くなっており、化粧粘土を貼り付けて内壁が直立する形に整形している。すなわち、体上端部(口縁部に相当する部分)は内外とも化粧粘土を貼り付けて整形している。化粧土の厚さは器表面で 1~2 mm 程度、内側は最大数ミリである。器面は内外ともへラナデ調整をしている。色調は赤褐色で焼きは良好である。全体に煤が付着している。57は短い頸部が緩く外反する。全体を横ナデした後、縦位にへラナデ調整を加えている。色調は褐色、焼きも良好である。全体に煤が付着しているが、底部ほど多い。58は粗砂が多い。調整は口縁部は横ナデ、体部は縦位、内側は横位にへラナデ調整をしているが、雑である。59は口縁部は非常に短く、くの字に外反する。60は緩く外反する口縁部破片である。61は小型の甕の底部である。62は口縁部がくの字に外反し、体部は膨みをもたない。口縁部には内外とも残滓が付着する。調整は雑である。暗赤褐色を呈する。63は胎土、器面調整等は他と同様である。口縁部より下の内面には残滓がほぼ全面に付着している。64は内外黒色処理の坏で、底部は回転糸切り調整である。内面は底面のみ粗い再調整がなされる。65~68は須恵器で、65、66は坏、67、68は甕の破片である。65の底部は回転糸切り無調整である。65と66は同一個体の可能性がある。67、68は同一個体と思われる。器面には平行叩き目文がみられるが、内面に当て具痕はみられない。69はミニチュア土器の体部片である。器面は丁寧なミガキがかけられる。210は砥石で上下端を除く4面が使用される。主として平らな物を砥いでいるが、棒状のような幅の狭い物も砥いでいる。石質は玻璃質流紋岩である。

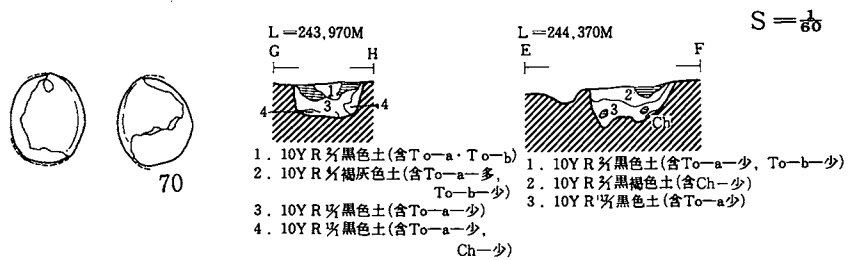
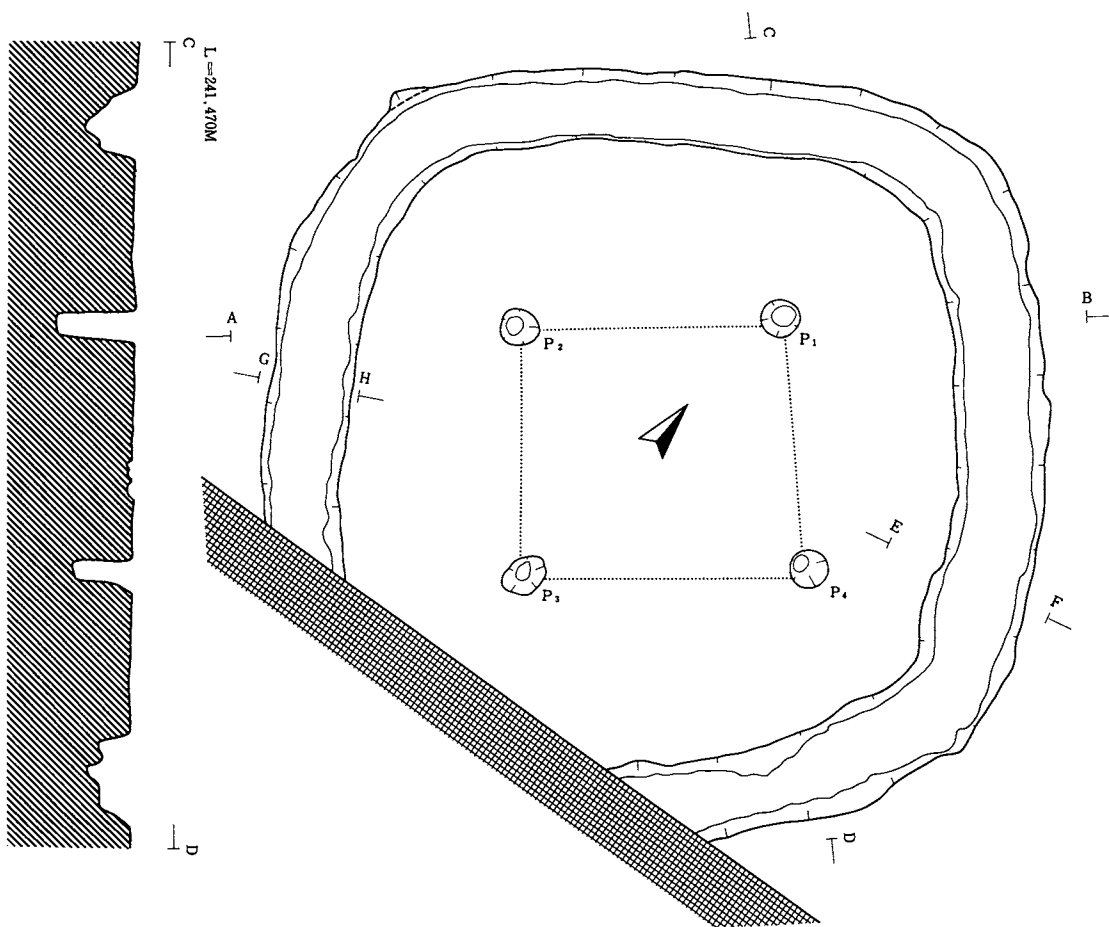
〔2〕掘立柱建物跡

本遺構は所謂方形周溝によって区画された内部に 4 本の柱穴跡がみられたものである。1棟のみである。

(1) 周溝を有する掘立柱建物跡

III A - 301 掘立柱建物跡

溝の一部は調査区外にのびるため未調査である。



第51图：ⅢA—301掘立柱建物跡及び出土遺物

遺構（第51図、写真図版21）

〔位置〕尾根の脚部に近い緩斜面に占地し、ⅢA-1住居跡の南約10mに位置する。

〔重複〕本遺構は畑跡の畝間と重複し畝間によって切られている。

〔埋土〕溝及び柱穴の埋土は黒色土に十和田a降下火山灰が粉状及びブロック状となって混入する。

〔平面形・規模〕溝は一辺が6mの隅丸方形である。溝の幅は60～70cm、深さは32～35cmである。各柱穴の規模は図版内に示したとおりであるが、その平均値は開口部径34.8cm、深さ47.7cmである。柱間は $P_1 - P_2$ が210cm、 $P_2 - P_3$ が200cm、 $P_2 - P_3$ が215cm、 $P_3 - P_4$ が210cmである。したがって斜面方向が10cm程長い、ほぼ正方形の配置である。

〔溝〕溝の底部には鋤先状の工具痕が明瞭に認められる。工具痕は三列に並び、右回り（時計回り）に掘られたものである。溝は掘り残している所はない。

〔柱〕柱穴には柱当りが見られず、また、溝跡は畑地跡によって切られること等から柱は抜きとられた可能性がある。また、溝によって区画された内部は柱穴以外は掘り込みや、硬く踏み固められた所はなかった。

遺物（第51図、写真図版34）

70の土玉1点が周溝内から出土した。断面形はやや長円形で最大直径2.5cmである。粘土塊を丸め、最後に厚さ1mm程の化粧土を全体に貼付したものである。化粧土は半分以上が剥落している。孔はない。重さは7gである。

(2) 掘立柱建物跡

ⅢA区に掘立柱2棟が検出されたが、規模、方向ともほぼ同じである。

ⅢA-302 掘立柱建物跡

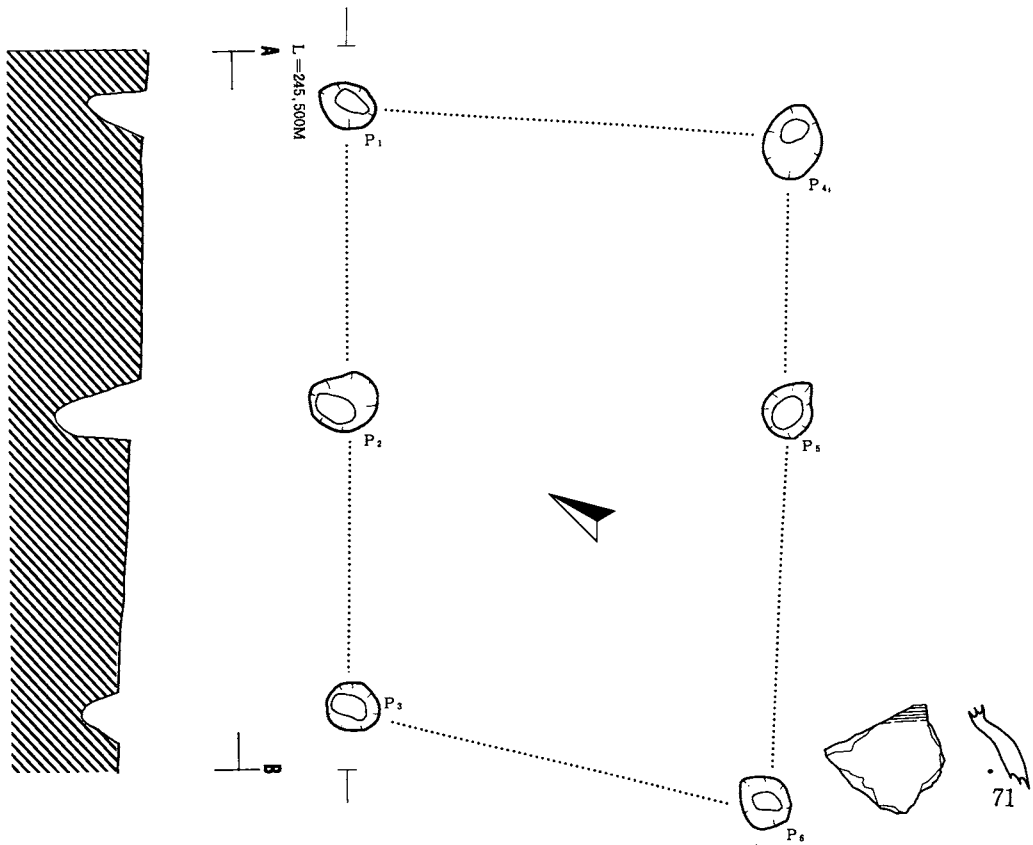
遺構（第52図、写真図版22）

〔位置〕尾根の脚部に近い緩斜面に立地し、北4mでⅢA-1住居跡に、南東4.5mでⅢA-301掘立柱建物跡に接する。

〔平面形・規模〕柱配置は1間×2間、平面形は台形状である。梁行2.3m、桁行3.2mである。

〔柱穴〕柱穴の規模は図版内に示した付表のとおりである。柱間は $P_1 - P_2$ が1.6m、 $P_2 - P_3$ も1.6m、 $P_4 - P_5$ は1.5m、 $P_5 - P_6$ が2.1mである。また、 $P_1 - P_4$ 、 $P_2 - P_5$ 、 $P_3 - P_6$ はすべて2.3mである。埋土は P_5 を除いてすべて黒色土に中振浮石と思われる褐色のパミスと十和田a降下火山灰が粉状及び小ブロック状で混入する。特に P_6 には十和田a降下火山灰が多量に混入していた。 P_6 は柱穴の上部に硬い焼土が形成され、下位からは炭化物が得られた。焼土の上には十和田a降下火山灰と黒色土の混土がのる。掘り方はなく打ち込み式と思われる。

〔床〕炉跡や特に硬い所はない。床相当面は整地されていないため緩やかな傾斜となっている。



第52図 III A - 302 掘立柱建物跡及び出土遺物

遺物 (第52図、写真図版34)

71がP₄の埋土中位から出土する。口縁部直下の体部片である。器表面は丁寧に研磨されるが内部は調整されず、凹凸が激しい。壺状のミニチュア土器と思われる。

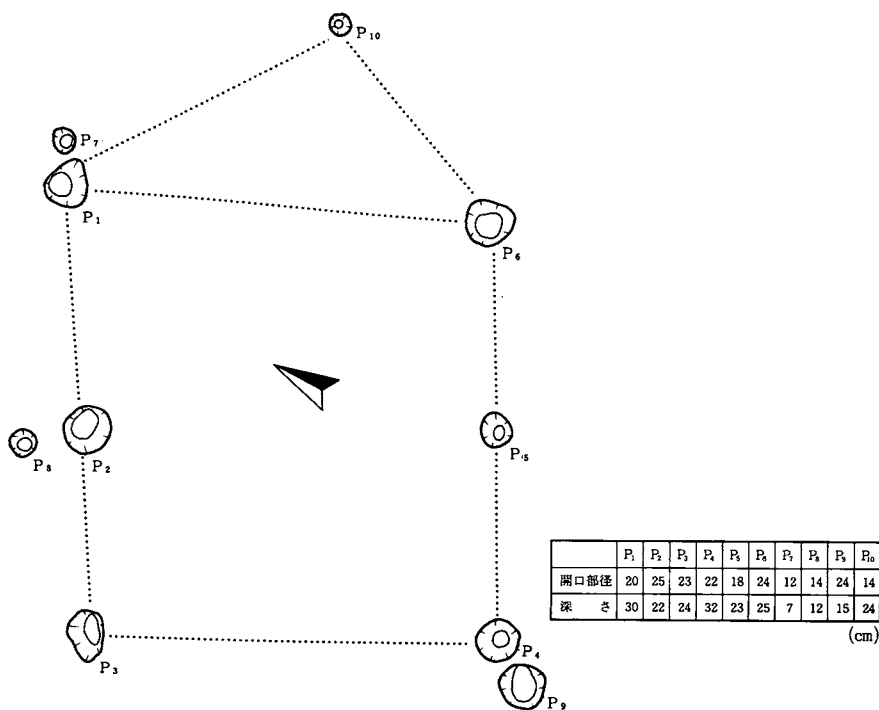
III A - 303 掘立柱建物跡

遺構 (第53図、写真図版22)

〔位置〕 緩斜面の中位に立地し、北8mでII A - 1住居跡に接する。

〔平面形・規模〕 柱配置は1間×2間で平面形は長方形である。梁行2.2m、桁行2.5mである。

〔柱穴〕 支柱穴 (P₁ ~ P₆) のほかに副穴 (補助柱穴) (P₇ ~ P₁₀) が検出される。いずれの柱穴の埋土も黒色土に十和田 a 降下火山灰と中礫浮石が混入する。各柱穴の規模は図版の中の付表に示したとおりである。柱間はP₁ - P₂ は1.35m、P₂ - P₃ は1.1m、P₄ - P₅ とP₅ - P₆ はともに1.15m、P₁ - P₆ は2.25m、P₂ - P₅ とP₃ - P₄ はともに2.2mである。P₁ とP₂ には補助杭と思



第53図 III A - 303 掘立柱建物跡

われる小穴がみられるが、P₉はP₄の刺し替えなのか補助柱なのかは不明である。また、P₁とP₆の中間でやや外側にずれた所に小穴が1基みられる。

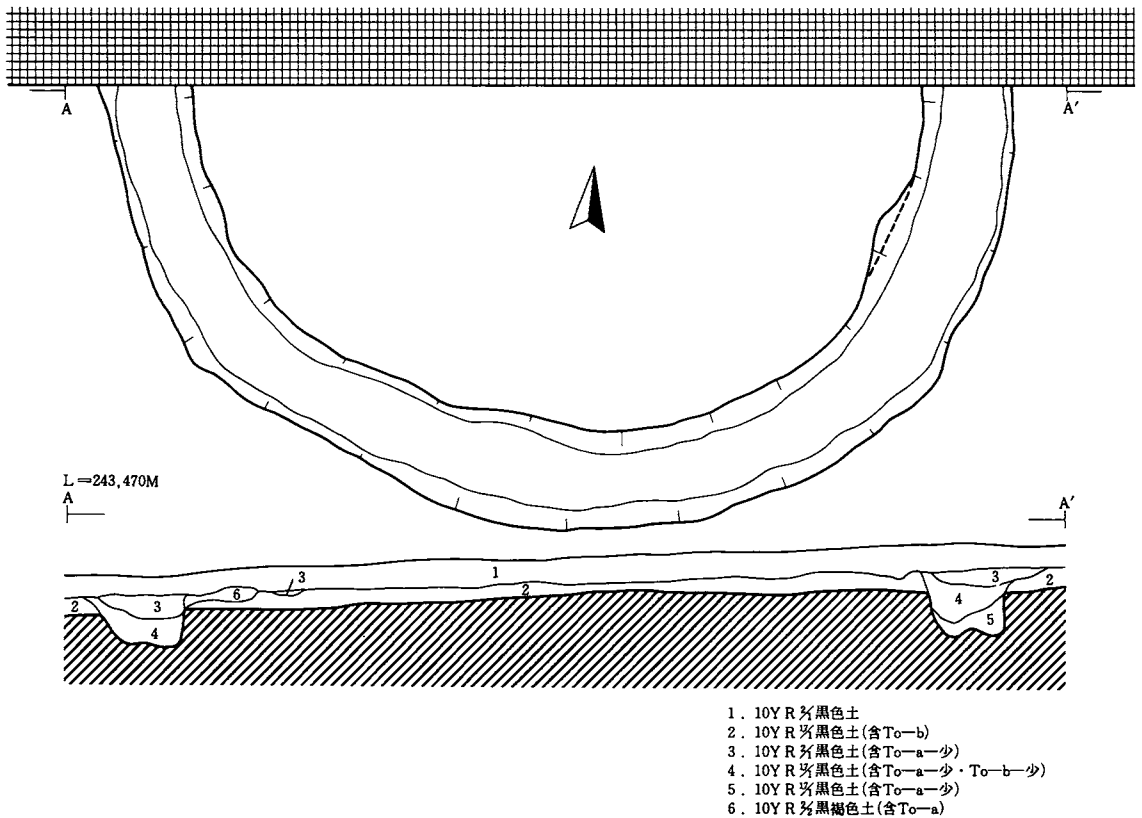
〔床〕 整地の跡や特に硬い所、焼土などは検出されない。床相当面は緩やかな傾斜となっている。

〔3〕 溝跡

溝跡は2箇所検出された。円形周溝跡（II A - 201 溝跡）と用水路跡（III A - 201 溝跡）である。

II A - 201 溝跡（第54図、写真図版24）

本遺構は北半が調査区外にのびるため、遺構の半分は未調査である。遺構は緩斜面の下位に位置し、西5mでII A - 1住居跡に接する。また、畑地跡と重複し、畑地跡によって切られる。平面形は円形で、規模は直径4.9mである。溝の幅は45~55cm、深さは30~35cmである。溝の埋土は2層に分かれ、上位には黒色土に十和田a降下火山灰が粉状及び小ブロック状となって混入

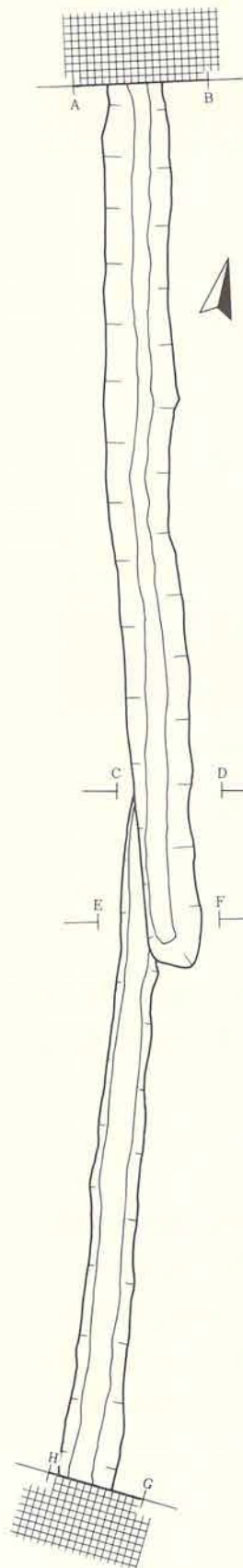


第54図 II A - 201 溝跡

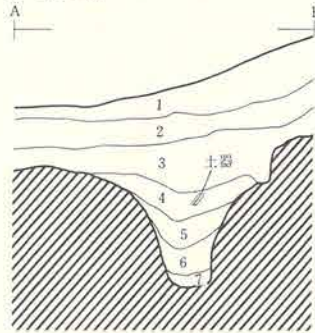
し、下位は中振浮石の崩壊土と黒色土との混土である。溝の底面には鋤先状の工具痕が2列に並ぶ。一つの工具痕は幅16cm、深さ6～8cmで先端部は丸味を帯びる。この溝は右回りに掘ったものである。溝によって区画された内部には掘り込み等の痕跡はない。

III A - 201 溝跡 (第55図、写真図版23)

本遺構は尾根の脚部に沿って北から南に引かれた用水路跡である。本遺構は現農道の道端に沿うかたちで検出された。そのため埋土の最上位は大部分、後世の攪乱を部分的に受けている。したがって平安時代の畑地跡と重複しているにもかかわらず、全面に渡って明瞭な先後関係を示すにはいたっていない。断面観察を試みた所は本遺構が畑の畝間跡を切っているように見られるが、本遺構の南側の溝跡は畝間の検出面を下げて検出したものであること、攪乱を受けていない本遺構の埋土内からは土師器、鉄滓、一箇所からだけはあるが十和田 a 降下火山灰の小ブロックが出土し、近現代の遺物である寛永通寶とロープはすべて攪乱による部分からのみ



L = 249,100M



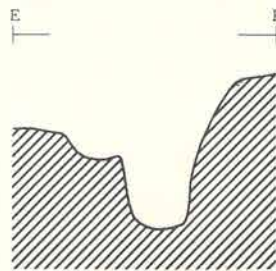
1. 10Y R 弱黒褐色土(含バミスー少・Cー少)
2. 10Y R 弱黒褐色土(含バミスー少・Toーbー少)
3. 10Y R 弱黒色土(含バミスー少・Toーbー少)
4. 10Y R 弱黒色土(含バミスー少・Toーbー少)
5. 10Y R 弱黒色土
6. 10Y R 弱黒褐色土~10Y R 弱暗褐色土
7. 10Y R 弱黒色砂質土(含バミス)

L = 248,200M

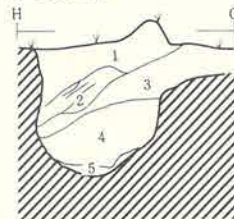


6. 10Y R 弱黒色土
7. 10Y R 弱黒色土
8. 10Y R 弱黒褐色土(含Nb・Ch)

L = 245,200M



L = 246,700M



1. 10Y R 弱黒褐色土
2. 10Y R 弱黒褐色土
3. 10Y R 弱黒褐色土(含バミスー少)
4. 10Y R 弱黒褐色土(含バミスー少)
5. 10Y R 弱暗褐色土

平面図 S = $\frac{1}{80}$
断面図 S = $\frac{1}{40}$

第55図 III A - 201 溝跡

出土したこと、南側の畝間は本遺構を境として切られること等から、本遺構は平安時代のものと考えたものである。埋土は締まりのよい暗褐色土を上位とし、その下に砂層（5～10cm）及び砂を多量に含む黒色土が堆積する。これは常時水が流れていたことを示している。本遺構は調査区の中央付近で付けかえられている。便宜上北側の溝を北溝、南側の溝を南溝と呼ぶことにする。北溝の勾配は約6度、南溝の勾配は約3度で、北溝の勾配はかなり急である。この用水路の構造は北溝を流れてきた水が溝の末端に至ると溜って水位を増し、南溝にオーバーフローして南溝に流れていくように作られている。溝幅は上部55～70cm、底部20cm、深さ50cmである。ただし、南溝は初めは10cmほどの深さであるが南下するにつれて深くなっていく。

〔4〕ピット

検出されたピットはその形状から3種類に分類される。すなわち皿状ピット、播鉢状ピット、柱穴状ピットである。検出された各遺構をこの3種類に分類すると次のようになる。

- ・皿状ピット……ⅢA-58ピット、ⅣA-58ピット 計2基
- ・播鉢状ピット……ⅢA-51ピット、ⅣA-51～53ピット 計4基
- ・柱穴状ピット……ⅡA-51～61ピット、ⅡB-51・52ピット、ⅢA-52～57ピット、ⅢA-59ピット、ⅣA-54～57ピット 計24基

これらのうち皿状ピット2基とⅢA-56・57ピット、ⅣA-55～57ピットの5基は住居跡の項で触れたため、本項では割愛することとする。

(1) 播鉢状ピット

ⅢA-51ピット

遺構（第55図、写真図版24）

〔位置〕緩斜面の下位に位置し、東2mでⅢA-303掘立柱建物跡に接する。

〔埋土〕埋土の大半を占める上～中位は十和田a降下火山灰が混入する黒褐色土である。下位は中振浮石が混入し、炭・焼土が含まれる。

〔形状・規模〕開口部は隅丸方形状、断面形は変形した播鉢状である。開口部径105～115cm、底部径25～35cm、深さ35cmである。

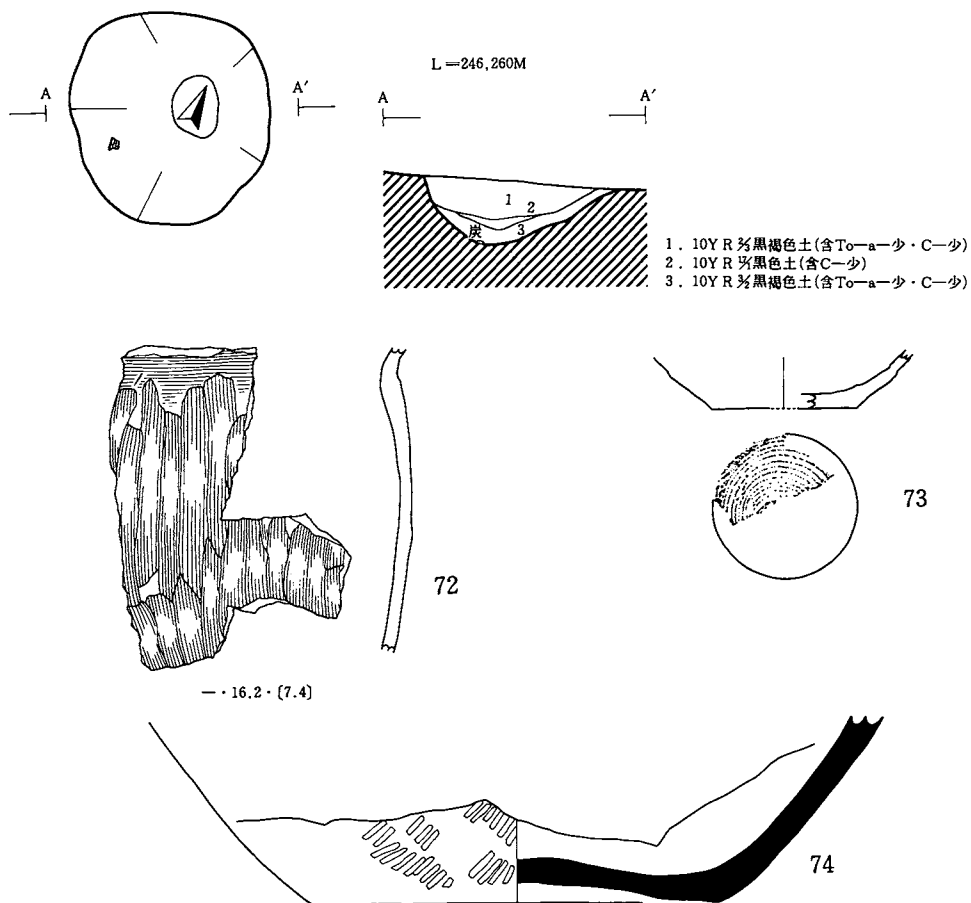
〔壁〕斜面上位側は湾曲しながらも急激に立ち上がるが、下位側は著しく開く。

〔底〕やや凹凸があり一部には淡い焼土が形成される。底部直上には炭化物、草木灰、土器片等がある。

遺物（第56図、写真図版34）

すべて埋土中～下位から出土したものである。72は内面を黒色処理した甕で、器面調整や胎土などは他の甕と同様である。煤が器表面に付着している。73はあかやき土器の坏である。色

調は明赤褐色で焼きも良好である。74は須恵器の大甕の底部である。胎土には7～8mmもの礫が混入し、良好とはいえない。器表面には平行叩き目文がみられる。内部は横ナデの調整で当て具痕はみられない。



第56図 III A-51ピット及び出土遺物

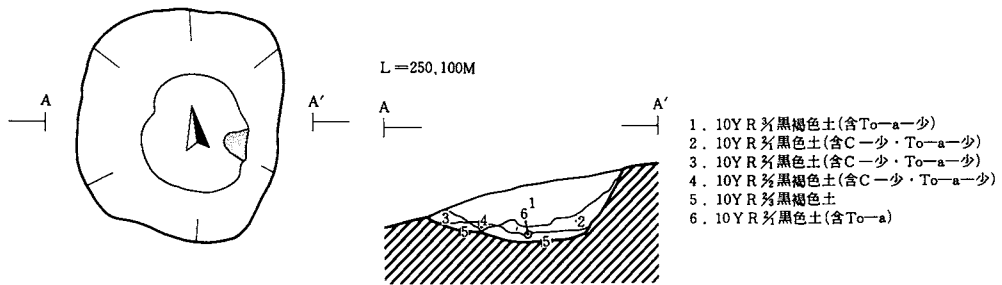
IV A-51ピット (第57図、写真図版24)

〔位置〕尾根の脚部付近に位置し、南6mでIV A-1住居跡に接する。標高は同住居とほぼ同じである。

〔埋土〕埋土上～中位は若干の黒色土がはいるが大部分が十和田a降下火山灰である。その下には黒褐色土と草木灰、焼土、炭、十和田a降下火山灰などが薄く堆積する。

〔形状・規模〕開口部は隅丸方形、断面形は変形した楕円状である。開口部径110～120cm、底部径55～60cm、深さ30cmである。

〔壁〕斜面上位側は急な立ち上がりとなるが、下位側は大きく開き、壁というより底部がなだ



らかに上がる。

第57図 IV A-51ピット

〔底部〕 若干の凹凸があり、一部に焼土が形成されている。

IV A-52ピット (第58図)

〔位置〕 尾根の脚部と緩斜面の傾斜変換点付近に位置し、東11mでIV A-51ピットに達する。

〔重複〕 IV A-53ピットに切られる。

〔埋土〕 IV A-53ピットを調査中に判明したものであり、正確な埋土の断面は不明である。上位は黒褐色～暗褐色土の混土であり、下位に十和田 a 降下火山灰が薄く堆積する。

〔平面形・規模〕 平面形は隅丸方形状を呈していたと思われる。遺構確認面での規模は1辺が95cm、深さ10cmで皿状を呈する。

〔底部〕 平坦で若干斜面に沿って斜行する。西壁際に若干の凹みがみられる。

IV A-53ピット

遺構 (第58図)

〔位置〕 IV A-52ピットと重複し、南側は調査区外へのびる。

〔重複〕 IV A-52ピットを切る。

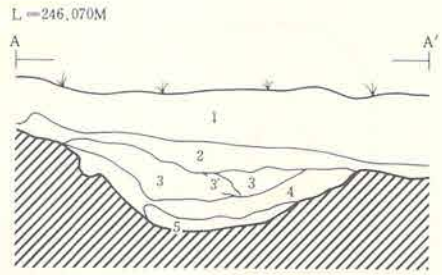
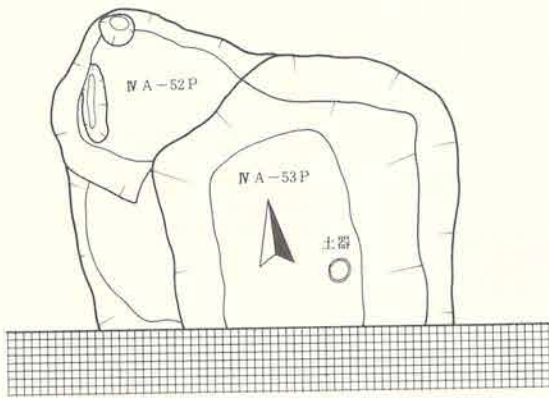
〔埋土〕 埋土の最上位に白頭山火山灰が厚く堆積し、その下部には十和田 a 降下火山灰と中振浮石の混土が堆積する。底部は草木灰・焼土・若干の炭化物等で覆われる。

〔形状・規模〕 一部未調査のため不明な点があるが、平面形は方形ないし長方形、断面形はピーカー状である。一辺が1.5m、深さは40cmである。

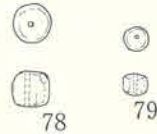
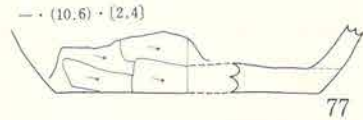
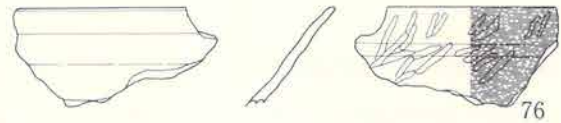
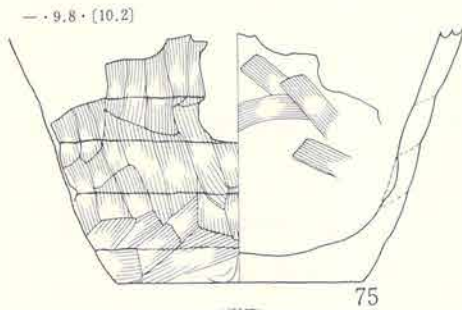
〔底部〕 底部は水平かつ平坦である。

遺物 (第58図、写真図版34)

75と77～79の4点が底部、76は埋土内から出土した。75は巻き上げ痕が明瞭に残る甕の体下半部である。器面の調整痕はかるくヘラナデしたもので、わずかにその痕跡が看取される程度



1. 10Y R 多黒褐色土(含バミスー少・To-bー少)
2. 10Y R 多黒色土-10Y R 多黒褐色土(含To-bー少)
3. 10Y R 多黒褐色土(含H)
4. 10Y R 多黒褐色土(含To-aー少)
5. 10Y R 多褐色土(含C-多)



$$S = \frac{1}{2} (78 \cdot 79)$$

第58図 IV A-52・53ピット及び出土遺物

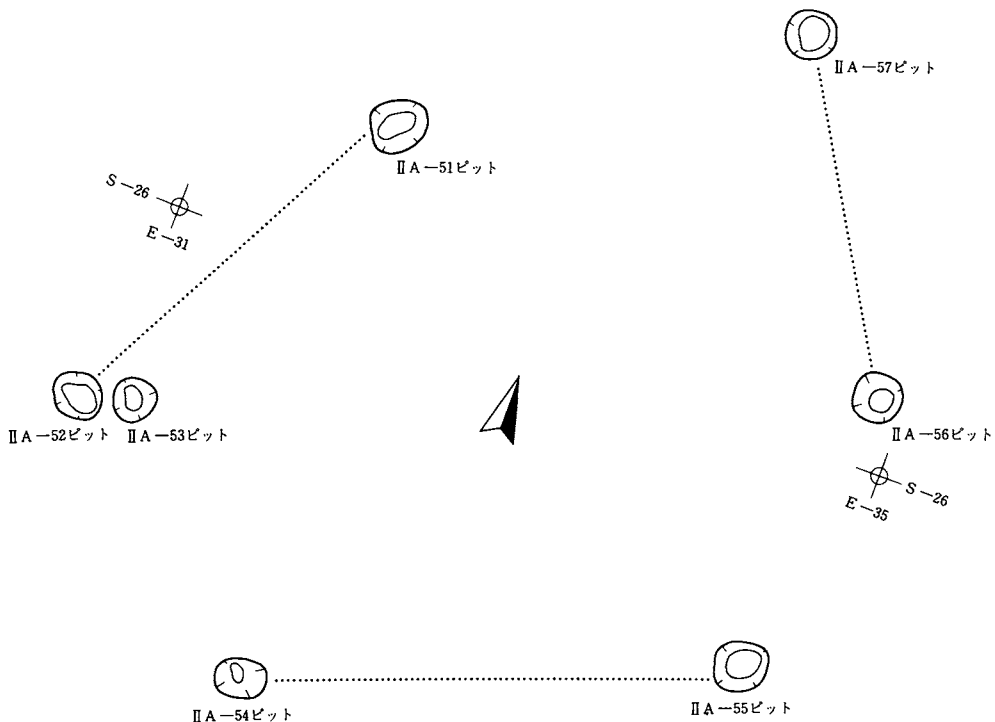
である。内面は凹凸が激しい。底部は木葉痕で広葉樹の葉を使用している。76は内面を黒色処理した坏の破片である。器表面に黒色の残滓が付着する。77は礫を含んだ甕の底部片である。78、79は土玉である。ともに円筒状をしている。中央に1孔をあけてから焼いたものである。法量は78は直径1.1cm、孔の直径0.1cm強、重さ1g、79は直径0.7cm、厚さ0.6cm、孔の直径0.1cm弱、重さ0.3gである。

(2) 柱穴状ピット

本項で扱う柱穴状ピットはその埋土に十和田 a 降下火山灰が混入していたものだけを取り上げたものである。一部のピット（II A-60ピット、III A-59ピット、IV A-54ピット）は十和田 a 降下火山灰が多量に、しかも底部まで混入していたが、それ以外のピットは埋土の中～上位に小ブロック状となって混入していた。また、下位は中礫浮石を含む黒褐色土であり、特殊な土や埋積の仕方をするものはない。したがって個々の記述に際して、埋土については割愛する。

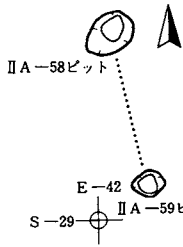
II A-51～57ピット群（第59図）

II A-51～57ピットはE-30～E-35、S-24～S-19の区画内（25cm²）に集中する7ピットである。これらを同時存在とみれば、歪つな多角形を描く配置となるが、検出状況及びピットの深さからみれば2個1対の対応関係が成立するとみることが妥当と思われる。即ち、①II A-51ピットとII A-52ピットないしII A-53ピット、②II A-54ピットとII A-55ピット、③II A-56ピットとII A-57ピットである。①は3ピットとも深さ15cm前後である。II A-52ピットとII A-53ピットは刺し替えの可能性もある。これらのピットとII A-51ピットとの間は約2 mである。②はどちらも深さ22cmで、その間は2.7 mである。③はどちらも深さ33cm程で、検出した時点で最も明瞭な形をとったピットである。地山と埋土も明瞭に分かれ開口部の



第59図 II A-51～57ピット群

崩れもない。ピット間は2 mである。



II A - 58・59ピット (第60図)

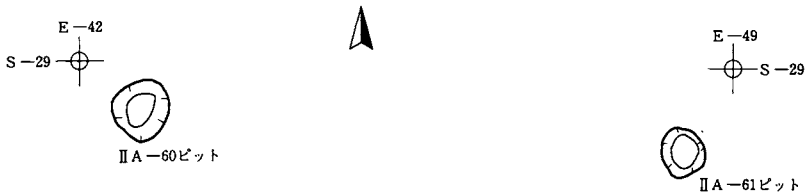
II A - 58ピットは開口部径20×30cm、深さ15cm、II A - 59ピットは開口部径18cm、深さ10cmである。このピットは開口部は広がっているが全体として径が5～8cmで尖端がとがり杭跡と思われる。両ピット間は約80cmである。

第60図

II A - 58・59ピット

II A - 60・61ピット (第61図)

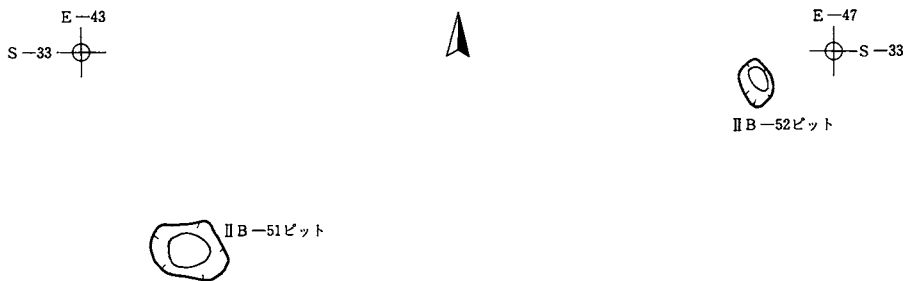
II A - 60ピットはII A - 59ピットの南0.8 mに位置している。開口部径が60cm程で、深さは11cm程である。埋土は十和田 a 降下火山灰が粉状に混入するためやや白っぽい黒色土の単層である。II A - 61ピットは開口部径が50cm、深さは22cmである。即ち後者は前者に比し平面形ではひとまわり小さいが、深さは倍となる。埋土は全く同じである。この両ピット間は5.8 mであり、対となるような位置関係ではない。



第61図 II A - 60・61ピット

II B - 51・52ピット (第62図)

II B - 51ピットは深さが30cmもあり、柱ないし太い杭跡のようなピットである。II B - 52ピットは開口部径も10cm程度、深さは11cmで杭跡と思われる。両ピットとも近くに遺構はなく、単独の遺構である。

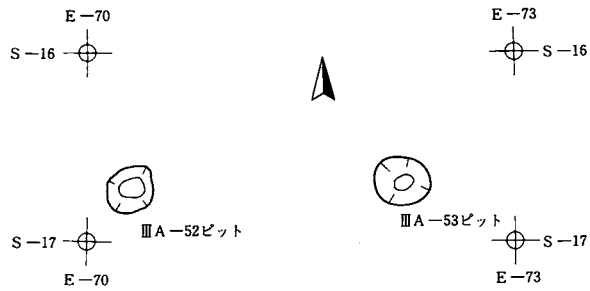


第62図 II B - 51・52ピット

Ⅲ A - 52・53ピット (第63図)

Ⅲ A - 52ピットは開口部径25cm弱、深さ25cm、Ⅲ A - 53ピットは開口部径25cm強、深さ22cmである。両ピット間は2.2mである。どちらも表土を除去した段階で暗褐色土の地山に十和田a 降下火山灰が混入した黒色土

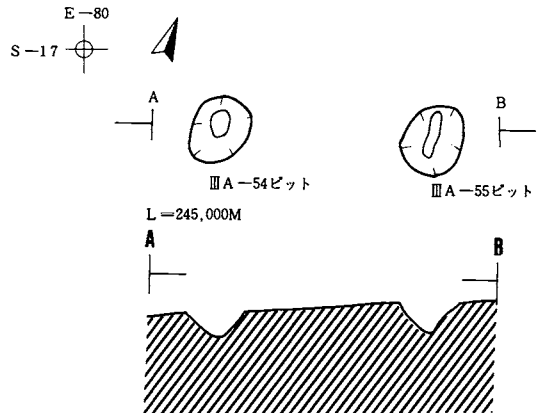
として検出したものであり、規模、検出状況、位置関係からみて対となる可能性が強い。



第63図 Ⅲ A - 52・53ピット

Ⅲ A - 54・55ピット (第64図)

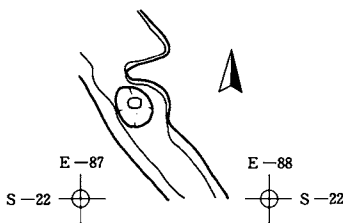
Ⅲ A - 54ピットは開口部径30×40cm、深さ17cm、Ⅲ A - 55ピットも開口部径30×40cm、深さ23cmで、どちらも底部は細くなる。両ピット間は1.1mである。どちらのピットも開口部、底部ともに南北に長くなっている。この両ピットもⅢ A - 52、53ピットと同様の理由で対になるものと思われる。



第64図 Ⅲ A - 54・55ピット

Ⅲ A - 59ピット、Ⅳ A - 54ピット (第65、66図)

Ⅲ A - 59ピットは開口部径20cm、深さ22cm、Ⅳ A - 54ピットは開口部径28cm、深さ19cmである。両ピットとも単独で、畑の畝の端に位置している。



第65図 Ⅲ A - 59ピット



第66図 Ⅳ A - 54ピット

〔5〕畑地跡(第67～69図、写真図版25～26)

畑地跡は尾根の脚部付近とそこから西へ続く緩斜面から検出された。現状は尾根の西側斜面としてなだらかになっているが、平安時代中葉は尾根から脚部までの急斜面とそれに続く緩斜面とでは勾配が著しく異なっており尾根の脚部はかなり明瞭である。従って脚部付近は当該時期以後雨水等によって尾根から運ばれた土が厚く堆積したのに対し、緩斜面はむしろ西側の沢に向かって流失している。この堆積と流失は当該地点の微地形に大きく左右されている。すなわち畑地跡の遺構が比較的良好に保存されていたⅣA区は尾根の脚部であり、東側は尾根、北側はE-75、S-0付近を頂上とする微高地となっており、あたかも南西に向かって緩やかに広がる小さな谷間状となっている。したがってその谷頭に近い所ほど土壌の堆積が顕著であり、谷頭から離れるにしたがって堆積土は薄くなる。これがⅢA区の西側で畑地跡の遺存状態が不良となる理由である。また、ⅡA区は微高地から続く斜面であり、ⅢA区の西側と同様の状態となっている。その結果、現表土から検出面までの深さはⅣA区では最大100cm、最小25cmであるのに対し、ⅡA区やⅢA区では概ね25～30cmである。よって最も遺存状態の良かったⅣA区の畑地跡を中心に以下を述べることにする。

1層は尾根から運ばれ堆積した層で厚さ0.5～1cmの砂層が黒褐色土中に何層も形成されている(基本層序Ⅰ層相当)。この層は層厚不定で、最大90cm、最小20cmである。2層は十和田b降下火山灰を含んだ黒色土で1層よりは締まっている(基本層序Ⅱ層相当)。ⅣA区東側(尾根側)では薄くなり尾根の中位以上では流失している。ⅢA区及びその以西では部分的に厚さを増す所みられるが概ね5～10cmである。畝間はこの層を掘り込んでいるため、畝として盛り上げられた土の一部は流れて畝間の埋土の下位に堆積し、その上に十和田a降下火山灰が堆積する。更にその上に盛り上げられた土が流れて覆ったものと考えられる。したがって十和田b降下火山灰は十和田a降下火山灰を狭んで上下から検出される。2層の下の地山は5層の黒褐色土で下位ほど中振浮石を多く含み、次の6層である中振浮石層(基本層序Ⅳ層)へ漸移する(基本層序Ⅲ層)。畝間はこの2層(Ⅱ層)から掘り込まれ6層(Ⅵ層)の上位に達する。検出された畝間の埋土は上位の十和田a降下火山灰(3層)と下位の暗褐色土(4層)から成るが、4層には十和田b降下火山灰や中振浮石起源と思われる粉状の黄褐色パミスが混入する。また3層と4層には草ないし柴状の小さな炭化物が比較的多量に、検出された畝間の全域から検出された。また、このような炭化物は畑地跡以外からは出土していない。

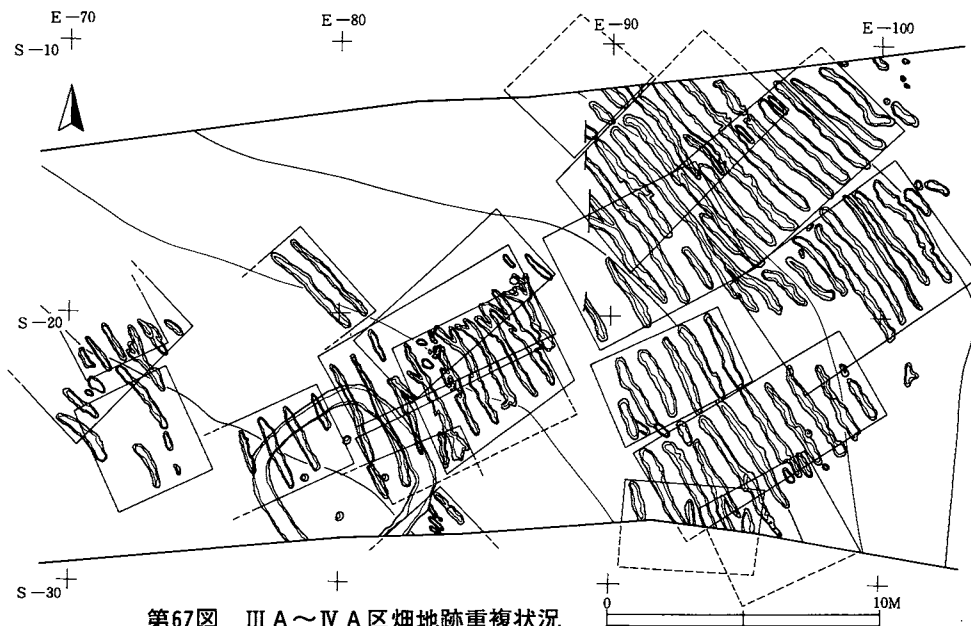
十和田a降下火山灰の上に再堆積した黒色土を除去すると黒褐色土の地山に十和田a降下火山灰の灰白色土が筋状に整然と列をなして検出された。表土の厚さと勾配等の関係から重機による表土剥ぎを行なったが、その際、一部に掘り過ぎた所もでた。

畑はあるまとまりをもって耕やされている。このまとまりを地元では「ふで(筆)」という

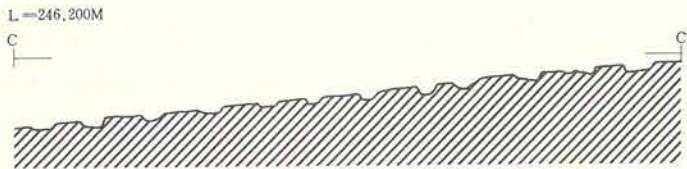
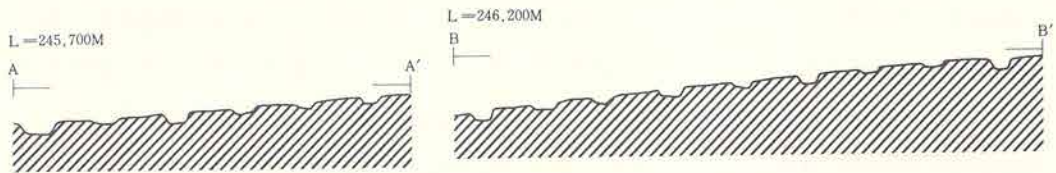
助数詞をつけて呼んでいるので、ここでもそれにしたがって呼ぶことにする。検出された畑地跡は全部で20筆であるが、重複により時期区分できるのは3時期である。各筆ごとに畝間の規模、畝間間の距離、畝間の方向などは一定しており、各筆の単位は比較的容易である。ただし、畑は何度もくり返し耕作されているため、各筆とも全体が明瞭に遺存する所はない。検出時の十和田 a 降下火山灰の状況と完掘時の畝間の観察とから各筆は規模からみれば2つ（A群、B群）に分類される。即ち畝間の幅30～40cm、深さ15cm、畝間の数10～11条（7.5～8 m）、畝間間40～70cmはA群、B群ともほぼ同じであるが、畝間の長さが3～4 mのもの（A群）と、4～5 m（B群）とに分けることができる。畑は等高線に沿って耕やされているが、同じ標高ではA群はA群どうし、B群はB群どうしで並んで耕作されている。各筆は30～50cmの間隔を有している。ⅣA区とⅢA区の境で検出された畝間の一部は現在の農道を作った時に削られている。

ⅡA区で検出された畑地跡はⅣA区のそれよりは遺存状態が悪く不詳な点が多いが、畝間の規模はA群と同じで、その方向も等高線に並行するなど基本的にはⅣA区の畑地跡と同じである。しかし、E-50、S-25付近で検出された5条の畝間は等高線に直交する方向となっている。畝間の所々に小さな窪や畝間が膨らむ所、あるいは斜面なりに小さな溝を作る所がある。深さはいずれも20～25cm程度で、配置等にも何ら規則性がみられない。重複・人為的な覚乱、雨裂等が考えられるが詳細は不明である。

本遺構の栽培種に迫るためプラント・オパールによる分析を実施した。詳細は後述する資料のとおりであるが、イネ・ヒエ・アワが栽培されていた可能性がある。また、十和田 a 降下火山灰の中からモモ・オオムギ等の種子が出土しているが、これらについてはまとめの項で触れることにする。



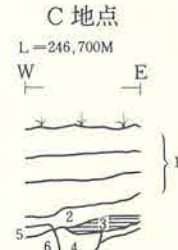
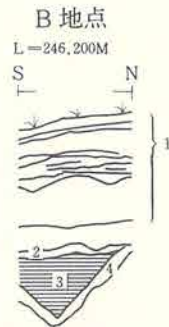
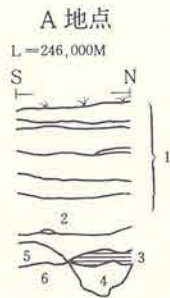
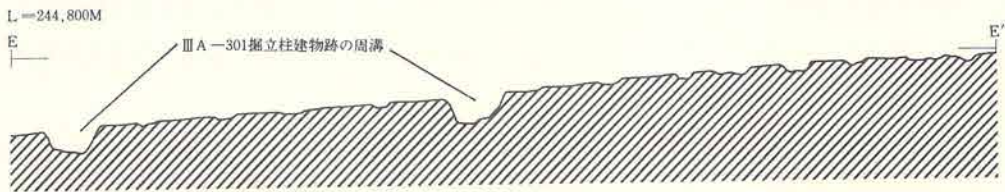
第67図 ⅢA～ⅣA区畑地跡重複状況



L=245,800M



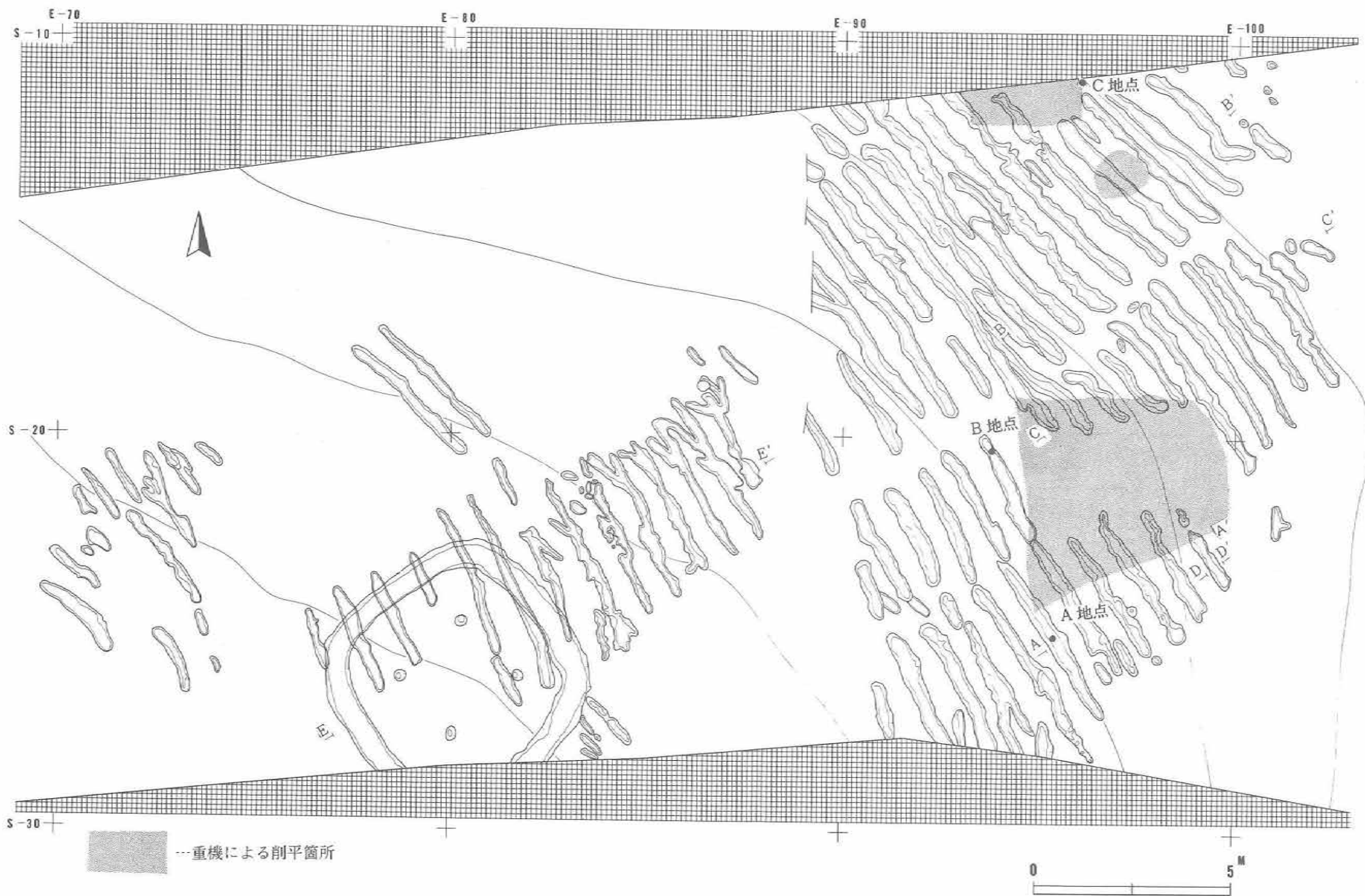
1. 10Y R 灰白色土 To-a
2. 10Y R 黑褐色土
3. 10Y R 暗褐色土(含Ch)



1. 10Y R 暗褐色土
2. 10Y R 黑褐色土(含To-b)
3. To-a
4. 10Y R 灰~黑褐色土(含Ch)
5. 10Y R 灰
6. 10Y R 灰~暗褐色土(含Ch)

S = $\frac{1}{20}$ (A~C地点断面図)

第68図 畑跡断面図及び土層断面図



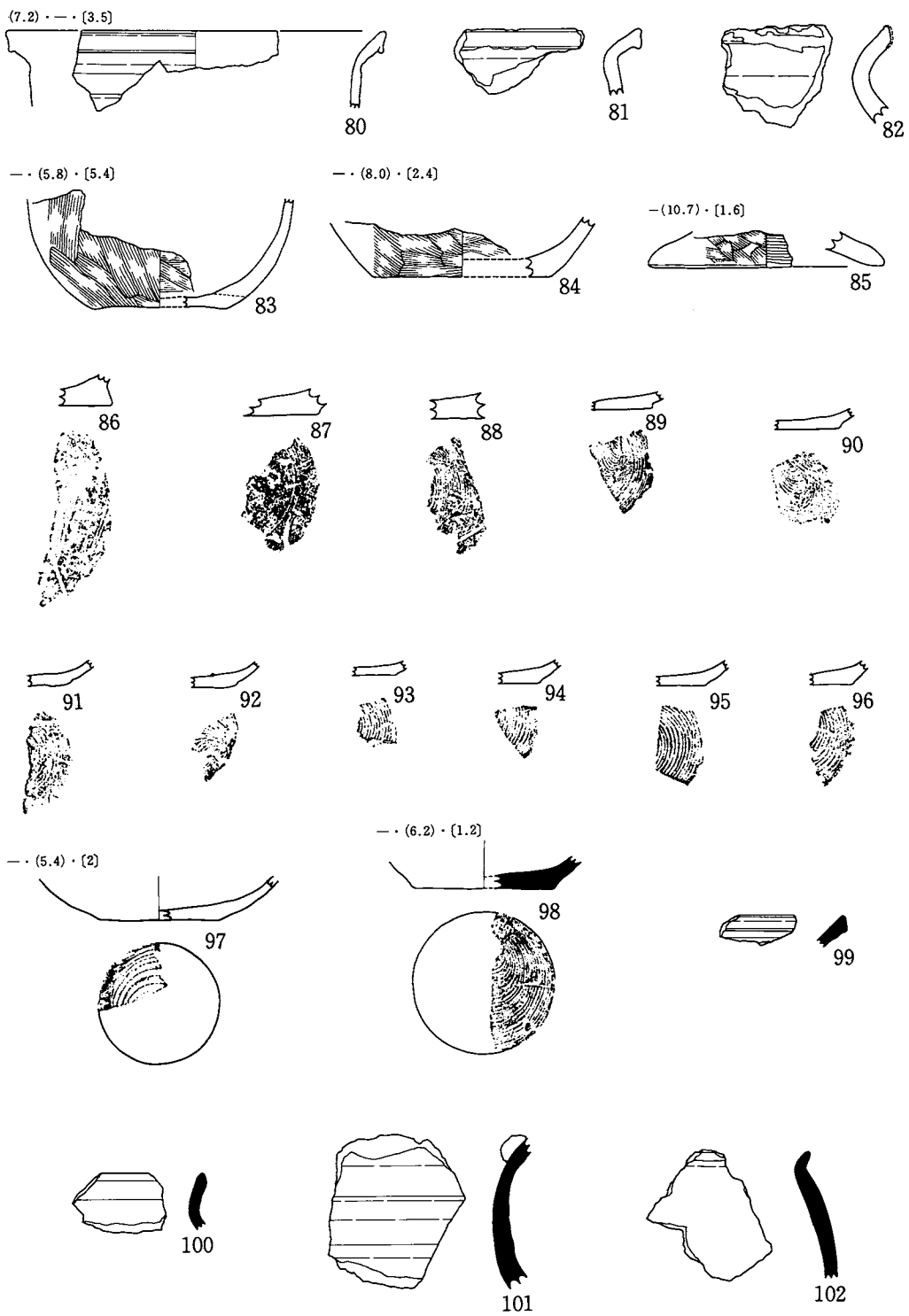
第69図 III A~IV A区畑地跡

〔6〕遺構外出土遺物（第70～71図、写真図版34～35）

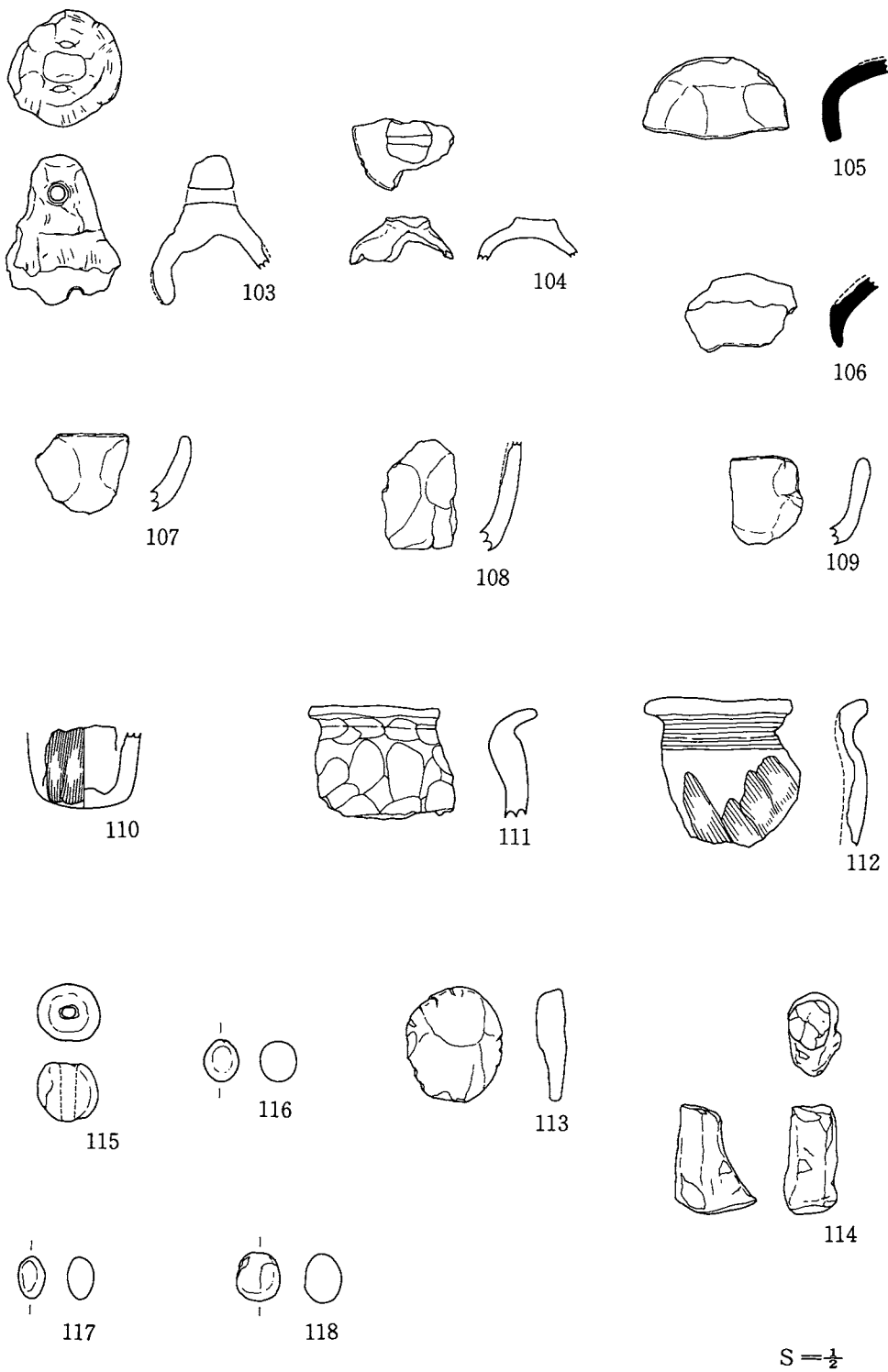
遺構外から出土した平安時代の遺物は土師器、あかやき土器、須恵器、土製品であるが、その量は少ない。出土地点はすべて尾根の西側に限られる。出土層位は88、96、101～103、105、107、108、111、115、117の10点は畑跡の十和田a降下火山灰の中ないし、平安期の遺構検出面から出土し、他の遺物は表採ないし耕作土中から出土したものである。なお、個数にして最も多く出土したのは土師器の甕の体部片であるが、それらについては割愛した。

80～82の3点はロクロ使用した土師器の甕の口縁部である。83、84は甕の体部下半ないし底部である。前者は上げ底状、後者は平底である。85は台付坏(?)の高台部と思われる。86～88は甕の底部である。86は底部に木葉痕状の圧痕がみられる。87と88は回転糸切り無調整である。89～98は回転糸切無調整の坏の底部である。93と97は内面黒色処理、98は須恵器でそれ以外は非黒色処理のあかやき土器である。99～102は須恵器の甕ないし壺の口縁部片である。99～101はロクロを使用し、102はロクロ不使用である。

103～114はミニチュア土器、115～118は土玉である。103～104は土鈴で上部に一孔があげられる。105～106は須恵器であるが同様のものと思われる。107～112は甕形のミニチュア土器、113はクッキー状の土製品である。縁辺に浅い刻みがつけられる。長径3.3cm、短径2.7cm、厚さ0.9cm、重さ4.8gである。114は土偶の足を思わせる土製品である。高さ3.1cm、底部の長さ1.7cm、最大幅1.5cm、重さ7.45gで、部分的に剥落はあるが完形品である。115～116は土玉である。115は中央に一孔があげられる。孔の断面は楕円形である。作りは粗雑である。草の茎に土をつけて玉をつくり、その後で茎を引き抜いたものである。玉はやや歪んだ円筒状である。最大幅1.9cm、重さ4.35gである。116は最も丁寧に作られた土玉でほぼ球状となっている。幅1.3cm、重さ1.5gである。117は麦粒状、118は歪んだ球状を呈する。粗雑な作りである。前者は最大径1.4cmで重さ0.65g、後者は1.5cmで重さ1.65gである。



第70図 遺構外出土遺物 (平安) (1)



第71圖 遺構外出土遺物(平安)(2)

〔7〕まとめ

はじめに平安時代に属する遺構と遺物を要約し、次に同定された種子とプラント・オパールの分析結果との関連について述べることにする。

(1) 要約

住居跡 5棟が検出されたが、ⅠA-1住、ⅡA-1住、ⅢA-1住の3棟は一部が調査区外にかかり、完掘できたのはⅣA-1住とⅣA-2住の2棟である。平面形はⅣA-1住がやや台形状に歪むが、概ね方形となると思われる。規模はⅠA-1住が最大で一辺の長さが4.4m、最小はⅡA-1住の2.8mで、概ね3~4mである。柱穴はⅢA-1住からのみ検出された。周溝はⅠA-1住、ⅡA-1住、ⅢA-1住の3棟に見られた。カマドはⅣA-1住とⅣA-2住で検出された。前者は北向きで、本体は芯材を用いずに粘土質シルトで作っている。後者は東向きで、本体は扁平な亜角礫を芯材として利用し、粘土質シルトで固めている。このような相違はみられるが、壁の中央部に設置され、煙道部は刳り貫き式であること、支脚には襖を用いていることなどの共通点がみられる。埋土はⅣA-1住とⅣA-2住は全く同じ堆積状況を示している。即ち下位から黒色土、暗褐色土となり上位には白頭山火山灰がレンズ状にやや厚い層となって堆積している。ⅡA-1住の埋土下位にも同火山灰が層状に堆積する。ⅠA-1住は埋土の上位が流失し、ⅢA-1住は遺構の南端部のみの調査であり詳細は不明である。ⅠA-1住は焼失し、ⅡA-1住もその可能性が一部に残るが他の3棟は焼失したものではない。

遺構内から出土した遺物は土器、土製品、鉄器、鉄滓、埴埴等であるが、その数は少ない。土器は内面黒色処理の坏と非黒色処理の所謂あかやき土器の坏が混在し、短い口縁部が小さく外反する土師器の襖と須恵器の坏、壺、襖が共伴する。土師器の襖は小石を多く含む雑な胎土で、ロクロを使用せず、体部は上下にヘラナデ調整、口縁部はヨコナデ調整となるものが主である。同時に口縁部から体部上半をロクロ整形したものも含まれている。住居跡以外の遺構から出土したものは土玉、土鈴等の土製品が多いが、遺構外から出土した土器を合わせても、各遺物間に時期差を認めることはできない。木器は完全に炭化した鋤状の農具と思われるものがⅠA-1住内から出土した。遺存状態が悪く詳細は不明である。鉄器は刀子と穂積み具と思われるものがⅠA-1住内から出土した。この住居跡内からは埴埴の破片と鉄滓が出土し、白い粘土のタタキもあることから野鍛冶をしていた可能性がある。

これらの住居跡はほぼ同じ方角を向き、ⅣA-1住はⅣA-2住に近い位置を占めるもののそれ以外は23mの間隔を保って一列に並ぶ。ⅡA-1住は白頭山火山灰の堆積の仕方に若干の疑問も残るが、すべての埋土や床に十和田a降下火山灰が小ブロック状で混入することや、前述したように出土遺物に時期差が認められないことなどから、これらの住居跡は同時期のものと考えられる。火山灰の堆積状況や遺物の様子から桂平遺跡(X22)という第Ⅱ期に相当し、絶対年代

としては10世紀中葉が想定される。

掘立柱建物跡 III A—302 掘と III A—303 掘はいずれも2間×1間のものである。柱間は梁行2.2mと2.3mでほぼ同じであるが、桁行は3.2mと2.5mで後者が若干短い。どちらも打ち込み式の柱で床面は掘り込まれずに斜行している。また、踏み固められた所や炉跡などもないことから上屋を有する「建物」であったかどうかは不明であるが、簡単な小屋などの可能性が考えられることから、ここでは一応掘立柱建物跡ととらえた。

III A—301 掘は周囲に幅60～70cm、深さ30cm～35cmの溝が隅丸方形状にめぐる。その溝の規模と形態からみれば従来から方形周溝と呼ばれてきた遺構に類似する。しかし、溝によって区画された内側に4基の柱穴が方形にかつ偏りなく配される。この柱穴の埋土と溝の埋土はともに黒色土に十和田 a 降下火山灰が小ブロックとなって混入するもので、全く同じである。しかも、4本柱の配置をとる掘立柱跡は本遺跡では他に類例がないため、たまたま周溝と掘立柱の遺構が重複したと考えるよりセット関係にあるととらえる方が自然であり妥当と思われる。しかし、このような遺構は筆者が知る限り本県では検出されていない。用途等も含めて今後の類例を待って検討したい。^(注1)

周溝 所謂円形周溝である。半分は調査区外にのびるため詳細は不明であるが、周溝によって区画された内側には全く掘り込み等は見られない。溝の規模や埋土等は III A—301 掘立柱建物跡にまわる周溝と同じである。また、本遺構も III A—301 掘立柱建物跡の周溝も畑の畝間によって切られている。即ち両遺構とも同時期の遺構と思われる。

水路 水路の規模は上部の幅が60～70cm、深さ50cmである。本遺構の北北西約300mに現在でも豊富な水量を有する湧水があり、本遺構もそこを給水源としていると思われる。

ピット 播鉢状ピットと呼称したピットは形が不整形であり、下部には淡い焼土が形成され、草木灰と一緒に土器片等が出土する。ゴミ焼き場等の廃棄の場としての性格を有するのかもしれない。柱穴状ピットは単独のものと2基1対とみられるものに分けられる。これらの占地には規則性がみられない。2基1対のピットは中心間の距離が平均2.1mである。

畑地跡 検出された畑地跡は整然と畝を作って耕作されたものである。しかし、畝として盛り上げられた部分は流失し、畝を作るために掘り窪められた部分（畝間）だけが遺存していた。畝間の埋土最上位には十和田 a 降下火山灰が堆積している。畑は一部は斜面に沿って耕やされているが、大部分は等高線に沿って耕やされている。どこまでが居住空間であったかという問題はありますが、少なくとも竪穴住居の際まで耕作されている所はない。そして、何度も耕作を繰り返してはいるが、同じ場所を若干角度を変えて耕作しているものであり、畑地として利用する空間は限定されている。1本の畝の規模は畝の下部（畝間と畝間の間）の幅が概ね70cm、畝の長さは4～5mのもので、10～11本の畝でひとまとまりとなっている。この畝間を覆う埋土内^(注2)

からは草の炭化物が多量に出土した。これは焼き畑農耕と同じように草を焼いて肥料として使用していたことを窺わせる。畝に当たる部分には掘り込みの跡が全く見られないことから、少くとも大根、ゴボウのような根葉が作付けされたものではない。また畝間に堆積していた十和田 a 降下火山灰の中から何点かの種子が出土した。この栽培種の問題は次の項で検討することにした。

(2) 同定された種子とプラント・オパール分析結果について

今回の調査で何点かの種子が採集され、その幾つかは属名等まで同定された。また、プラント・オパール分析も試みた。ここではこれらの資料の採集方法についてまず触れ、ついでこの二つの同定・分析の結果についてまとめることにしたい。

1. 種子の採集方法

種子を採集した所は住居跡、畑地跡、井戸跡である。住居跡は I A-1 住、II A-1 住、IV A-1 住、IV A-2 住の 4 遺構である。各遺構の中～上位の埋土は採集の対象外とし、床面を直接覆う埋土及び床、カマドの燃焼部を対象とした。埋土と床は検出した面積の半分、燃焼部は全面を採集の対象とした。畑地跡は畝間に堆積した十和田 a 降下火山灰のみを対象とした。そのため同火山灰が最も良好な状態で堆積していた 5 地点で採集を行った。採集した地点は調査区に設定した 1 m メッシュで区画された単位で、その中に含まれる畝間すべてを対象とした。住居跡と畑地跡から採集した土は水で完全に溶かした後、網の目盛が 3 mm の篩を用いて上澄み液と溶けた土とを別々に濾した。更にその上澄み液を 1 mm の篩で濾した。以上のようにして取り出した物を乾燥させ、その中から種子と思われるものを取り出した。なお、井戸跡は中～下位の埋土をその対象とした。採集された土はすでに泥の状態であったためシートに取り出して乾燥させ、直接その中から拾い上げた。この井戸跡内から出土した種子は明治時代のものと考えられるため以下では割愛する。以上のようにして得られた資料から最も遺存状態のよいもの 1～2 点ずつ抽出しその同定をバリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。したがって試料の数量にはまったく意味がない。また篩で濾したのから種子ないし種子状のものとして選別する過程と、種子ないし種子状のものから同定試料を抽出する過程で脱落した種子が存在する可能性は高い。しかし、現在作付けされている物の種子が風等の作用で混入した可能性はほとんどない。なぜなら付近に作付けされていたのは大豆がほとんどで、一部に小麦があったのみである。

2. プラント・オパール試料採取について

平安時代の畑でどのようなものが栽培されていたかを調査する目的で、IV A 区の畑地跡でプラント・オパール検査を行った。試料の採取方法については付篇に収録した報告書にゆずり、ここでは試料の採取地点の選定について述べることにする。種子と同様に後世のものが混入す

る危険性を極力防ぐため、平安時代の遺構検出面がなるべく深い所、即ち表土とそれに続く第1層が最も厚く堆積している所を選定した。この第1層は土壌の流失と再堆積を繰り返し行なわれた層であり、同層から採取された試料は後世のものも含まれている可能性があるため以下の考察にあたっては一応除外して考える。なお、第1層の厚さはA地点では65cm、B地点60cm、C地点50cmである。第2層以下は後世の攪乱等は全く受けていない。

3. 同定・分析の結果について

第2表が種子の同定結果とプラント・オパールの結果を一覧表にしたものである。住居跡と畑地跡から採取された種子は大部分は炭化したものである。試料番号66は住居跡床面である程度かたまって出土したものである。試料を得た4住居跡のうち、3住居跡からイネが出土し、プラント・オパールでも畑地跡から検出されている。このことから、当時、米が食せられており、それは陸稲栽培された可能性を指摘できる。次にエノコログサ属であるが、プラント・オパールでは全地点全層で検出され、種子も4住居跡中3住居跡で出土している。これはアワと考えられる。この種子は炭化したもので黒い小さな粒となって水に浮いた。量的には出土した種子の中では最も多量に得られたものであった。プラント・オパールの結果からもこの畑地でアワが栽培されていたことはほぼ間違いないものと思われる。同様にヒエも3地点すべてで検

種子の種類			プラント・オパール							
試料番号	出土地点	種類	イネ	ヨシ属	クマザサ属	ウシクサ族	ヒエ属	エノコログサ属等	シバ属	ジュズダマ属
1	IA-1住	ブドウ属	A地点							
2	"	ブドウ属クマノミズキ	2層	○	○	○	○	○		
5	"	イネ	3"		○	○		○		
3,66	"	エノコログサ属類似種	4"	○	○	○	○	○		
7	IIA-1住	エノコログサ属類似種	5"		○	○		○		
9	"	オオムギ類似種	6"		○	○		○		
14	"	シロザ・種類不明	B地点							
16	IVA-1住	マメ科の一種	2層			○	○	○		
17	"	イネ	4"		○	○	○	○		○
19	"	カバノキ属の一種	5"		○	○	○	○		
20	IVA-2住	ホタルイ属の一種	6"		○	○	○	○		
21	"	エノコログサ属類似種	C地点							
22	"	イネ科の一種	2層	○	○	○	○	○	○	
27	畑地跡	オオムギ類似種	3"			○	○	○		○
			4"		○	○	○	○		
			6"			○	○	○		

第2表 種子同定とプラント・オパールの結果

出されており栽培されていたものと思われる。ⅡA—1住と畑地跡からオオムギ類似種が出土し、プラント・オパールでも1点とり上げられておりムギも食されていた可能性が強いが、この畑地で栽培された可能性については保留せざるを得ない。また、クマザサ属とウシクサ属（スキ属）のプラント・オパールが大量に得られた。これは畑地跡から多量の草の炭化物が出土したことと関係があると思われる。また、ⅣA—1住居跡の床からカヤ状の炭化物が敷かれた状態で出土しており、栽培種の問題はさておいても当時の生活にそれらが大きなかわりをもっていたと思われる。

プラント・オパールはイネ科植物だけを対象とし、しかもサンプリングした場所も僅かに3地点であり、その結果については極めて限定的なものである。また種子のサンプリングについても前述したように粗いものである。当時の栽培種や植物性食料の種類全般に迫ることはほとんどできないが、少なくともヒエ・アワを中心にイネも栽培され、その品種の特性上これらの穀類が主食となっていたと考えられる。今後、同様な調査例を重ねるとともに花粉分析等の諸科学的方法を駆使するなどして類例を重ね、文献資料とも照合し当時の食生活を復元できるようにすすめるべきであろう。

〈注〉

1. 周溝を有する掘立柱建物跡は時期的には13世紀と下がるが秋田県中田面遺跡から報告されている。建物の規模は2間×3間のもものが3棟、2間×2間のももの1棟と大きく、床面が堅く締まっている等の違いがあるものの、周囲にめぐる溝の規模等はほぼ同じである。中田面遺跡では「性格は不明」としながらも「倉庫とか小屋」を想定している。
2. 時代は遡るが群馬県の黒井峯遺跡^(文24)では畠は住居際まで作られている。

3. 江戸～明治時代

幕末から明治初頭にかけての遺構と遺物は民家跡とそれに付属する井戸跡及び若干の柱穴状ピットとそれらに伴う木器、木製品、古銭、鉄製品、陶磁器、布及び種子である。これらの遺物は民家跡及び井戸跡の内部から出土したもので、すべて同時期のものである。したがってこれらの遺物は一括して記載することにする。これらとは別に若干の陶磁器片がⅠA区～ⅢA区から出土した。いずれも表採で、しかも近現代のものであったためそれらについては写真図版に掲載したのみで本文、作図等は割愛した。

〔1〕住居跡

本項に属する遺構はⅧA-1掘立柱建物跡1棟だけである。本遺構の大部分は調査区外にかけ、調査できたのは南端部のみである。

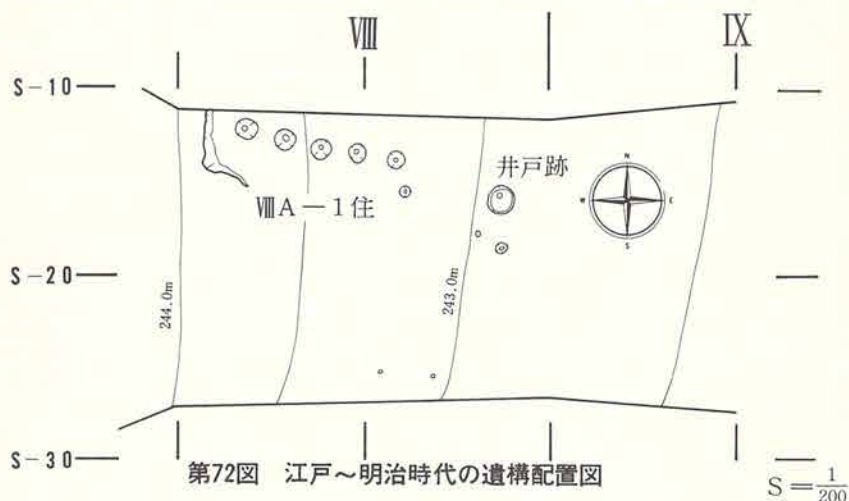
遺構（第73図、写真図版27）

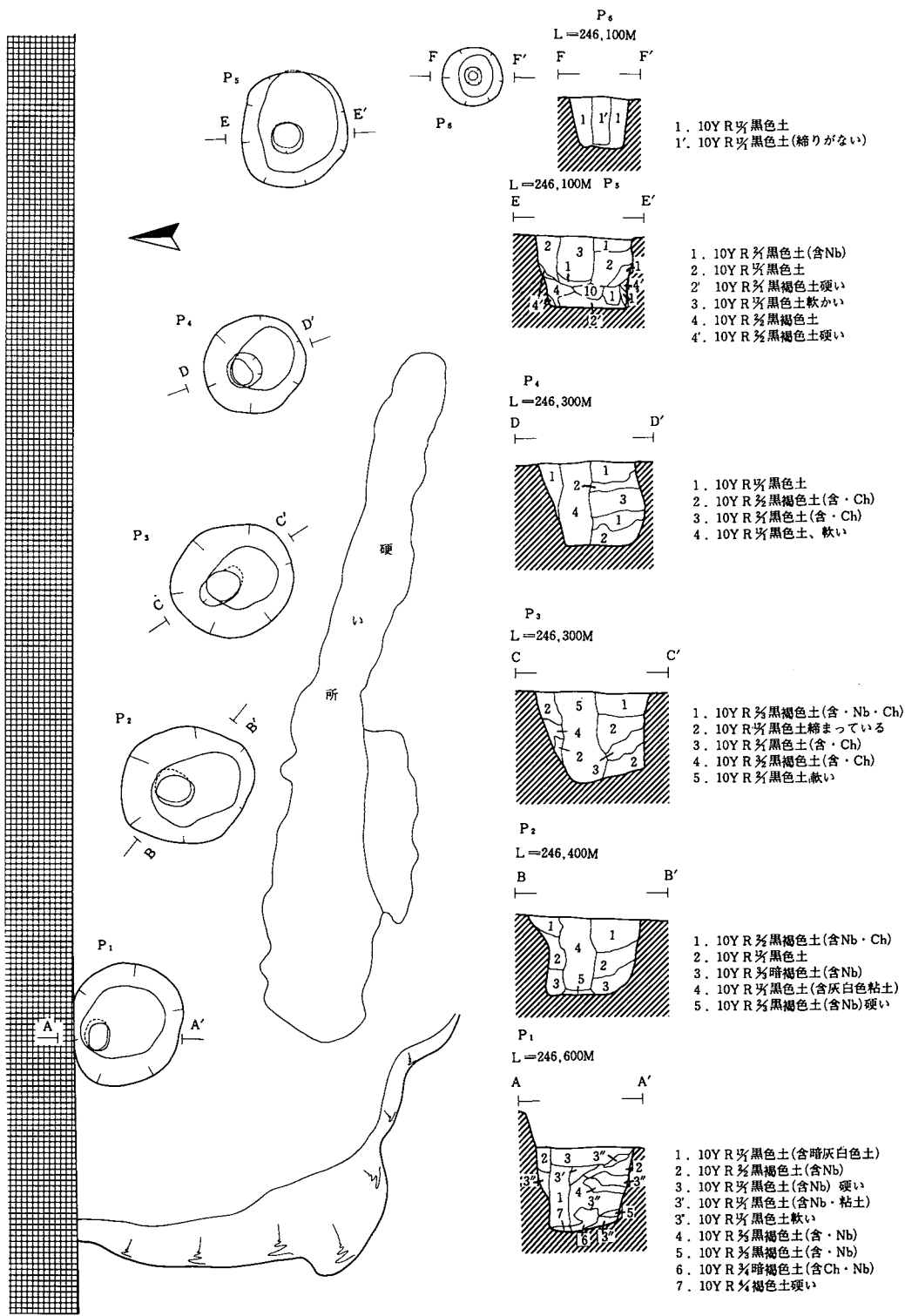
〔位置〕尾根の東側の脚部に位置し、検出面の標高は243.3mである。

〔柱穴配置と規模〕5基の柱穴が東西に並ぶ。最も西側の柱穴（ P_1 ）から順に東に向かって連番を付した。各柱間は芯一芯間で $P_1-P_2 \rightarrow 235$ cm、 $P_2-P_3 \rightarrow 195$ cm、 $P_3-P_4 \rightarrow 200$ cm、 $P_4-P_5 \rightarrow 220$ cmであり、平均をとると212 cmとなる。また、西側は斜面の上位に当たるため若干掘り込んで整地をしているが、掘り込みの端と P_1 との距離は170 cmである。

〔柱穴の埋土〕掘り方の埋土は黒色土に南部浮石、灰白色粘土、粉状バミス等が混入している。柱当りの埋土は軟らかくて締まりのない黒色土である。特に P_2 と P_3 では柱を立てる部分は若干埋め戻して突き固められている。

〔柱穴の平面形と規模〕各柱穴は掘り方と柱当りが明確に検出された。平面プランはすべて円形を基調とするが、掘り方の底部は長円形となる。各柱穴の規模は付表のとおりであるが、平均的な数値は開口部105 cm、底部55×75 cm、深さ75 cm、柱あたりの直径25 cmである





S = 1/80

第73図 VIII A - 1 住居跡

〔周囲の状況〕柱穴列が検出された付近はきわめて緩やかな斜面であるが、西側を幾分掘り下げてほぼ水平になるように整地した跡が見られる。また、柱穴列の南側に硬く踏み固められた所が検出された。その硬い部分は柱芯から1 mの距離をおいて柱穴列に沿ってP₁からP₄まで帯状にのびている。P₁～P₂の間は幅1 m、P₃～P₄の間は幅50cmとなる。厚さは2～3 cm程度である。この硬い部分の先2.5 mの所に小さな柱穴（P₆）がある。このP₆はP₁～P₅を南縁とする建物の南東隅にあたる。このP₆はP₁～P₅の柱穴と比べると規模だけが異なり、検出面から掘り方の埋土にいたるまで全く同様である。また、P₁～P₅の延長線上でP₅から6 mの所に井戸が作られている。

付表・柱穴一覧

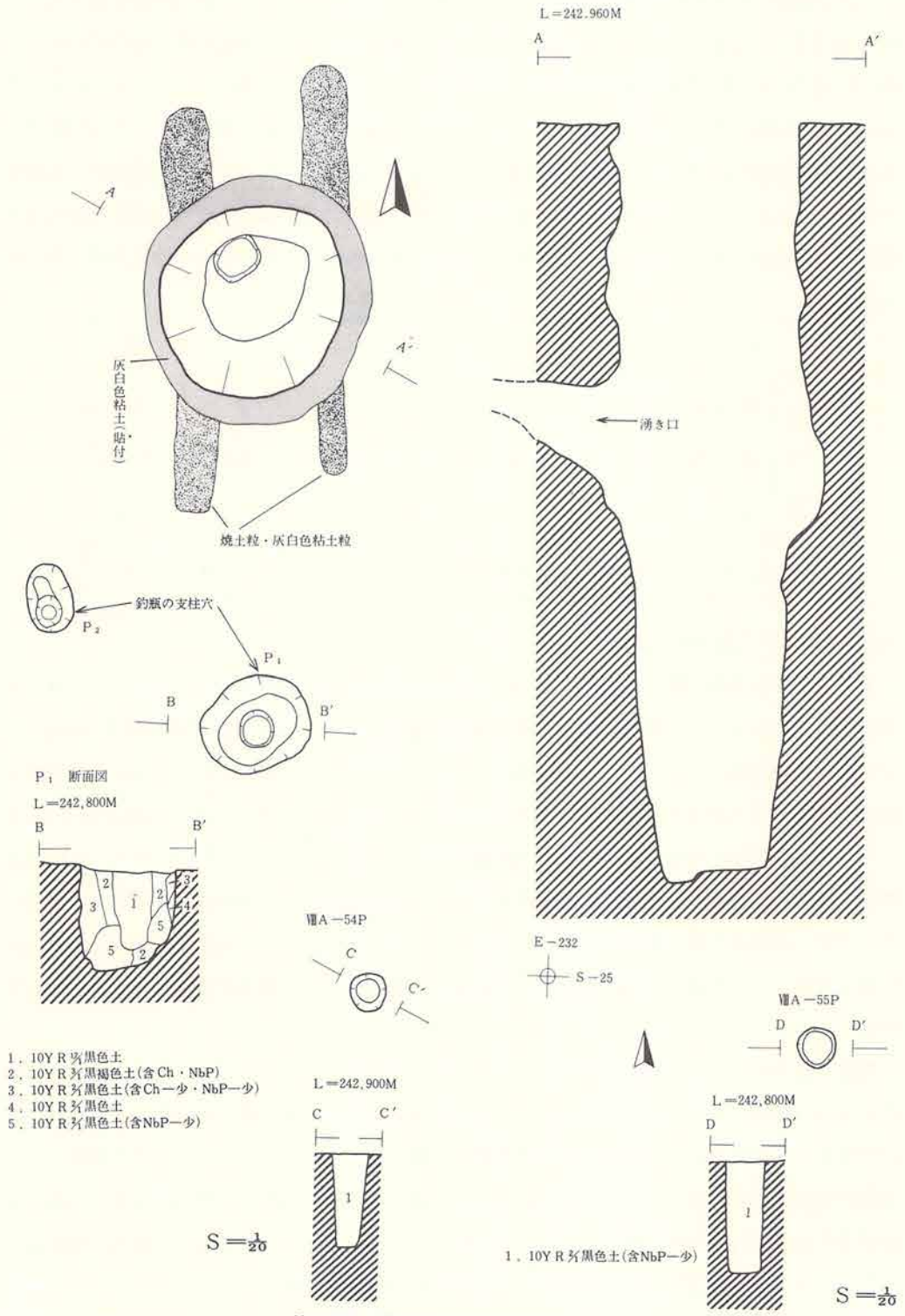
No.		P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
掘り方	開口部	110	105～110	105～115	90	95～105	55
	底部	60～75	55×85	50×60	45×60	70×90	30×40
	深さ	75	80	85	75	60	50
柱あたり		15～20	25～30	35	25～30	25～30	18

(cm)

〔2〕井戸跡（第74図、写真図版28）

本項に属する遺構はⅧA-301井戸跡のみである。民家の南東隅の柱から東へ6 mに位置する。Ib層下位で灰白色粘土が環状にまわり井戸本体を検出した。本体は素掘りで規模は開口部径1.1～1.15 m、底部径0.6～0.65 m、深さ4.5 mである。底部の北側に副穴が1基みられる。規模は径25～30 cm、深さ10 cmである。湧き口は地表から160 cmの深さで西側（斜面上位側）にある。ラッパ状に広がり井戸の壁では径50×90 cmの横に長い長円形をしており、奥に向かってすぼまる。奥行きは1 m以上である。地表から南部浮石層までは灰白色の粘土を10 cmほどの厚さで貼付しているが、南部浮石層の部分は大半が剥げ、崩落している。八戸火山灰以下の基盤層はきわめて硬く締まっており崩落の危険性を感じさせない。湧き口の反対側は若干抉られて広がっている。

現在でも水は湧いており、水量は多くはないが一夜で湧き口まで溜まり、それ以上水位は変わらない。周囲を2～3 cm下げたところ、若干の焼土粒と灰白色の粘土粒が2×3 mほどの広がりをもって検出された。しかしこの層は非常に薄く、2～3回のクリーニングで消滅したが、同様の土が図に示したように帯状にきわめて硬く締まって検出された。柱穴は南2 mの所に1基検出された（P₁）。明瞭な掘り方を持ちしっかりした作りとなっている。ハネ釣瓶の支柱跡である。また、この柱穴の北西1 mの所にもう1基の柱穴（P₂）を検出した。この柱穴は上部は完全に破壊され中～下位だけが残っていた。P₁に先行する支柱と思われる。埋土と遺物の出土状況



- 1. 10Y R 弱黒色土
- 2. 10Y R 弱黒褐色土(含Ch・NbP)
- 3. 10Y R 弱黒色土(含Ch一少・NbP一少)
- 4. 10Y R 弱黒色土
- 5. 10Y R 弱黒色土(含NbP一少)

第74図 井戸跡及び柱穴状ピット

は次のとおりである。検出面から1 mほどはI b層と同じ締りのない黒褐色土の単層で、磁器1点が出土した。地表下1～1.6 mは崩落した灰白粘土と黒褐色土の混土である。下位から丸太材や角材の一部、砥石等が出土する。1.6～2 mは空洞となっている。2～3 mは青灰色の粘土質シルトで釣瓶や板材、角材、陶磁器等と礫が出土する。3～4 mまでは黒褐色土で沢山の礫が入っていた。4～4.5 mは黒褐色土で若干の礫が出土した。

〔3〕ピット（第74図）

VIII A区の調査区南端部に2基の柱穴VIII A-54ピット、VIII A-55ピットを検出した。埋土はともに南部浮石粒を若干混入する締まりのない黒色土である。開口部はどちらも25 cm、深さは54ピットが55 cm、55ピットは70 cmである。柱あたりはみられない。両柱穴は中心間で2.7 mの距離である。これらは検出状況や埋土の状況から同時存在と思われる。用途は不明である。

〔4〕出土遺物

人工遺物としては鉄製品、古銭、陶磁器、礫石器、礫及び、木器、木製品、布等が出土した。自然遺物としては多数の種子、木の葉、昆虫の遺体等が出土した。自然遺物はすべて井戸跡の内部から出土したものである。それらのうち、ここでは種子のみを取り上げることにした。木の葉は、マツ、スギ、クリ、ケヤキ、ブナ（?）、タケ等である。

(1) 鉄製品・古銭（第75図、写真図版38～39）

305～312の8点が出土した。306と308は井戸跡の埋土内、307と311は民家跡柱穴3の埋土上位、それ以外は民家跡の柱穴付近の遺構検出面から出土した。305は箆の把手と思われる。306は元の形状が不明である。307は断面形が長円形となる環状の鉄製品である。長軸4.1 cm、短軸2.5 cm、幅1 cm、厚さ0.2 cm、重さ16 gである。口金と思われる。308は角釘状のものであるが、一方の端部は1.3 cmほどやや扁平にふくらみ二つに分かれる。中央は空となり、端は薄い鉄板を中に入れ径2 mmの止め釘で止めている。中に挟まれた鉄板は錆び付いているが、元はもっと長いもので回転していたものと思われる。長さ7.8 cm、幅3 mm、重さ2.7 gである。309～312は角釘である。313～318は古銭である。腐食の著しい317は不明であるが、それ以外はすべて「寛永通宝」である。ただし、316～318の3点はII A～III A区の表採ないし耕作土中から出土したものである。

(2) 陶磁器（第75図、写真図版35）

民家跡のP埋土内から119と120の2点、井戸跡の埋土内から121～126の6点が出土した。119は白磁の紅皿である。120と121は染付の碗である。前者は青が濃いのにに対し、後者のそれは薄くややくすんでいる。121～125は施釉された陶器で淡黄褐色を呈する。123～125は

同一個体と思われる。碗状の器形と思われる。126は素焼きで形状は前者と同様と思われる。

(3) 石器 (第76図、写真図版37)

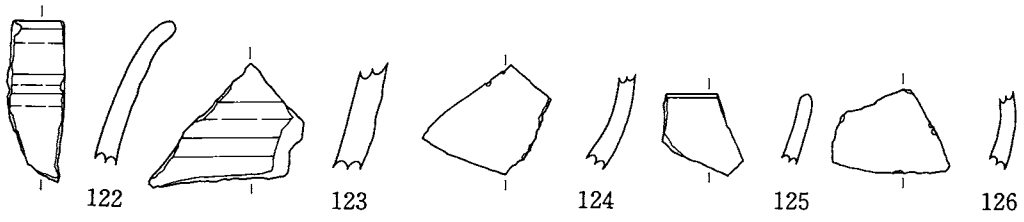
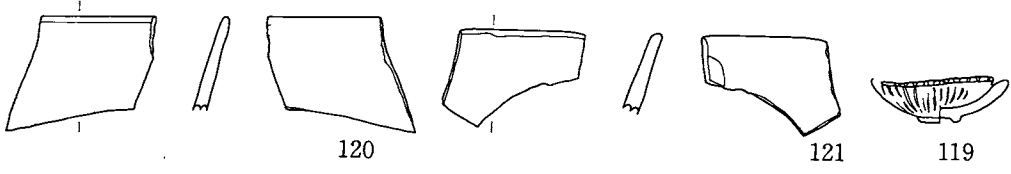
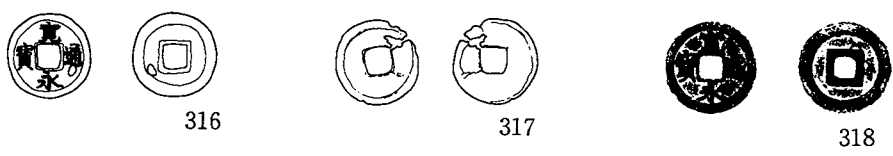
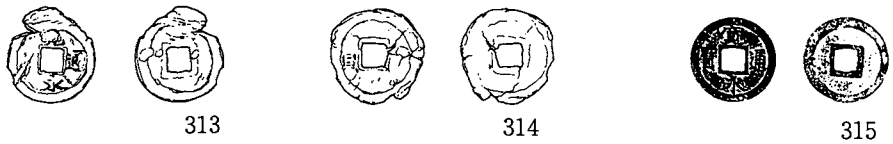
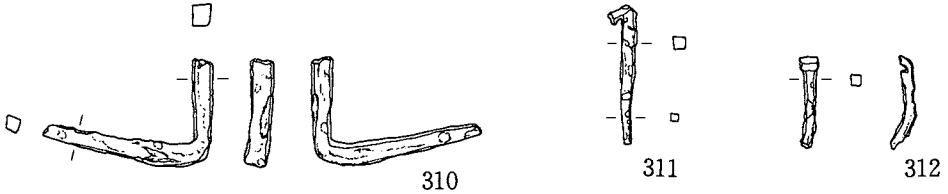
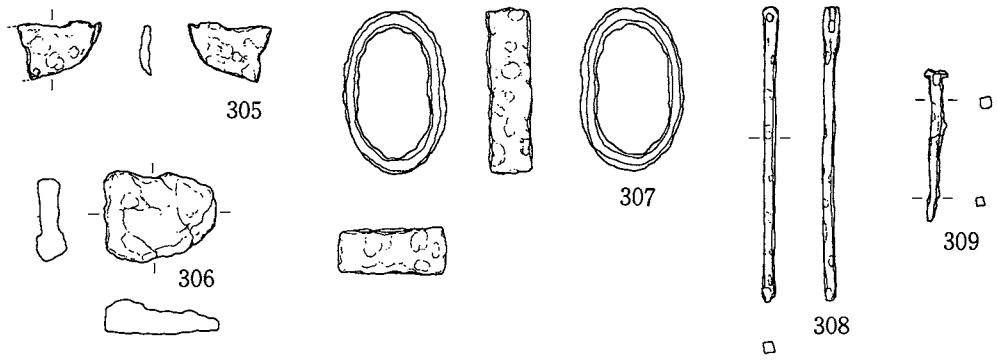
3点が井戸跡内から出土した。211と212は砥石である。前者は両面を使用している。火熱を受け表面から1cmほどの厚さに赤色化している。後者は5面が破損しているため両面を使用したかどうかは不明である。石質はどちらも硬砂岩である。同一個体と思われる。213は扁平な台形状をした垂角礫である。その一面に非常に磨滅した面がある。重量は4kgである。石質は粘板岩である。

井戸跡の埋土下位から70個を越える礫が出土した。円礫は少なく、角礫・垂角礫が大半である。5kg未満の小礫と15kg以上の重い礫とに分けることができる。石質は大半が硬砂岩で他にチャートと粘板岩がある。また、サンゴ虫石灰岩が大小15個も出土した。加熱を受け赤化したものが多く、サンゴ虫石灰岩などは15点に煤が付着していた。これらの礫には加工痕が見られず自然石の状態ではあるが、本遺跡内にはこのような礫はないことから、人為的に運ばれてきたものであり、かつ、加熱の跡がみられることなどから何かに使用され、後に井戸内に廃棄されたものと思われる。

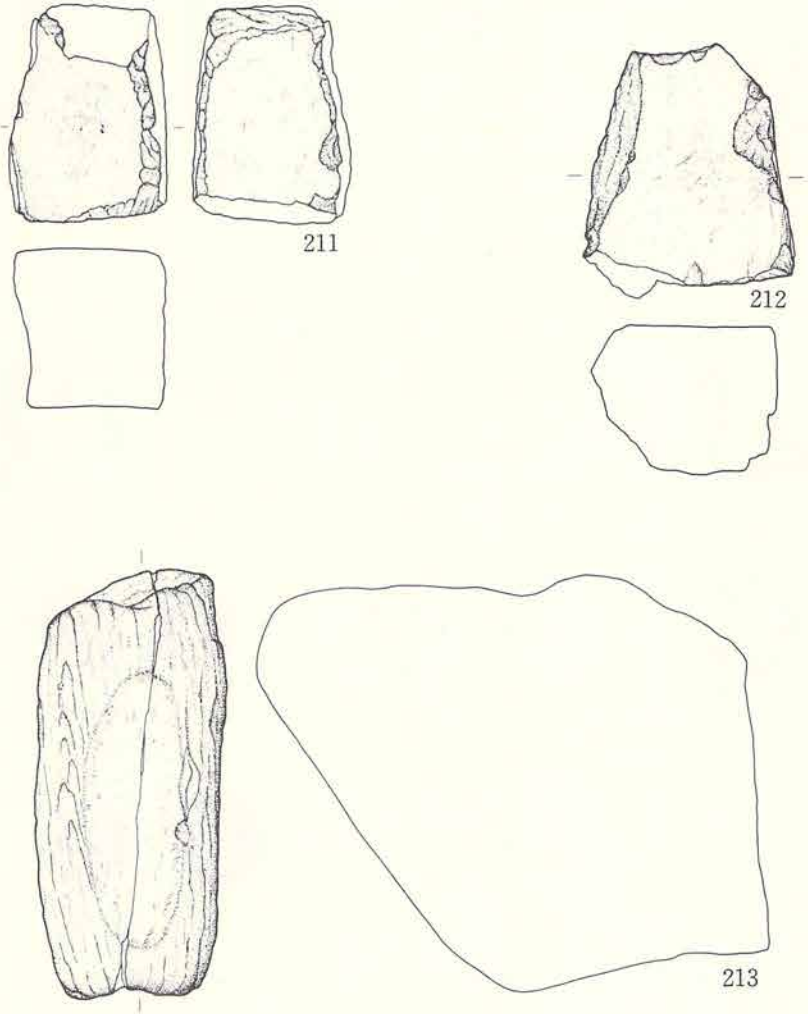
(4) 木器・木製品 (第77図～91図、写真図版40～44)

井戸跡内から出土した木器、木製品は個数にして100個を越える。しかし、その多くはまったく原形をとどめていない小片であり、それらを除く52点をここではとり上げることにする。しかし、52点のうち原形を保つかまたは用途が推測できるのは僅かに10点余りである。

319は外側には黒漆、内側には赤漆を塗布した板である。四周に釘穴がまわり、両端には幅1cmの板を合わせた跡がついている。釘は木製である。一隅が少し焼けている。図の上辺が欠損しているため縦が若干短くなっているがもとは正方形であったと思われる。法量は縦18.5cm、横19cm、厚さ0.5cmである。材質はマツである。器種は特定できないが、重箱か膳のようなものと思われる。320は柄杓である。一木を刳り貫いて作ったものである。内外とも工具痕が残っており、丁寧な仕上げとはなっていない。口縁部の2cmほど下に1.7×1.1cmの長方形な穴が内側に斜行するようにあけられている。柄を差し込んだ穴である。容積は約460mlと推定される。材質はホウである。321は一端が削られた串状の木製品である。全体が鉋をかけたように滑らかで角もとれている。長さは20cm以上である。先端は尖ってはいるが、鋭利ではない。材質はマツである。322は中心部が中空となる材質であるが品種は不明である。皮を剥いだもので工具痕が残っている。323は全体に黒漆が塗布されている。長さは27cm、最大幅2cmである。材質はクリである。324は楔である。長さ2.8cm、材質はマツである。325は釣瓶である。たがはバラバラになっているが、それ以外に欠損部はない。把手の横木の中央部は綱を巻きつけるために括れている。たがは上部に1本、下部には2本まわる。把手の柄穴は上下に長い長円形を



第75圖 VIII A - 1 住居跡出土遺物

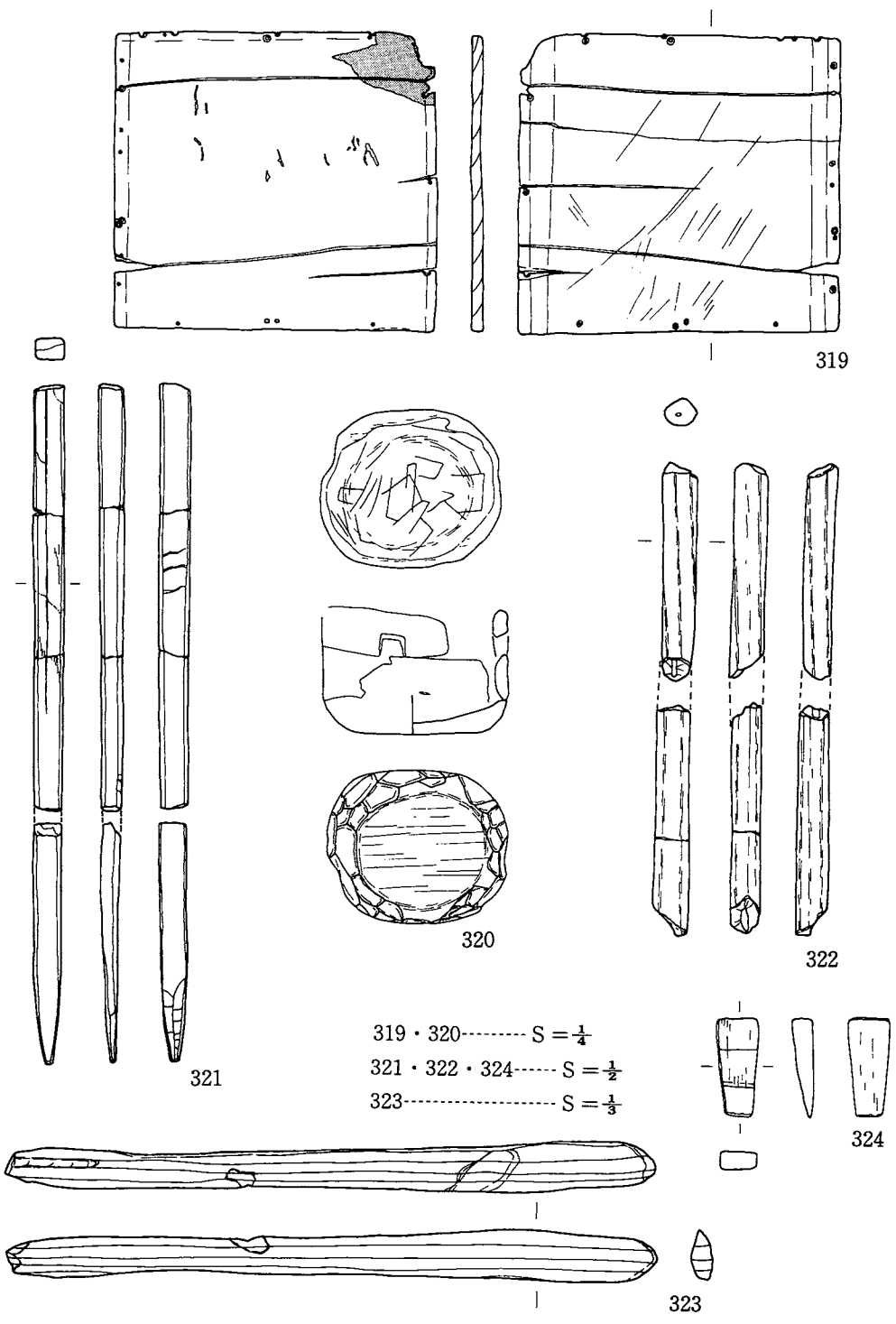


第76図 VIII A-1 住居跡内出土遺物

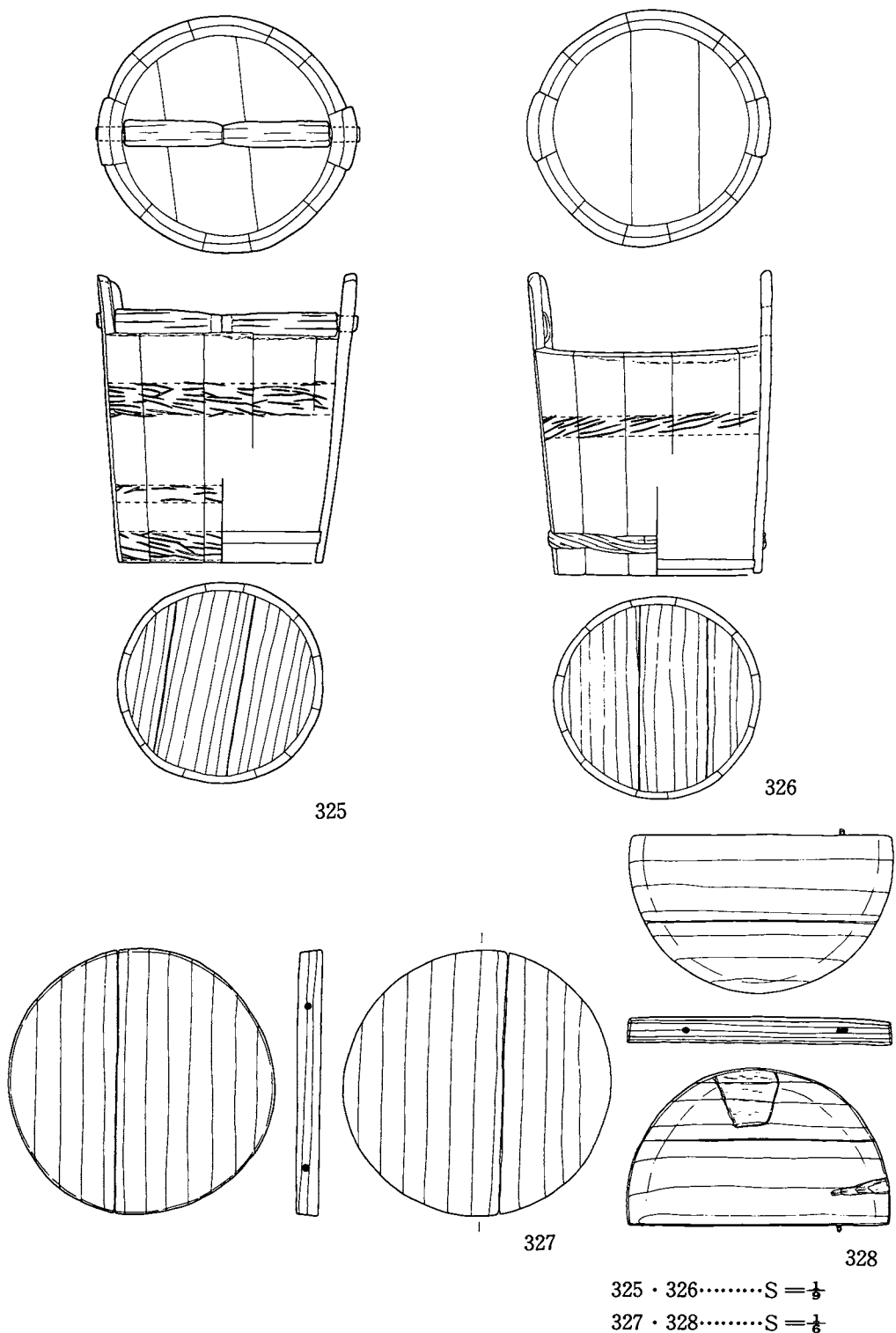
なし、かなり磨耗している。容量は約13.5ℓである。横木を除く部分はすべてスギを使用しているが、横木の材質は不詳である。326も釣瓶である。把手の横木と、上部のたがが欠損している。たがは上下部に各1本である。法量、材質等は325と同じである。327、328は桶の底板である。どちらも合釘には竹を用いている。直径は24cmほどで、325、326の桶とほぼ同じである。材質はスギである。329は木を割ったり削ったりする時の作業台である。クリの木を輪切りにし、更に縦50cm、横30cmの長方形に木取りしたものである。厚さ16cmである。330は木ベラである。柄は欠損している。鉋を用いず鉋ないし手斧で粗削りしたものであるが、使用によって表面は磨耗し、光沢を放っている。中央部が脹み、側縁部はやや薄くなる。材質はイタヤである。331は鋏台である。柄の一部が欠損している。柄の断面は隅丸方形である。鋏先を装着する部分は若干薄くなっている。材質はクリである。332はマツを輪切りしたものから直方体に木取りをした作業台である。木口面は正方形である。側面は鉋をかけている。その一面に鉋状の工具痕がやや深く残っている。材質はマツである。333は俎である。脚は差し込みであるが欠損している。包丁による使用痕は表だけでなく裏まで認められる。長さ73cm、幅20cmである。材質はマツである。334は土を突き固める時に使用する蛸胴突きである。柄は3本であるがいずれも欠損している。胴体部の厚さは19cmである。材質はクリである。335は木槌である。柄は根元から折れている。材質はイタヤである。336～342は板材ですべて鋸で挽いたもので、材質はマツである。また、336～340は鉋をかけているが、341、342は使用していない。336は長さ91cmで、両端は3cmほどの幅で何かに釘打ちされたものである。厚さは8mmで板材の中では最も薄い。337は厚さ6cmの板で片面には包丁の使用痕と釘穴状の小穴が板端に集中的に刻されている。作業台として使用されたものであるが、本来作業台として作られたものかどうかは不明である。338と340は板端を若干削ってすぼめている。341の片面は剥げている。343と344は井戸枠である。使用痕からみて前者は上、後者は下に組まれたものと思われる。9cm(3寸)角材を用いて、方形に組んだものである。内法で53cm(約1尺8寸)を測る。材質はクリである。345～360は角材である。349と350は杭である。ほとんどがクリを使用している。361～370は丸木材である。363は未製品、367は杭である。その他は用途不明である。材質はマツが多い。371は芯の部分が空洞となっているイタヤの木を利用している。両端を斧状の工具を用いて切断している。長さは約1m、太さは17～27cmである。一部は炭化している。表面は皮がついたままで内側は風化が著しい。用途は不明であるが、桶として利用された可能性がある。

(5) 布 (写真図版39)

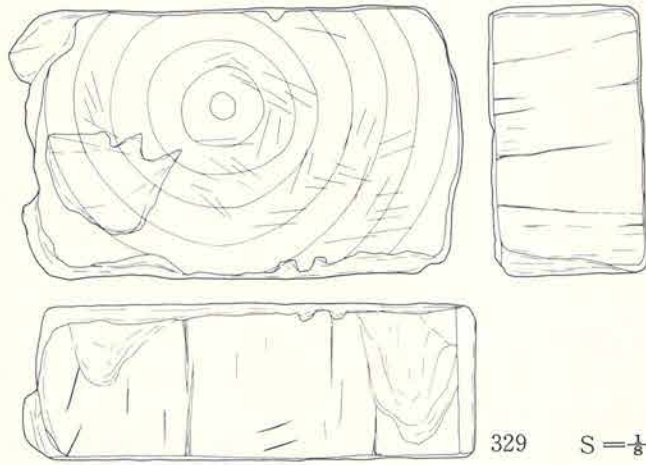
布は1点出土した。ややくすんではいるが白地である。目は非常に緻密である。平織で麻の上物(いそ)と思われる。4cm×4.5cmである。



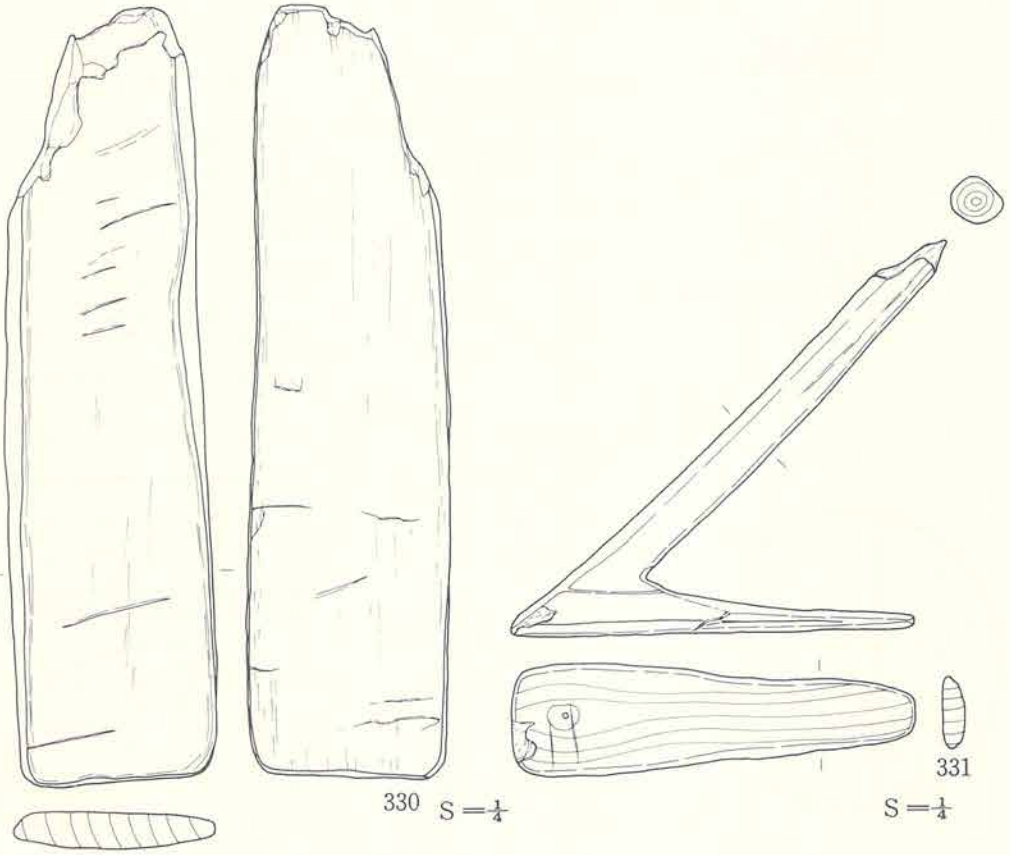
第77図 木器、木製品(1)



第78図 木器、木製品(2)



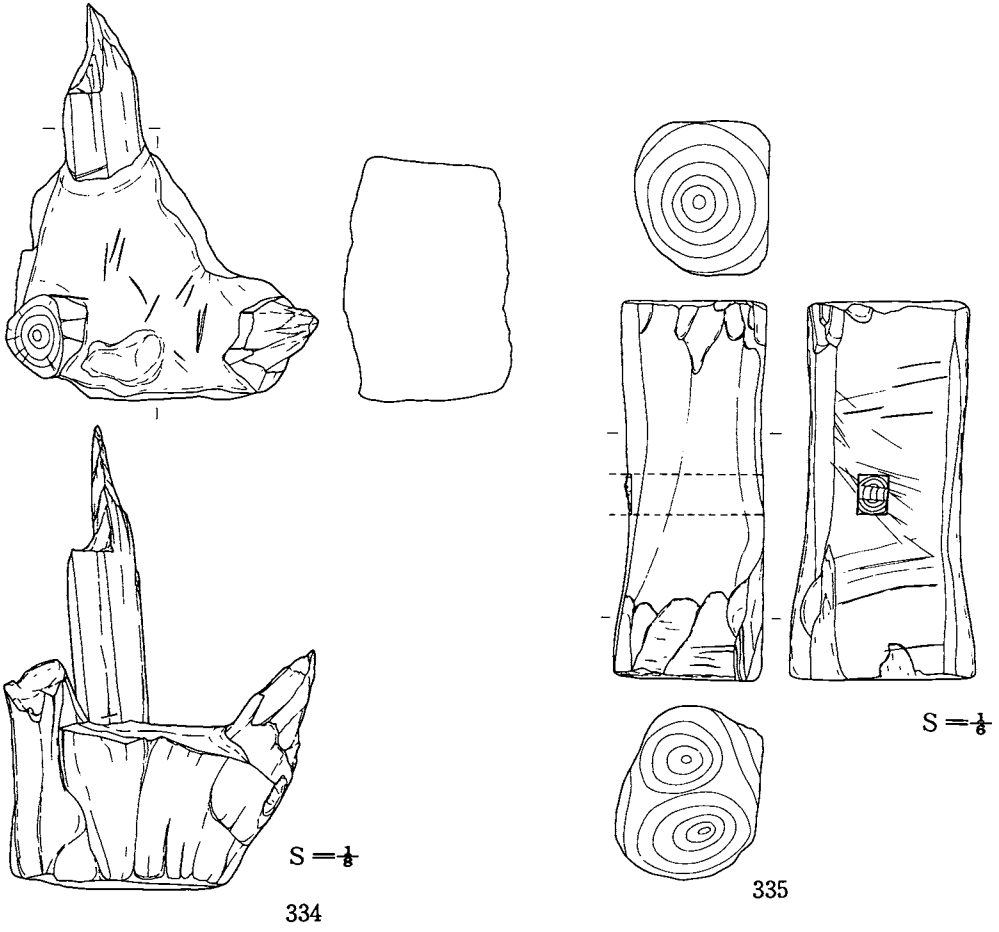
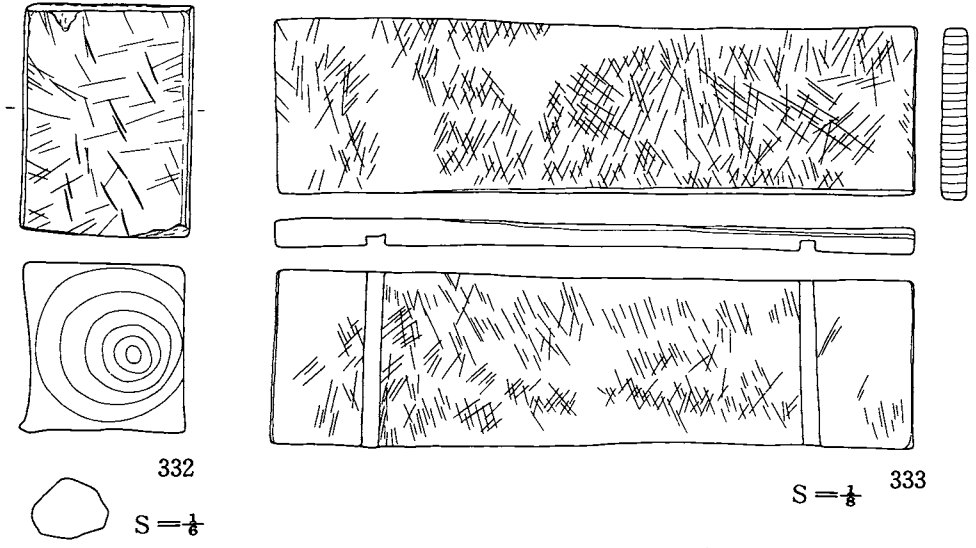
329 S = 1/8



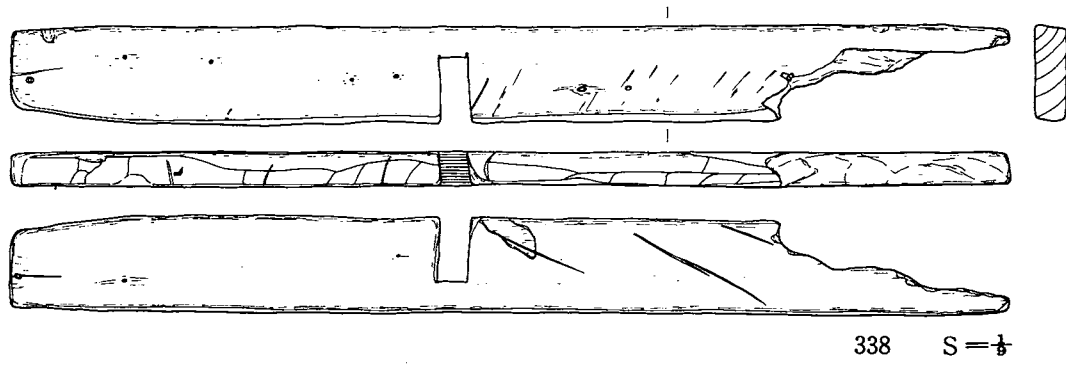
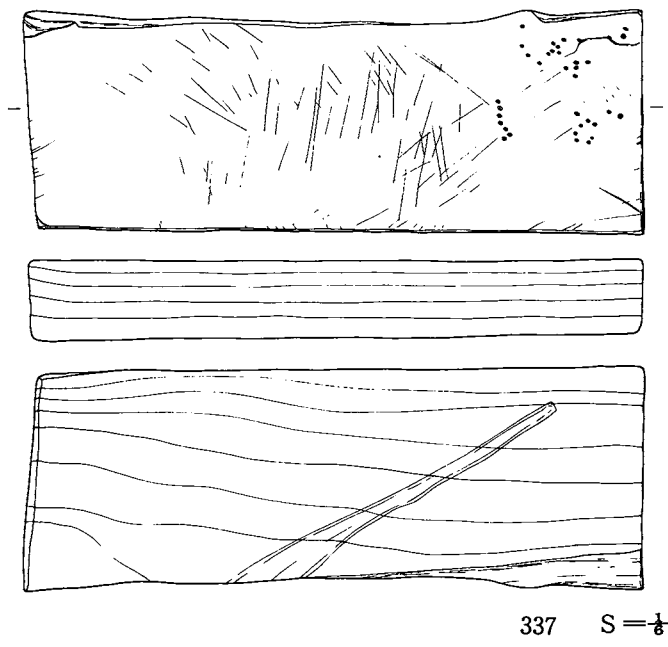
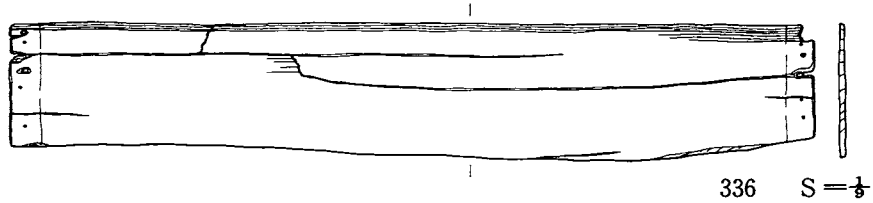
330 S = 1/4

331 S = 1/4

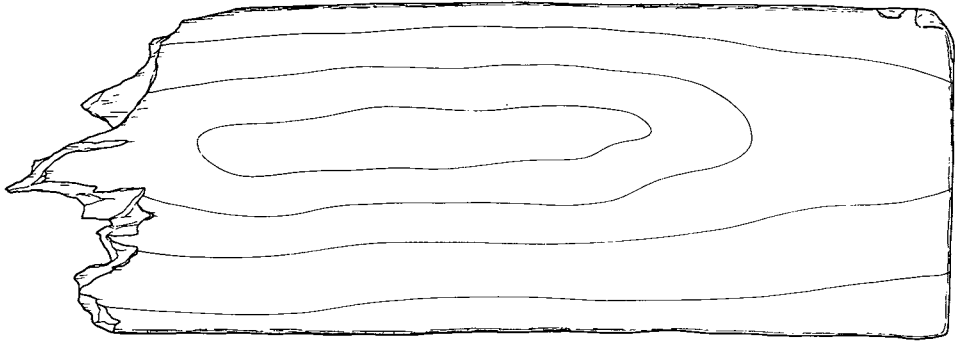
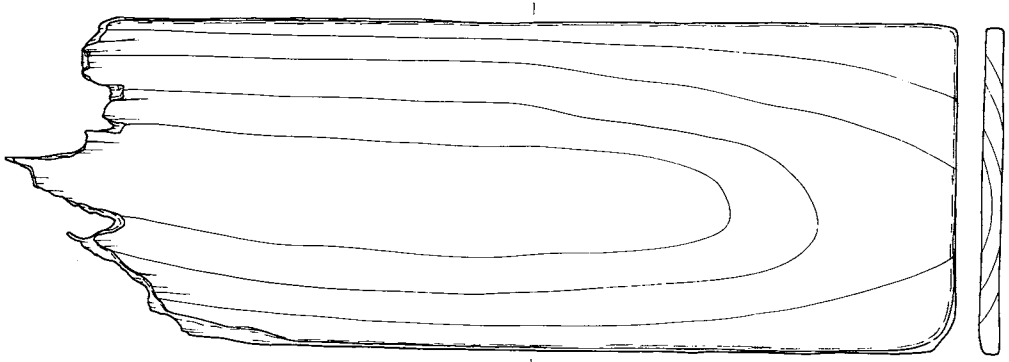
第79図 木器、木製品(3)



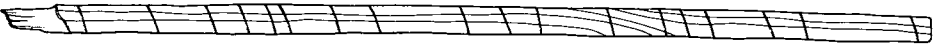
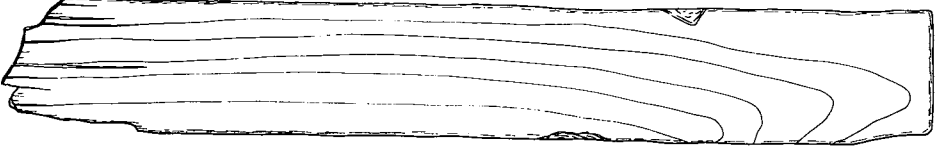
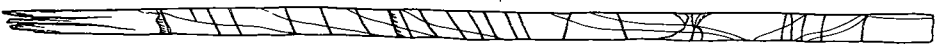
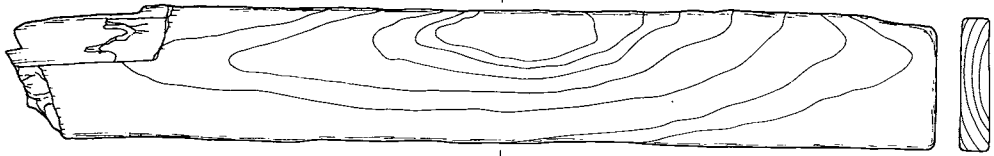
第80図 木器、木製品(4)



第81図 木器、木製品(5)

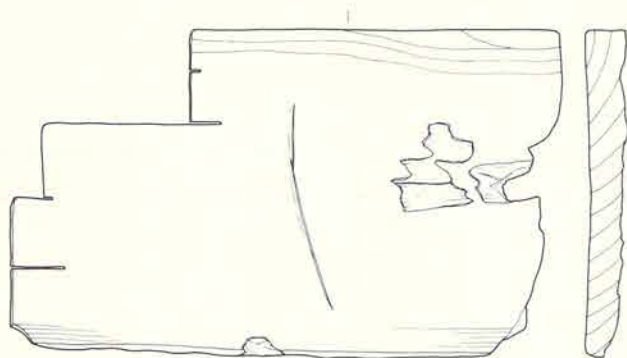


339 S = 1/8

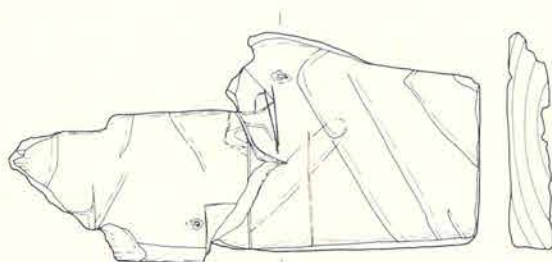


340 S = 1/8

第82図 木器、木製品(6)

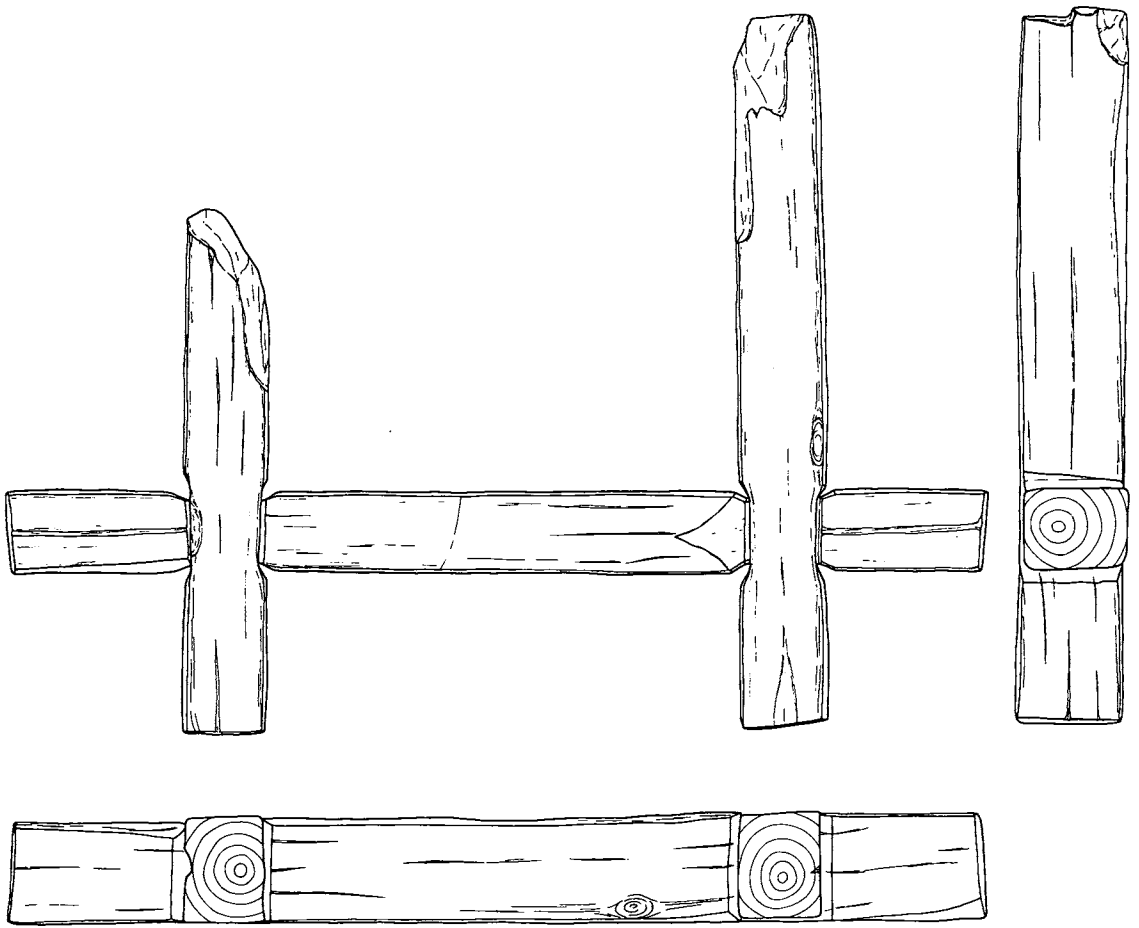


341 S = $\frac{1}{8}$



342 S = $\frac{1}{8}$

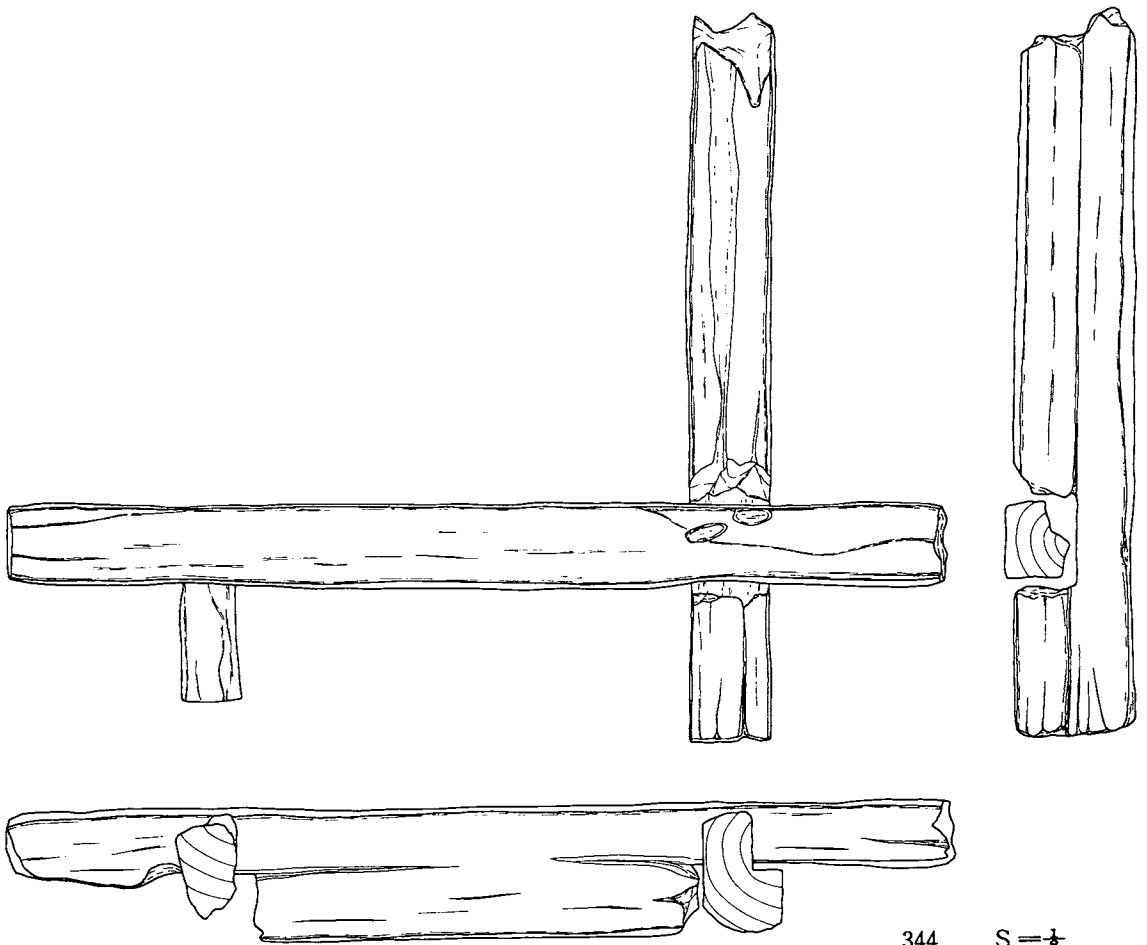
第83図 木器、木製品(7)



343

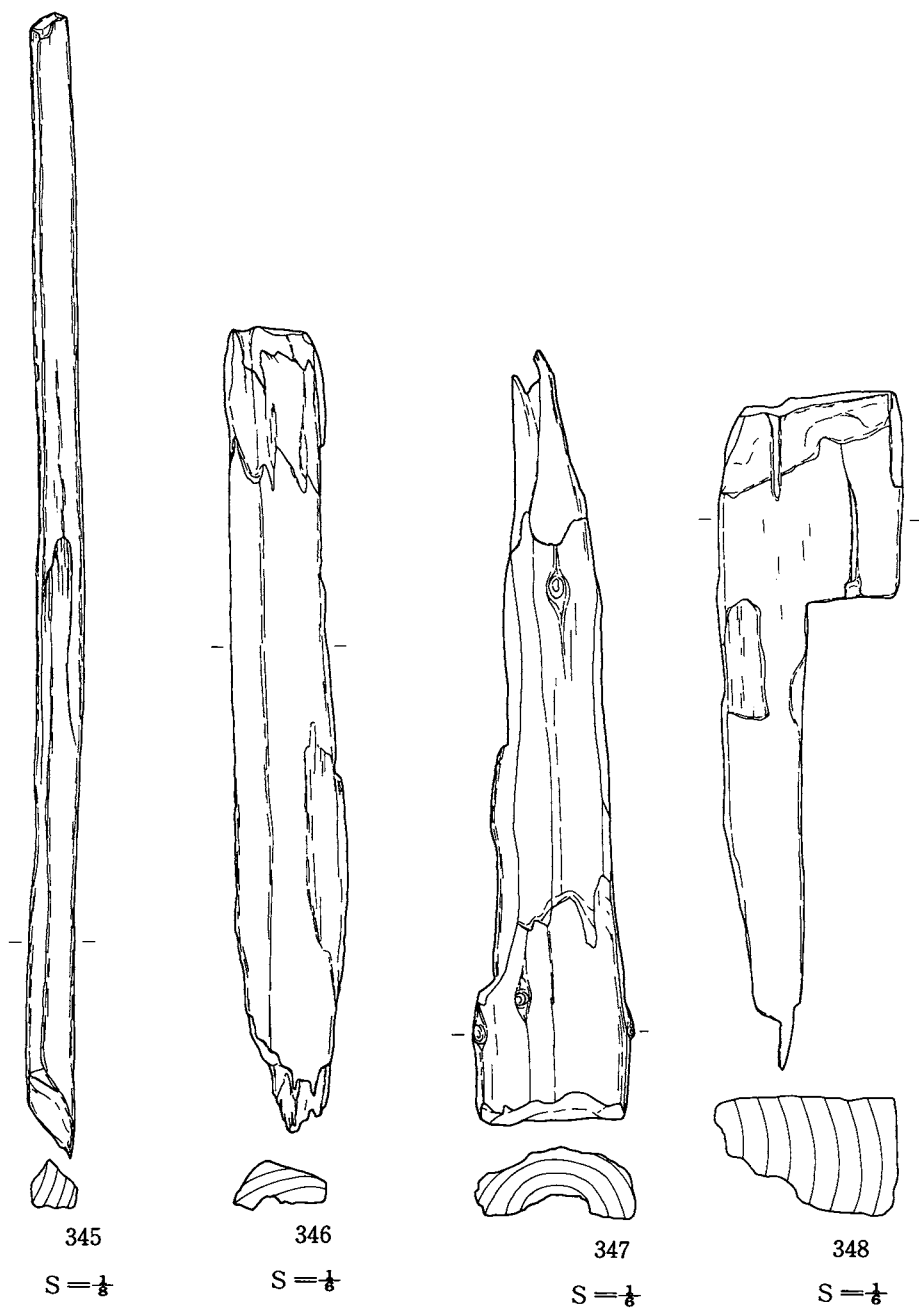
S = $\frac{1}{4}$

第84図 木器、木製品(8)

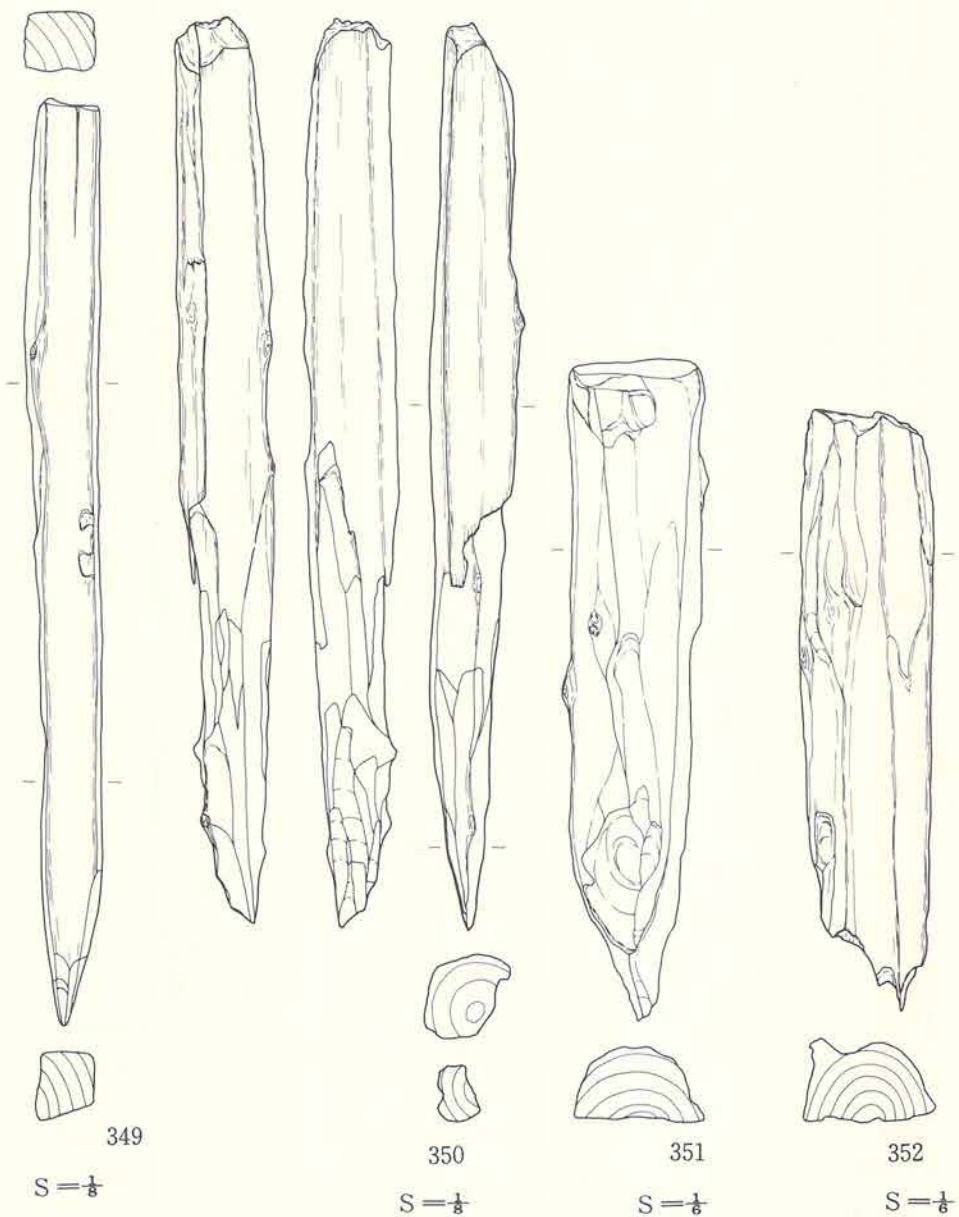


344 S = 1/8

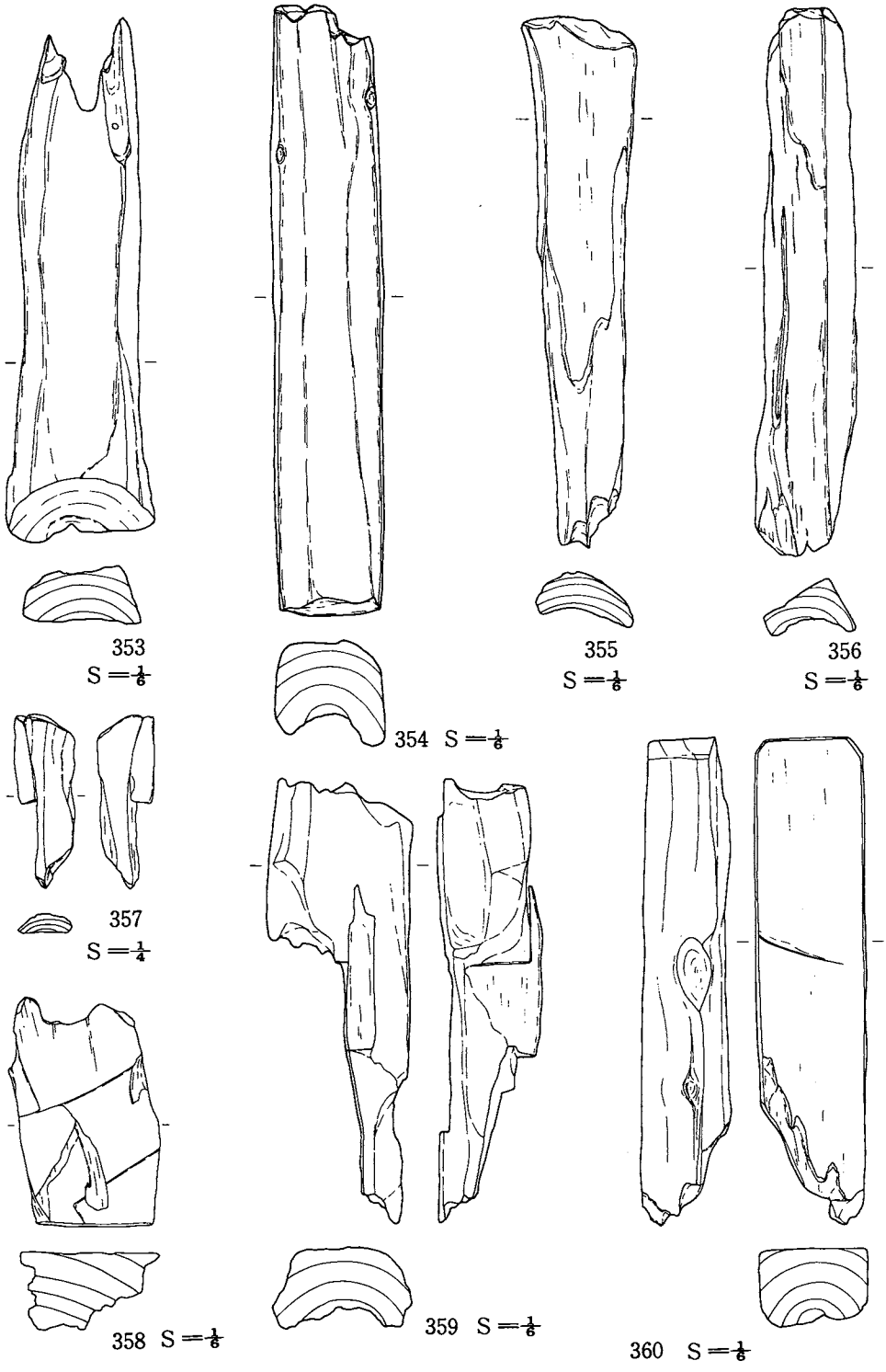
第85図 木器、木製品(9)



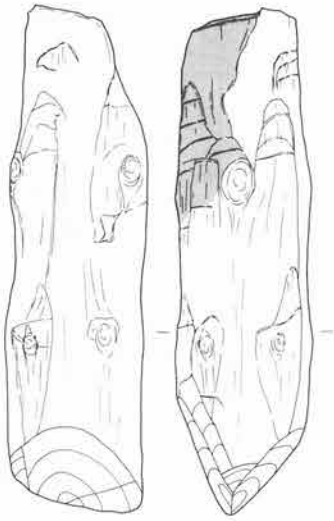
第86図 木器、木製品(10)



第87図 木器、木製品(11)

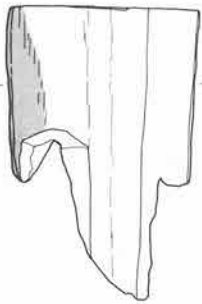
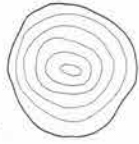


第88図 木器、木製品(12)



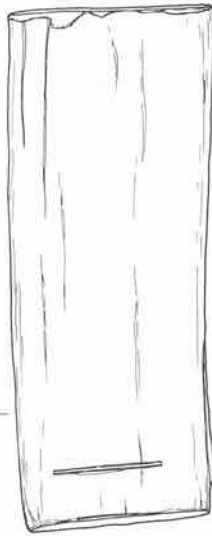
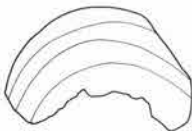
361

S = 1/4



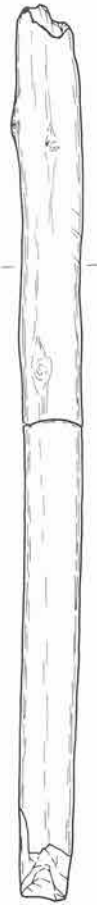
362

S = 1/8



363

S = 1/4



364

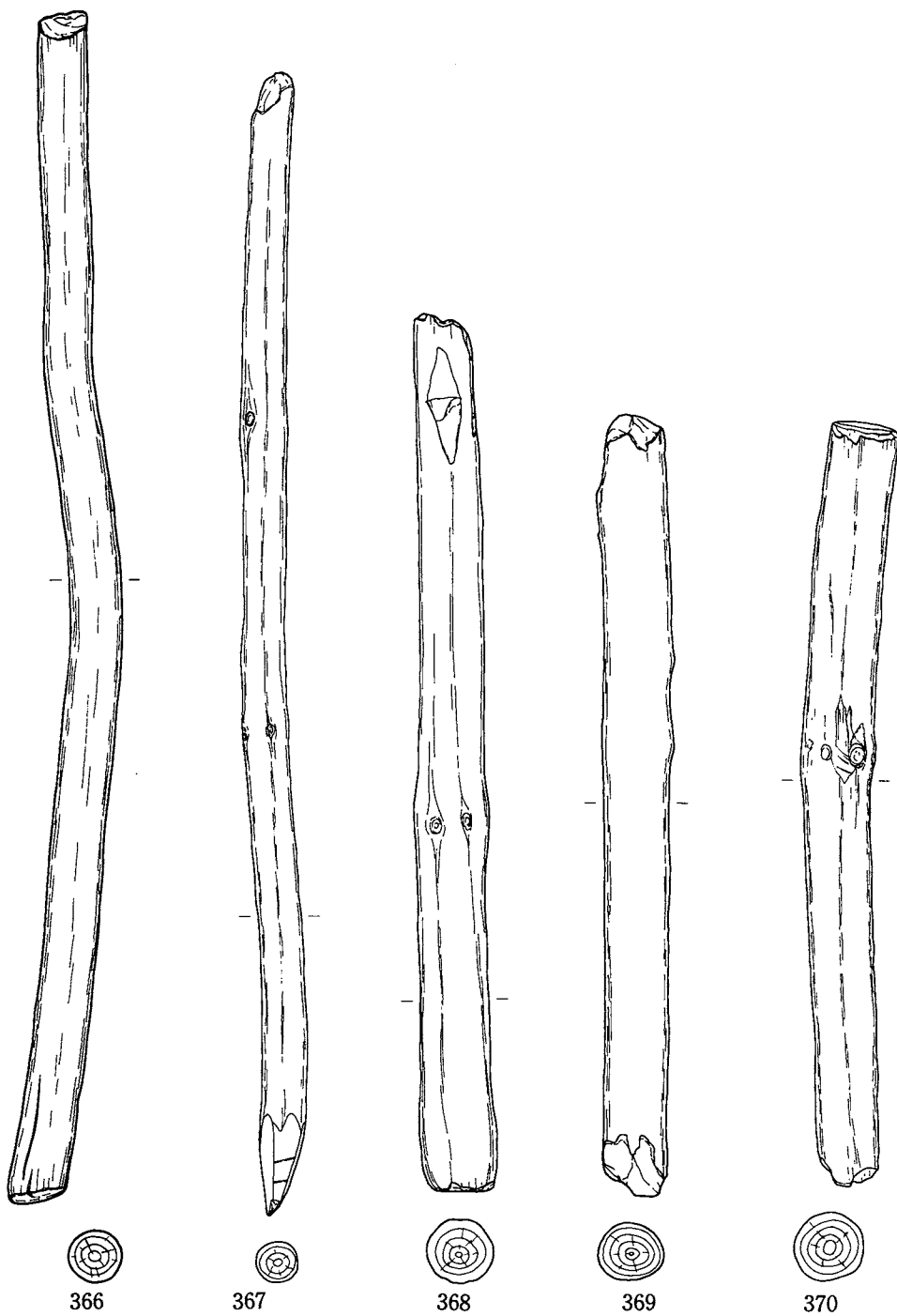
S = 1/8



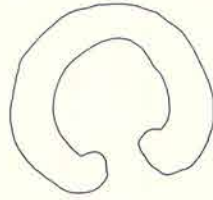
365

S = 1/8

第89図 木器、木製品(13)



第90図 木器、木製品(14)



371

S = $\frac{1}{8}$

第91図 木器、木製品(15)

第3表 木器・木製品一覧表

遺物番号	器種	法 量			材 質	特 記 事 項	図版番号	写真図版
		長さ(縦)	幅(横)	厚さ				
319	膳 (?)	17.7 ^{cm}	19.3 ^{cm}	0.7 ^{cm}	マ ツ	黒漆、赤漆、一部焼ける	75	40
320	柄 杓	7.3	11.0	0.7	ホ ウ		75	40
321	串状木製品	—	0.8	0.9	マ ツ		75	40
322	棒状木製品	—	1.4	1.1	広 葉 樹		75	40
323	棒状木製品	27.2	2.1	0.9	ク リ	黒漆	75	40
324	楔	2.8	1.2	0.6	マ ツ		75	40
325	桶	37.2	33.2	1.7	ス ギ		76	41
326	桶	39.2	31.3	1.6	ス ギ		76	41
327	桶	24.6	24.6	2.1	ス ギ	底板	76	40
328	桶	23.7	14.4	2.4	ス ギ	〃	76	41
329	作 業 台	30.6	51.2	16.5	ク リ		77	42
330	木 筥	43.2	11.2	2.1	イ タ ヤ		77	41
331	楸 台	32.9	9.1	4.5	ク リ		77	42
332	作 業 台	18.4	13.5	13.4	マ ツ		78	42
333	俎	72.8	19.5	3.2	マ ツ		78	43
334	蛸 胴 突き	52.7	35.3	18.7	ク リ		78	42
335	木 槌	30.4	14.9	11.1	イ タ ヤ		78	42
336	板 材	15.2	91.0	0.8	マ ツ		79	43
337	板 材	16.5	49.5	6.2	マ ツ		79	43
338	板 材	10.8	113.8	3.7	マ ツ		79	43
339	板 材	36.7	107.4	2.2	マ ツ		80	43
340	板 材	15.0	105.3	3.2	マ ツ		80	43
341	板 材	26.1	44.1	3.3	マ ツ		81	
342	板 材	17.4	37.6	3.4	マ ツ		81	
343	井 戸 枠	80.9	110.6	12.0	ク リ	上部	82	44
344	井 戸 枠	82.7	107.4	13.5	ク リ	下部	83	44
345	角 材	128.6	5.5	5.5	ク リ		84	
346	角 材	64.4	8.9	2.8	ク リ		84	
347	角 材	62.0	13.0	3.8	ク リ		84	
348	角 材	55.1	15.0	9.5	ク リ	井戸枠の一部か?	84	
349	角 杭	104.4	8.5	8.0	ク リ		85	43
350	角 杭	102.6	10.6	9.3	ク リ		85	
351	割 り 材	53.7	11.1	5.8	ク リ		85	
352	割 り 材	47.6	10.6	6.7	ク リ		85	
353	割 り 材	44.0	13.1	5.2	ク リ		86	
354	角 材	54.0	9.8	8.5	マ ツ		86	
355	角 材	46.0	8.5	3.2	ク リ		86	
356	角 材	47.4	8.0	3.7	ク リ		86	
357	角 材	10.7	3.5	1.1	ク リ	黒塗りあり	86	
358	角 材	19.9	12.1	6.8	マ ツ		86	
359	角 材	39.0	12.4	5.6	マ ツ		86	
360	角 材	42.4	9.5	6.8	ク リ		86	
361	丸 太 杭	28.5	7.6	7.5	マ ツ		87	
362	丸 太 材	23.7	15.6	7.2	マ ツ	一部焼ける	87	
363	丸 太 材	29.4	11.5	10.0	イ タ ヤ	未製品	87	
364	丸 太 材	104.4	7.3	6.7	マ ツ		87	
365	丸 太 材	72.4	4.3	4.0	マ ツ		87	
366	丸 太 材	101.3	4.5	4.6	マ ツ		88	
367	丸 太 杭	97.1	3.6	3.6	マ ツ		88	43
368	丸 太 材	74.2	5.8	5.5	マ ツ		88	
369	丸 太 材	66.2	5.5	5.0	イ タ ヤ		88	
370	丸 太 材	64.9	6.1	5.9	マ ツ		88	
371	種 (?)	103.6	26.8	5.0	イ タ ヤ	一部焼ける	89	

〔5〕まとめ

江戸末～明治の遺構は尾根の東側の裾野で検出された。民家跡と思われる掘立柱建物跡の一部と井戸跡及び若干の柱穴であり、該期の民家の屋敷跡の一部である。遺物は遺構に伴って検出されたものが大部分で、ほかに尾根の西側から該期及びそれ以後の遺物が若干表採された。

民家跡は掘立柱式のもので、調査された部分は民家の南端のみである。調査区外の畑を観察すると同所はやや平坦となっており、その地形から4間×6間の直屋で東向きに建てられたものと思われる。掘立柱は概ね開口部径が105cm、深さ80cmほどの掘り方を有し、柱には20～30cmほどの丸木を使用している。柱間は平均210cmである。

本住居跡に伴う井戸は素掘りで、上屋をもたないハネ釣瓶式のものである。また、井戸跡の周囲には使い水処理する排水施設が在るのが一般的であるが、本遺構ではそのような施設は検出されなかった。井戸跡を検出した時に焼土粒が薄く分布していたが、井戸跡内から出土した木製品の大部分は焼けてはおらず、炭もほとんど出土していないことから、焼失を受けたものとは考えられない。むしろ、多くの礫が加熱を受けた状態で出土したことから、カマド等を破壊した時の焼土であったと思われる。

大部分の遺物は井戸跡内から出土した木器、木製品である。これらは板材、角材、丸太材に分類できる。板材は鉋をかけたものがほとんどで、材質はマツ、スギが主である。角材には木口が方形となるものとそれらを半裁した割材とに分けられる。材質はクリが主である。丸太材は太いものはなく、ほとんどが直径5～7cmの一握りできるものである。材質はマツが中心である。古銭は掘立柱の掘り方と井戸跡から出土したが、すべて「寛永通宝」で所謂「新寛永」である。また、陶磁器は近世以後のものである。

以上の遺構と遺物の観察からみれば、遺構は古く、遺物は新しい様相を呈している。また、当地に家があったという伝承が残っており、本遺構に伴うとされる墓碑2基が遺構の南20mほど（畑地造成に伴い移動したもので本来の場所ではない）にある。その墓碑に刻まれた享年は「賀（嘉）永六年五月廿六日」と「明治五年三月三日」である。また、本遺構の東北東50mほどの所には3基の墓碑があり、それには「天保九年九月八日」、「天保九年十一月廿六日」、「安政四歳二月二十二日」と刻されている。これらは本遺構に直接伴うとの伝承はなく、一応無縁仏となっている。しかし、その当時から、この付近に民家があった一つの傍証といえるであろう。

引用参考文献

1. 岩手県（1971）：『土地分類基本調査 一戸』岩手県
2. 岩手日報社（1985）：『岩手年鑑 昭和60年度版』岩手県

3. 小平忠孝 (1983) : 『叭屋敷 I a 遺跡発掘調査報告書』 岩埋七
4. 工藤利幸、中川重紀、田村壮一 (1986) : 『馬場野 II 遺跡発掘調査報告書』 岩埋七
5. 村上達夫 (1983) : 『沼山遺跡・獄 I 遺跡・土弓 I 遺跡発掘調査報告書』 岩埋七
6. 佐々木嘉直、佐藤勝 (1983) : 『叭屋敷 I b 遺跡発掘調査報告書』 岩埋七
7. 村上達夫 (1983) : 『叭屋敷 II 遺跡発掘調査報告書』 岩埋七
8. 佐々木嘉直 (1983) : 『叭屋敷 III 遺跡発掘調査報告書』 岩埋七
9. 田鎖寿夫 (1987) : 『大日向 II 遺跡発掘調査報告書』 岩埋七
10. 遠藤勝博 (1983) : 『君成田 IV 遺跡発掘調査報告書』 岩埋七
11. 近藤宗光、鈴木恵治、酒井宗孝、大原一則、渡辺洋一、岩瀬久、光井文行 (1987) : 『駒板遺跡発掘調査報告書』 岩埋七
12. 軽米町 (1975) : 『軽米町誌』 軽米町
13. 草間俊一、司東真雄、他 (1986) : 『岩手県中世城館跡分布調査報告書』 岩手県教育委員会
14. 高橋与右エ門 (1986) : 『水神遺跡発掘調査報告書』 岩埋七
15. 石川長喜、渡辺洋一 (1986) : 『五庵 I 遺跡発掘調査報告書』 岩埋七
16. 平井進、石川長喜 (1984) : 『獄 II 遺跡発掘調査報告書』 岩埋七
17. 高橋与右エ門、吉田洋 (1982) : 『川向 III 遺跡発掘調査報告書』 岩埋七
18. 佐々木清文 (1983) : 『滝谷 III 遺跡発掘調査報告書』 岩埋七
19. 関豊 (1981) : 『中曾根 II 遺跡発掘調査報告書』 二戸市教育委員会
20. 酒井宗孝、石川長喜、平井進 (1986) : 『沼久保遺跡発掘調査報告書』 岩埋七
21. 平井進 (1987) : 『大堤 II 遺跡発掘調査報告書』 岩埋七
22. 平井進 (1986) : 『桂平遺跡発掘調査報告書』 岩埋七
23. 永瀬福男、熊谷太郎 (1980) : 『中田面遺跡発掘調査報告書』 秋田県教育委員会
24. 石井克己 (1986) : 『昭和61年度黒井峯遺跡発掘調査概報』 子持村教育委員会

プラント・オパール分析調査報告書

一 岩手県軽米町 皂角子久保VI遺跡 一

昭和62年11月

古環境研究所

1. はじめに

皂角子久保VI遺跡におけるプラント・オパール分析調査が終了しましたので、結果をご報告いたします。

この調査は、当遺跡で検出された畑状遺構における栽培植物（イネ科）の確認を目的として行なわれたものです。

2. 試料

現地調査は昭和62年9月17日に行ない、図1に示したA～Cの3地点で試料を採取した。基本層序は1層～6層に分層され（図1参照）、このうち1層と2層の間には平安時代前半に噴出したとされる「十和田a降下火山灰」が挟在している。溝跡（畑地跡）は、再堆積土とされる2層の下層に位置し、溝内には4層、4'層、5層が堆積している。

試料は、各地点の土層壁面において、各層ごとに5～10cm間隔で採取した（図2参照）。採取にあたっては、容量50cc採土管ならびにポリ袋を用いた。採取した試料数は計23点であり、このうち15点について分析を行なった。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行なった。

試料土の絶乾（105℃・24時間）、仮比重測定、試料土約1gを秤量、ガラスビーズ混入（直径約40 μ m、約0.02g）、脱有機物処理（電気炉灰化法または過酸化水素法）、超音波による分散（150W・26KHz・15分間）、沈底法による20 μ m以下の微粒子除去、乾燥、オイキット中に分散、プレパラート作成、検鏡、計数。なお、秤量は電子分析天秤を用いて1万分の1gの精度で行なった。

同定は、機動細胞に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）を対象に、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が500以上になるまで行

った。これはほぼプレパラート1枚分以上の精査に相当する。

試料に混入したガラスビーズの個数(個/g)に、計数結果(プラント・オパールとガラスビーズ個数の比率)をかけて、試料1gあたりのプラント・オパール個数を求めた。これに仮比重をかけて、試料1ccあたりのプラント・オパール個数を求めた。

こうして求められたプラント・オパール密度に、表1の換算計数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体各部乾重)をかけて植物体量(t/10a・cm)を算出した。

表1 各植物の換算係数(単位:10⁻⁵ g)

植物名	葉身	全地上部	種実
イ ネ	0.51	2.94	1.03
ヒ エ	1.34	12.20	5.54
ヨ シ	1.33	6.31	—
ゴキダケ	0.24	0.48	—
クマザサ属	0.21	—	—
ス ス キ	0.38	1.24	—

4. 分析結果

つぎの分類群について同定・定量を行い、数値データを表2に示した。イネ、ヨシ属、タケ亜科A(ネザサ節、マダケ属など)、タケ亜科B1(クマザサ属)、ウシクサ(ススキなど)キビ族A(ヒエ属)、キビ族B(エノコログサ属など)、シバ属、ジュズダマ属、樹木起源、表皮毛起源、棒状珪酸体、その他、不明。

また、イネ、ヨシ属、クマザサ属、ウシクサ族、ヒエ属については、プラント・オパール密度から植物体量を算出し、表3に示した。

5. 考察

当遺跡の畑状遺構は、溝部だけが検出されたものであり、当時の耕作土(畝部)は後代の耕作などによって削平されていた。したがって、溝内部に堆積した土壌(4、5層)が当時の耕作土の一部ではないかと見られていた。

そこで、4、5層を中心としてプラント・オパール分析を行なったが、堆積状況から考えて、他の時代の土壌が混入している危険性もあるため、分析結果については慎重な判断が必要と思われる。なお、サンプリング当日は台風にもなう風雨が強く、現場における土層の堆積状況の検討が充分に行えなかったことを付け加えておく。

当遺跡から検出されたプラント・オパールの分類群のうち、栽培種もしくは栽培種を含む分類群は、イネ、キビ族、ウシクサ族、ジュズダマ属である。これらについて、個別に検討を行った。

(1) イネについて

イネのプラント・オパールは、A地点の Ia-1層（現地表面）、Ia-4層、2層、4層およびC地点の2層から、いずれも少量検出された。

このうち、A地点の Ia-1層は最近の耕作に伴うものと思われる。2層は地表面下70cmと深いことから、最近の耕作に伴うプラント・オパールが混入したことは考えにくい。したがって、同地点では比較的古い時期から稲作が行われていたものと推定される。

4層は、畑状遺構にともなう耕作土を含んでいるものと見られていた。同層ではイネのプラント・オパールは検出されたものの、600個/gとごく少量である。このことから、畑状遺構でイネが栽培されていた可能性も考えられるが、上述のように上層からの混入の危険性も考慮しなければならない。

(2) キビ族について

キビ族植物のうち、ヒエ属にはヒエ、エノコログサ属にはアワ、キビ属にはキビという栽培植物が含まれている。しかし、現在のところキビ族植物の同定の精度は一部か属レベルで識別される段階であり、機動細胞珪酸体の形態から栽培種を特定するに至っていない。ここでは、典型的なヒエ属だけを特定しキビ族Aとした。キビ族Bはエノコログサ属、キビ属などであるが、ヒエ属の一部が含まれている可能性もある。

畑状遺構にともなう耕作土を含んでいるとされる4層では、キビ族AがA地点で600個/g、B地点で1,200個/g、キビ族BがA地点で1,200個/g、B地点で4,200個/g、C地点で600個/g検出された。また、5層ではキビ族Aは検出されず、キビ族BがA地点3,100個/g、B地点で1,800個/g検出された。このことから、畑状遺構でヒエやアワなどのキビ族植物が栽培されていた可能性も考えられるが、上述のように上層からの混入の危険性も考慮しなければならない。また、キビ族のプラント・オパールは5,000～6,000年前とされる。6層からも検出されているため、さらに慎重な判断を下すべきであろう。

(3) その他

当遺跡では、特にウシクサ族のプラント・オパールが多量に検出された。これらの大部分はススキ属に由来するものと見られる。同族にはサトウキビ属やモロコシ属も含まれるが、現在のところプラント・オパールの形態から栽培種を特定するには至っていない。

B地点の4層では、ジュズダマ属が少量検出された。同族には、畑作物であるハトムギが含まれるが、これについてもプラント・オパールの形態から栽培種を特定するには至っていない。

(4) まとめ

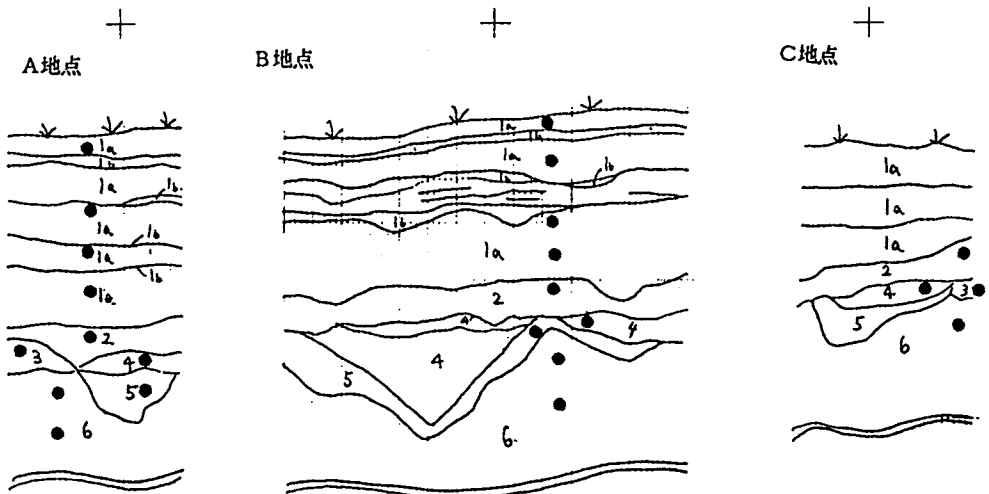
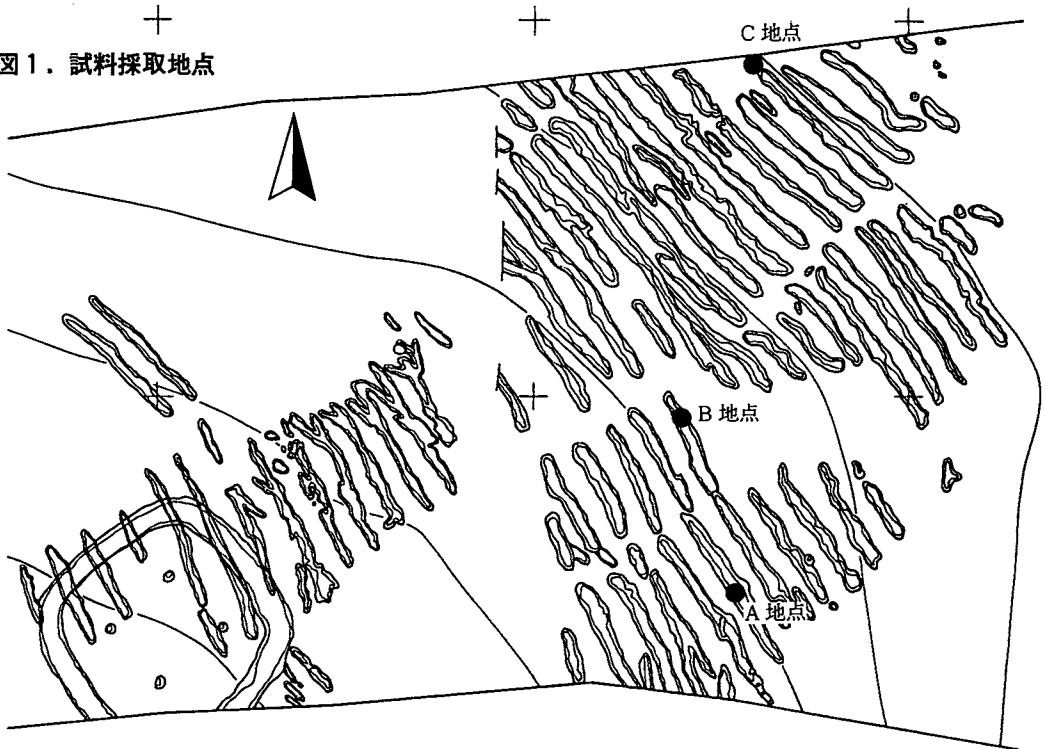
以上のように、同遺跡の畑状遺構では、イネおよびキビ族（ヒエやアワ）などが栽培されていた可能性が考えられる。しかし、後代における攪乱など土壌堆積状況の問題点などもあるため、栽培植物の明確な特定には至らなかった。

なお、プラント・オパール分析で復元できる植生はイネ科植物に限定されている。したがって、根菜類などの畑作物は対象外となっていることに留意されたい。

◎参考文献

- 軽米町皂角子久保VI遺跡、現地説明会資料、1987（財団法人岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター）
- 藤原宏志、1976 プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—、考古学と自然科学，9：15—29
- 藤原宏志、1979 プラント・オパール分析法の基礎的研究（3）—福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（*O.sativa*L.）生産総量の推定—、考古学と自然科学，12：29—41
- 藤原宏志・杉山真二、1984 プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）—プラント・オパール分析による水田址の探査—、考古学と自然科学，17：73—85
- 杉山真二・藤原宏志、1986 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—、考古学と自然科学，19：69—84

図1. 試料採取地点



注 記

- 1 a. 10Y R 弱黒褐色土 極小の小石混りの上位は耕作土
- 1 b. 砂
- 2. 10Y R 弱黒色土 1aより締まり、To-bを含む、再堆積土である。
- 3. 10Y R 弱黒褐色土 2よりやや褐色がかかる、上部にTo-bを若干含む
- 4. 10Y R 弱～弱灰褐色土 黒色土にTo-aを含む
- 4'. 10Y R 弱～弱灰褐色土 4よりTo-aが少なく、4層がフラクションをおこしたもの
- 5. 10Y R 弱～弱黒色土 畝間等の埴土、To-bと若干の中級浮石を含む
- 6. 10Y R 弱～弱黒褐色土 黒色土が混入した中級浮石層

表2 試料1gあたりのプラント・オパール個数(×100個/g)

(岩手県軽米町、皂角子久保VI遺跡)

※タケ亜科Aはネザサ節・マダケ属など、タケ亜科B1はクマザサ属、キビ族Aはヒエ属、キビ族Bはエノコログサ属など。

A地点

層位	イネ	ヨシ	タケ亜科A	タケ亜科B1	ウシクサ族	キビ族A	キビ族B	シバ属	ジュズダマ属	樹木起源	表皮毛起源	棒状	その他・不明
1 a-1	17	0	0	17	130	0	34	6	0	6	0	11	192
1 a-4	6	6	0	18	103	36	0	30	0	0	12	54	193
2	6	6	0	29	69	17	12	0	0	0	11	46	115
3	0	6	0	24	124	0	12	0	0	0	18	47	302
4	6	12	0	6	61	6	12	0	0	0	0	12	133
5	0	8	0	8	141	0	31	0	0	0	0	39	172
6-1	0	18	0	18	55	0	18	0	0	0	12	12	239

B地点

層位	イネ	ヨシ	タケ亜科A	タケ亜科B1	ウシクサ族	キビ族A	キビ族B	シバ属	ジュズダマ属	樹木起源	表皮毛起源	棒状	その他・不明
2	0	0	0	29	77	6	30	0	0	0	12	11	148
4	0	6	0	30	162	12	42	0	6	6	6	6	6
5	0	6	0	6	184	0	18	0	0	0	6	25	257
6-1	0	12	0	18	289	12	55	0	0	0	18	12	400

C地点

層位	イネ	ヨシ	タケ亜科A	タケ亜科B1	ウシクサ族	キビ族A	キビ族B	シバ属	ジュズダマ属	樹木起源	表皮毛起源	棒状	その他・不明
2	6	6	0	24	146	18	36	6	0	6	6	36	486
3	0	0	0	6	114	0	31	0	6	0	6	13	324
4	0	6	0	6	42	0	6	0	0	0	0	30	197
6	0	0	0	32	191	0	13	0	0	0	19	26	466

表3 植物体生産量の推定値 (単位: t/10 a・cm)

※ウシクサ族はススキ、ヒエ属はヒエの換算係数を用いて算出。

全重は地上部全体重。

A地点

層位	イ 全重	ネ (籾重)	ヨシ 全重	クマザサ属 葉身重	ウシクサ族 全重	ヒエ属 全重	エ (籾重)
1 a-1	0.38	(0.13)	0.00	0.06	1.28	0.00	(0.00)
1 a-4	0.12	(0.04)	0.28	0.07	1.01	3.41	(1.55)
2	0.09	(0.03)	0.21	0.09	0.56	1.34	(0.61)
3	0.00	(0.00)	0.21	0.06	0.88	0.00	(0.00)
4	0.09	(0.03)	0.49	0.01	0.45	0.37	(0.17)
5	0.00	(0.00)	0.28	0.02	1.04	0.00	(0.00)
6-1	0.00	(0.00)	0.76	0.05	0.41	0.00	(0.00)

B地点

層位	イ 全重	ネ (籾重)	ヨシ 全重	クマザサ属 葉身重	ウシクサ族 全重	ヒエ属 全重	エ (籾重)
2	0.00	(0.00)	0.00	0.09	0.62	0.37	(0.17)
4	0.00	(0.00)	0.21	0.08	1.15	0.73	(0.33)
5	0.00	(0.00)	0.21	0.01	1.35	0.00	(0.00)
6-1	0.00	(0.00)	0.49	0.05	2.21	0.85	(0.39)

C地点

層位	イ 全重	ネ (籾重)	ヨシ 全重	クマザサ属 葉身重	ウシクサ族 全重	ヒエ属 全重	エ (籾重)
2	0.09	(0.03)	0.21	0.07	1.08	1.22	(0.55)
3	0.00	(0.00)	0.00	0.01	0.84	0.00	(0.00)
4	0.00	(0.00)	0.21	0.01	0.31	0.00	(0.00)
6	0.00	(0.00)	0.00	0.09	1.41	0.00	(0.00)

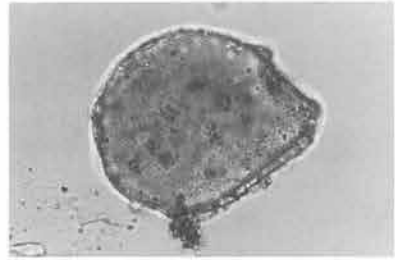
顕微鏡写真リスト

— 軽米町、皂角子久保VI遺跡—

No.	プラント・オパール	地点	試料名	1987.11.26	
				倍率	ネガNo.
1	イネ	A	1 a - 1	400	1 - 7
2	イネ	A	3	400	1 - 10
3	イネ	C	2	400	2 - 14
4	イネ	C	2	400	1 - 2
5	ヨシ属	A	5	400	1 - 10
6	ヨシ属	A	5	400	1 - 15
7	タケ亜科 (クマザサ属)	A	1 a - 4	400	1 - 5
8	タケ亜科 (クマザサ属)	A	2	400	1 - 8
9	タケ亜科 (クマザサ属)	A	3	400	1 - 12
10	タケ亜科 (クマザサ属)	B	6 - 1	400	2 - 8
11	タケ亜科 (クマザサ属)	C	6	400	2 - 17
12	ウシクサ族	A	2	400	2 - 9
13	ウシクサ族	B	5	400	2 - 7
14	ウシクサ族	B	5	400	2 - 6
15	ウシクサ族	C	6	400	2 - 20
16	ウシクサ族	C	6	400	2 - 16
17	キビ族 (ヒエ属)	B	2	400	1 - 1
18	キビ族 (ヒエ属)	B	2	400	1 - 23
19	キビ族 (ヒエ属)	B	6 - 1	400	2 - 9
20	キビ族 (その他)	A	3	400	2 - 25
21	キビ族 (その他)	A	5	400	1 - 19
22	キビ族 (その他)	B	2	400	2 - 23
23	キビ族 (その他)	B	4	400	1 - 25
24	キビ族 (その他)	B	6 - 1	400	2 - 11
25	キビ族 (その他)	C	4	400	2 - 15
26	ジュズダマ属	B	4	400	1 - 24
27	樹木起源A	B	4	400	2 - 4
28	樹木起源A	C	6	400	2 - 20
29	樹木起源B	B	4	400	2 - 1
30	樹木起源B	C	2	400	2 - 12
31	ムギ類の穎?	A	1 a - 4	400	1 - 3
32	不明	A	1 a - 4	400	2 - 5
33	不明	B	6 - 1	400	1 - 11
34	不明	A	6 - 1	400	2 - 22
35	不明	A	4	400	1 - 14
36	不明	B	6 - 1	400	2 - 10
37	不明	C	6	400	2 - 18
38	不明	A	1 a - 1	400	1 - 6
39	不明	C	2	400	2 - 13
40	不明	A	6 - 1	400	1 - 22
41	不明	A	5	400	1 - 18
42	不明	A	1 a - 4	100	1 - 4



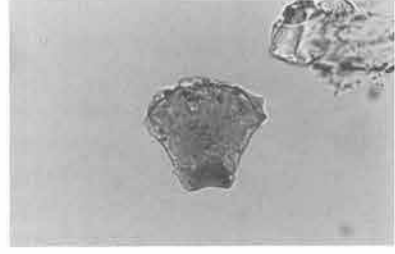
1



6



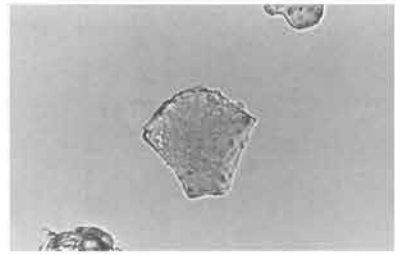
2



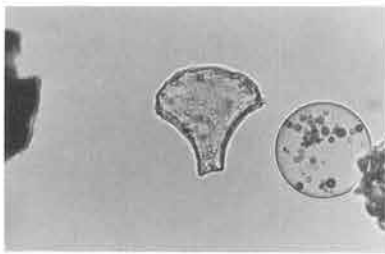
7



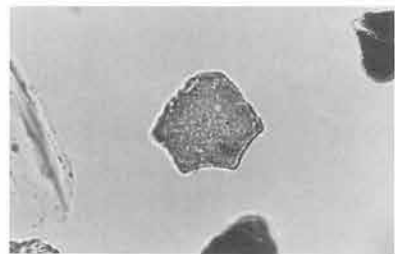
3



8



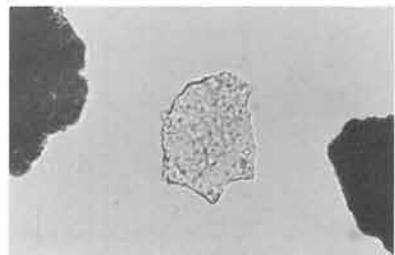
4



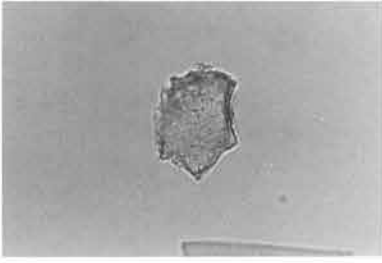
9



5



10



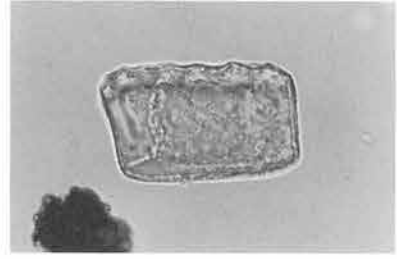
11



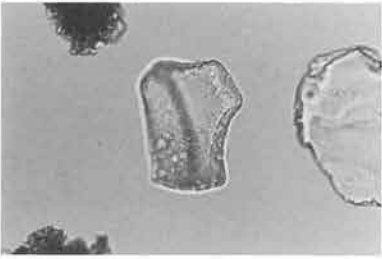
16



12



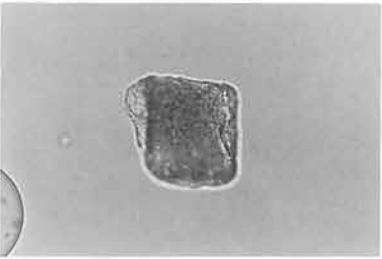
17



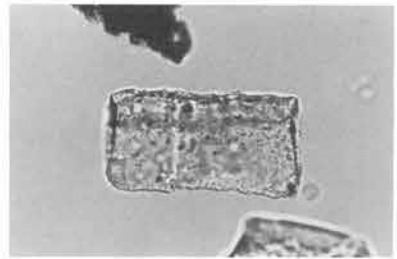
13



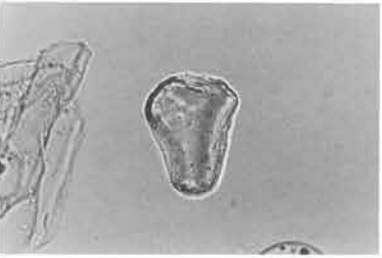
18



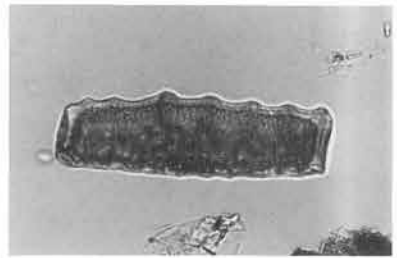
14



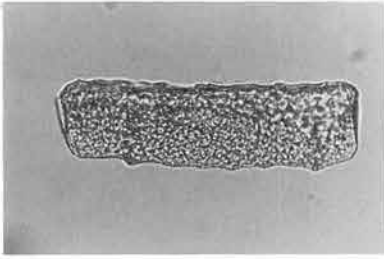
19



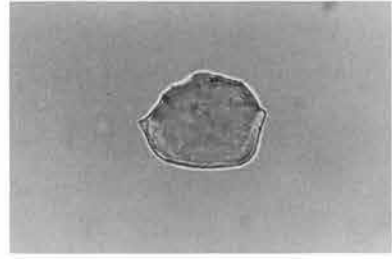
15



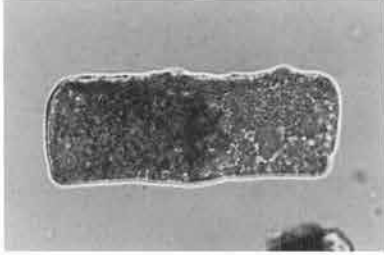
20



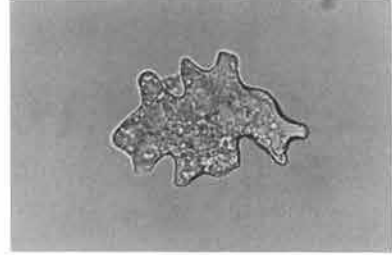
21



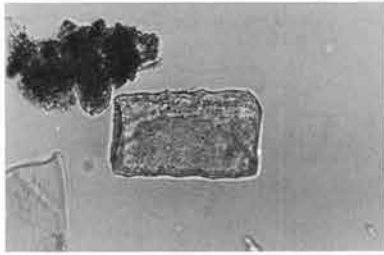
26



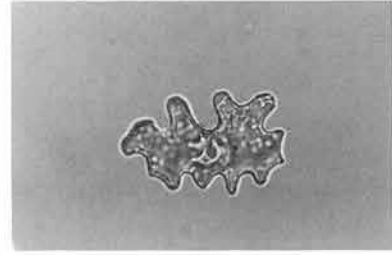
22



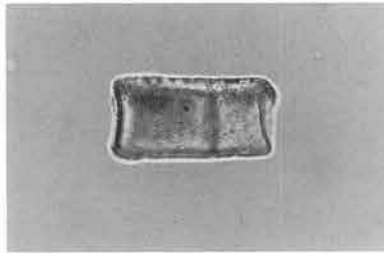
27



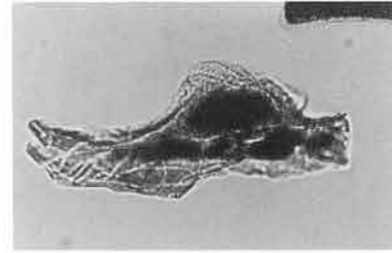
23



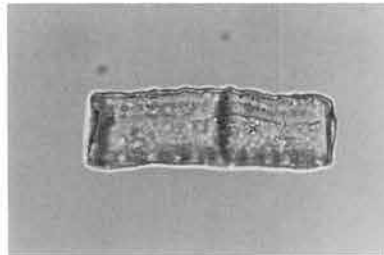
28



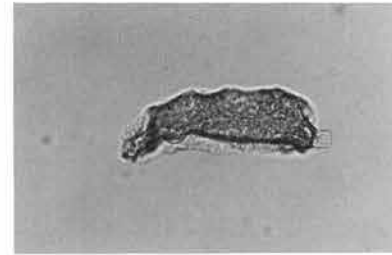
24



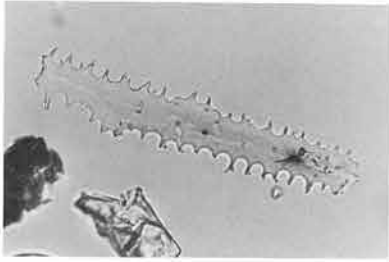
29



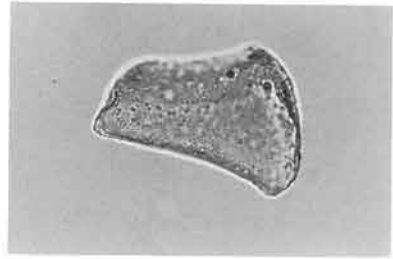
25



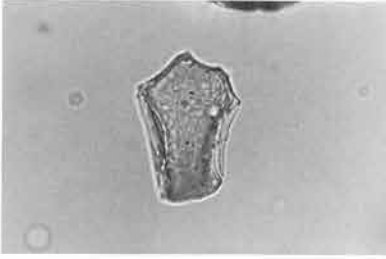
30



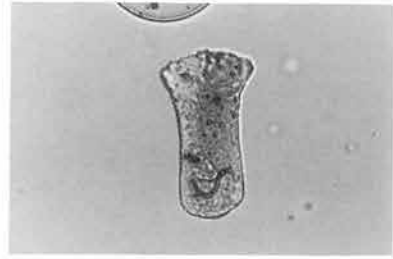
31



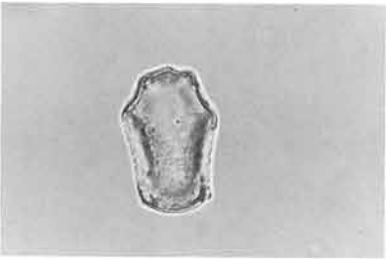
36



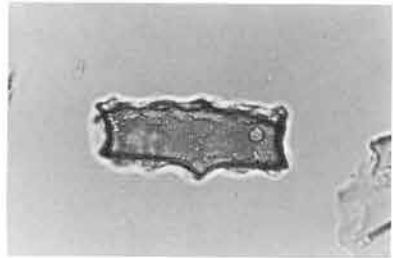
32



37



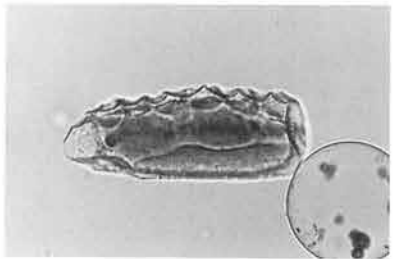
33



38



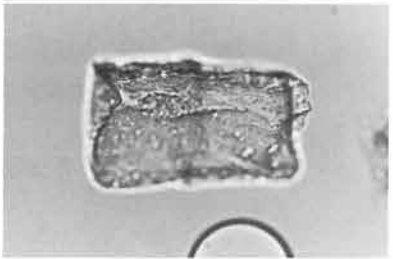
34



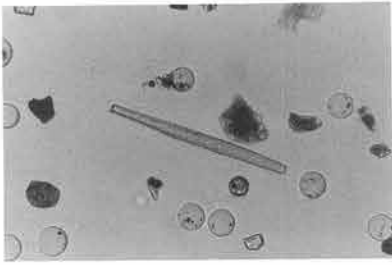
39



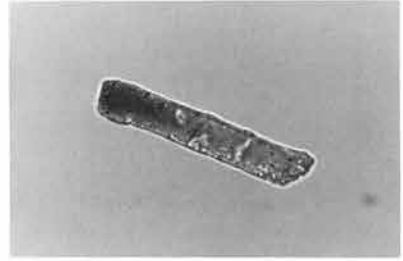
35



40



41



42

皂角子久保Ⅵ遺跡出土試料 種子同定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

貴、財団法人 岩手県文化振興事業団殿より御依頼のありました皂角子久保Ⅵ遺跡出土試料の種子同定が終了致しましたので、その結果をご報告申し上げます。

1 試料

試料は、皂角子久保Ⅵ遺跡から採取された合計66試料（No.1～66）である。各々の試料は、既に洗別抽出された単体種子（1～7個体）から成る。

No.1～27とNo.64～66は平安時代のもとのされる住居址覆土と畑跡から、No.28～63は明治時代初頭のもとのされる井戸から検出されたものである。

2 方法

試料を実体顕微鏡下で観察し、同定した。同時に写真図版（図版1・2）も作成した。

3 結果

試料の中には、昆虫の外骨格など種子ではないものの、種子であるかどうか判別できないもの、種子ではあるが種類不明のものもあったが、以下の14科20種類（Taxa）が同定された（表1・2）。

表1 同定された種子とその生育形

科名	種名	生育形*
GRAMINEAE (イネ科)	cf. <i>Setaria</i> sp. ** (エノコログサ属類似種)	草
	<i>Oryza sativa</i> ** (イネ)	草・栽
	cf. <i>Hordeum</i> sp.** (オオムギ類似種)	草・栽
	Gramineae spp.** (イネ科の一種)	
CYPERACEAE (カヤツリグサ科)	<i>Scirpus</i> sp. (ホタルイ属の一種)	水・草
BETULACEAE (カバノキ科)	<i>Betula</i> sp. (カバノキ属の一種)	落・高
FAGACEAE (アナ科)	<i>Quercus</i> spp.** (コナラ属の一種)	高
	<i>Castanea crenata</i> ** (クリ)	落・高・(栽)
MORECEAE (クワ科)	<i>Humulus scandens</i> (カナムグラ)	草
	<i>Cannabis sativa</i> (アサ)	草・栽
POLYGONACEAE (タデ科)	<i>Fagopyrum esculentum</i> ** (ソバ)	草・栽
CHEPODIACEAE (アカザ科)	<i>Chenopodium album</i> (シロザ)	草
MAGNOLIACEAE (モクレン科)	<i>Magnolia kobus</i> (コブシ)	落・高
ROSACEAE (バラ科)	<i>Prunus persica</i> ** (モモ)	落・高・栽
	<i>P. armeniana</i> ** (アンズ)	落・高・栽
LEGUMINOSAE (マメ科)	Legminosae sp.** (マメ科の一種)	草・(栽)
ANACARDIACEAE (ウルシ科)	<i>Rhus</i> sp. (ウルシ属の一種)	高～低
RHAMNACEAE (クロウメドキ科)	<i>Berchemia</i> sp. (クマヤナギ属の一種)	落・低
VITIDACEAE (ブドウ科)	<i>Vitis</i> spp.** (ブドウ属の一種)	低・つる・(栽)
CORNACEAE (ミズキ科)	<i>Cornus brachypoda</i> (クマノミズキ)	落・高

* : 栽=栽培 水=水生 草=草本 落=落葉性 つる=つる性 高=高木 低=低木

** : 食用となる種または種を含むTaxa

表 2 皂角子久保VI跡出土種子の種類

試料番号	出土地点など	種 類
1	I A-1 住床31	ブドウ属の一種
2	I A-1 住床31	ブドウ属の一種・クマノミズキ
3	I A-1 住床32	エノコログサ属類似種
4	I A-1 住床32	種類不明
5	I A-1 住床32	イネ
6	I A-1 住床33	種類不明 (2点)
7	II A-1 住42	エノコログサ属類似種 (2点)
8	II A-1 住43	種類不明 (2点)
9	II A-1 住43	オオムギ類似種・種類不明
10	II A-1 住43	種類不明 (2点)
11	II A-1 住44	昆虫
12	II A-1 住44	種類不明 (2点)
13	II A-1 住45	—
14	II A-1 住45	シロザ・種類不明
15	II A-1 住50	昆虫
16	IV A-1 住30	マメ科の一種
17	IV A-1 住30	イネ
18	IV A-1 住36	—
19	IV A-1 住36	カバノキ属の一種 (2点)
20	IV A-2 住4	ホタルイ属の一種
21	IV A-2 住34	エノコログサ属類似種
22	IV A-2 住35	イネ科の一種 (7点)
23	E-95, S-13 畑跡37	種子? (2点)
24	E-41, S-21 畑跡38	種子?
25	E-95, S-13 畑跡39	種子? (2点)
26	E-94, S-13 畑跡40	種類不明 (2点)
27	E-82, S-25 畑跡41	オオムギ類似種
28	井戸 1	種類不明
29	井戸 3	種子?
30	井戸 5	コナラ属の一種
31	井戸 6	ソバ
32	井戸 7	種子?
33	井戸 8	種子?
34	井戸 8	種類不明
35	井戸 9	種子?
36	井戸 9	種子?
37	井戸 10	種子?
38	井戸 11	イネ
39	井戸 12	クマヤナギ属の一種
40	井戸 12	ブドウ属の一種
41	井戸 13	ウルシ属の一種
42	井戸 14	種子?
43	井戸 14	種子不明
44	井戸 16	イネ
45	井戸 16	カナムグラ
46	井戸 17	種子?
47	井戸 17	クリ
48	井戸 18	アサ
49	井戸 18	種子?
50	井戸 19	エノコログサ属類似種
51	井戸 20	コブシ

表 2 (続き)

試料番号	出土地点など	種 類
52	井戸 21	ソバ
53	井戸 22	ブドウ属の一種
54	井戸 23	種類不明
55	井戸 24	種子?
56	井戸 25	—
57	井戸 26	イネ科の一種
58	井戸 27	アサ
59	井戸 28	エノコログサ属類似種・種類不明
60	井戸 46	モモ
61	井戸 47	アンズ
62	井戸 48	アサ
63	井戸 49	コナラ属の一種
64	I A - 1 住床50	種類不明
65	I A - 1 住床50	種類不明
66	I A - 1 住床50	エノコログサ属類似種

※虫; 昆虫の外骨格片, 一; 種子以外のもの, 種子?, 種子であるかどうか不明のもの, 種類不明; 種子ではあるが同定できなかったもの。

表 3 鳥角子久保VI遺跡出土の平安時代と明治時代とされる種子の種構成の比較

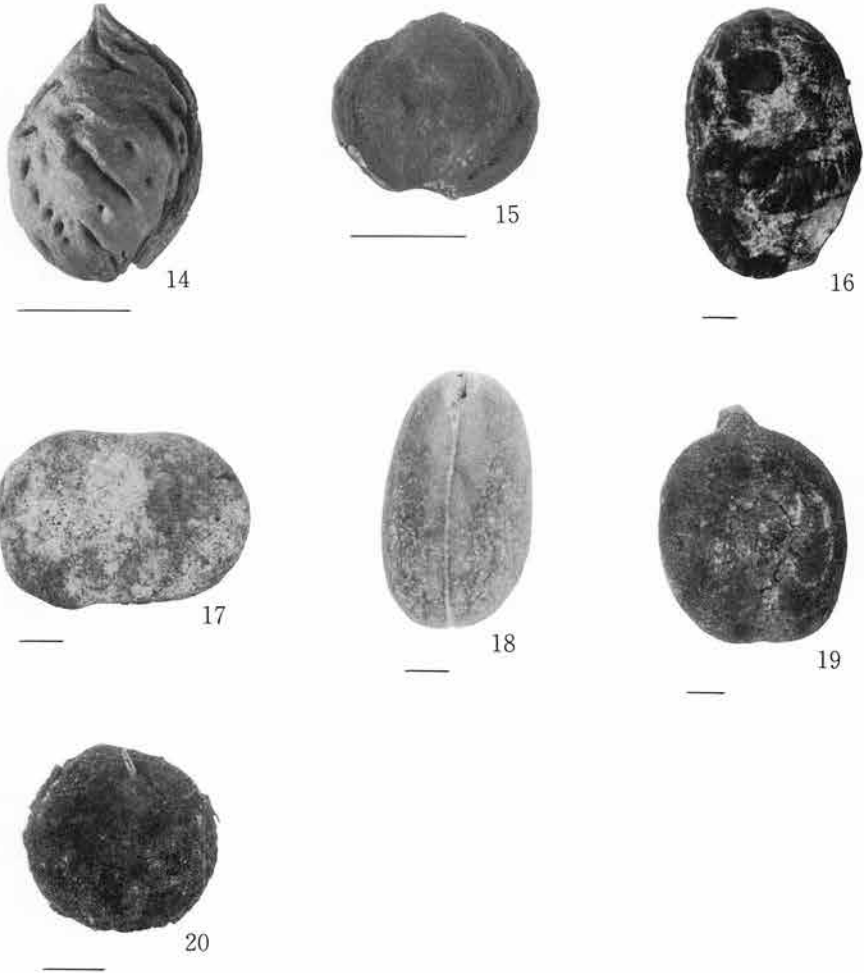
種 類/時 代	種 類/時 代		種 類/時 代	種 類/時 代	
	平安	明治		平安	明治
エノコログサ属類似種	5	2	コブシ		1
イネ	2	2	モモ		1
オオムギ類似種	2		アンズ		1
イネ科の一種	7	1	マメ科の一種	1	
ホタルイ属の一種	1		ウルシ属の一種		1
カバノキ属の一種	2		クマヤナギ属の一種		1
コナラ属の一種		2	ブドウ属の一種	2	2
クリ		1	クマノミズキ	1	
カナムグラ		1	種類不明	15	5
アサ		3			
ソバ		2			
シロザ	1		合 計	39	26

同定された20種類のうち、イネ・オオムギ類似種・アサ・ソバ・モモ・アンズの6種類は栽培種であり渡来種でもある。また、平安時代とされるものと明治時代とされるものの中には共通種は少ない。(表3)

(图版 1)



(図版 2)



図版 1

- 1 : エノコログサ類似種 (No21) 2 : イネ (No 5) 3 : オオムギ属類似種 (No27)
4 : イネ科の一種 (No57) 5 : ホタルイ属の一種 (No20) 6 : カバノキ属の一種 (No19)
7 : コナラ属の一種 (No30) 8 : クリ (No47) 9 : カナムグラ (No45)
10 : アサ (No48) 11 : ソバ (No31) 12 : シロザ (No14) 13 : コブシ (No51)

図版 2

- 14 : モモ (No60) 15 : アンズ (No61) 16 : マメ科の一種 (No16)
17 : ウルシ属の一種 (No41) 18 : クマヤナギ属の一種 (No39) 19 : ブドウ属の一種 (No53)
20 : クマノミズキ (No 2)

スケール : 7 : 8 : 13は 5 mm, 14 : 15は 1 cm, その他は 1 mm

写真図版



写真図版 1 調査区全景(空中写真)



写真図版 2 平安時代の遺構群(空中写真)



調査前風景 (西側斜面)



重機を使用して



精査風景



プラント・オパールのサンプリング



基本層序

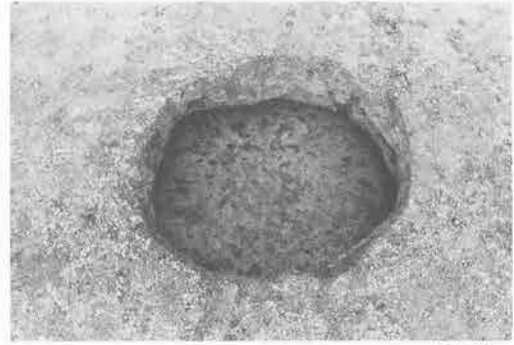


現地説明会

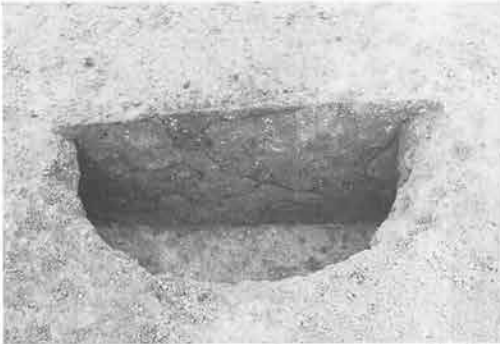
写真図版 3 調査風景・基本層序等



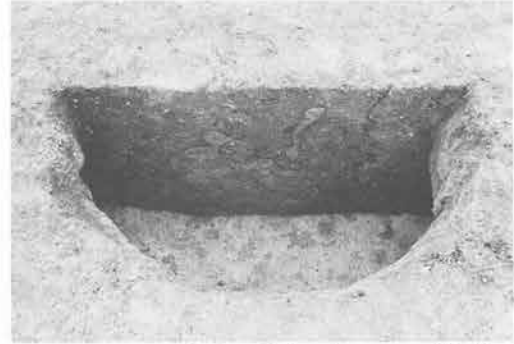
(平面)



(平面)



VA-56ピット (断面)



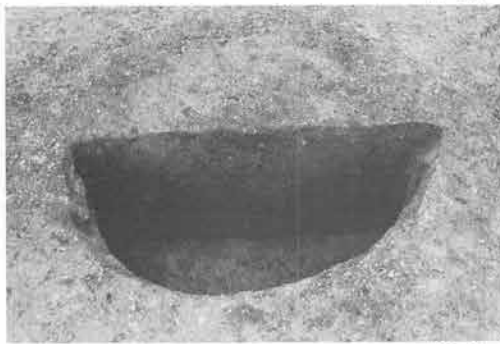
VA-52ピット (断面)



(平面)



(平面)



VA-51ピット (断面)



VA-57ピット (断面)

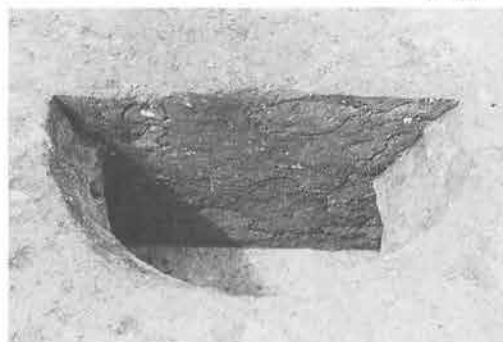
写真図版4 VA-51,52,56,57ピット



(平面)



(平面)



VI A-52ピット (断面)



V B-51ピット (断面)



(平面)



(平面)



VI A-53ピット (断面)



VI B-51ピット (断面)

写真図版5 VI A-52, V B-51, VI A-53, VI B-51ピット



(平面)



(平面)



VI B-53ピット (断面)



VI A-54ピット (断面)



(平面)



VI A-55ピット (断面)

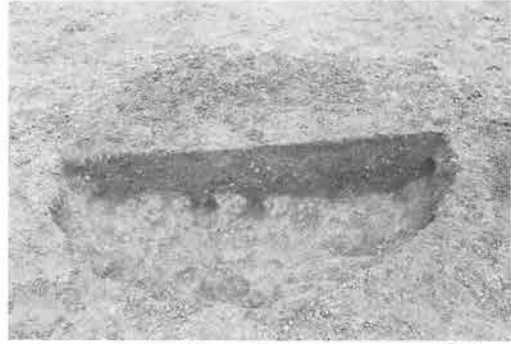
写真図版6 VI A-54,55, VI B-53ピット



VA-54ピット (平面)



(平面)



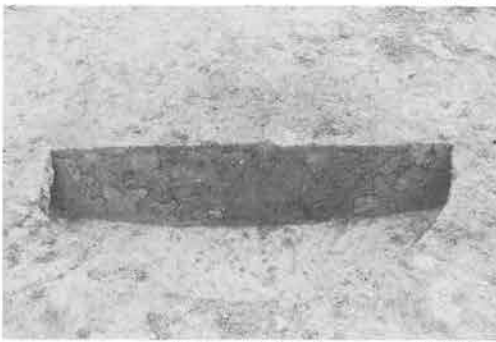
VA-53ピット (断面)



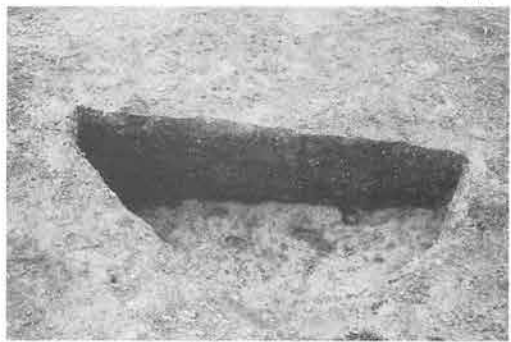
(平面)



(平面)



VIA-51ピット (断面)



VIB-52ピット (断面)

写真図版7 VA-53,54, VIA-51, VIB-52ピット



(平面)



(平面)



Ⅲ A—57陥し穴 (断面)



Ⅲ A—58陥し穴 (断面)



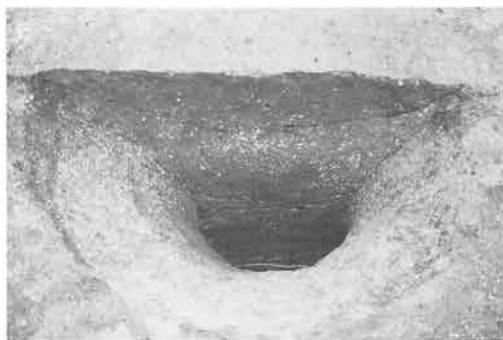
(平面)



(平面)



Ⅲ A—59陥し穴 (断面)



Ⅲ A—60陥し穴 (断面)

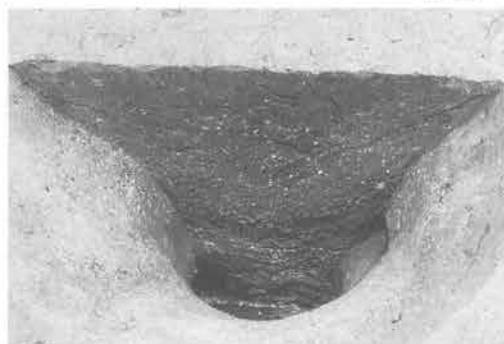
写真図版 8 Ⅲ A—57～60陥し穴



(平面)



IV A-55陥し穴 (平面)



III A-61陥し穴 (断面)



(平面)



(平面)



IV A-56陥し穴 (断面)



IV A-57陥し穴 (断面)

写真図版 9 III A-61, IV A-55~57陥し穴



(平面)



(平面)



IV A—58陥し穴 (断面)

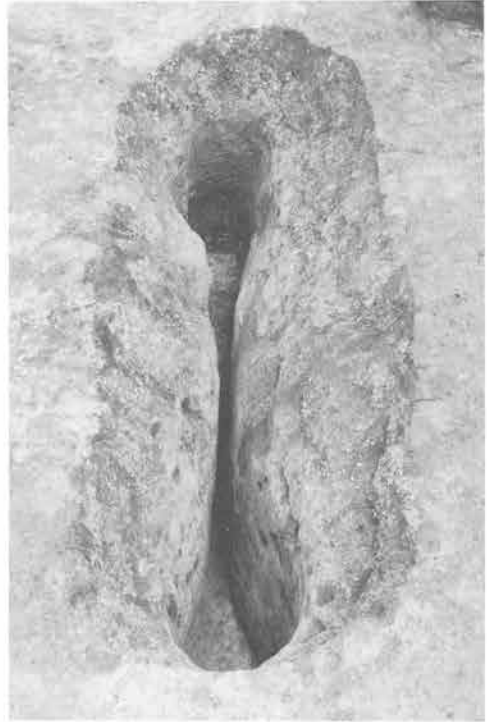


IV A—59陥し穴 (断面)

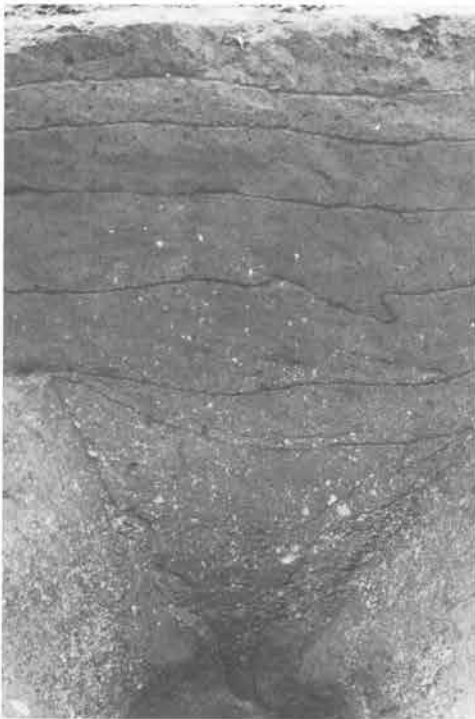


円筒状陥し穴群

写真図版10 IV A—58・59陥し穴



(平面)

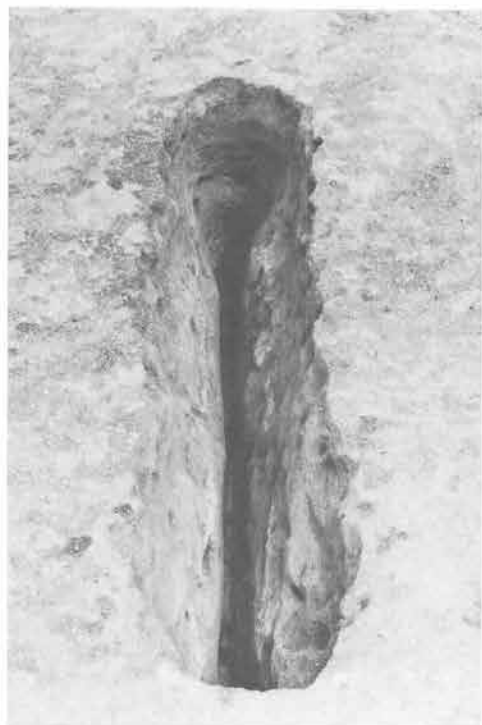


Ⅲ A—101陥し穴 (断面)



V A—104陥し穴 (断面)

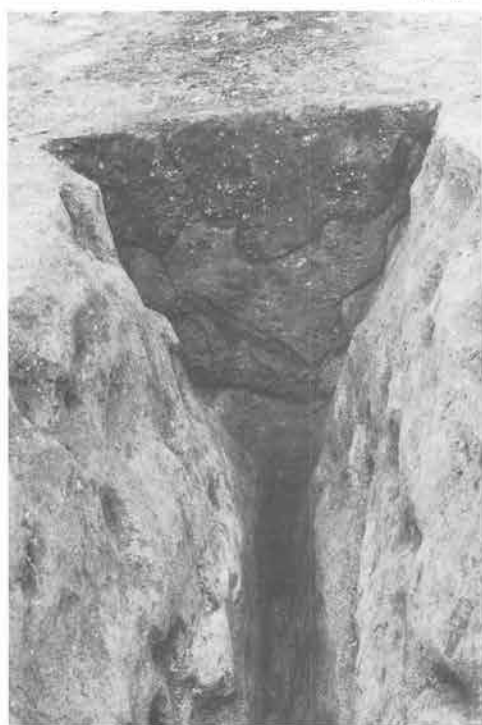
写真図版11 Ⅲ A—101, V A—104陥し穴



(平面)



(平面)



VA-101陥し穴 (断面)



VA-102陥し穴 (断面)

写真図版12 VA-101・102陥し穴



(平面)



(平面)

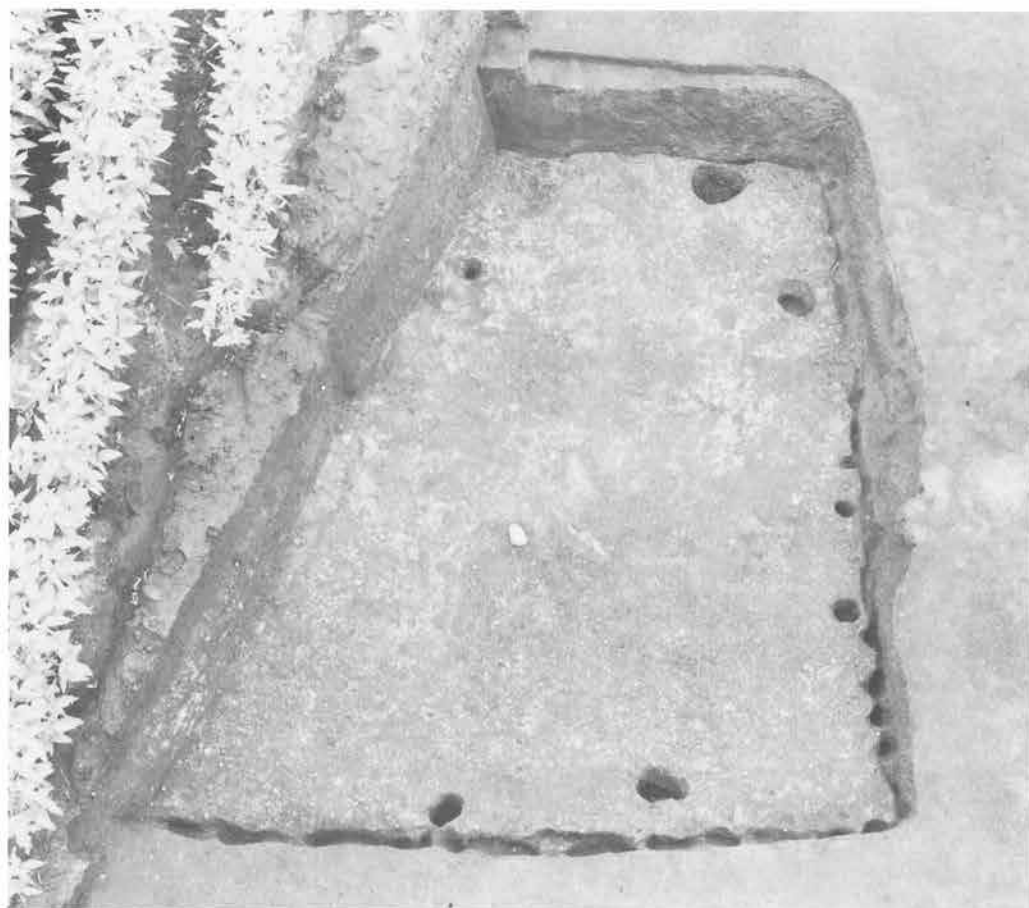


VA-103陥し穴 (断面)



VIA-101陥し穴 (断面)

写真図版13 VA-103, VIA-101陥し穴



(完掘状況)

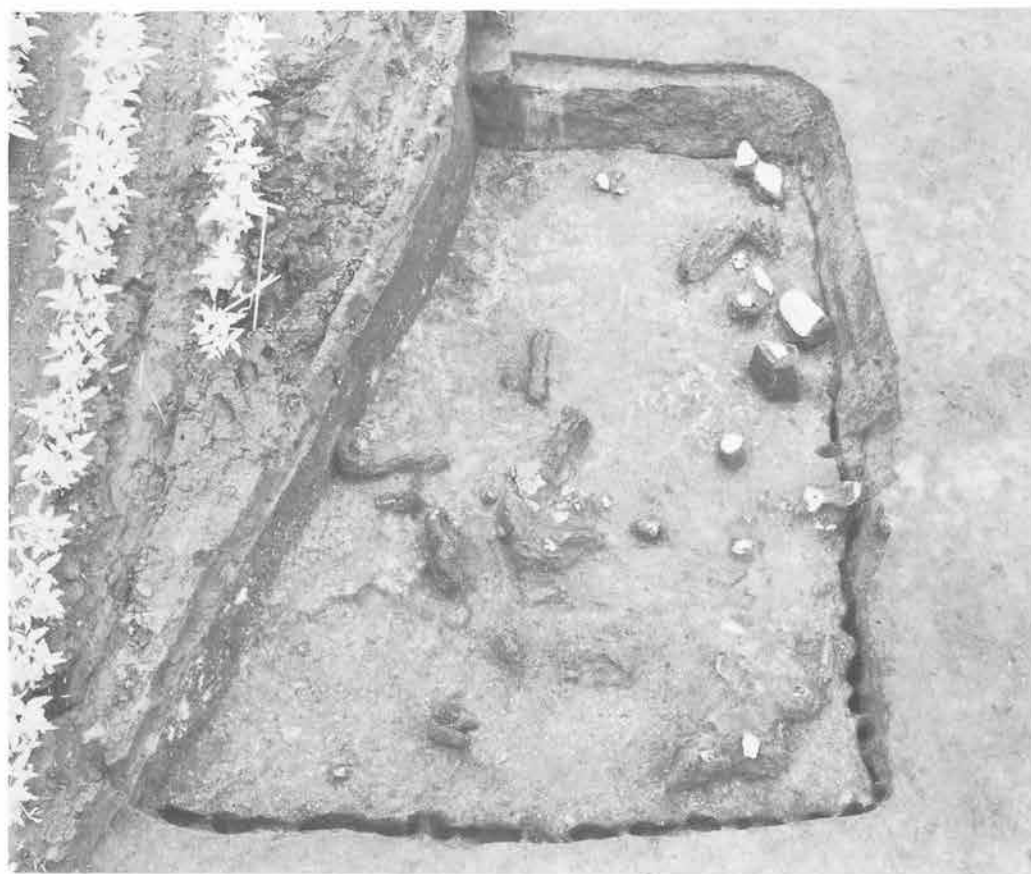


(埋土断面)



(粘土のタタキ)

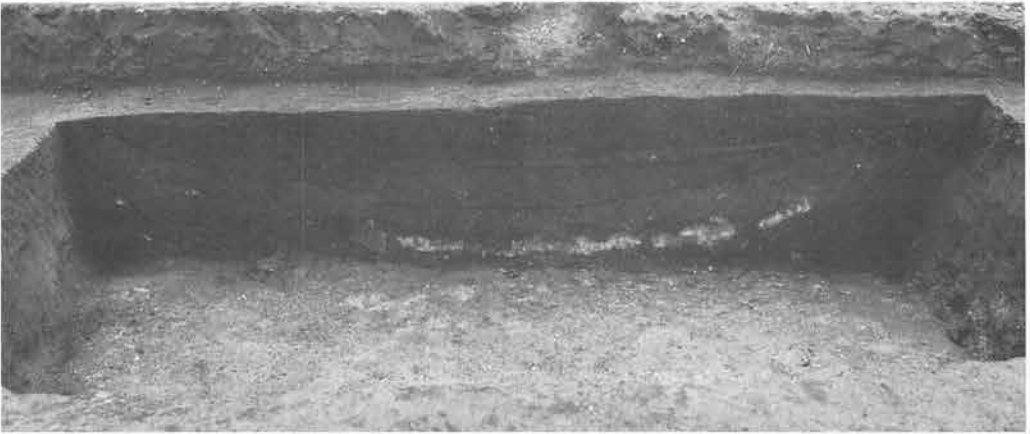
写真図版14 I A—1 住居跡



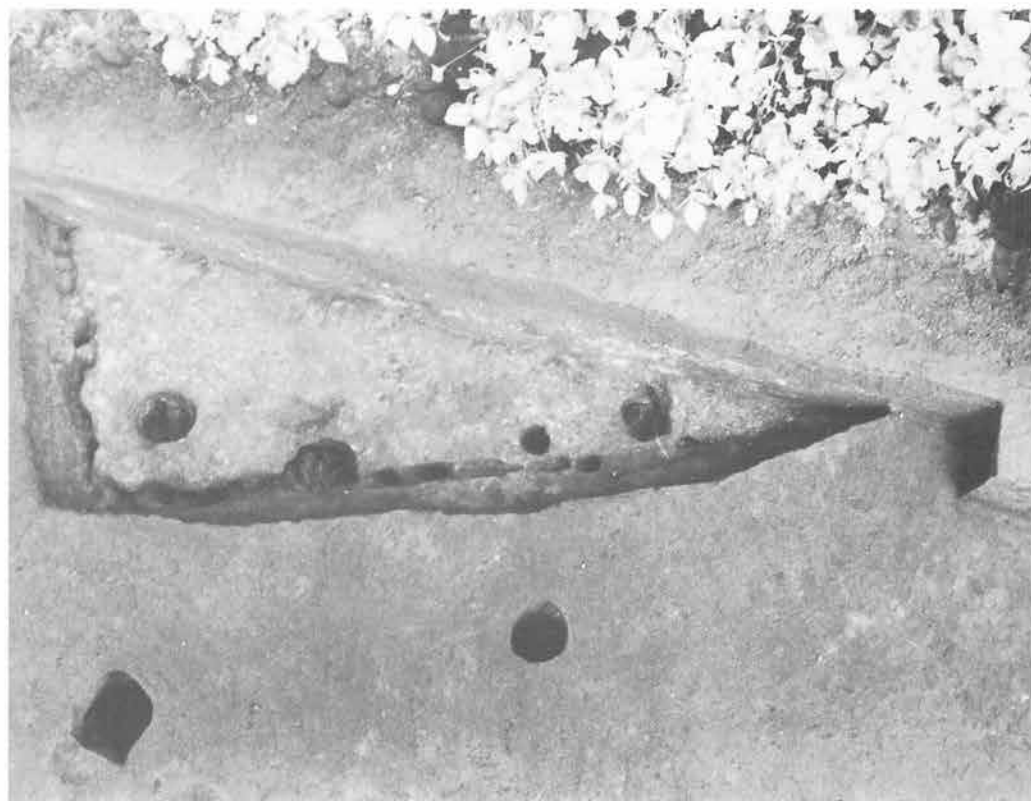
写真図版15 I A-1 住居跡遺物出土状況



(平面)



(土層断面)



(土層断面)



(平面)



(平面)



(土層断面)



(カマド検出状況)



(煙道部土層断面)

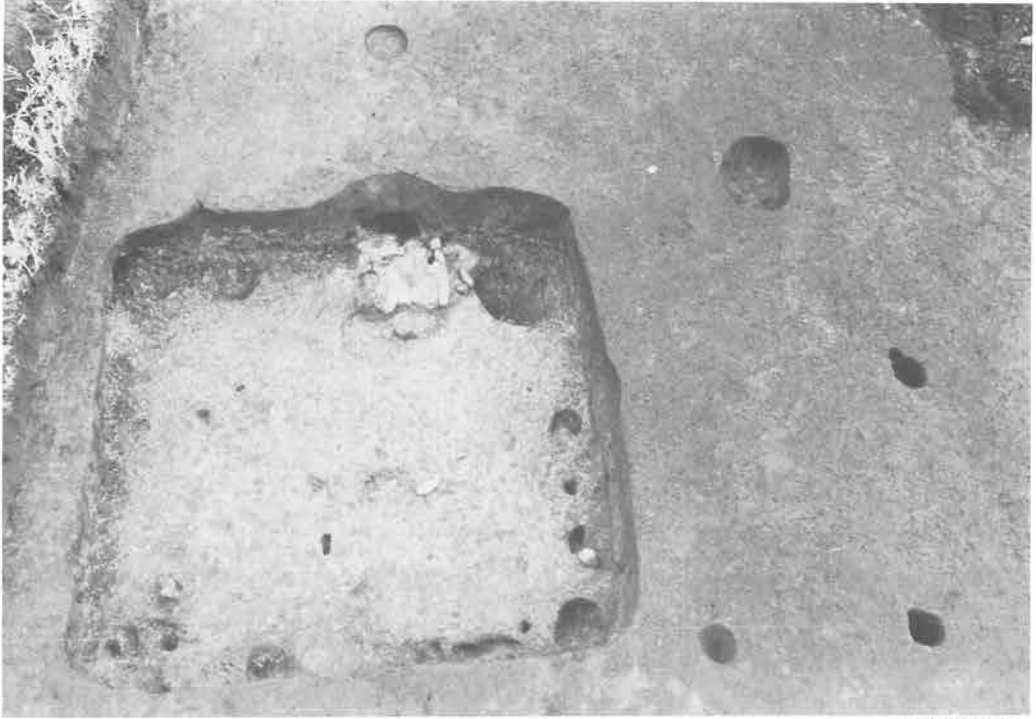


(ワラ状炭化物出土状況)

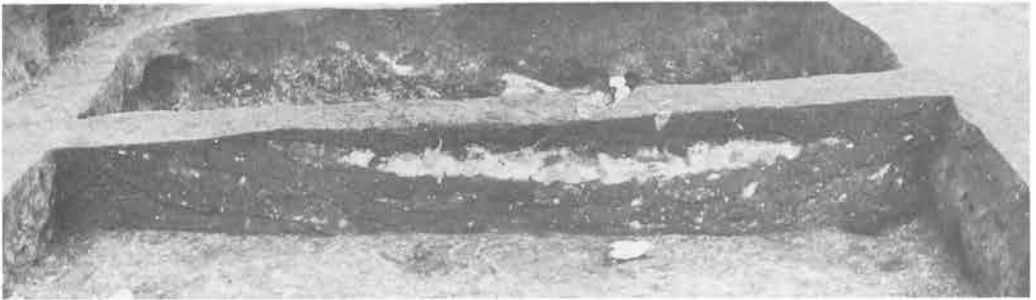


(鉄滓出土状況)

写真図版19 IV A-1 住居跡・カマド・遺物出土状況



(完掘状況)



(埋土断面)

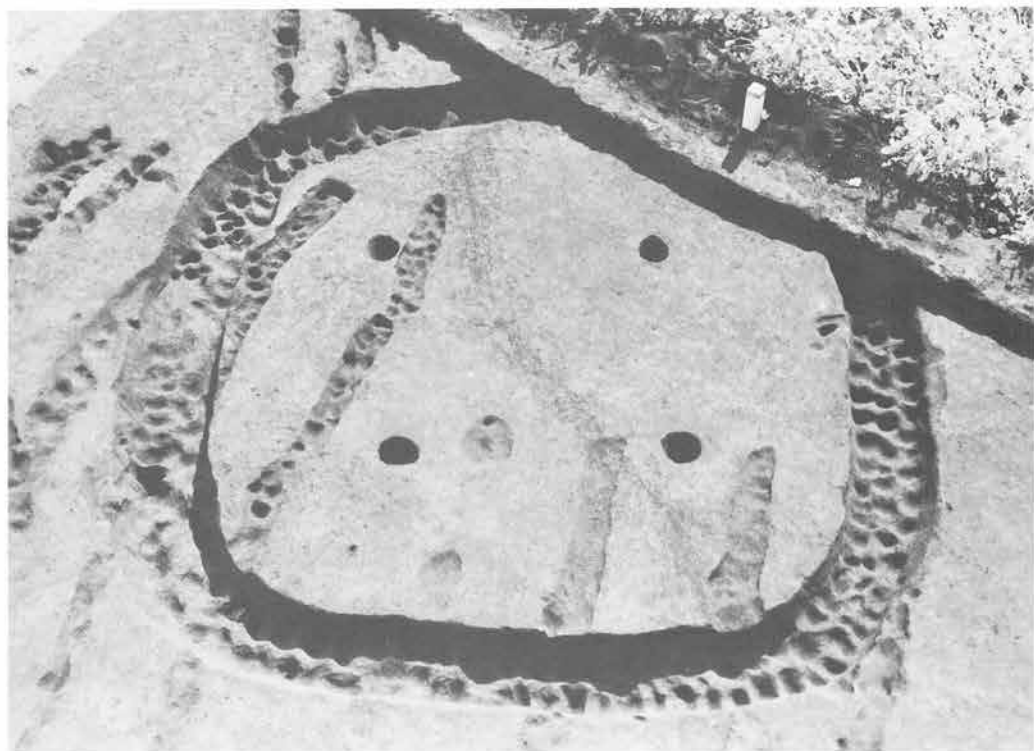


(カマド)



(煙道部)

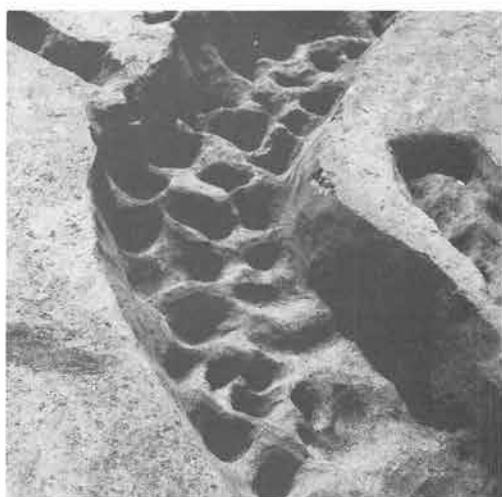
写真図版20 IV A-2 住居跡



(完掘状況)



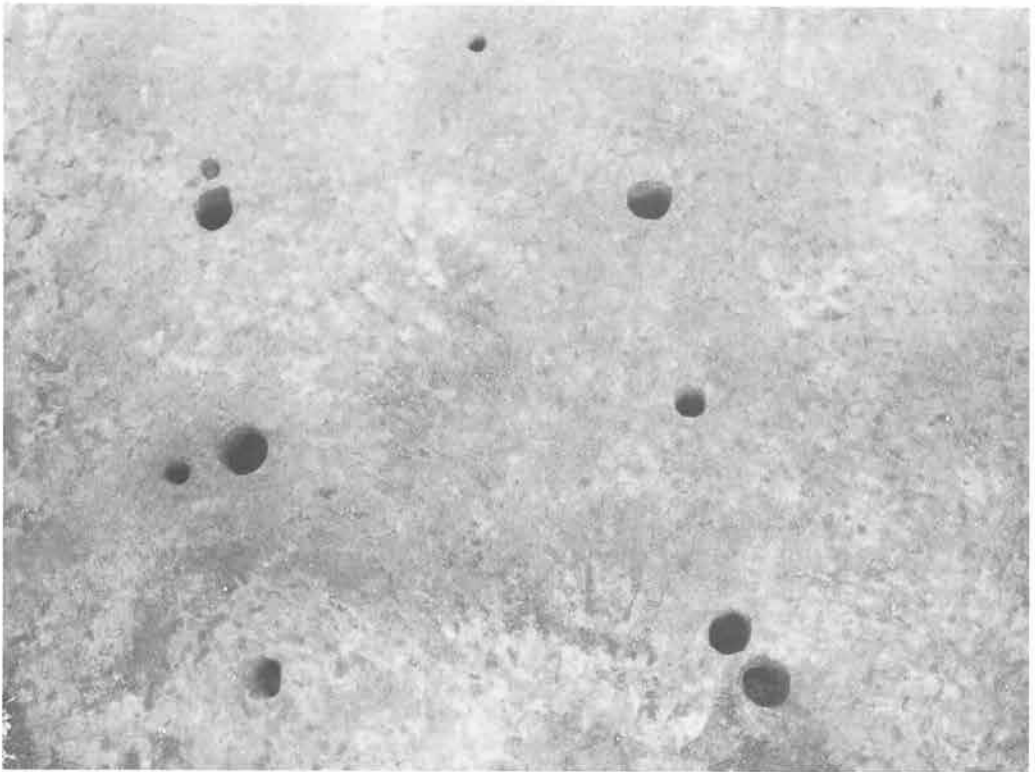
(埋土断面)



(掘り方)



Ⅲ A—302掘立柱建物跡



Ⅲ A—303掘立柱建物跡

写真図版22 Ⅲ A—302・303掘立柱建物跡



(完掘状況)

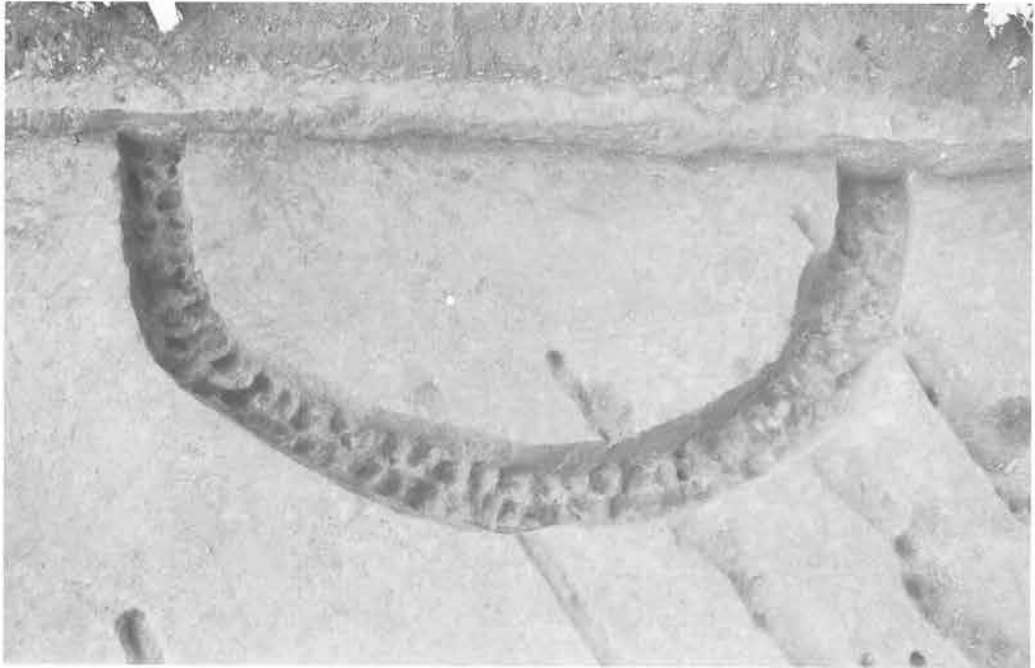


(北側、埋土断面)



(中央、埋土断面)

写真図版23 III A—201溝跡



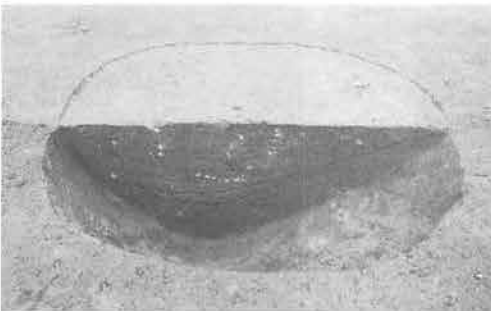
II A-201溝跡



(平面)



(平面)



III A-51ピット (断面)

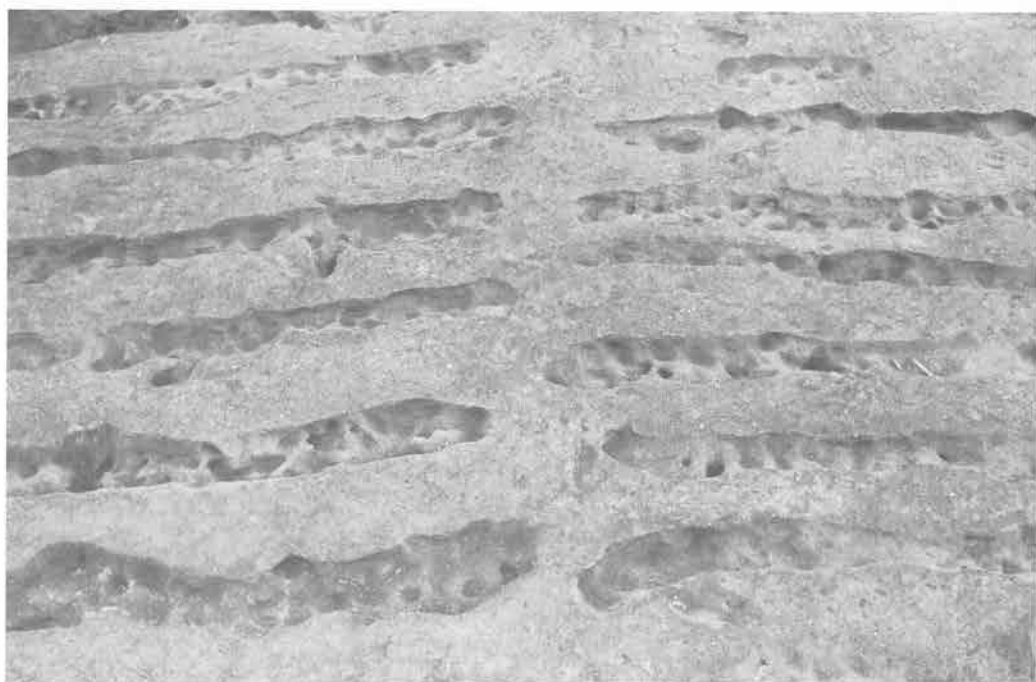


IV A-51ピット (断面)

写真図版24 II A-201溝跡, III A-51, IV A-51ピット



(IV A 区畑地跡完掘状況)



(畑地跡拡大)



(畑地跡検出状況)



(掘立柱建物との重複)



(溝跡との重複)



(畝間土層断面)

写真図版26 畑地跡の検出・重複状況



(完掘状況)



(P₁平面)



(P₂断面)



(P₂平面)



(P₃平面)



(P₄断面)



(P₅断面)



(P₃断面)



(P₄平面)

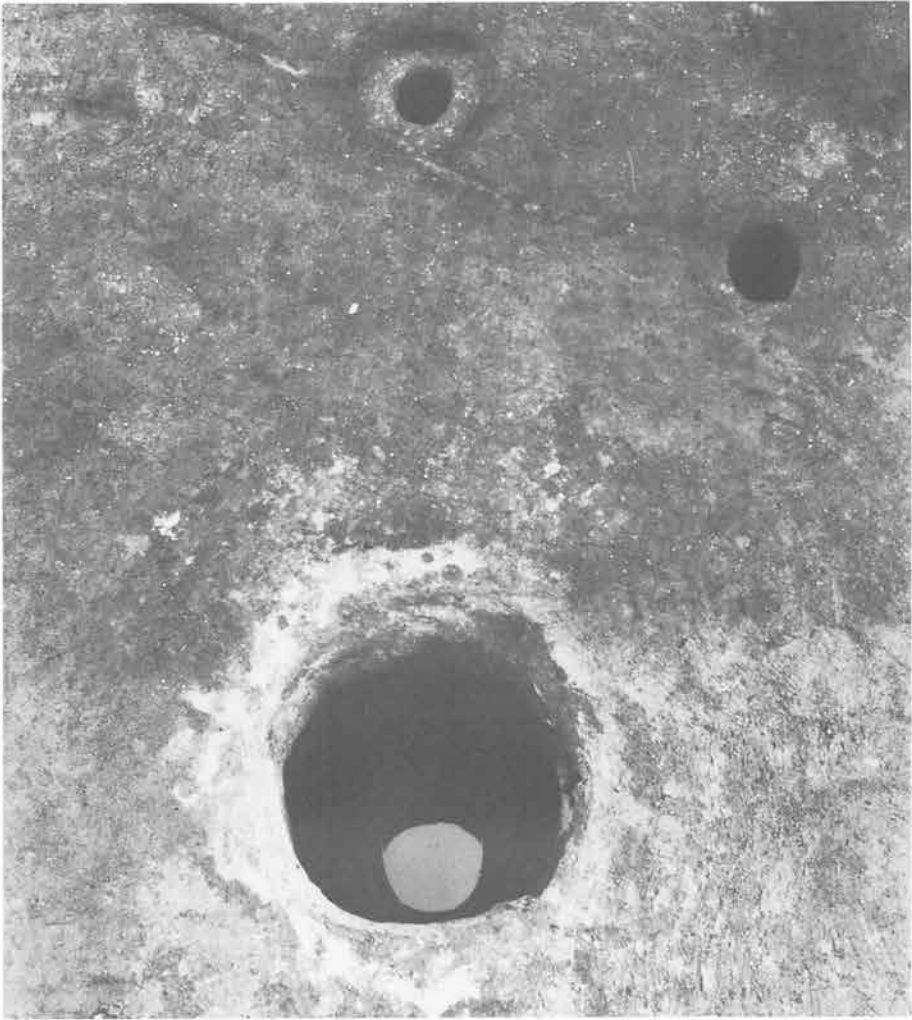


(P₅平面)



(P₆断面)

写真図版27 ⅧA-1 住居跡

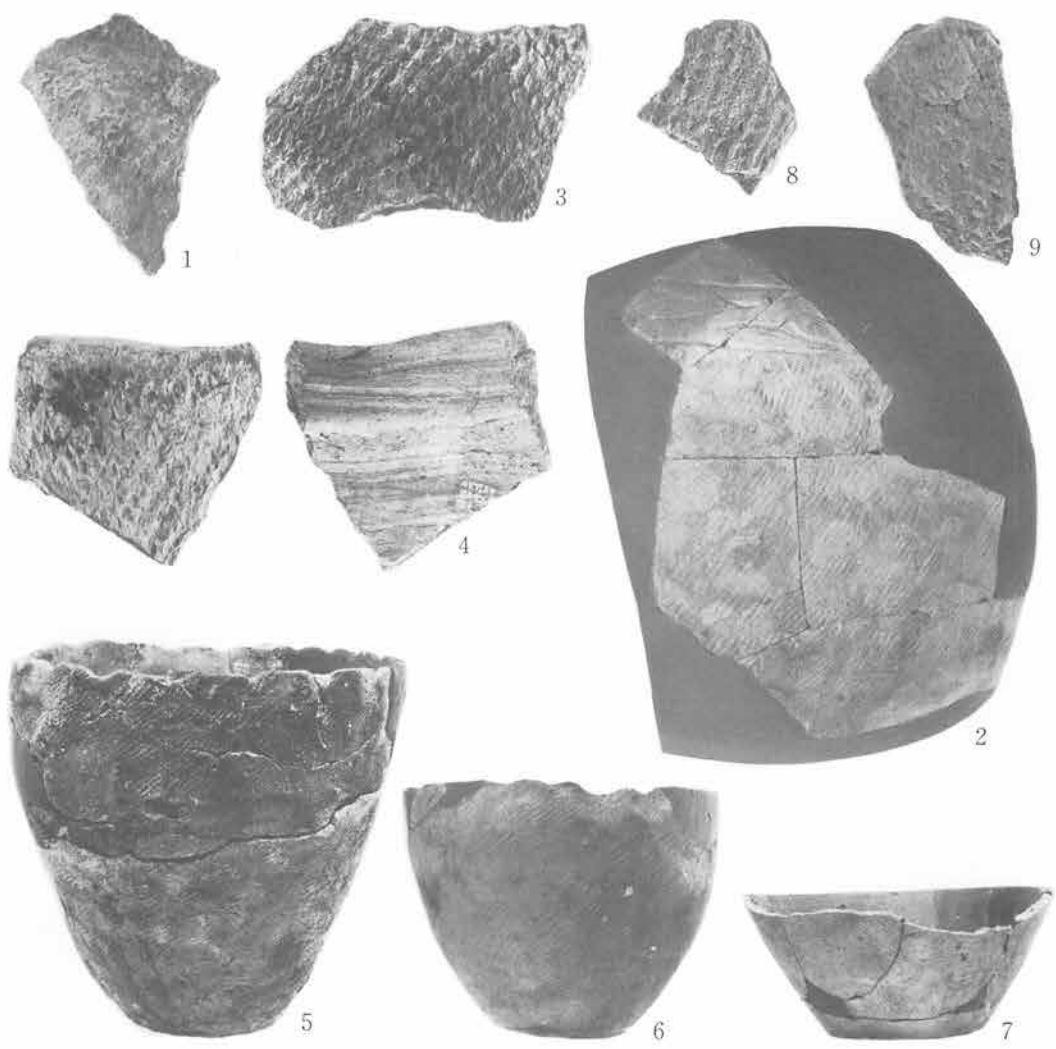


(完掘状況)

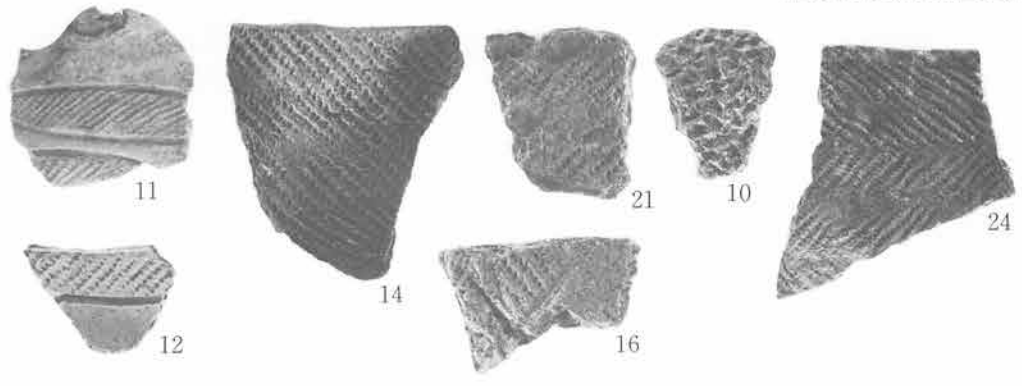


(遺物出土状況)

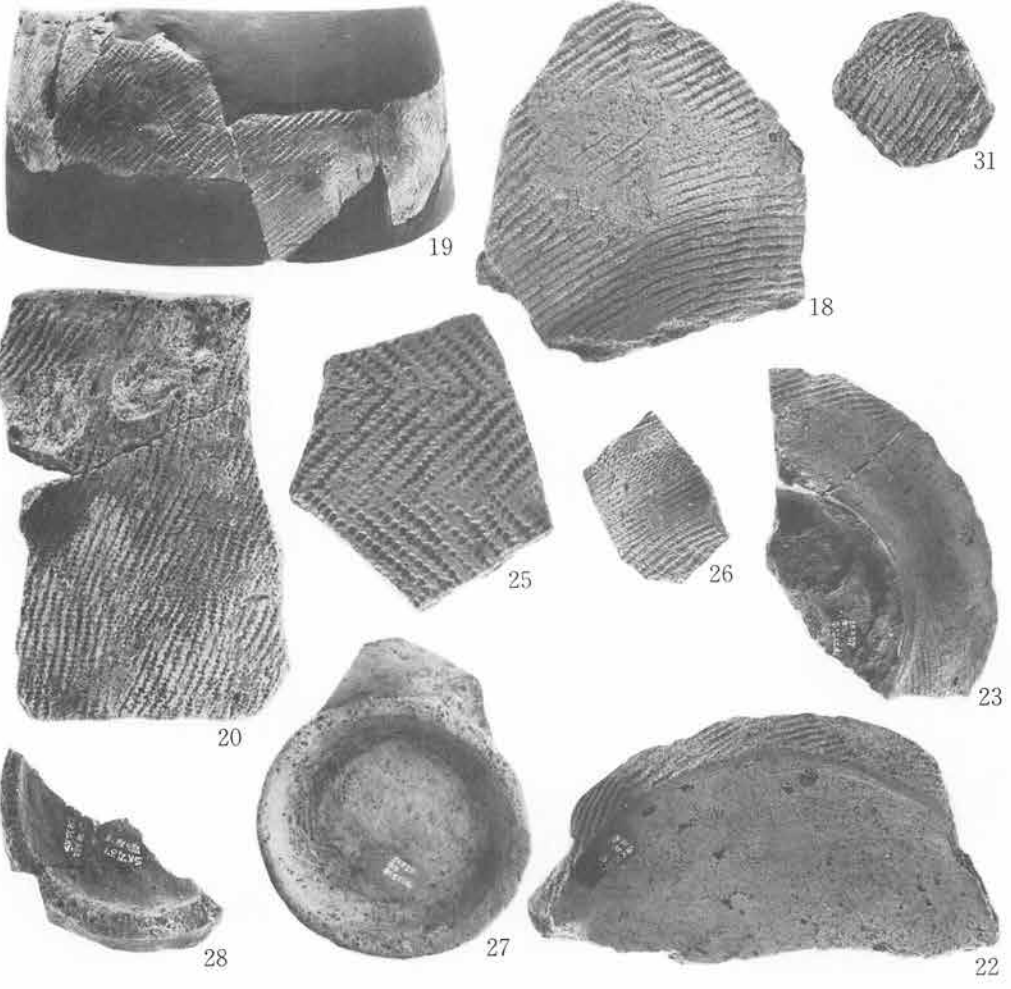
写真図版28 VIII A—301井戸跡



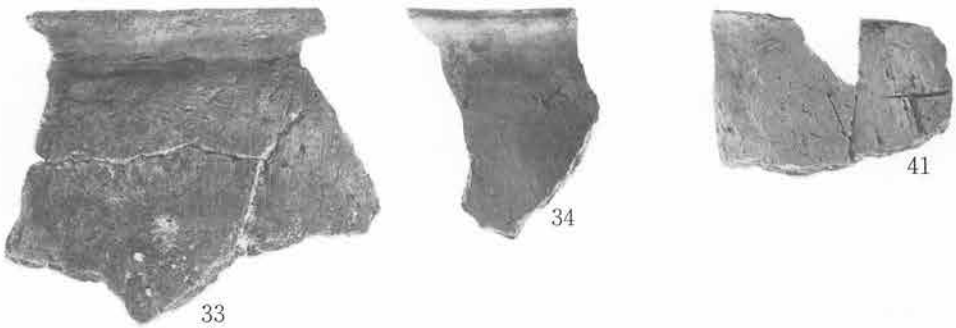
縄文土器遺構内出土遺物



写真図版29 縄文土器

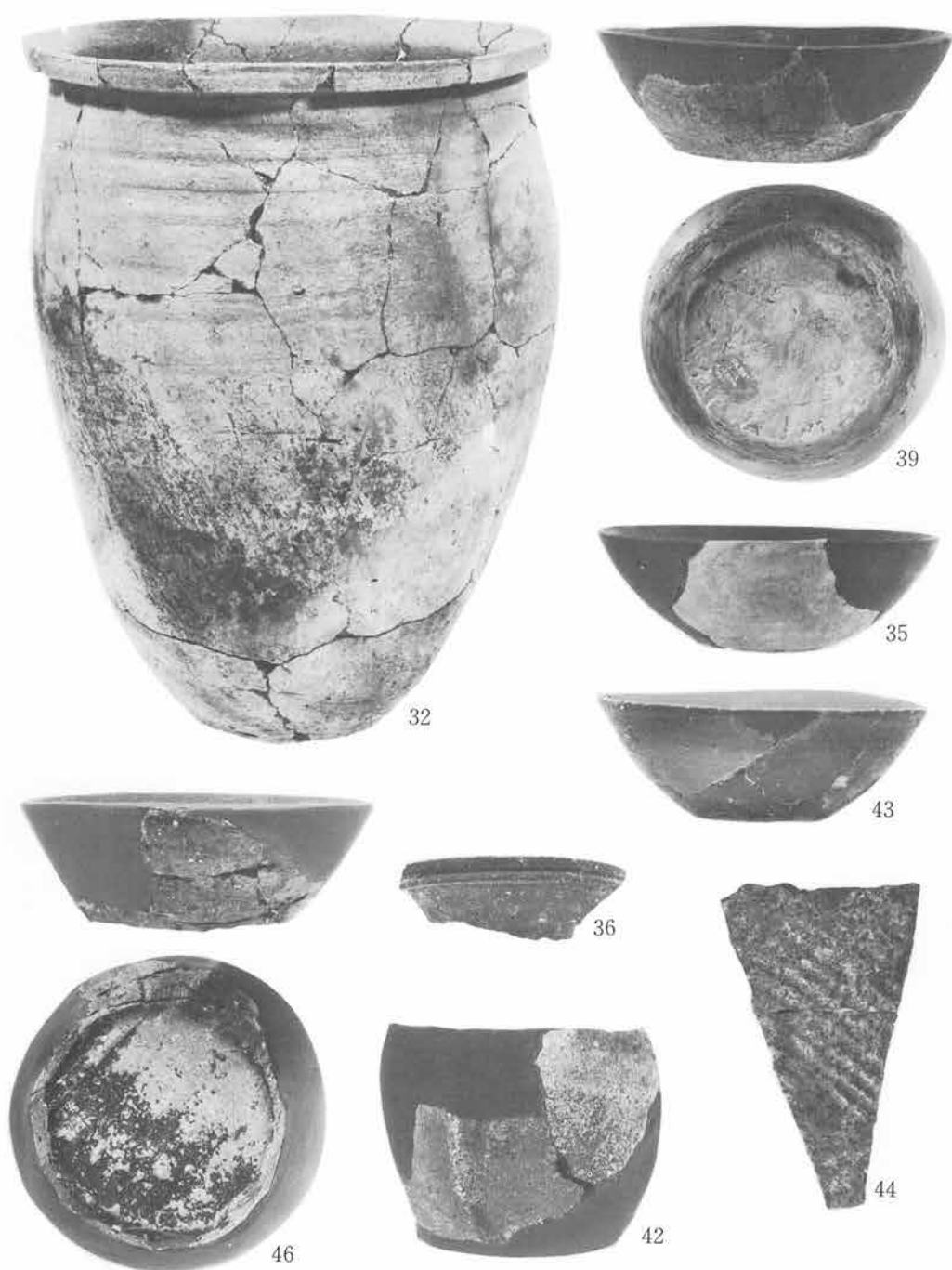


縄文土器・遺構外出土遺物



I A-1 住居跡内出土遺物

写真図版30 縄文土器及びI A-1 住居跡内出土遺物



写真図版31 I A—1住居跡内出土遺物



47



48

ⅢA—1 住居跡内出土遺物



49



50



52



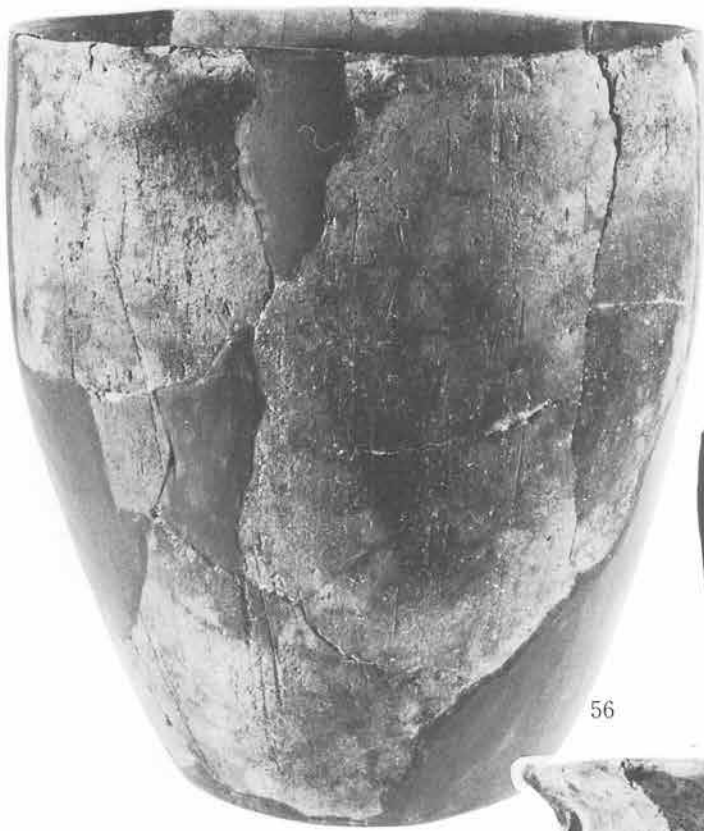
51



54

ⅣA—1 住居跡内出土遺物

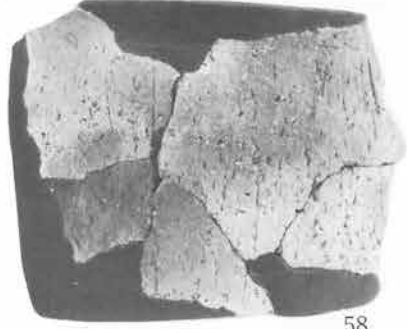
写真図版32 ⅢA—1,ⅣA—1 住居跡内出土遺物



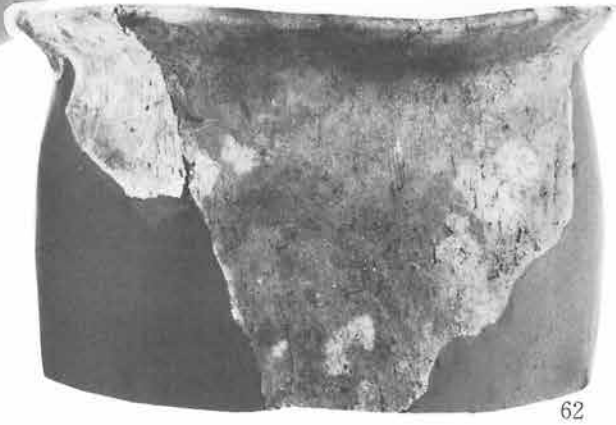
56



63



58



62



57



64

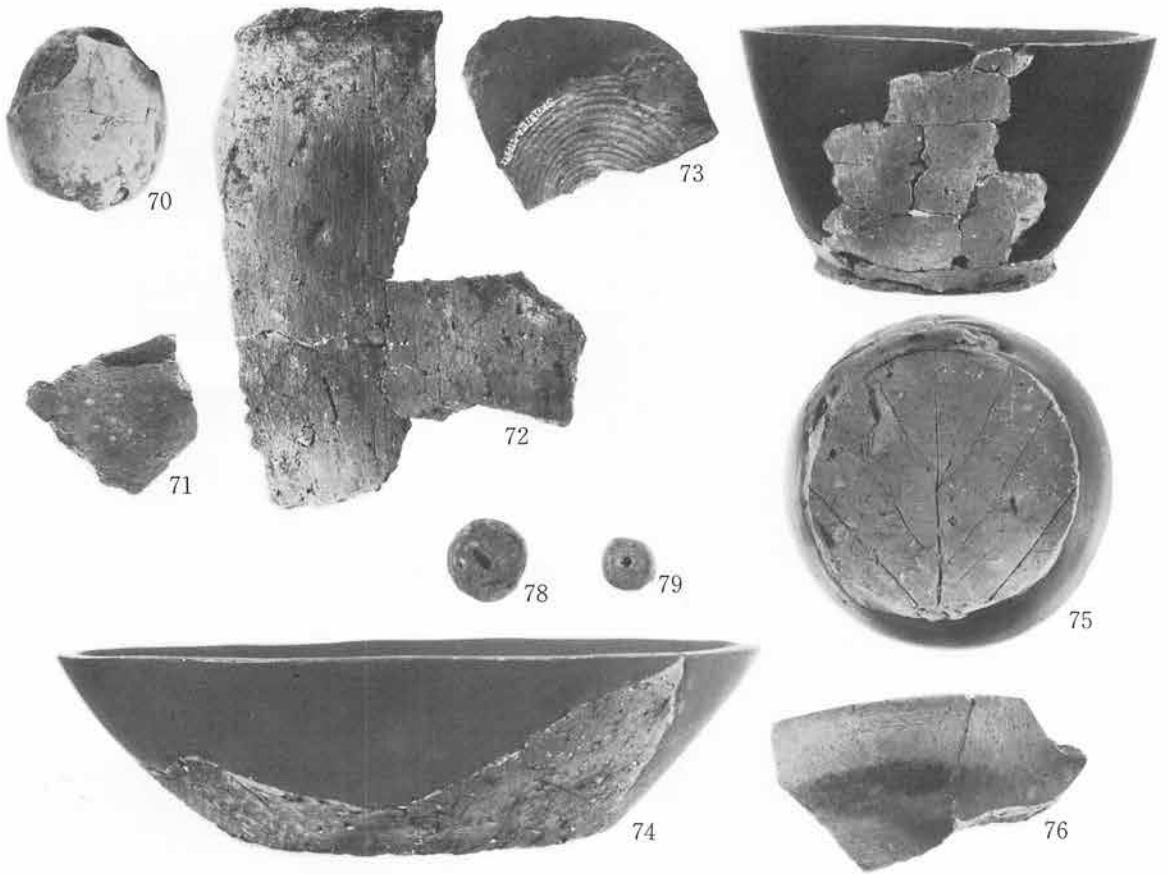


65

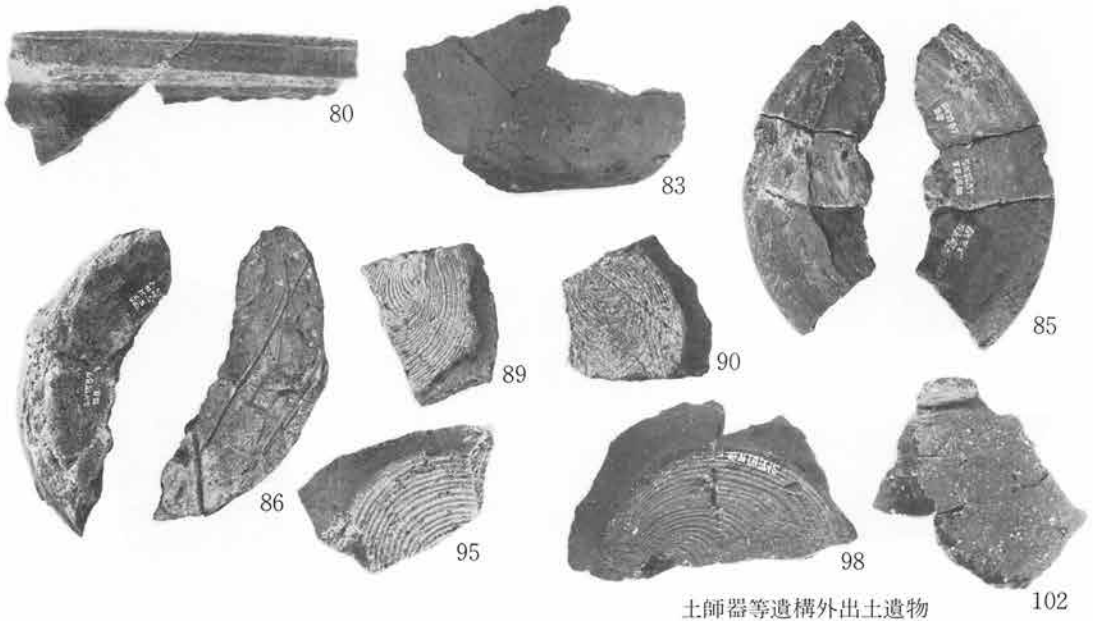


68

写真図版33 IV A—2 住居跡内出土遺物



ピット等遺構内出土遺物

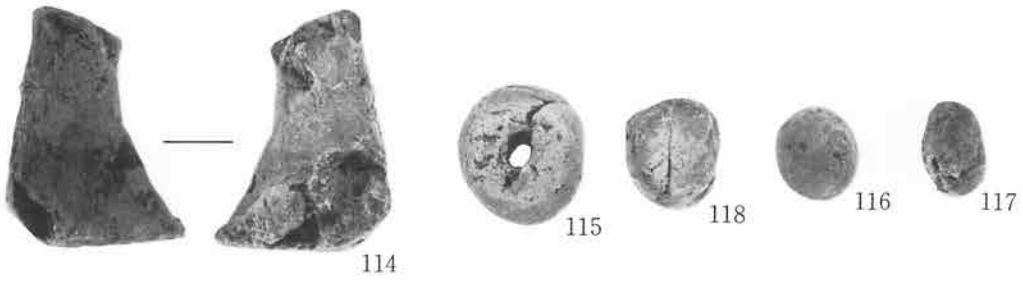
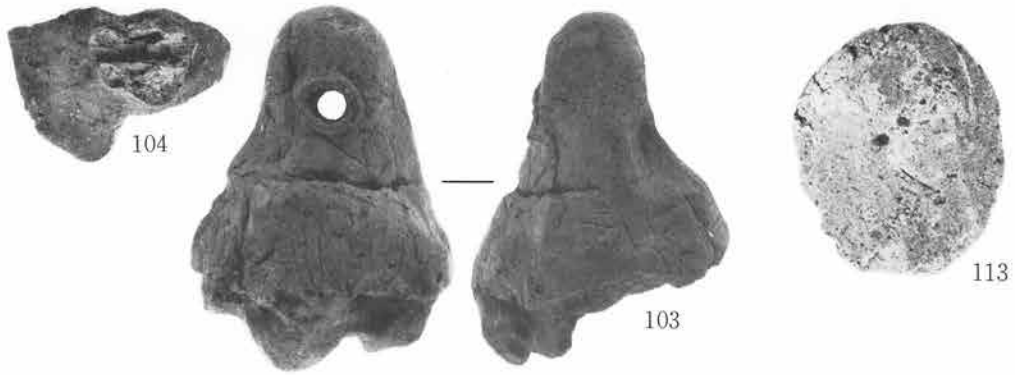


土師器等遺構外出土遺物

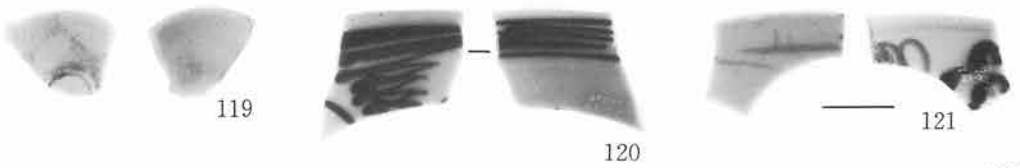
写真図版34 ピット内出土及び遺構外出土遺物(土師器)



ミニチュア土器



土師器土製品

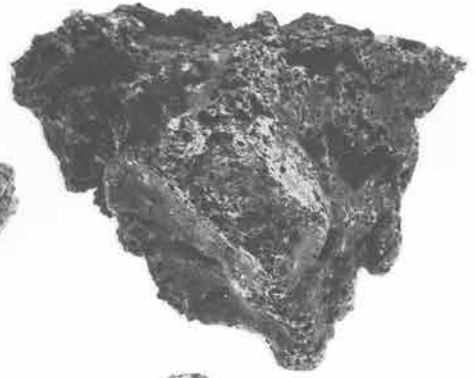
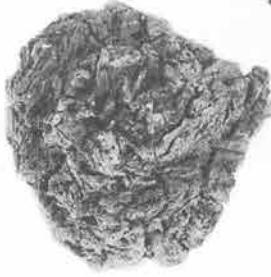


磁器

写真図版35 ミニチュア土器・土製品(土師器)・磁器



(IV A-1 住出土・鉄滓)

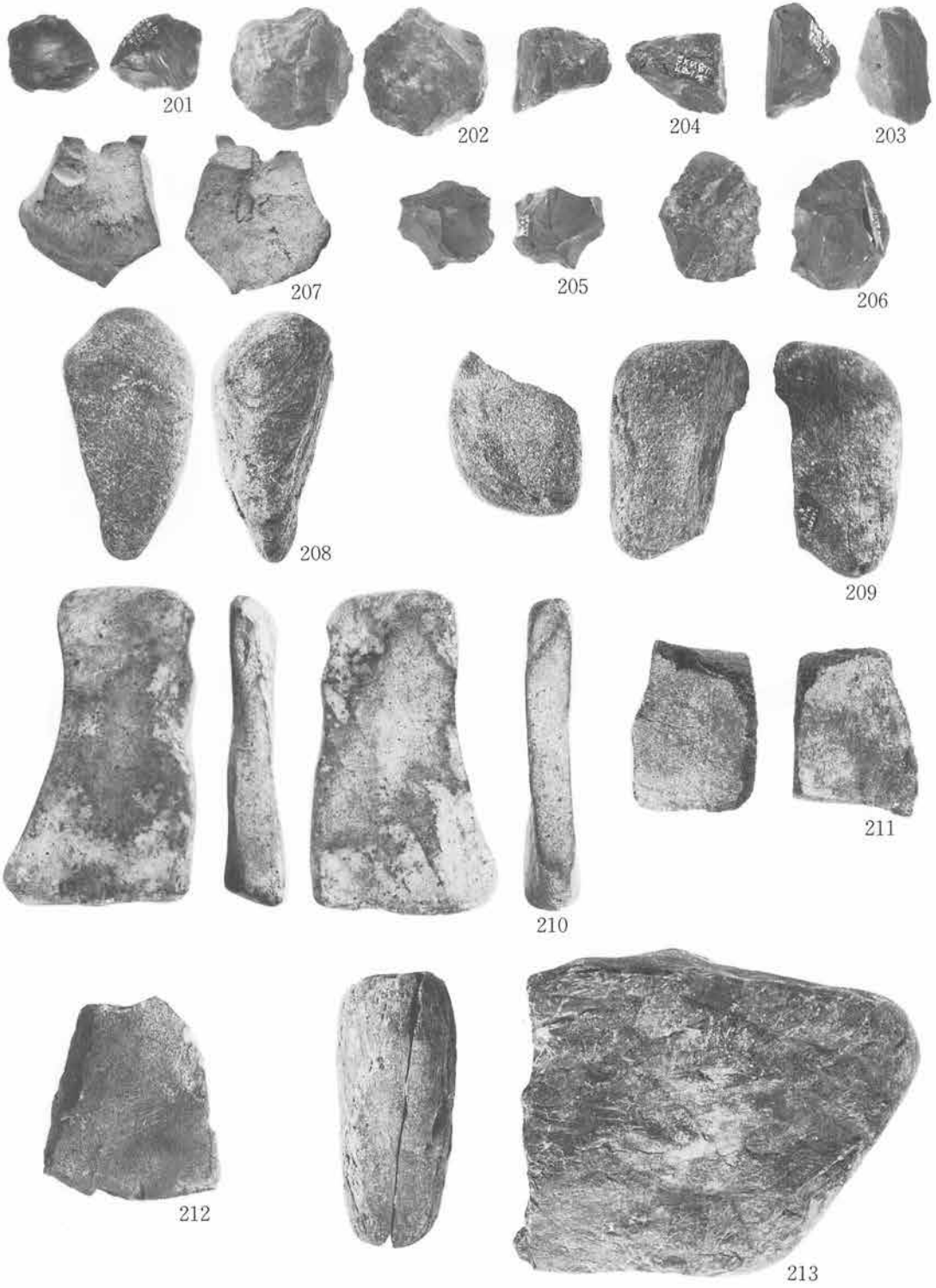


(I A-1 住出土・坩堝)

鉄滓・坩堝



陶磁器・表採遺物



写真図版37 石器・石製品



写真図版38 鉄製品



313



314



315



316



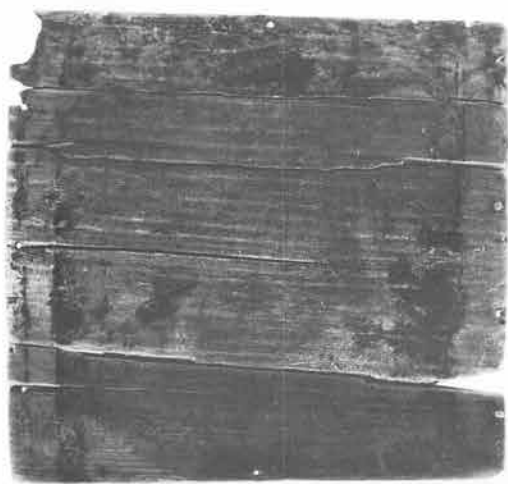
317



318



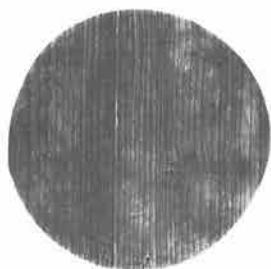
布



319



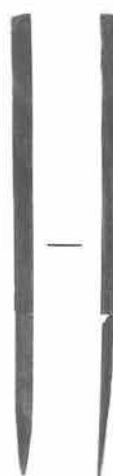
320



327



324



321



322



323

写真図版40 木器・木製品(1)



325



328



326



330

写真図版41 木器・木製品(2)



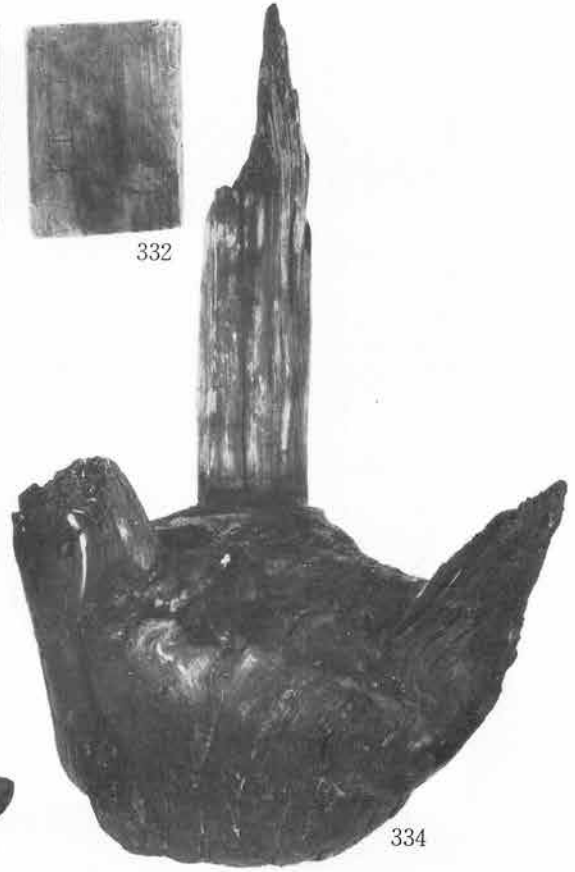
335



332



331

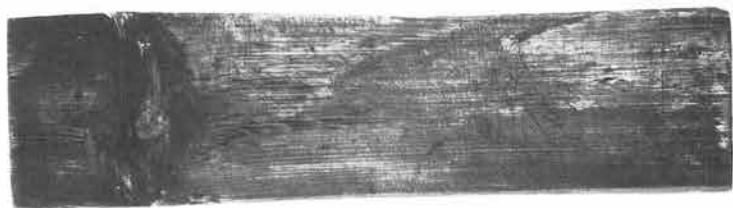


334



329

写真図版42 木製品(3)



333



336



337



338



339



340

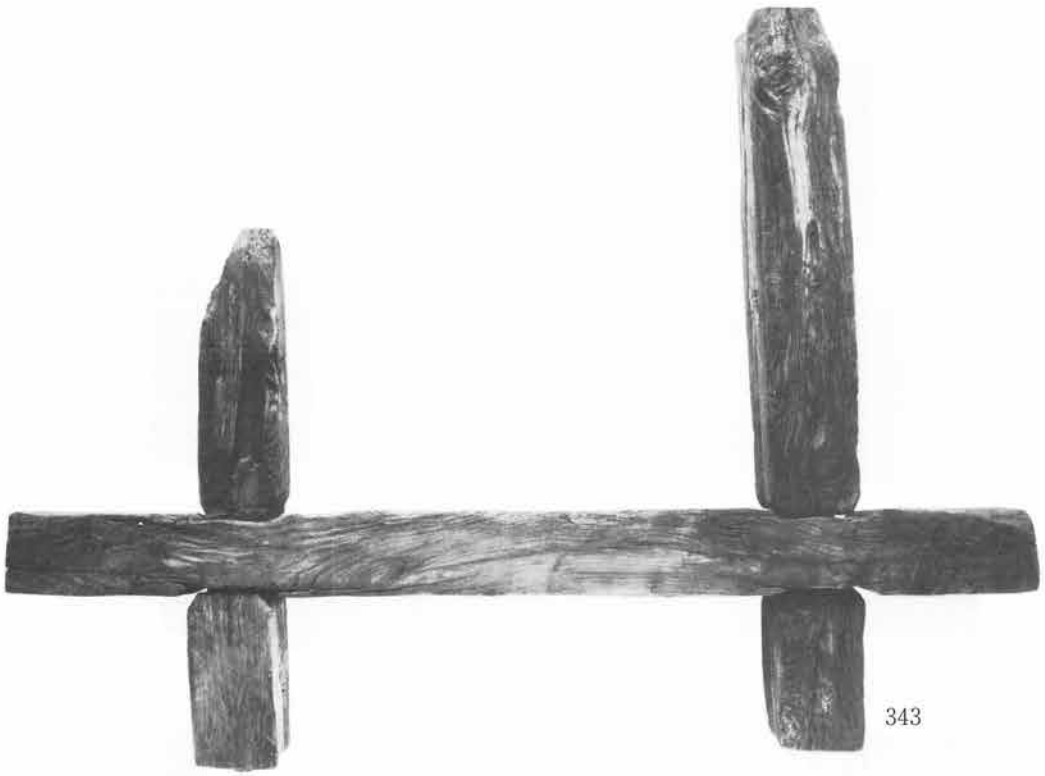


349

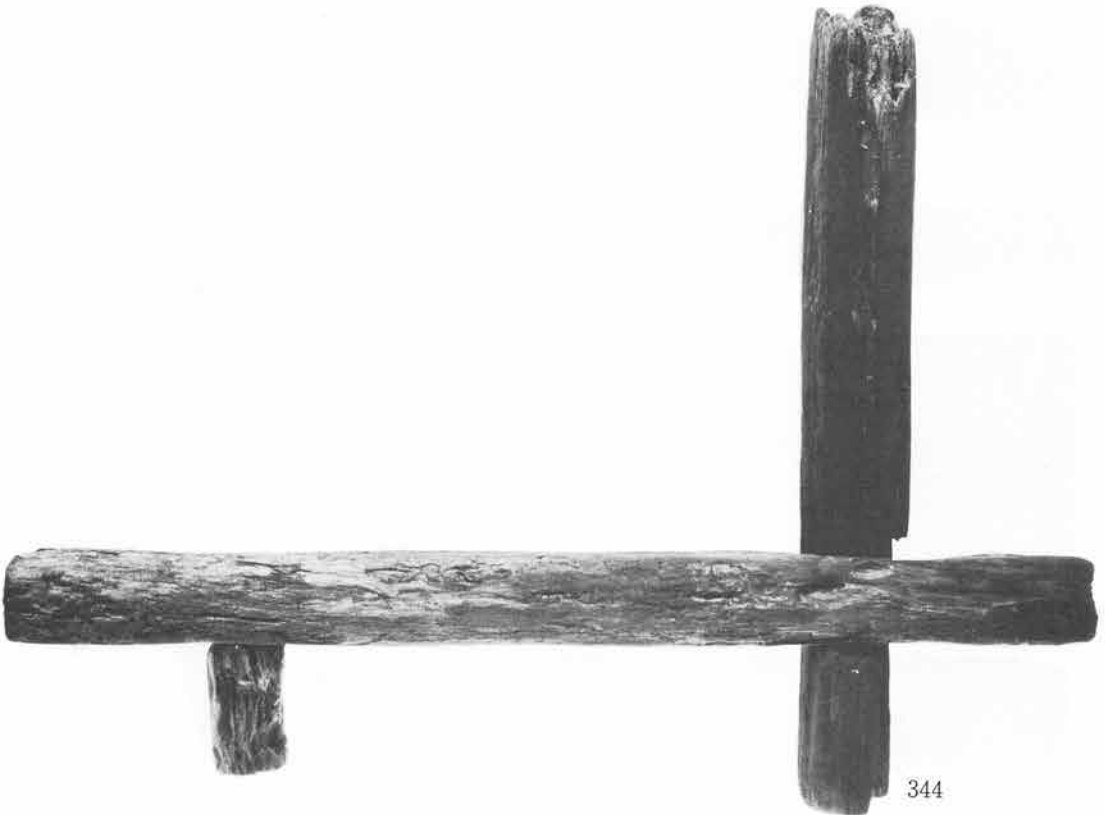


367

写真図版43 木製品・板材・杭



343



344

写真図版44 井戸枠

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 及 川 昌 二

副 所 長 鎌 田 良 悦

〔管 理 課〕

管理課長(兼) 鎌 田 良 悦

課長補佐 伊 藤 吉 郎

主 事 阿 部 隆 広

嘱 託 似 内 喜 兵

運 転 技 士 佐 藤 春 男
兼 技 能 員

〔調 査 課〕

調 査 課 長 昆 野 靖

主任文化財
専門調査員 三 浦 謙 一

〃 工 藤 利 幸

〃 高橋 与右_エ門

〃 田 鎖 寿 夫

〃 佐々木 嘉 直

〃 平 井 進

〃 中 村 良 一

〃 中 川 重 紀

文 化 財
専門調査員 光 井 文 行

文 化 財
専門調査員 佐 瀬 隆

〃 玉 川 英 喜

〃 斎 藤 博 司

〃 東海林 隆 幹

〃 遠 藤 修

〃 斎 藤 邦 雄

〃 高 橋 義 介

〃 酒 井 宗 孝

〔資 料 課〕

資 料 課 長 新 田 和 雄

主任文化財
専門調査員 小 田 野 哲 憲

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第129集

皂角子久保Ⅵ遺跡発掘調査報告書

一般国道340号改良工事関連遺跡発掘調査

印刷 昭和63年 8月25日

発行 昭和63年 8月30日

発行 (財)岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡第11地割字高屋敷185

TEL (0196)38-9001・9002

印刷 (株)熊谷印刷

〒020 岩手県盛岡市上田一丁目6の49

TEL (0196)53-4151

© 岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター1988